

大規模方言データの多角的分析 成果報告書

一言語地図と方言談話資料

PDF 版

このファイルは、下記の国立国語研究所共同研究報告の PDF 版です。

シリーズ名：国立国語研究所共同研究報告；12-05

書名：大規模方言データの多角的分析 成果報告書

一言語地図と方言談話資料

編者：熊谷康雄（編）

発行：2013.3.31

発行所：国立国語研究所

ISBN 978-4-906055-25-8

ISSN 2185-0127

- 1.この PDF 版は、印刷版の成果報告書のデジタル原稿を PDF 化して作成したものです。
2. 印刷版の成果報告書はモノクロですが、PDF 版はカラーです。
デジタル原稿がカラーで用意されていたものは、カラーになっています。
- 3.印刷版の正誤表にあった誤植は、PDF 版では訂正してあります。
訂正箇所は、正誤表として、この PDF の末尾に掲載してあります。
なお、新たに誤植が見つかった場合には、正誤表に追加し、同様に訂正します。

■PDF 版の作成・更新の履歴

[国立国語研究所 時空間変異研究系 熊谷康雄]

更新：2013.4.16 正誤表を更新。2013.4.16 追加分の正誤訂正を反映

作成：2013.4.5

ISSN 2185-0127

国立国語研究所

共同研究報告 12-05

大規模方言データの多角的分析 成果報告書

一言語地図と方言談話資料

熊谷康雄（編）

2013年3月

大規模方言データの多角的分析 成果報告書
一言語地図と方言談話資料—
熊谷康雄（編）
国立国語研究所

この報告書のPDF版を本プロジェクト「大規模方言データの多角的分析」のホームページより公開する。
URLは下記の通り。

<http://www.ninjal.ac.jp/research/project/b/daikibo/>

はじめに

熊谷 康雄
(国立国語研究所)

1. プロジェクトの目的と本報告書

本報告書は国立国語研究所の共同研究プロジェクト(独創・発展型)「大規模方言データの多角的分析」(プロジェクトリーダー 熊谷康雄, 研究期間 平成21年10月～平成24年9月, 研究取りまとめ期間 平成24年10月～平成25年3月)の研究成果報告書である。

様々な研究分野において、基本的な情報の電子化、データベース化は重要なものとして推進されている。方言研究の分野においても、海外でも方言のデータベースが構築され、そのデータを用いた研究が行われている。しかし、膨大な量のデータが公開されても、使って初めて意味があるが、我が国の方言研究において、このようなデータを本格的に駆使した研究は、今後に期待するところが大きい。

我々は、かねてから、日本の方言研究の基盤的な資料である『日本言語地図』(調査期間1957～1965, 調査地点数2,400, 調査項目数285)や「各地方言収集緊急調査」(調査期間1977～1985, 全国約200地点)の資料の電子化・データベース化を進めてきた。これらは共に全国レベルの大規模な方言研究の資料であり、日本の方言研究における基礎的な資料である。本プロジェクトでは『日本言語地図』データベースや全国方言談話データベース(「各地方言収集緊急調査」より作成)などの資料・データの整備を研究基盤として進めるとともに、既に電子データが公開されている『方言文法全国地図』やその他の資料等の利用も視野に入れ、新たな情報も加えながら、計量的方言研究, 言語地理学, 日本語史, 談話研究など専門を異にする共同研究者が、共有する方言データをそれぞれの関心のある観点から実践的に使い込み、複数の視点から多角的に分析を行うことを目的とした。研究の基盤となる大規模方言データを整備, 共有し、これが持つ可能性を引き出す多角的な研究を通して、ことばの地域差の実態やその形成の解明に寄与する新たな知見の獲得, 研究方法の開発, 研究基盤となる資料・データの整備・共有や利用法の蓄積などを行い、方言研究の一層の発展に寄与することを目指した。

本報告書には、研究メンバーによる論文と『日本言語地図』データベースの概説および共同研究会発表会の記録を収録した。報告書の副題は「言語地図と方言談話資料」である。大規模方言データといっても様々に考えられる。このプロジェクトで扱うのは、この2種類のものであるという意味の副題であるが、研究メンバーによる研究は、言語地図に関わる研究, 方言談話資料による地域差に関わる研究, そして、言語地図と談話資料の両者を用いた研究という広がりで行われている。

本報告書の論文は、共同研究のメンバーにより、それぞれの視点から、この共同研究のテーマに取り組んだ成果の一部であるが、資料とこれを活用した研究という意味でも、多様な視点から迫っている。方言研究が資料に基づいて行われるのであれば、その資料そのものの性格を知り、また、その上でその資料を生かした分析が必要である。また、資料の

制約を知り、その上で、その制約の中で、資料の中からその資料の持つ可能性を引き出し、新たな研究の発展に結びつけていく観点と研究の実践が重要であると考えます。

本共同プロジェクトでは専門を異にする研究者が集まって、共有のデータを核にして、異なる視点からの分析が、共通のデータの上で交錯することにより、データの持つ可能性を掘り起こし、新たな知見、視野を得たいと考えた。本報告書に収められている共同研究のメンバーの論文は、それぞれに、このような側面を持つものと思う。

プロジェクトの期間が過ぎても、研究は終わるわけではない。分析は途に着いたばかりの研究もある。方言談話資料を用いた研究にしても、分析には多くの時間を要し、全国的な広がりの中で、対象地域を拡大していくにも、まだ、時間が必要と思われる。また、『日本言語地図』データベースも、このプロジェクトを通して、構築を加速し、利用可能な項目数を増やして、実質的な分析に手をつけることができるようになったが、完成までは、まだ、しばらくの時間がかかる段階である。今後の研究の継続によって、一層の分析の深化と発展が期待される。

2. プロジェクトの組織

以下の研究組織でプロジェクトを進めた。

・共同研究者

- 熊谷康雄（国立国語研究所時空間変異系・准教授）
- 井上文子（国立国語研究所時空間変異系・准教授）
- 大西拓一郎（国立国語研究所時空間変異系・教授）
- 沖 裕子（信州大学文学部・教授）
- 小林 隆（東北大学大学院文学研究科・教授）
- 澤木幹栄（信州大学文学部・教授）
- 澤村美幸（和歌山大学教育学部・講師） [2011年4月から]
- 高橋頭志（群馬県立女子大学文学部・教授）
- 日高 水穂（関西大学文学部・教授）
- 三井はるみ（国立国語研究所理論・構造研究系・助教）

構築を推進した『日本言語地図』データベース（LAJDB）の利用に関心の深い方に、共同研究を進めていく過程の中で、随時、研究協力者として加わっていただいた。

- 竹田晃子（国立国語研究所時空間変異研究系特任助教）
- 鎌水兼貴（国立国語研究所時空間変異研究系プロジェクト非常勤研究員）
- 吉田雅子

（所属は報告書刊行時点のもの）

3. データの共有

3. 1 共有データ：方言談話資料

方言談話資料の共有データとしては（1）『全国方言談話データベース』（国立国語研究所）、（2）『方言談話資料』（国立国語研究所）、（3）『方言録音資料シリーズ』

(国立国語研究所) を共有データとしてひとつのハードディスクに入れ、利用しやすい形にしてメンバーに提供し、共有することにした。初年度に共有データのハードディスクは共同研究者全員に配布した。

(1) 『全国方言談話データベース』全20巻

(1-1) 全20巻のCD収録の全音声ファイル (wav ファイル) を収録した。

(1-2) 全20巻の各巻別のディレクトリに全てのデータを収録した。

データの形式：ファイルメーカー、エクセル、PDF、音声ファイル

(1-3) 『全国方言談話データベース』統合版を新たに作成した。

『全国方言談話データベース』には各収録地点別にデータベースや文字化テキストが作成、収録してある。全国的な視野での分析を助けるために、全都道府県の統合版のデータベースを作成した。

(a) 『全国方言談話データベース』のオリジナルのファイルメーカー版の文字化テキストデータの全都道府県の全てを1つに統合したデータベースを作成した。

(DDJD_ALL 統合版 V1)

対訳形式のテキストファイルも作成

(b) 検索、分析のために、DDJD_ALL 統合版 V1 の文字化テキストデータの共通語訳テキスト、方言テキストのそれぞれについて、文節単位の KWIC を作成し、ファイルメーカー上で検索できるようにしたデータベースを作成した。

(ddjd_kwic_kyotugo_all および ddjd_kwic_hogen_all)

対訳形式の KWIC のテキストファイルも作成

(2) 『方言談話資料』 各巻別のデータを収録

01 山形・群馬・長野

06 鳥取・愛媛・宮崎・沖縄

02 奈良・高知・長崎

07 老年層と若年層との会話

03 青森・新潟・愛知

08 老年層と若年層との会話

04 福井・京都・島根

09 場面設定の対話

05 岩手・宮城・千葉・静岡

10 場面設定の対話

データの形式：文字化テキスト、音声ファイル (一部に未整備あり)

(3) 『方言録音資料シリーズ』 各巻別のデータを収録

01 鹿児島県鹿児島市

09 石川県志雄町

02 宮崎県都城市

10 愛知県小牧市

03 鹿児島県笠沙町

11 京都府京都市

04 岐阜県垂井町

12 沖縄・瀬底島

05 高知県高知市

13 静岡市旧大川村-1

06 秋田県男鹿市

14 静岡市旧大川村-2

07 鹿児島県上屋久町

15 沖縄県八重山鳩間島

08 高知県大方町

データの形式：文字化テキスト、音声ファイル (一部に未整備あり)

なお、上の（２），（３）はこれまでに国立国語研究所で HP 上に公開している。

3. 2 共有データ：『日本言語地図』データベース

『日本言語地図』データベース（LAJDB）については、本編を参照することとして、ここでは、データを共有した方法について記しておく。LAJDB の構築は、方言談話資料の共有データと異なり、LAJDB は研究期間を通して整備し、項目を増やしていった。画像データベースの容量も大きいため、当初は共有ハードディスクに最初の項目を入れ、追加項目分がある程度揃うと、DVD-R を作成し、メンバーに郵送する方法をとっていた。その後、この方法では手間と時間がかかり、また、データの追加にもラグが生じるため、ネット上のディスクスペースにアップして、メンバーで共有できる方法に変更した。画像データベースの容量は1項目で200MB ないし300MB 程度のもが多く、容量が大きいことが問題であったが、項目毎に出来たところで随時アップし、連絡するやり方で、効率的に運ぶことができるようになった。その後は、研究期間を通して、この方法によって随時最新の状態の LAJDB のデータを共有した。

3. 3 データの公開

研究成果ならびにデータベース（LAJDB）はホームページより公開する。公開の情報はプロジェクトのホームページ上に掲載する。

URL: <http://www.ninjal.ac.jp/research/project/b/daikibo/>

4. 今後に向けて

本プロジェクト期間を通して、当初の目的に向かって資料の整備、共有やその分析を前に進めることができた。開始当初に予想していた以上に、LAJDB のデータ整備などで、解決しなければならない困難があり、一定の段階に持ってくるまでに多くの時間を費やしたが、ようやく見通しが開けてきたところのように思われる。

プロジェクト期間を経て、研究は見通しが開けてきたところにある。今後、さらに深化、発展させるべき課題が多い。LAJDB の整備も続け、完成を目指していく。今後とも、研究メンバーの研究の進展と、さらに、データを公開することによって、多くの研究者による研究がなされ、蓄積されていくことを期待したい。プロジェクト開始当初にテーマを議論した問題意識を振り返り、今後さらに深化を図っていきたいと思う。

目次

はじめに	熊谷康雄	iii
目次		vii
1. 談話資料における間投助詞の地域差について	井上文子	1
(1) 相手への働きかけを示す助詞		
(2) 間投助詞の全国分布		
(3) 間投助詞の場面差		
(4) 関連項目 終助詞		
(5) 方言談話に現れる間投助詞		
(6) 地域間コミュニケーション・ギャップ		
(7) 印象と評価の背景		
2. 「昔語り」に現れる文末表現の地理的分布	日高水穂	13
(1) はじめに		
(2) 『方言文法全国地図』の分析		
(2.1) 伝聞表現の文末形式		
(2.2) 回想表現の文末形式		
(2.3) 伝聞表現と回想表現の文末形式の比較		
(3) 方言ももたろう」の分析		
(4) おわりに		
3. 大規模方言談話資料にみる受話法の地域差	沖裕子	33
(1) はじめに		
(2) 談話論からみる『ふるさとことば集成』の性格と活用		
(3) 受話法とは一本稿の目的—		
(4) 対象資料		
(5) 資料作成方法		
(6) 会話冒頭部における型の地域差		
(6.1) とりこみ型と直接型の対立からみた地域差		
(6.2) とりこみ型の出現率からみた地域差		
(7) 会話冒頭部における形式の地域差		
(7.1) あいづち型に含まれる形式の地域差		
(7.2) 接続詞・副詞型に含まれる形式の地域差		
(8) おわりに		

4. 用言準体法の分布と形式 大西拓一郎 59
- (1) はじめに
 - (2) 準体法の定義・位置づけ
 - (3) 準体法の全国分布概観
 - (3.1) 行く (の) だ
 - (3.2) な (の) で
 - (3.3) 植えた (の) に
 - (3.4) ある (の) は
 - (4) 中部地方における準体法の用法と分布
 - (4.1) 準体法と非準体法の現れ方
 - (4.2) 「するだ」と「するで」
 - (4.3) コピュラの形
 - (4.4) コピュラの連続
 - (4.5) 一般名詞句の構成
 - (5) 関連事象—ズラとラー
 - (6) むすび
5. 『日本言語地図』にみる牛の鳴き声のオノマトペ 竹田晃子 69
- (1) はじめに
 - (2) 動物の名称と鳴き声のオノマトペの関係
 - (2.1) 牛の鳴き声と牛・子牛の名称の歴史的関係
 - (2.2) 擬声語の分布が伝播かどうか
 - (3) 『日本言語地図』の資料
 - (3.1) 牛に関連する地図
 - (3.2) もうもう (牛の鳴き声) の語形
 - (3.3) 牛・子牛の鳴き声
 - (3.4) 牛・子牛の名称
 - (3.5) 鳴き声のオノマトペと動物の名称の関係
 - (3.6) まとめ
 - (4) 今後の課題
6. 全国方言調査データから見た感動詞の地域差 澤村美幸 81
- (1) 目的と方法
 - (2) 調査の概要
 - (3) 調査結果のデータベース化
 - (4) 「暑さ」・「熱さ」・「辛さ」・「汚さ」に見る感動詞の地域差
 - (4.1) 語幹 (●) と終止形 (／)
 - (4.2) 感動詞の前接 (●) と前接なし (／)
 - (4.3) 「その他 (●)」
 - (5) 感動詞の地域差をどう捉えるか

(5.1) 失敗の感動詞の地域差		
(5.2) 痛みの感動詞の地域差		
7. 孤例についての諸問題	澤木幹栄	93
(1) 孤例についてのこれまでの研究		
(2) 電子化された LAJ データによる研究		
(3) n 例の統計的分布		
(4) 孤例と 2 例を多く産出する地点		
(5) 2 例や 3 例はどれくらいの範囲に散らばっているか		
(6) 終わりに		
8. 言語地図にみる方言変化・共通語化	鏈水兼貴	103
—LAJDB 編—		
(1) はじめに		
(2) 言語地図内の世代差		
(2.1) 言語地図とグロットグラム		
(2.2) GAJ での検討		
(3) LAJ の話者の世代区分		
(3.1) LAJ の話者の時代		
(3.2) LAJ における話者の生年分布		
(3.3) LAJ の話者の 4 区分		
(4) 考察		
(4.1) かたつむり (蝸牛)		
(4.2) うろこ (鱗)		
(5) まとめ		
(6) 今後の課題		
9. 『日本言語地図』のデータベース化と計量的分析	熊谷康雄	111
—併用現象, 標準語形の分布と交通網, 方言類似度の観察—		
(1) はじめに		
(2) 『日本言語地図』データベース (LAJDB)		
(3) 『日本言語地図』データベースの計量的分析		
(4) 『日本言語地図』における併用現象の地点別集計の地理的分布		
(5) 『日本言語地図』における併用処理項目数の地点別集計の地理的分布		
(6) 『日本言語地図』における標準語形数の地点別集計の地理的分布		
(7) 併用現象, 併用処理, 標準語形の分布と交通網, ネットワーク法の観察		
(8) おわりに		
10. 共通語形の分布と伝播について	小林隆・熊谷康雄	129
(1) 考察のねらい—共通語形は伝播するか?		

- (2) 共通語形の分布-「併用処理」語形の復活
- (3) 共通語形の伝播-その伝わり方のメカニズム
- (4) まとめと課題-分布と伝播の諸相

<ul style="list-style-type: none"> 1 1. 大規模方言分布データの構築に向けて -東北大学方言研究センターの全国分布調査- (1) 報告の趣旨 (2) 消えゆく日本語方言の記録 <ul style="list-style-type: none"> (2.1) 語彙項目を中心とした調査 (2.2) 調査項目の方針 (2.3) 調査方法 (2.4) 資料の整理と分析 (3) 新しい分野の開拓 <ul style="list-style-type: none"> (3.1) 表現法・言語行動に関わる分野の開拓 (3.2) 感動詞〈感情系・感覚系・行為系〉を中心とした調査 (3.3) 感動詞〈談話系 - 応答詞・声かけ・談話標識〉を中心とした調査 (3.4) 表現法・言語行動を中心とした調査 (4) おわりに 	<p>小林隆</p>	<p>143</p>
<ul style="list-style-type: none"> 1 2. 『日本言語地図』データベースの概要 	<p>熊谷康雄</p>	<p>159</p>
<ul style="list-style-type: none"> 1 3. 『日本言語地図』のデータベース化（再録） 	<p>熊谷康雄</p>	<p>165</p>
<ul style="list-style-type: none"> 1 4. 共同研究発表会開催記録 		<p>175</p>

談話資料における間投助詞の地域差について

井上 文子
(国立国語研究所)

1. 相手への働きかけを示す助詞

話しことばに特徴的に現れるもののひとつとして、「あのネ、あしたネ」、「あのサ、あしたサ」、「あのナ、あしたナ」と言う場合のような、文中の切れ目に入る「ネ」「サ」「ヨ」「ナ」「ノ」などがある。いわゆる間投助詞と呼ばれるものである。多くは、プライベートなうちとけた会話に用いられるが、場合によっては、「です」などを伴って、「あのですね」、「ということはですね」のように、多少あらたまった場面でも使われることがある。また、書きことばでも、手紙のように相手に伝えるような文章には表れることがある。

間投助詞は、他の助詞と違って文中で使われる位置の制限が少なく、文節の終わりにならどこにでも比較的自由につく。これを取り去っても文の成立や意味内容そのものには影響がない。けれども、文全体の調子に抑揚をつけて、自分の話しぶりを強調したり、相手の関心を引きつけたりなど、相手への働きかけの気持ちを添えている。

ここでは、地域方言における間投助詞について、全国分布、場面による切り換え、談話の中での使われ方の概観と、間投助詞をめぐる印象と評価の一端を見ていくことにしたい。

2. 間投助詞の全国分布

国立国語研究所編『方言文法全国地図』第6集の「間投表現」では、いわゆる間投助詞について、どのような形式が各地で用いられているか、全国的な分布を明らかにすることを目的としている。具体的な質問文は次のとおりである。

O 場面「親しい友達にむかって、「今日、役場に①なあ、行ったら②なあ」のよう
うとき、「役場になあ、行ったらなあ」のところをどのように言いますか。」
《245-O》

A 場面「近所の知り合いにむかって、ややていねいに言うときはどうですか。」《245-A》

B 場面「この土地の目上の人にむかって、ひじょうにていねいに言うときはどう
ですか。」《245-B》

「(役場に) ①なあ」は、名詞を含む文末以外の文節に後続する場合、「(行ったら) ②なあ」は動詞を含む文末以外の文節に後続する場合をたずねるものである。文法的な位置の違いがある2か所を設定し、各地におけるそれぞれの形式を求めている。

また、「O 場面」は、「親しい友達」に対する「くだけた形式」を、「A 場面」は、「近所の知り合い」に対する「やや敬意のある形式」を、「B 場面」は、「この土地の目上の人」に対する「もっとも敬意のある形式」をたずねるものである。話し相手への待遇度の違いがある3場面を設定し、各地におけるそれぞれの形式を求めている。

O 場面「親しい友達」に対する「くだけた形式」

A 場面「近所の知り合い」に対する「やや敬意のある形式」

B 場面「この土地の目上の人」に対する「もっとも敬意のある形式」

間投助詞の全国的な出現状況は、文中の位置2か所と話し相手の異なる3場面とを組み合わせ、下記の6枚の地図により示されている。

第6集 第343図 役場になあ、行ったらなあ (B場面)

第6集 第344図 役場になあ、行ったらなあ (A場面)

第6集 第345図 役場になあ、行ったらなあ (O場面)

第6集 第346図 役場になあ、行ったらなあ (B場面)

第6集 第347図 役場になあ、行ったらなあ (A場面)

第6集 第348図 役場になあ、行ったらなあ (O場面)

出現する間投助詞は、広い地域に見られる「ナ」「ノ」「ネ」「ヨ」や、特定の地域に現れる「ヤ」「クサ」「ニヤ」「ネヤ」「ナシ」「ネシ」「ノシ」「ナモ」「ナンシ」「ナンタ」「ノンタ」など、項目によって異なり、また、分布領域が違うが、共通する形式も多い。

図1に、間投助詞の分布状況の一例として、「345図 役場になあ、行ったらなあ (O場面)」の簡略図を示す。「ナ」「ナー」を「ナ系」、「ノ」「ノー」を「ノ系」、「ネ」「ネー」を「ネ系」、「ニヤ」「ニャ」「ニヤー」を「ニヤ系」、「ネヤ」「ネア」を「ネヤ系」などのように、ある程度形式をまとめて表示している。

「親しい友達」に対する「くだけた形式」の間投助詞としては、「ナ系」が北海道から岡山県あたりまでの広い範囲で、「ノ系」が中国や、四国・九州・近畿の一部、東北・北陸の日本海側の各地で、「ネ系」が九州でまとまって使われている。また、意外にも、「サ系」はほとんど現れない。「ヨ系」は東北・関東・沖縄などに、「ヤ系」は東北・沖縄に分布している。そのほか、特徴的な形式として、「クサ系」は福岡・佐賀に、「ニヤ系」は長崎などに、「ネヤ系」は高知・愛媛などに見られる。

3. 間投助詞の場面差

話し相手への待遇度の違いがある3場面の、「親しい友達」に対する「くだけた形式」、「近所の知り合い」に対する「やや敬意のある形式」、「この土地の目上の人」に対する「もっとも敬意のある形式」を比較すると、出現語形や分布領域に異なりが見られる。

全体的な傾向として、場面が高くなるほど「ナ」「ノ」が減少し、「ネ」が増加するようである。しかし、鹿児島など、「ナ」と「ネ」について逆の使い分けの見られる地域もある。上位場面で分布が広がる「ノシ」「ナモ」、下位場面に多く現れる「クサ」「ネヤ」「ニヤ」「ヨ」(関東・東北)など、地域による特徴が観察される。一方で、場面にかかわらず同じ語形が用いられる地域もある。

間投助詞の場面による違いの一例として、「役場になあ、行ったらなあ」をとりあげ、「345図 役場になあ、行ったらなあ (O場面)」「344図 役場になあ、行ったらなあ (A場面)」「343図 役場になあ、行ったらなあ (B場面)」を比較しながら、おもな語形について、その出現状況を概観する。

図2・図3・図4は「ナ系」の出現地点の
 みを記した地図である。東日本などでは、
 「親しい友達」に対する「くれた形式」
 (図2)には広く分布するが、「近所の知り
 合い」に対する「やや敬意のある形式」(図
 3)や「この土地の目上の人」に対する「も
 っとも敬意のある形式」(図4)のように高
 い場面になると、あまり現れなくなる。

一方、鹿児島など九州南部では、「ナ系」
 は「親しい友達」に対する「くれた形式」
 (図2)では使われないが、「近所の知り合
 い」に対する「やや敬意のある形式」(図3)
 や「この土地の目上の人」に対する「も
 っとも敬意のある形式」(図4)では多用され、
 東日本などとは逆の使い分けが見られる。

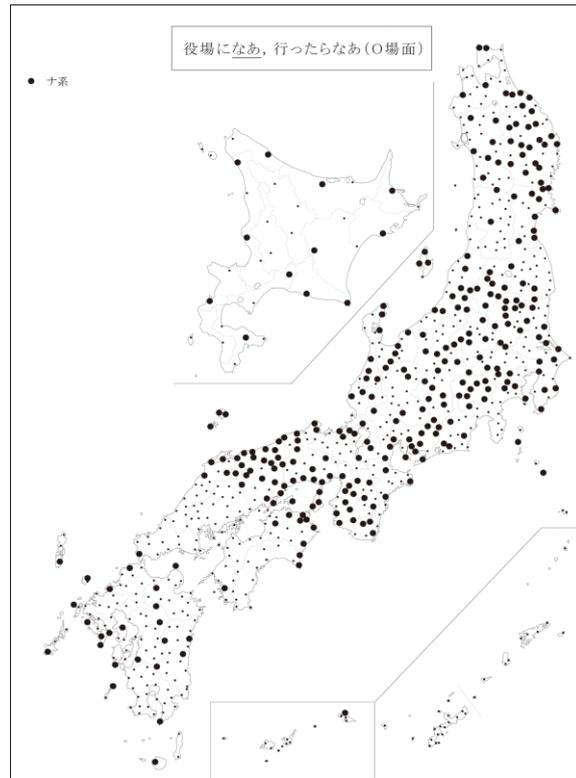


図2

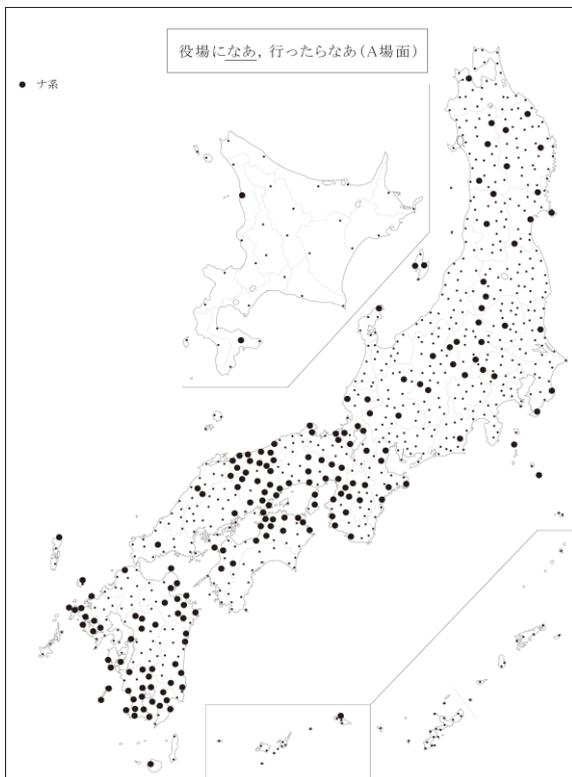


図3

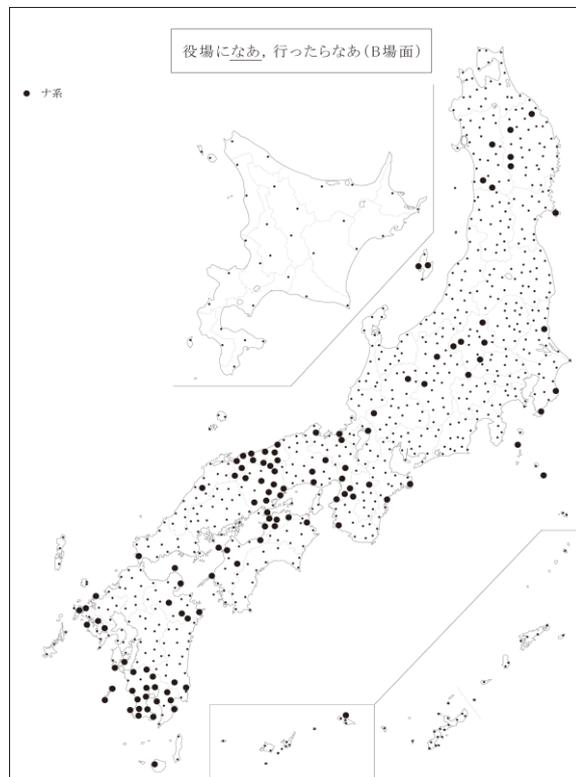


図4

また、鳥取・大阪南部などのように、場面にかかわらず「ナ」が用いられる地域もある。いずれの場面においても「ナ」が現れない地域には、中国西部・四国南部などのように別の形式を用いる場合と、「間投助詞なし」と回答された場合とがある。

図5・図6・図7は「ノ系」の出現地点のみを記した地図である。岡山・香川や大分では、「親しい友達」に対する「くだけた形式」(図5)にまとまった分布が見られるが、「近所の知り合い」に対する「やや敬意のある形式」(図6)や「この土地の目上の人」に対する「もっとも敬意のある形式」(図7)になると、分布が消えてしまう。岡山・香川では“下位場面「ノ」「ナ」の併用”から“上位場面「ナ」”へ、大分では“下位場面「ノ」”から“上位場面「ナ」”へ切り換えている。これらの地域では「ノ」よりも「ナ」のほうの待遇価が高いと解釈できる。

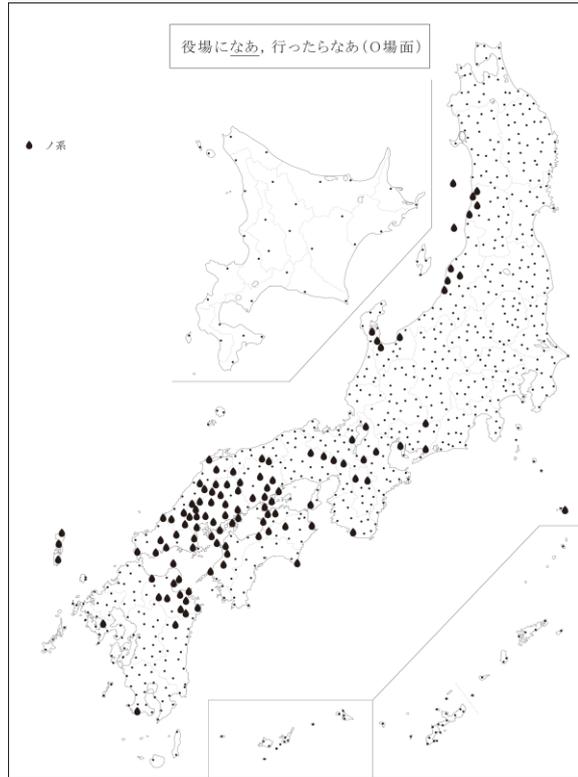


図5

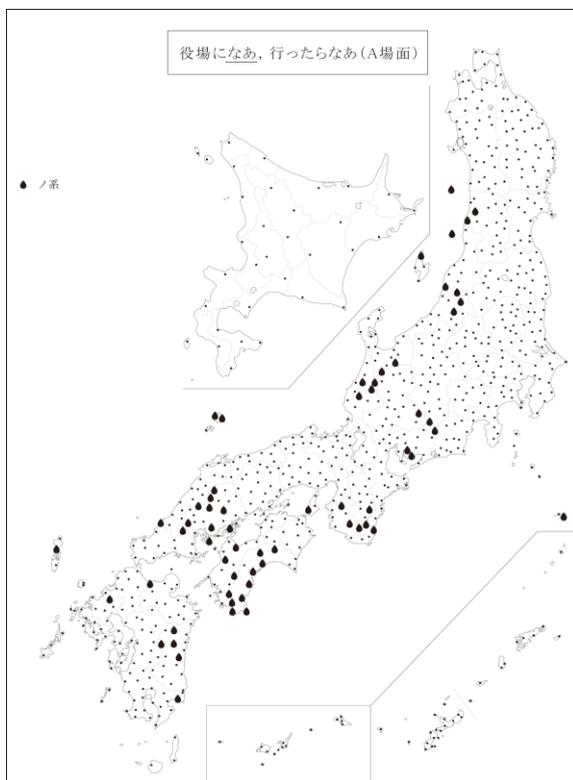


図6

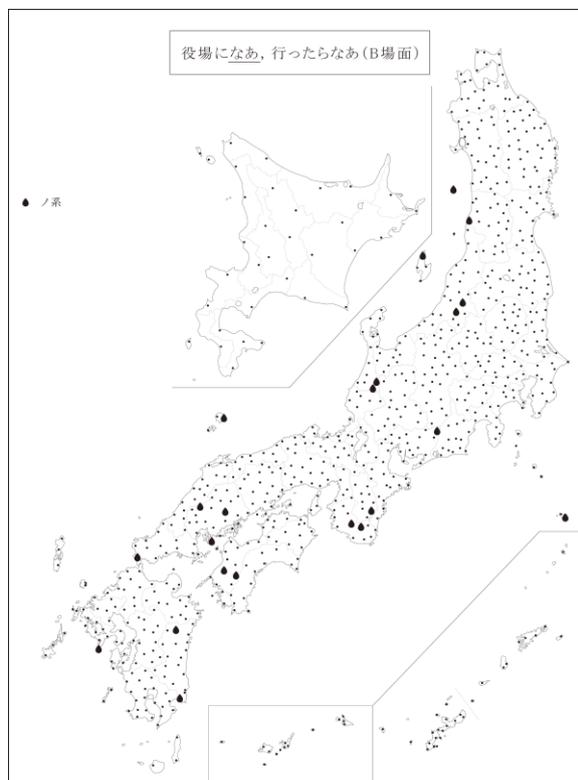


図7

一方、和歌山南部などでは、「ノ系」は「親しい友達」に対する「くだけた形式」(図5)には現れないが、「近所の知り合い」に対する「やや敬意のある形式」(図6)や「この土地の目上の人」に対する「もっとも敬意のある形式」(図7)になると出現し、岡山などとは逆の使い分けが見られる。和歌山南部では“下位場面「ナ」”から“上位場面「ノ」”へ切り換えている。この地域では「ナ」よりも「ノ」のほうの待遇価が高いと解釈できる。

また、山形庄内地方のように、場面にかかわらず「ノ」が用いられる地域もある。いずれの場面においても「ノ」が現れない地域には、東日本などのように別の形式を用いる場合と、「間投助詞なし」と回答された場合とがある。

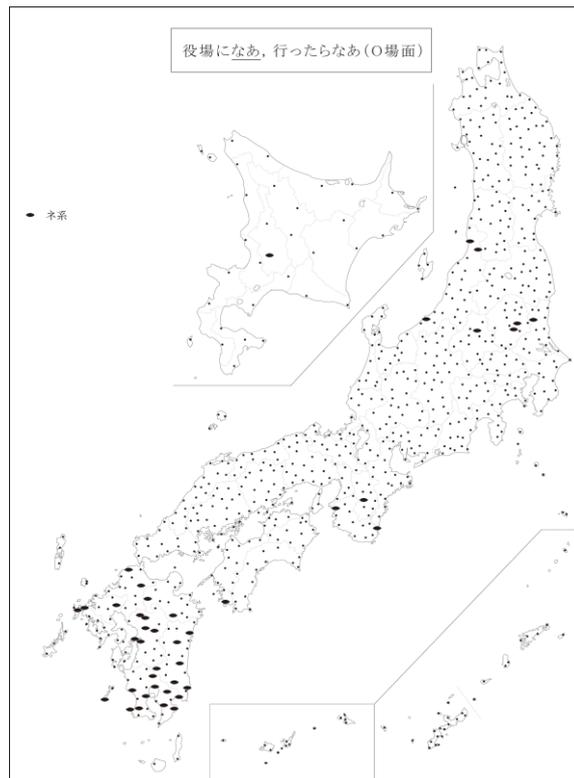


図8

図8・図9・図10は「ネ系」の出現地点のみを記した地図である。本州では「親しい友達」に対する「くだけた形式」(図8)にはほとんど現れないが、「近所の知り合い」に対する「やや敬意のある形式」(図9)や「この土地の目上の人」に対する「もっとも敬意のある形式」(図10)になると、関東・北陸など各地に分布が広がる。たとえば、富山県富山市新庄町などの地点で、“親しい友達「ナ」—近所の知り合い「ネ」—この土地の目上の人「ネ」”という切り換えが行われている。

一方、鹿児島など、九州南部では、「ネ系」は「親しい友達」に対する「くだけた形式」(図8)にはまとも現れるが、「近所の知り合い」に対する「やや敬意のある形式」(図9)や「この土地の目上の人」に対する「もっとも敬意のある形式」(図10)になるとほとんど使われなくなり、本州とは逆の使い分けが見られ

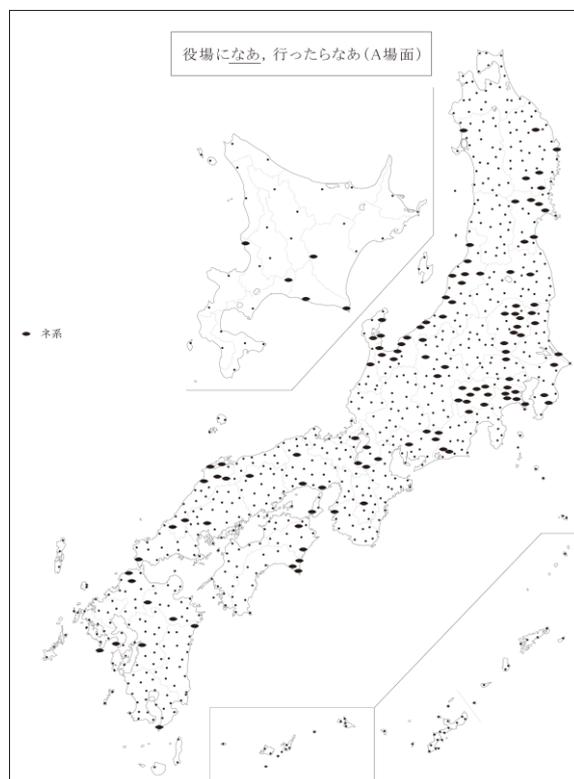


図9

る。たとえば、鹿児島県始良郡横川町中ノ・鹿児島県串木野市本浜町・鹿児島県国分市中央4丁目・鹿児島県鹿児島市冷水町・鹿児島県曽於郡大隅町中之内など多くの地点で、“親しい友達「ネ」－近所の知り合い「ナ」－この土地の目上の人「ナ）」という切り換えが行われている。

また、地域的にまとまりのある分布として、上位場面で現れる「ノシ」「ナモ」、下位場面に現れる「クサ」「ネヤ」「ヨ」（関東・東北）などが観察される。

なお、「敬語（デス・ゴアスなど）＋間投助詞」の形である「デスナ」「デスノ」「デスネ」なども、おもに広島・九州では、「近所の知り合い」に対する「やや敬意のある形式」や「この土地の目上の人」に対する「もっとも敬意のある形式」の場面に使われている。

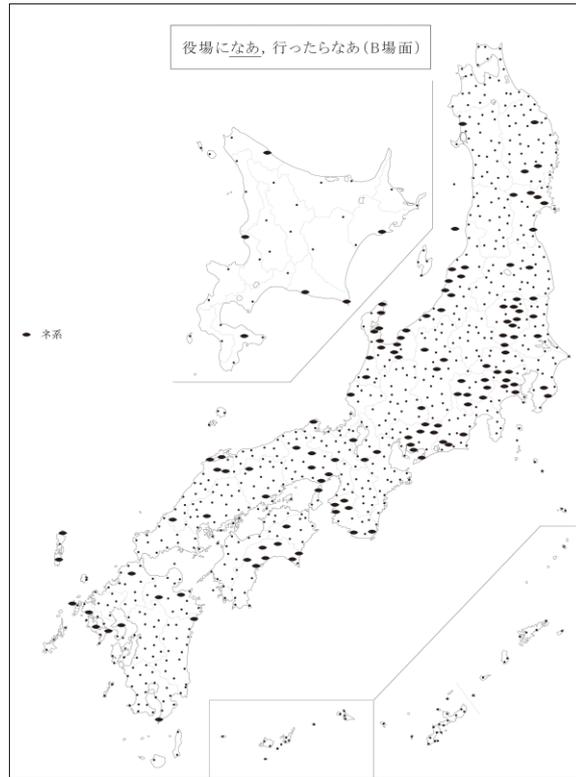


図 10

このほか、場面による差が見られるものに、「間投助詞なし」がある。全体的な傾向として、「間投助詞なし」は上位場面で増加する。上位場面には間投助詞は使わないとする話者の内省も多い。ただし、京都・福島東部・岐阜など（「無回答」を「間投助詞なし」と解釈すれば、静岡なども）、「親しい友達」に対する「くだけた形式」としても「間投助詞なし」と回答された地域もある。

話し相手が異なる3場面についての間投助詞の出現状況により、話し相手への待遇度による間投助詞の使い分けを読み取ることができる。また、「ナ」や「ノ」や「ネ」など、同じ形式の間投助詞でも地域により場面の現れ方の違い、待遇度の違いが認められる。このことは、各地の間投助詞の待遇価の違いを表している結果であるとも言える。ただし、「近所の知り合い」や「この土地の目上の人」に対することばの切り替えの認識が各地で異なっている可能性も考えられる。

4. 関連項目 終助詞

間投助詞と終助詞とは、使われる位置の制限や、文に与える意味の重要性などについて相違点があるが、意味や形式の面で関連も深い。『方言文法全国地図』には、終助詞（「疑問」を除く）が接続する項目に、下記のものがある。第6集の「第322図 寒いですね（B場面）」「第6集 第324図 寒いですね（A場面）」「第6集 第326図 寒いですね（O場面）」（調査時の質問文は「今日は寒いな」）でも、今回取り上げた「役場になあ」に出現した間投助詞と同じ形式の終助詞が出現しており、あわせて確認する必要がある。

第4集 第164図 うん、無いよ

- 第4集 第166 ㊦ いや、有るよ
 第5集 第187 ㊦ おもしろかったなあ
 第5集 第189 ㊦ 行ったなあ
 第5集 第191 ㊦ いたよ
 第5集 第193 ㊦ 書いたよ
 第5集 第195 ㊦ 強かったよ
 第5集 第222 ㊦ 行くなよ (やさしく)
 第5集 第224 ㊦ 行くなよ (きびしく)
 第5集 第228 ㊦ 行きたいなあ
 第5集 第236 ㊦ 行こうよ
 第6集 第322 ㊦ 寒いですね (B 場面)
 第6集 第324 ㊦ 寒いですね (A 場面)
 第6集 第326 ㊦ 寒いですね (O 場面)
 第6集 第328 ㊦ 本ですね (B 場面)
 第6集 第330 ㊦ 本ですね (A 場面)

5. 方言談話に現れる間投助詞

『方言文法全国地図』における間投助詞の分布状況と比較して、各地域の方言の会話ではどのような使われ方の特徴が見られるだろうか。各地の会話の記録である方言談話資料のひとつ、『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』から間投助詞が用いられている具体的な使用例をいくつか抜き出してみる。(引用部分については、書式と共通語訳を原本から一部変更した。共通語訳では間投助詞を便宜上「ね」と訳している場合がある。発話に挟まれたあいづちは省略した。)

■奈良県五條市五條・1923 (大正12) 年生まれ (収録時 58 歳)・女性

[1981 (昭和56) 年収録]

イヤ ワタシカッテナ アノ リョコーノトキノナー キロクナ、 アルバムイ
 ハッテナ シャシン。 ホテー アノー ナニ ショー ト オモテ、 イヤー
 センキョサンノ ミセテモータラナ イヤ コナイ シトイタ オモイデン
 ナルナー ト オモテ オモイモッテ コノ、 ア、 アノ シャシン
 タマッテシモテ。

(いや、私だってね、あの、旅行の時のねえ、記録ね、アルバムに貼ってね、写真を。そして、あの、あれをしようと思って、いやあ、仙居さんのを見せてもらったらね、いやあ、こうしておいたら、思い出になるなあと思って、思いながら、この、あ、あの、写真がたまってしまった。)

■愛媛県松山市久谷町奥久谷・1914 (大正3) 年生まれ (収録時 67 歳)・女性

[1981 (昭和56) 年収録]

ダイデノ コーヤッテ ナワオノ アノ チャント タグッテノ ホイテ
 ソレオ イチワニシテノ ホイテ イチワ ナンボ ユーテ トベ

モッテイキヨツタン。

(台でねえ、こうやって縄をねえ、あの、ちゃんと手繰ってねえ、そして、それを1把にしてねえ、そして、1把がいくらと言って、砥部へ持っていったの。)

■秋田県湯沢市角間・1904（明治37）年生まれ（収録時73歳）・女性

[1977（昭和52）年収録]

オレアエノ バツパヨ一 シュードバツパ ユーオンダケタ ナンデオ
オナコ° ダジダンバ コーエ アノ ヤッコエ ドゴサナ ササルフンデヨ ソエデ
ン一 チョエト ナンデルドヨ ビリーツテ ユーオンダド

(私の家のおばあさんねえ、姑が言うものであった。なんでも、女たちならば、こういう、あの柔らかいところへね、刺さるようでね、それで、うん、ちょいとなでるとね、びりっというものだって。)

以上の例では、『方言文法全国地図』の当該地点およびその周辺地点に分布する形式が談話の中にも登場している。用例としては女性の発話を取り上げたが、「ナ」「ノー」「ヨ」についても、男女の差なく用いられている。

一方、『方言文法全国地図』には明確な分布としては現れないが、ひとりの人の話の中に、さまざまな形のものが見られることがある。言語地図では、東京には「サ系」はほとんど分布していないが、談話には多用されている。

■東京都台東区・1911（明治44）年生まれ（収録時69歳）・男性

[1980（昭和55）年収録]

トコロカ° ネ一 キョ オトトシカナー オテーチャンノ テレビ ヤツテサ ソレデ
フーズクコーショー コツチカ° ウケモツテサ一。 ソーシタラ アレ ハイユーサン
カ° シキー フンジメヤーカ° ッタンダヨ。 コマツチャツテサ。 ソイデ シンブン
トーヒョー サレテサ一 アンナーナー ナイ ト。

(ところがねえ、去、一昨年かなあ、「おていちゃん」のテレビをやってさ、それで、風俗考証をこっちが受け持ってさあ。そうしたら、あれ、俳優さんが敷居を踏んでしまいやがったんだよ。困ってしまつてさ。それで、新聞投書をされてさあ、あんなのはないと。)

逆に、『方言文法全国地図』では、「ネ系」「ニ系」などの間投助詞が見られる場合でも、談話にはあまり間投助詞が用いられない地域もある。

■鹿児島県揖宿郡頰娃町牧之内飯山・1902（明治35）年生まれ（収録時75歳）・男性

[1977（昭和52）年収録]

X10ワ モー ムガシ タイショー タイショーナンネンヂャッタガ タイショー
チョード タイショー、ヒチハチネンヂャラセンヂャッタログ アタイカ°
カコ° イメ オツ トツヂャッタデ マダ ショセーノ ウヂ アダイカ°
ゲシュクヂュー カヂヤチョーニ アダシャ オッタカ° ゲシュクギー

X11 オヂヤ X10 オヂヂャッチュー アスツケ キオツタンヂャ ニチヨービン
ヒロ

(X10 は、もう、昔、大正、大正何年だったか、大正、ちょうど、大正 7、8 年ではなかっただろうか。私が鹿児島市にいる時だったから。まだ書生の頃、私が下宿中、加治屋町に私はいたが、下宿まで X11 おじさんや X10 おじさんたちは遊びに来ていたんだ。日曜日の日は。)

これらは、間投助詞の使用の多寡に特徴があり、用いられる間投助詞の形式がさまざまである、代表的な地域である。『国立国語研究所資料集 13 全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』に収録されている、それぞれの地域の談話全体を対象として、主要な間投助詞の出現状況をまとめてみた。

収録地点	収録時間	ナ系	ノ系	ネ系	サ系	ヨ系	ヤ系
秋田県湯沢市	28 分 49 秒	37	0	0	0	22	0
東京都台東区	34 分 51 秒	6	0	220	34	0	0
奈良県五條市	33 分 39 秒	157	0	1	0	0	0
愛媛県松山市	31 分 48 秒	38	100	2	1	0	0
鹿児島県揖宿郡	34 分 29 秒	12	0	2	0	0	0

語や語の運用のしかたの地域差を明らかにするためには、実際の談話を切り取って観察することが必要である。何気なくしゃべっていて話し手本人も無意識のうちに用いていることばや、内省の中では合理化されていることばが、実際にはどのように用いられているかを、談話資料の中に見つけることができる。また、談話から文脈や使用状況が読み取れることによって、話者自身には意味の説明の難しい語や文法形式についても、観察者にとっては分析が可能となるという利点もある。

6. 地域間コミュニケーション・ギャップ

地域によっては、「あのな」「あのよ」を女性が使うことに違和感を持ち、「乱暴」「ぞんざい」「男っぼい」と感じたり、「あのね」を男性が用いることを「女っぼい」という印象でとらえることがある。また、「あのさ」を「都会風」「東京っぼい」／「きざ」「気取っている」などのように、肯定的／否定的に評価することもある。さらに、地域によって、話し相手が目上か目下かで使える語が決まっていたり、くだけた場面でしか使えないなどの制限があったりすると、「なれなれしい」「失礼だ」という行き違いが生まれるおそれもあるだろう。

尾崎喜光 2003 では、東京圏と阪神圏の大学生・大学院生を対象に、間投助詞の使用と評価について調査している。

「なあ」については、関西では男女共通で多用されるが、関東では使用がほぼ男性に限定されているため、関東の人には男性的なニュアンスを伴って受け止められ、女性の「なあ」の使用は否定的な評価につながる可能性がある。実際には、女性の使う「なあ」につ

いて、関東の人は積極的な評価を伴わない「特に何も感じない」が最も多く、「良い感じがする」は3割、「あまり良い感じがしない」は2割前後で、関西の人が思っているほど、関東の人には否定的には受け止められていない。

また、「ねえ」については、関東の女性が多く使う表現であるため、男性による使用が少ない関西の人には、女性的なニュアンスを伴って受け止められ、男性の「ねえ」の使用は否定的な評価につながる可能性がある。実際には、男性の使う「ねえ」について、関西の人は「あまりよい感じがしない」が半数を超え、特に、関西の女性の数値が高く、関東の人が思っている以上に、関西の人には否定的には受け止められている。陣内正敬 1999 でも、関西では、「ネ」を使う男性には女っぽい印象があることが指摘されている。

7. 印象と評価の背景

昭和 30 年代に神奈川県鎌倉市の腰越小学校で起こり、全国に広まった「ネサヨ運動」は、語尾に「ネ」「サ」「ヨ」を使わないようにする活動として有名である。また、福岡県筑穂町の大分小学校で昭和 37 年から 3 年間続けられ、九州地域で展開した「ネハイ運動」は、地元で語尾につける「クサ」の代わりに「ネ」を使い、「ん」の代わりに「はい」と返事し、美しく丁寧なことばにしようという活動であった。いずれも、本来の動機・実態は、ことばの使い方を考えようとする創造学習や社会へ出た時の基礎教育としての教育活動であったようである（橋本典尚 2005 など）。

「ネ」「サ」「ヨ」を「悪いことば」と意識して、なくそうとする行動と、「ネ」を「いいことば」と意識して、「ネ」をつけようとする行動、このふたつの活動の「ネ」に対する評価と志向する方向は逆である。「ネ」「サ」「ヨ」と「間投助詞なし」、「クサ」と「ネ」の認識の違いは、それぞれ、下位場面と上位場面での使用形式の差にも関連しているようである。

このような、言語使用や言語意識の違いから生じる評価や、誤解・違和感といったコミュニケーション・ギャップなど、各地で異なる印象と評価の背景にある言語形式と運用の実態、その地域差について、使用者の属性・使用場面・語の丁寧度などを、分布データ・談話データなどを利用して総合的にとらえたいと考えている。

参考文献

- 尾崎喜光 (2003) 「用法に地域差が伴う言語表現に対する相互評価—関東と関西の評価—」『社会言語科学』5 (2), 58-73.
- 国立国語研究所編 (2006) 『方言文法全国地図』第 6 集 国立印刷局.
- 国立国語研究所編 (2001~2008) 『国立国語研究所資料集 13 全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』全 20 巻 国書刊行会.
- 陣内正敬 (1999) 「東京のことばは女性っぽい?」『どうなる日本のことば 方言と共通語のゆくえ』大修館書店.
- 田中章夫 (1973) 「終助詞と間投助詞」『品詞別 日本文法講座 9 助詞』明治書院.
- 橋本典尚 (2005) 「「ことば」の教育活動と臨床視点—「ネサヨ運動」(腰越・永山東・大尼田)と「ネハイ」運動(大分)—1960年代以降、全国展開した「ことば」からの教育的運動の実態と、現在の様子—鎌倉市腰越から全国展開した「ネサヨ運動」と、筑

穂町大分から地域展開した「ネハイ運動」一 『東洋大学大学院紀要 文学研究科 国文学』 41, 312 (1) -298 (15).

「昔語り」に現れる文末表現の地理的分布

日高 水穂
(関西大学)

1. はじめに

昔話や思い出話などを語る「昔語り」の語り方には、個人差を超えた地域的な型があるように思われる。本稿では、『方言文法全国地図』の分布図および昔話資料「方言ももたろう」をもとに、特に「昔語り」の文末表現の地理的分布を見ていきたい。

国立国語研究所編『方言文法全国地図』には、次のような「昔語り」を想定した調査項目の分布図が収録されている。

(1) 250～251 図 いたそうだ

[質問文] たとえば、「昔、昔、あの山に鬼がいたそうだ」と言うとき、「鬼がいたそうだ」のところをどのように言いますか。

(2) 190・191 図 いたよ

[質問文] 昔、自分が子どものころに、この土地にももの知りの人がいました。その人のことを孫に教えてやります。「昔、ここにももの知りの人が……」その次にどのように言いますか。

(1) は、伝聞表現を見ることを目的としたものである。現れる述語の構成を見ると、「動詞＋伝聞形式」とともに、「動詞＋ノダ相当形式＋伝聞形式」というパターンのもが見られる。一方、(2) は、回想表現を見ることを目的としたものである。設定されている場面は、過去の事実を述べることであるが、現れる述語の構成を見ると、「動詞」のみの表現に加えて、「動詞＋伝聞形式」「動詞＋ノダ相当形式」「動詞＋ノダ相当形式＋伝聞形式」というパターンのもが見られる。事実の叙述を想定した(2)で伝聞形式が現れる場合があることがまず興味深い。さらに、(1)(2)ともに、質問文では特に指定をしていないノダ相当形式を含む回答がなされる場合があることも注目される。

同様の観点で、昔話の資料についても分析が可能である。本稿では、「方言ももたろう」を資料とした調査を試みる。「方言ももたろう」とは、1989-1992年度科学研究費補助金重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究」(代表：杉藤美代子)によって、全国約100地点で収録された昔話「桃太郎」の冒頭部分の音声データである。これにもとづく既刊の資料のうち、以下のものを総合した71地点分のデータを分析する。(a)には、監修者による文字化資料が付されているため、これを使用した。(b)は音声データのみの資料であるため、日高が聞き取り、文字化資料を作成した。

(a)佐藤亮一監修(2007)『ポプラディア情報館 方言』ポプラ社

(b)杉藤美代子監修・著『CD-ROM 方言ももたろう』富士通BSC

2. 『方言文法全国地図』の分析

2. 1 伝聞表現の文末形式

伝聞表現とは、「話者がある事柄を他から聞いて、あるいは、読んで知ったという意を表す表現」(生田目 1982)である。共通語の伝聞表現には、「そうだ」「らしい」という認識系の形式と、「って」「だって」「んだって」「という」「とのことだ」「ということだ」「とか」という引用系の形式がある(日本語記述文法研究会編 2003、宮崎 2005)。

『方言文法全国地図』250～252 図「いたそうだ」の「そうだ」にあたる伝聞形式を(I)のように整理し、図 1-1 を作成した(『方言文法全国地図』では、250 図が認識系伝聞形式、251・252 図が引用系伝聞形式を取り上げた図となっている)。なお、(I)では、伝聞形式としては周皮的と見られる形式(回答地点数が少なく中心的な意味が伝聞ではない形式)の一部および語形の由来の明確でないものを除いてある。

(I) 250～252 図「いたそうだ」に現れる伝聞形式

(a) 認識系伝聞形式

ソー類 : soo + 断定辞

ゲ類 : ge, ŋe + 断定辞

フー類 : huu, hu + 断定辞

ラシー類 : rasii, rasi

(b) 引用系伝聞形式

・「助詞+動詞」形

トユー類 : to juu, to cju

テユー類 : tte juu, di juu

・縮約形

チュー類 : cjuu, ccjuu, cju, ccju, zjuu, ttjuu, cuu,ccuu, cu, ccu, zuu, zu ci, cci, cciN, zi, zii,

チョー類 : cjoo, ccjoo, cjo, zjoo,tjo, djoo, djo, ccɔɔ, coo, zo

チャ類 : cja, ccja, caa, ccaa, zaa, zai, zεε, zε

テ類 : te, tee, tte, ttee, de, ti, ttii, di, dii, ri

・助詞単独形

ト類 : to, too, do, doo, tu, tuu, ttu, du

・ゼロ助詞形(引用助詞が現れない形)

ユー類 : juu

次に、「いたそうだ」の動詞の直後に現れるノダ相当形式を、準体助詞部分の形をもとに(II)のように分類し、図 1-2 を作成した。なお、図 1-1 では伝聞形式を伴わない回答は除いたが、図 1-2 では伝聞形式を伴わない「動詞+ノダ相当形式」も地図化してある。ただし、その地点数は2地点であり、大多数の回答は伝聞形式が後に続く。

(II) 250～252 図「いたそうだ」の動詞の直後に現れるノダ相当形式

ノ類 : noda, N{da, zja, ja, nja}, nde, teN, N, ne

ガ類：ga, gada, ŋaja, ganda

ト類：zzja

ナ類：nada

モノ類：monda

φ類：da

さらに、図 1-2 に見られるノダ相当形式が、どのような伝聞形式とともに現れるのかを見るために、図 1-3 を作成した。

図 1-1 によれば、引用系伝聞形式は、認識系伝聞形式に分断されて東西の両端に分布する。いわゆる周圏分布をなしており、この分布からは、引用系伝聞形式が広がったあとに、中央部で認識系伝聞形式が発生し、広がりつつあることがわかる（伝聞表現の地理的分布の分析については日高(2013 予定)を参照）。

一方、図 1-2 を見ると、伝聞表現を問う質問文においてノダ相当形式を含む表現を回答する地点は、(A)東北中部（宮城・山形）、(B)関東北部（茨城・栃木・群馬・埼玉）、(C)東海（静岡・愛知）、(D)近畿南部（奈良・和歌山）に集中する傾向が見取れる。

また、図 1-3 によれば、それぞれの地域のノダ相当形式を伴う伝聞形式は、地域(A)は引用系伝聞形式のト類、地域(B)は引用系伝聞形式のチュー類、地域(C)は認識系伝聞形式のゲ類、地域(D)は引用系伝聞形式のト類となっており、地域(C)を除いて引用系伝聞形式がノダ相当形式を伴って現れやすいことがわかる。表 1 は、それぞれの伝聞形式の回答数と、ノダ相当形式を前接する回答数を示し、前者に対する後者の比率を示したものであるが、ここからも、認識系伝聞形式よりも引用系伝聞形式のほうが、ノダ相当形式を伴いやすいという傾向が読み取れる。

表1 ノダ相当形式を伴う伝聞形式の比率

伝聞形式		(a)回答数		(b)ノダ相当形式を前接する回答数		(a)に対する(b)の比率	
認識系 伝聞形式	ソー類	315	522	14	26	4.4%	5.0%
	ゲ類	165		11		6.7%	
	フー類	18		1		5.6%	
	ラシー類	24		0		0.0%	
引用系 伝聞形式	トユー類	4	397	0	81	0.0%	20.4%
	テユー類	3		0		0.0%	
	チュー類	169		16		9.5%	
	チョー類	23		4		17.4%	
	チャ類	20		1		5.0%	
	テ類	55		14		25.5%	
	ト類	122		46		37.7%	
ユー類	1	0	0.0%				

ここで特に、地域(D)に注目したい。図 1-1 によれば、近畿地方は全域的に認識系伝聞形式ソー類が優勢な地域であり、地域(D)にもト類とともにソー類が混在して分布する。一方、図 1-2 によれば、地域(D)はノダ相当形式を伴う伝聞表現が盛んな地域である。また一方で、図 1-3 によれば、ノダ相当形式を伴う伝聞表現はト類に限られ、ソー類はノダ相当形式を伴わない。このことを別の角度から見れば、ソー類が優勢な近畿地方の中でこの地域にト類が現れるのは、ト類自体が伝聞形式として優勢を保っているからではなく、「ノダ相当形式+ト類」が伝聞表現として慣用化しているためだということがわかる。

2. 2 回想表現の文末形式

共通語は回想表現の専用の形式を持たないが、東日本方言に見られる述語動詞のタツケ形、東北方言に見られるテアッタ・タッタ形は、回想場面で用いられやすい過去表現である。『方言文法全国地図』190・191 図「いたよ」は、主にこの述語動詞の過去形のバリエーションの地理的分布を見ることを目的に設定されたものであり、動詞部分を地図化した 190 図には、上述したようなタツケ形とテアッタ・タッタ形の分布が鮮明に現れている。

一方、動詞に続く形式の分布を示した 191 図では、終助詞類とともに、ノダ相当形式、伝聞形式が要素の一部として現れている。

190・191 図の略図を作成するにあたり、述語動詞をタ形（テアッタ・タッタ形含む）、タツケ形、テ形に大別し、その後続部分を以下の (Ⅲ) (Ⅳ) (Ⅴ) のように分類・整理した。なお、以下の分類では、語形の由来の明確でないものを除いてある。

(Ⅲ) ノダ相当形式

ノ類：N{da, daa, zja, zjaa, ja}, ^Ndaa, no, N

ガ類：ŋaja, ŋai, ŋa, ga, ŋaN, gaN

ト類：toja, to, ton, (tai)

ア類：aNda

モノ類：monoda, mon{da, zja, zjaa, ja, jaa}, mon, mun, onjaa, on, o

φ類：da, daa

(Ⅳ) 伝聞形式

ソー類：soo+断定辞

ゲ類：ge, ŋe+断定辞

チュー類：cjuu, cu, ccuu, ci, cci, zu, zua, zi

チャ類：cja, ccja

テ類：te, ttee

ト類：to, toi, do, doo, tu

(Ⅴ) 終助詞

ナ行系：na, naa, naaa, naadoo, nai, nare, ne, nee, njaa, nεε, nεa, nejā, ni, no, noo, nosaa

ヤ行系：ja, jaa, janoo, jo, joo, jone, jonee, jonoo, ee, enaa, i, ija, ijaa, ine, ino

サ行系：sa, saa, see, se, sja, sjaa

ワ行系 : wa, waa, wai, wae, wanaa, bai, baai, bana, tai
 ザ行系 : ze, zejo, zea, zo, zoe, zoo, zjo, zjoo, zzo, zja, zjaga
 ダ行系 : de, dee, de, deba, denaa, denoo, dejoo, do, doo, doojaa, ddo
 ガ行系 : ga, ɲa, gana, ɲana, ganaa, ɲanaa, gane, ganee, ganeja, ganoo
 接続助詞系 : karanoo, sukenee, ken, kennoo, kennai, kedo, kedonaa, kedomonaa, kitto,
 kettonjaa, battenee, battennee, romonaa, sigajaa

ノダ相当形式のト類に tai を含めているが、主に肥筑方言に現れる終助詞「タイ」は、「助詞トの内在が考えられる」（藤原 1997）とされるものであることから、ここではノダ相当形式と終助詞（ワ行系の wai）が融合した形式として扱った。また、to についてはノダ相当形式と伝聞形式、do については伝聞形式（to の子音が有声化したもの）と終助詞、ga・ɲa についてはノダ相当形式と終助詞のいずれの可能性もあるが、形態的な特徴（東北地方に現れるタツケ形に後接する do は伝聞形式とするなど）や使用地域（東北地方以外に現れる do は終助詞とするなど）から判断して、それぞれを分類した。

述語部分の構成は、①動詞、②ノダ相当形式、③伝聞形式、④終助詞の組み合わせとなる。図 2-1 がすべての組み合わせを示した総合図である。図 2-2 は動詞単独（①）および動詞＋終助詞（①＋②）の表現（事実の叙述）を抽出した図、図 2-3 はノダ相当形式を含む表現（①＋②／①＋②＋③／①＋②＋④／①＋②＋③＋④）を抽出した図、図 2-4 は伝聞形式を含む表現（①＋③／①＋③＋④／①＋②＋③／①＋②＋③＋④）を抽出した図である。また、図 2-5 には伝聞形式の実際の回答語形（IV）の分類によるものを示した。

(2) に示したように、この項目の質問文は、述語部分を明示しないで話者に文を完成させるという形式を取っており、表現の選択の幅が広い。回想表現の専用形式を持たない地域（主に西日本方言）では、図 2-2 に見るようにテ形の言いさし形（イテ、オッテ、オッテナ等）を回答するものが多く見られるが、これも広い意味での「回想の語り」（昔語り）の型の一つとして、一定の地域に定着したものと見なすことができるだろう。

図 2-3 は、ノダ相当形式の回答パターン（述語の構成）とその分布を示したものであるが、(A)東北北東部（青森東部・岩手北部）、(B)東北中東部（宮城）、(C)東北中西部（山形沿岸部）、(D)関東北部（茨城・栃木・埼玉）、(E)中部日本海側（新潟・富山・石川）、(F)近畿・中国南東部・四国（奈良・和歌山・兵庫・岡山・広島・香川・高知）、(G)九州北西部（佐賀・長崎・熊本）にまとまった分布が見られる。このうち、(A)(B)(C)(E)(G)はモノ類が複数地点で回答されているが、モノ類はこれらの地域で用いられる典型的な準体助詞（『方言文法全国地図』16 図「ここに有るのは何か」、17 図「行くのではないか」に現れる形式）ではないことから、これらの地域のモノ類の表現は、単なるノダ相当形式の表現とは異なり、回想表現に現れやすい意味特性を持っているものと思われる。それぞれの地域で典型的な準体助詞がノダ相当形式に用いられているのは、(B)(D)(F)のノ類、(E)と(F)のうちの高知のガ類、(G)のうちの佐賀・長崎のト類である。

図 2-4 は、伝聞形式の回答パターン（述語の構成）とその分布を示したものであるが、(A)東北中部（岩手・宮城・秋田、山形内陸部）、(B)関東（茨城・栃木・埼玉・千葉・東京）、(C)東海西部（愛知）、(D)九州南東部（熊本内陸部・宮崎・鹿児島）にまとまった分布が見られる。この図 2-4 と図 2-3 の分布域を比較すると、東北中西部（宮城）と関東

北部（茨城・栃木・埼玉）を除いて、両図の分布域が重ならないことがわかる。また、東北北西部（青森西部）、東南北部から中部内陸部・東海東部にかけて（福島・群馬・山梨・長野・岐阜・静岡）、中国北西部（鳥取・島根・山口）には、ノダ相当形式と伝聞形式のいずれも現れない地域が広がっている。

表2に「回答の語り」におけるノダ相当形式と伝聞形式の現れ方のパターンとその該当地域をまとめた。

表2 「回想の語り」のノダ相当形式(図 2-3)と伝聞形式(図 2-4)の現れ方

ノダ相当形式	伝聞形式	該当地域
○	○	東北中東部／関東北部
○	×	東北北東部／東北中西部／中部日本海側／近畿・中国南東部・四国／九州北西部
×	○	東北中部／東海西部／九州南東部
×	×	東北北西部／東北南部・中部内陸部・東海東部／中国北西部

2. 3 伝聞表現と回想表現の文末形式の比較

ここで、伝聞表現の質問文に現れた伝聞形式（図 1-1）と回想表現の質問文に現れた伝聞形式（図 2-5）を比較してみる。図 2-5 の(A)東北中部（岩手・宮城・秋田、山形内陸部）、(B)関東（茨城・栃木・埼玉・千葉・東京）、(D)九州南東部（熊本内陸部・宮崎・鹿児島）の地域については、図 1-1 と図 2-5 で現れる伝聞形式はほぼ一致している。一方、(C)東海西部（愛知）の地域については、図 1-1 ではゲ類が回答されているのに対し、図 2-5 ではテ類が回答されている。ただし、地域(C)では以下の例のような、引用助詞に由来する終助詞「テ」がさかんに用いられる。

- (3) 「なに言っとる。ほれは、きんのうのことだ。きょう覚えたことだて。」
 （「そろりそろりと来るわいな」『読みがたり愛知のむかし話』）

- (4) ほいでも、寝床ん中あ入ったって、どだい寝るどころじゃあないて。
 （「六部とシジュウカラ」『読みがたり愛知のむかし話』）

伝聞の専用形式としてゲ類を使用する地域(C)でその形式が現れないことからすると、図 2-5 に現れた地域(C)のテ類は、伝聞の機能は薄いものと見るべきだろう。そのように考えると、回想表現で伝聞形式を回答する傾向は、東北・関東・九州南東部という日本列島の周辺部に見られるものであるということになる。

次に、伝聞表現の質問文に現れたノダ相当形式（図 1-2）と回想表現の質問文に現れたノダ相当形式（図 2-3）を比較してみる。両者を総合した図 3 を見ると、両方の質問文に対してノダ相当形式を回答する地点は多くないことがわかる。その中で、東北中西部（宮城）と関東北部（茨城・栃木・群馬・埼玉）は伝聞・回想ともノダ相当形式を回答する地点が多く、また、いずれかの質問文に対してノダ相当表現を回答する地点も集中している。伝聞・回想とも「昔語り」にノダ相当形式が多用される地域だと言える。

西日本では、近畿・中国・四国の瀬戸内海寄りの地域（奈良・和歌山・兵庫南部・岡山・広島・香川・愛媛）に分布が集中する傾向がある。この地域のノダ相当表現は、伝聞・回想のいずれかに偏って現れるものではないようであり、「昔語り」に任意で現れる形式であると見られる。

九州では、北西部の佐賀・長崎にト類、熊本にモノ類の表現がさかんであるが、これらは回想表現に現れ、伝聞表現には現れない。「昔語り」のうち、事実の叙述において、これらの形式が多用されるものと思われる。

3. 「方言ももたろう」の分析

「方言ももたろう」の調査における、もとの共通語文は、以下のようなものである。

[共通語] ①むかしむかしあるところに、おじいさんとおばあさんがありました。②おじいさんは山へしばかりに、おばあさんは川へせんたくに行きました。③おばあさんがせんたくをしていると、川上から大きなももがどんぶらこどんぶらこと流れてきました。④おばあさんはそのももをひろって家へ帰りました。⑤おばあさんがももを切ろうとするとももがふたつにわれて、なかから大きな男の子が生まれました。⑥おじいさんとおばあさんはその子に桃太郎という名前をつけました。

「方言ももたろう」では、上記の共通語文の6つの文を各地方言に訳出している。6つの文の述語部分（①ありました、②行きました、③流れてきました、④帰りました、⑤生まれました、⑥つけました）に着目し、ノダ相当形式と伝聞形式の出現パターンを表3にまとめた。また、これにもとづき、図4、図5を作成した。

図4のノダ相当表現のバリエーションの分布は、関東にφ類、四国南西部（愛媛・高知）にガ類、九州北西部にト類とモノ類が現れており、おおむね図3の分布に一致している。

一方、図5の伝聞形式のバリエーションの分布を見ると、認識系伝聞形式のうちソー類の使用はきわめて不活発で、図1-1でソー類が現れていた地域にはト類が現れている。認識系伝聞形式のうちゲ類は、図1-1の分布に一致して現れている。引用系伝聞形式では、ト類が全国的に優勢であるが、チュー類も図1-1の分布域の範囲内で現れている。その中で、東北北東部（青森東部・岩手）は、図1-1ではチュー類が集中して分布しているが、図5ではト類が優勢である。

以上のことから、昔話の語りにおいては、関東および近畿・中国・四国・九州にノダ相当形式を多用する方言があること、また、伝聞形式では全国的にト類が多用されること、その中で関東ではチュー類、ゲ類使用地域ではゲ類が優勢であることがわかる。

4. おわりに

本稿では、『方言文法全国地図』の分布図と、昔話資料「方言ももたろう」をもとに、「昔語り」の文末表現の地理的分布を見てきた。文末表現のうち、特に注目したのは、ノダ相当表現と伝聞表現である。

ここで、本稿でいずれの資料においても、共通に見られる地域傾向をまとめておく。

(VI) 「昔語り」の文末表現の地域傾向

1. 関東北部では、ノダ相当形式（ノ類・φ類）・伝聞形式（チュー類）をともに用いる傾向がある。
2. 近畿・中国南東部・四国では、ノダ相当形式（ノ類）を多用する傾向がある。
3. 九州北西部では、ノダ相当形式（モノ類）を多用する傾向がある。
4. 東北北部・中部・中国北西部・九州南東部では、ノダ相当形式を用いない傾向がある。

ここで調査対象とした資料は、同時期に統一の調査法により収集された「整った」資料である。それによって、「昔語り」の文末表現として、ノダ相当形式と伝聞形式が多用されることに着目するに到った。今後は、実際に語られた自然談話資料、昔話の語りの資料を見ることによって、上記の地域傾向について検証していきたい。

参考文献

- 生田目弥寿(1982)「伝聞の表現」『日本語教育事典』大修館書店, 205.
日本語記述文法研究会編(2003)『現代日本語文法④モダリティ』くろしお出版.
日高水穂(2013 予定)「複合辞「という」の文法化の地域差」藤田保幸編『形式語研究論集』和泉書院.
藤原与一(1997)『日本語方言辞書（下巻）—昭和・平成の生活語—』東京堂出版.
宮崎和人(2005)「伝聞」『新版日本語教育事典』大修館書店, 145-146.

資料

- 国立国語研究所編(1999)『方言文法全国地図』第4集(190・191 図) 大蔵省印刷局.
国立国語研究所編(2002)『方言文法全国地図』第5集(250～252 図) 財務省印刷局.
佐藤亮一監修(2007)『ポプラディア情報館 方言』ポプラ社
杉藤美代子監修・著『CD-ROM 方言ももたろう』富士通B S C
愛知のむかし話の会編(2005)『読みがたり愛知のむかし話』日本標準

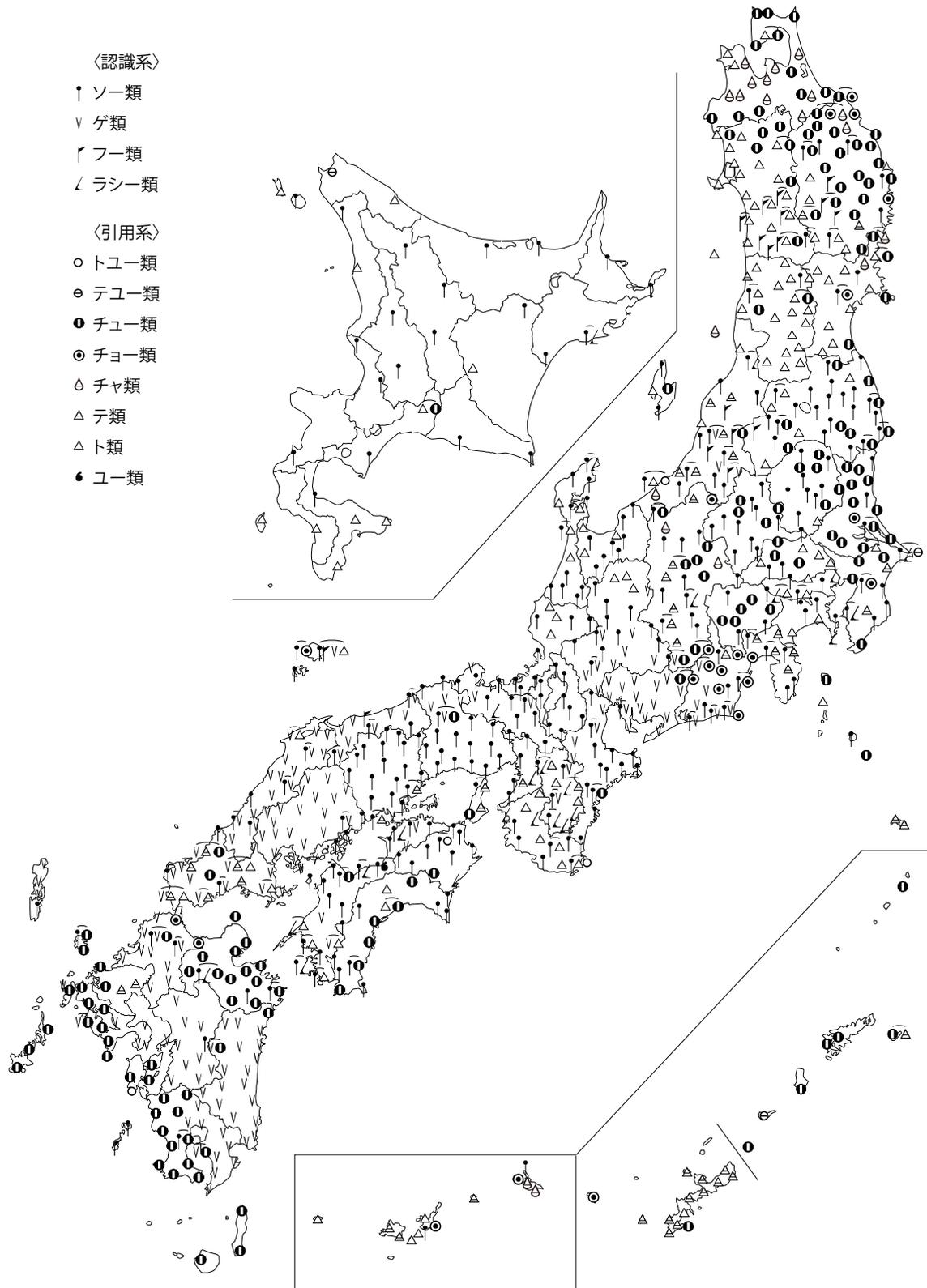


図 1-1 「昔、昔、あの山に鬼がいたそうだ」《伝聞形式》
 (『方言文法全国地図』250～252 図より作図)



図 1-2 「昔、昔、あの山に鬼がいたそうだ」《ノダ相当形式》
 (『方言文法全国地図』250～252 図より作図)

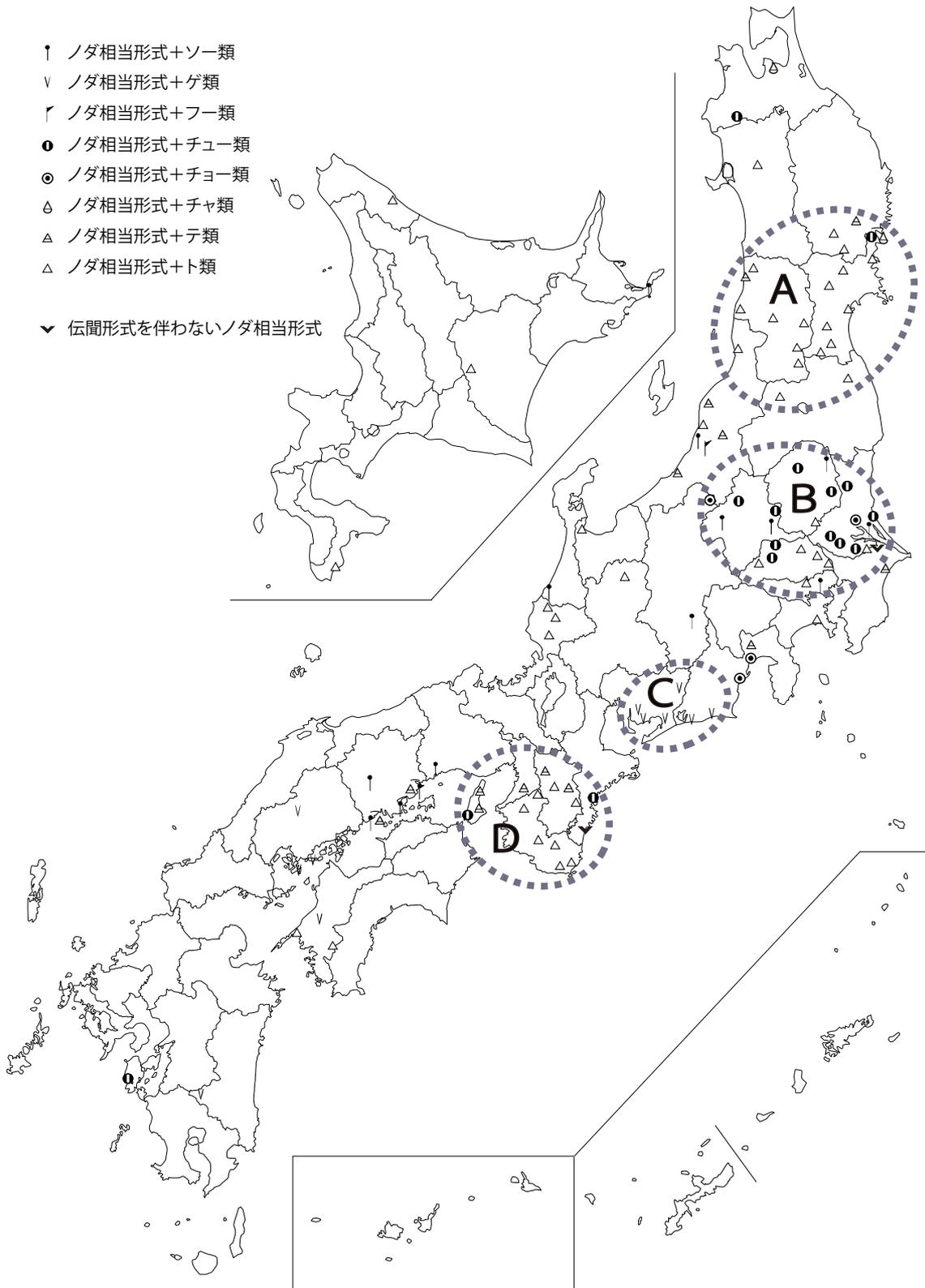


図 1-3 「昔、昔、あの山に鬼がいたそうだ」《ノダ相当形式+伝聞形式》
 (『方言文法全国地図』250～252 図より作図)

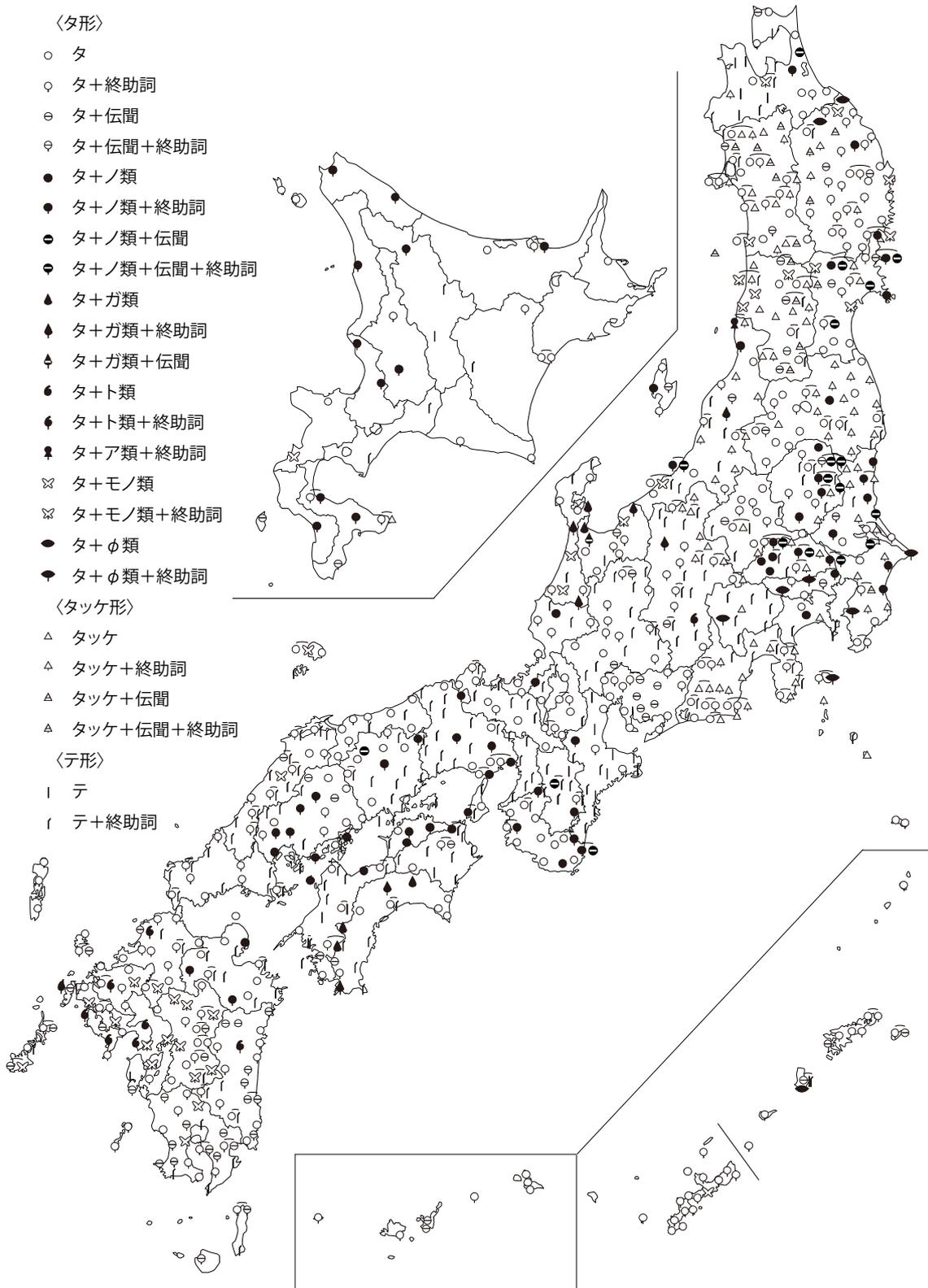


図 2-1 「昔、ここにももの知りの人がいたよ」《総合》
 (『方言文法全国地図』191・192 図より作図)

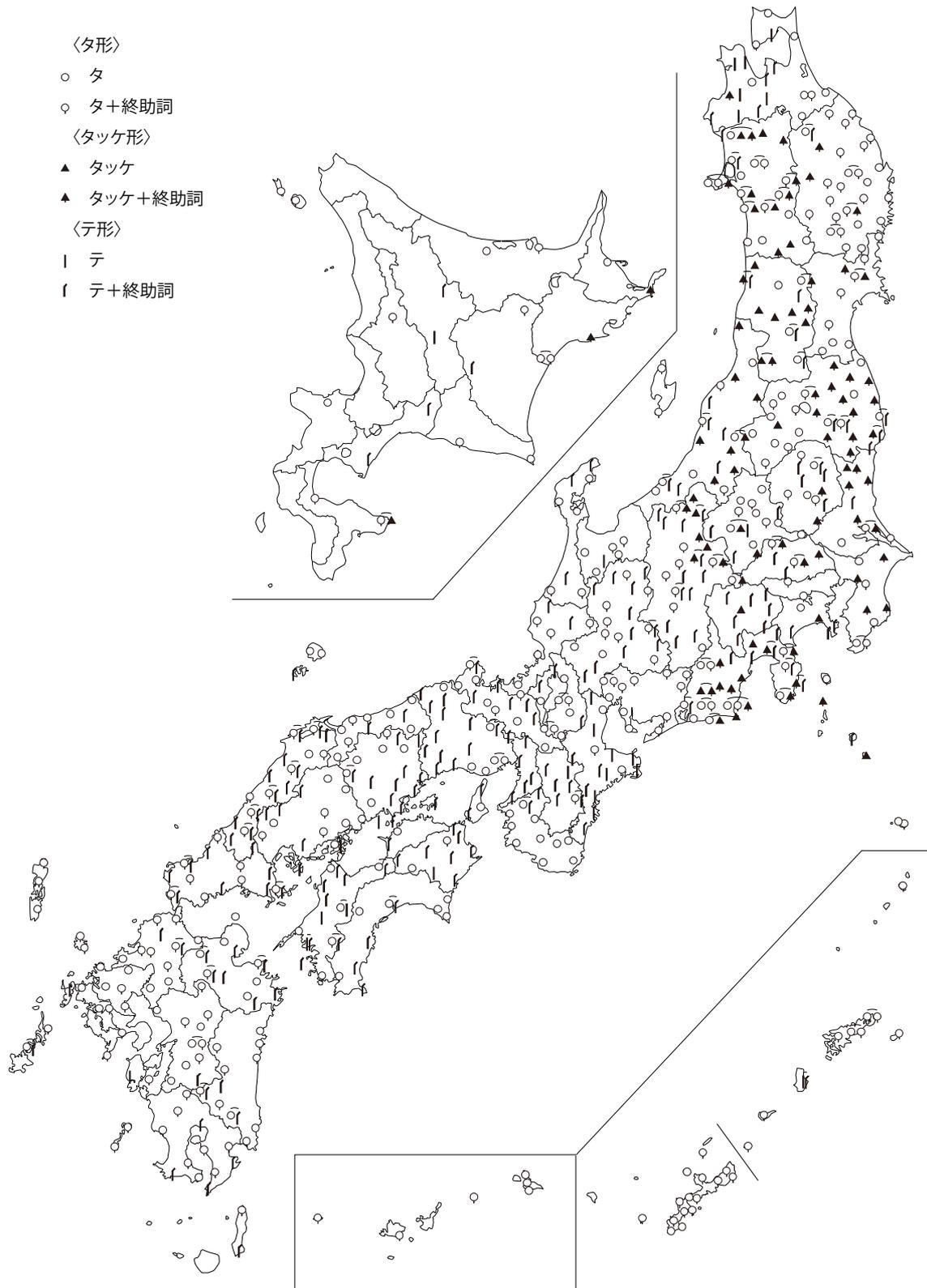


図 2-2 「昔、ここにももの知りの人がいたよ」《事実の叙述》
 (『方言文法全国地図』191・192 図より作図)

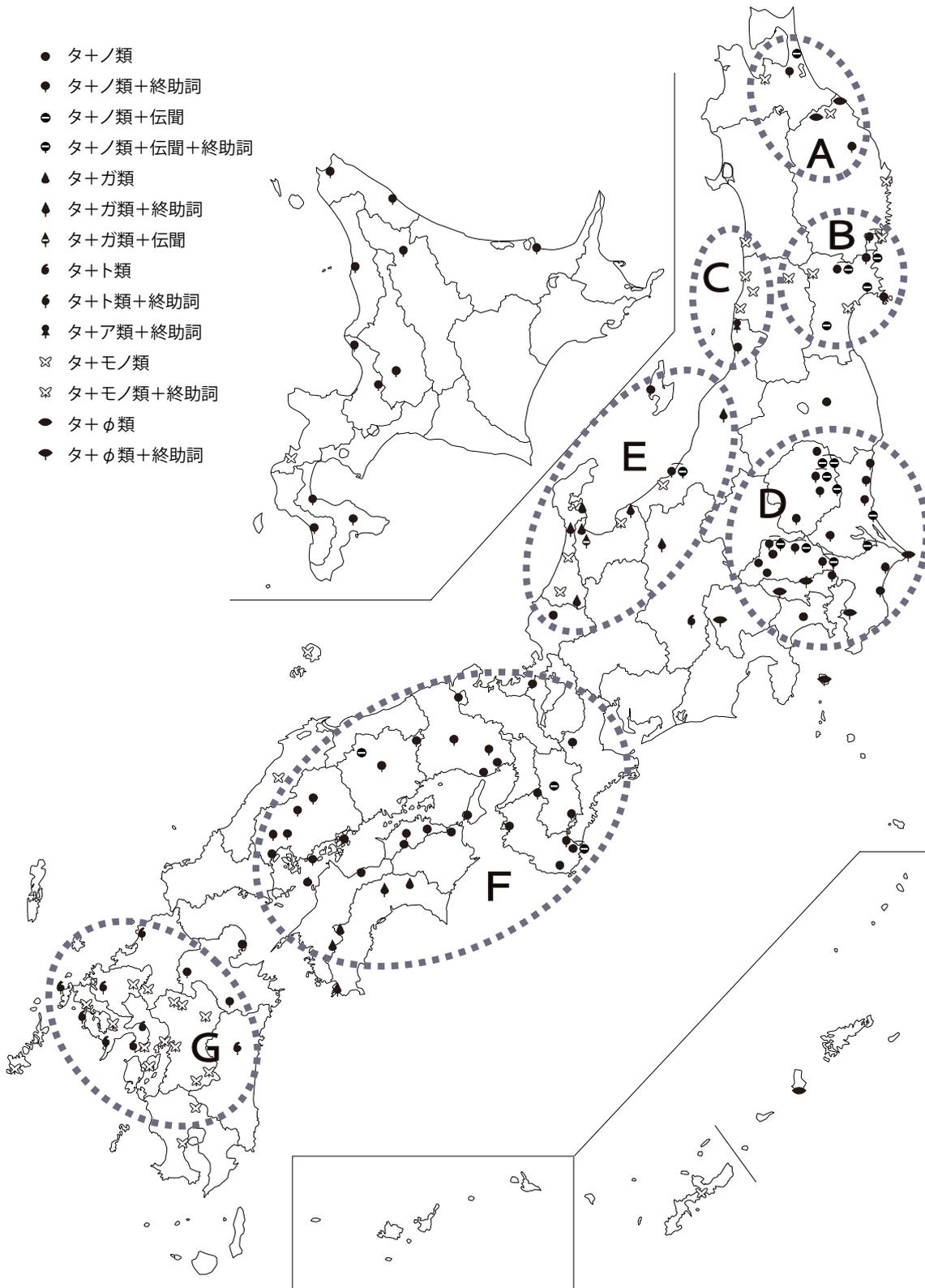


図 2-3 「昔、ここにももの知りの方がいたよ」《ノダ相当形式》
 (『方言文法全国地図』191・192 図より作図)

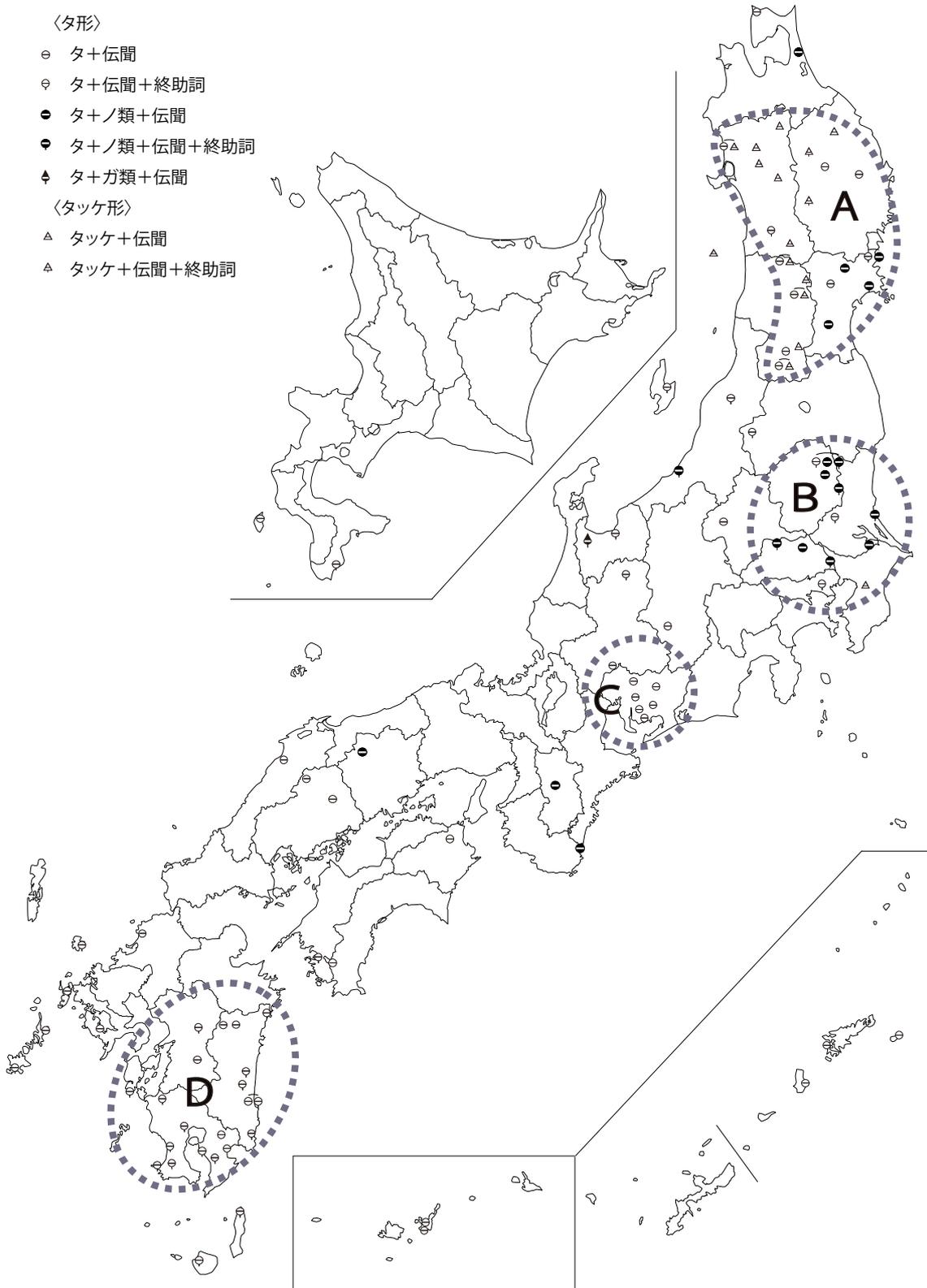


図 2-4 「昔、ここにももの知りの人がいたよ」《伝聞形式を含む述語の構成》
 (『方言文法全国地図』191・192 図より作図)

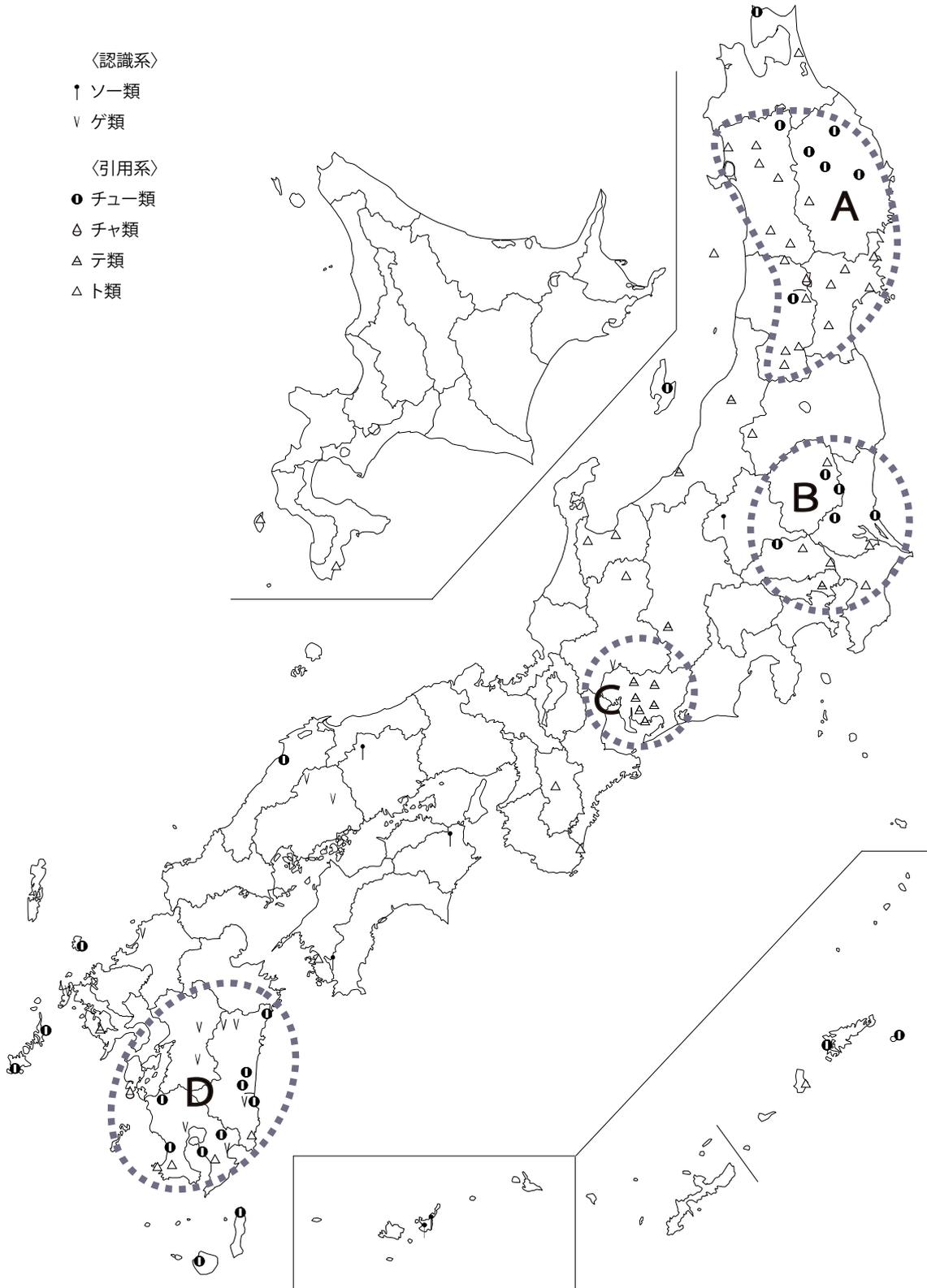


図 2-5 「昔、ここにももの知りの人がいたよ」《伝聞形式の語形》
 (『方言文法全国地図』191・192 図より作図)

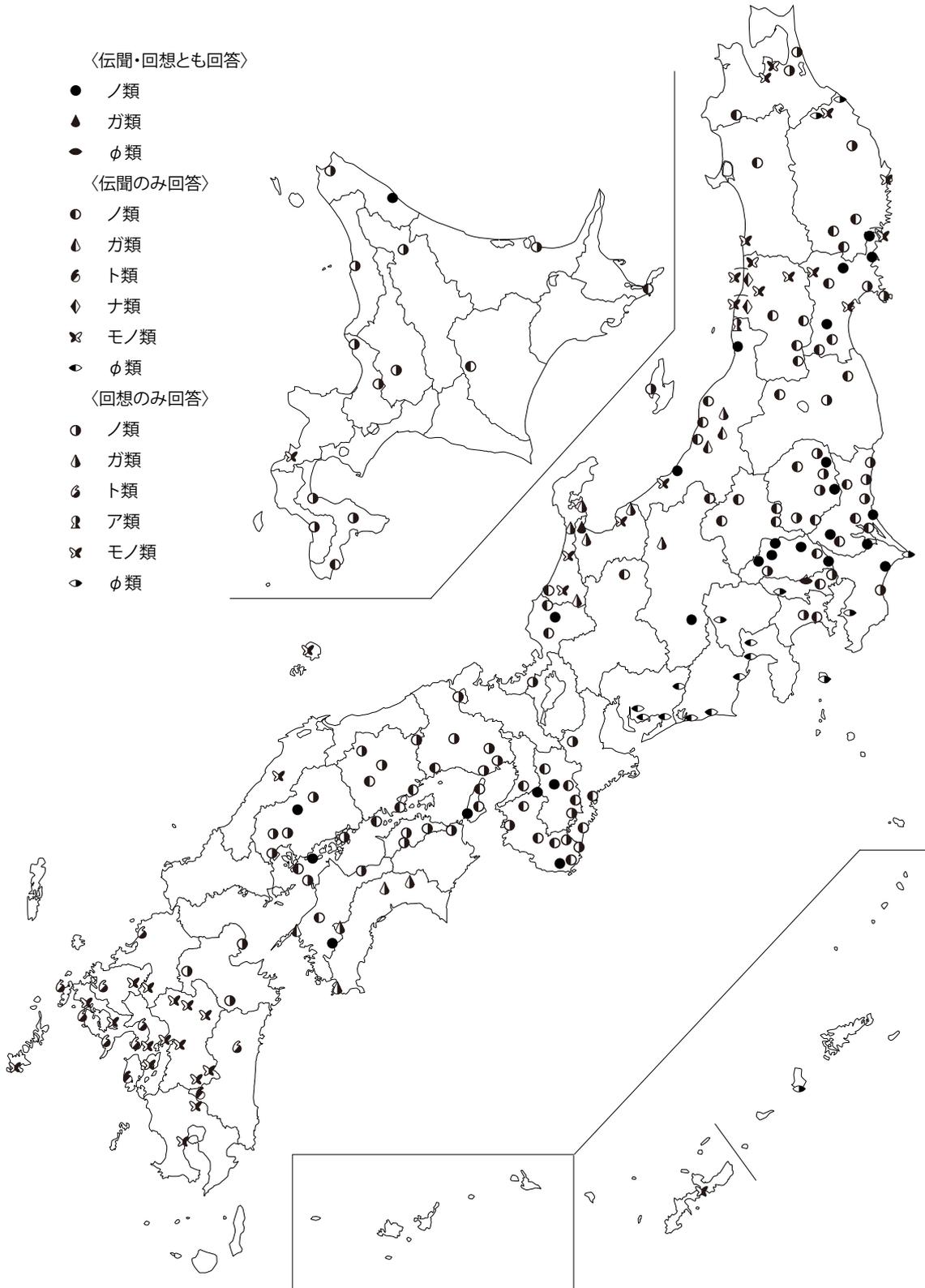
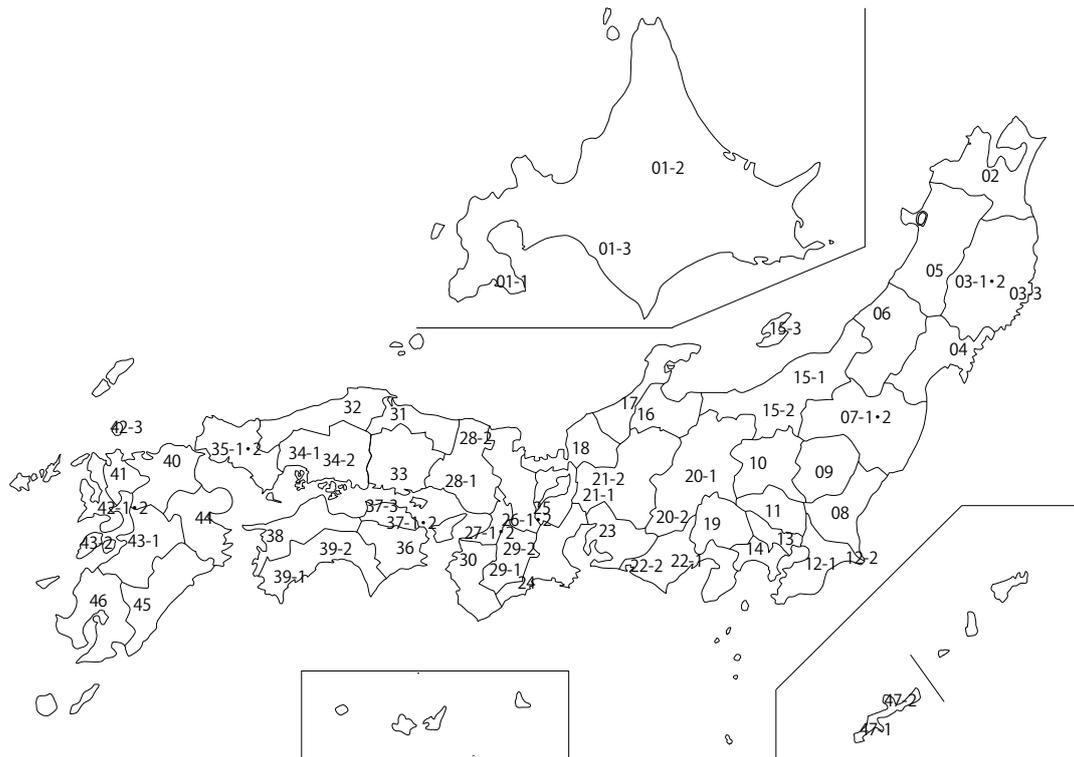


図3 伝聞・回想表現に現れるノダ相当形式(図1-2-2-3の総合図)
 (『方言文法全国地図』191・192・250～252 図より作図)

「方言ももたろう」収録地点



- | | | |
|--------------------|-----------------|-----------------|
| 01-1 北海道函館市 | 17 石川県金沢市 | 34-1 広島県広島市 |
| 01-2 北海道名寄市 | 18 福井県越前市 | 34-2 広島県賀茂郡大和町 |
| 01-3 北海道静内郡静内町 | 19 山梨県南アルプス市 | 35-1・2 山口県山口市 |
| 02 青森県五所川原市 | 20-1 長野県松本市 | 36 徳島県阿南市 |
| 03-1・2 岩手県花巻市 | 20-2 長野県下伊那郡天龍村 | 37-1・2 香川県高松市 |
| 03-3 岩手県宮古市 | 21-1 岐阜県不破郡垂井町 | 37-3 香川県観音寺市 |
| 04 宮城県気仙沼市 | 21-2 岐阜県揖斐郡藤橋村 | 38 愛媛県西予市 |
| 05 秋田県横手市 | 22-1 静岡県静岡市 | 39-1 高知県四万十市 |
| 06 山形県東田川郡三川町 | 22-2 静岡県浜松市 | 39-2 高知県高知市 |
| 07-1・2 福島県大沼郡会津美里町 | 23 愛知県名古屋 | 40 福岡県福岡市中央区 |
| 08 茨城県水戸市 | 24 三重県尾鷲市 | 41 佐賀県佐賀市 |
| 09 栃木県さくら市 | 25 滋賀県大津市 | 42-1・2 長崎県長崎市 |
| 10 群馬県吾妻郡中之条町 | 26-1・2 京都府京都市 | 42-3 長崎県壱岐郡郷ノ浦町 |
| 11 埼玉県秩父市 | 27-1・2 大阪府大阪市 | 43-1 熊本県熊本市 |
| 12-1 千葉県市原市 | 28-1 兵庫県姫路市 | 43-2 熊本県天草郡苓北町 |
| 12-2 千葉県銚子市 | 28-2 兵庫県出石郡出石町 | 44 大分県大分市 |
| 13 東京都港区 | 29-1 奈良県吉野郡十津川村 | 45 宮崎県都城市 |
| 14 神奈川県秦野市 | 29-2 奈良県生駒郡斑鳩町 | 46 鹿児島県鹿児島市 |
| 15-1 新潟県三条市 | 30 和歌山県和歌山市 | 47-1 沖縄県那覇市 |
| 15-2 新潟県十日町市 | 31 鳥取県米子市 | 47-2 沖縄県国頭郡今帰仁村 |
| 15-3 新潟県佐渡郡真野町 | 32 島根県松江市 | |
| 16 富山県南砺市 | 33 岡山県岡山市 | |

佐藤亮一監修 (2007) 『ポプラディア情報館 方言』ポプラ社
 杉藤美代子監修・著『CD-ROM 方言ももたろう』富士通BSC

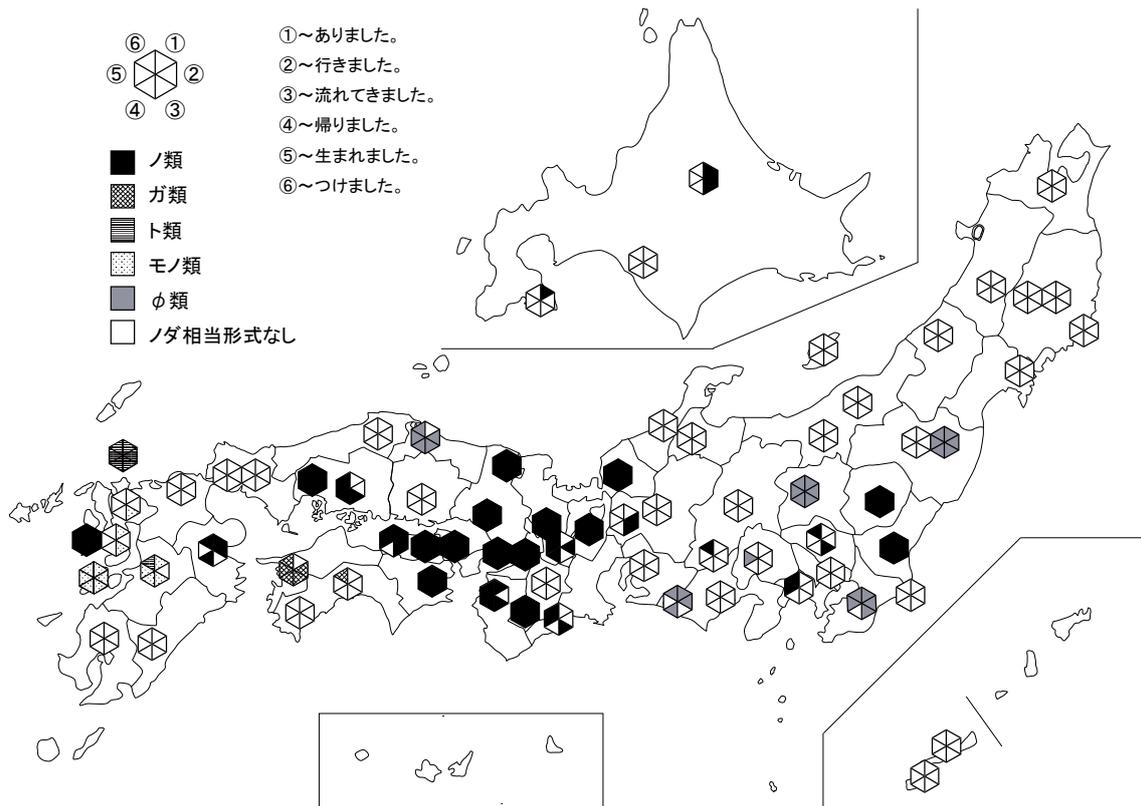


図4 「方言もたろう」のノダ相当形式の出現パターン

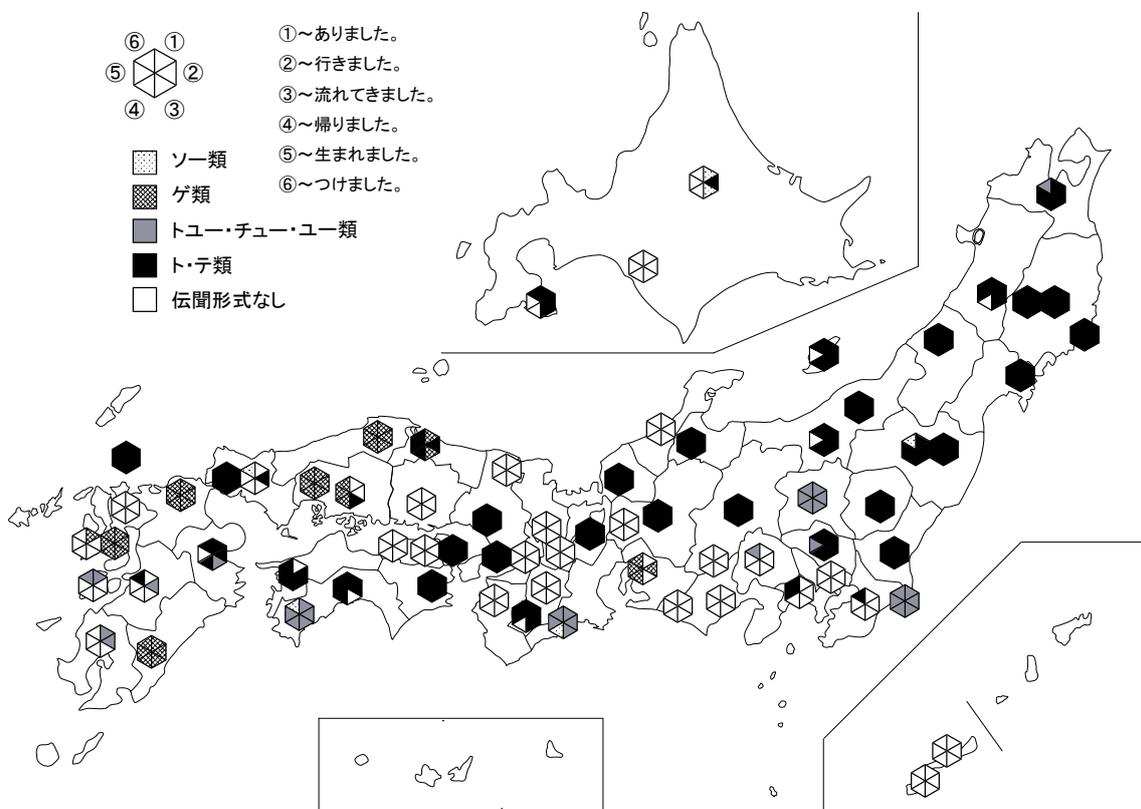


図5 「方言もたろう」の伝聞形式の出現パターン

大規模方言談話資料にみる受話法の地域差

沖 裕子
(信州大学)

1. はじめに

本稿は、熊谷康雄氏が率いる国立国語研究所独創・発展型共同研究プロジェクト「大規模方言データの多角的分析」の一環として行った研究成果の一部を記すものである。

大規模方言データのひとつである方言談話資料『国立国語研究所資料集 13-1～20 全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』全 20 巻(注 1)をとりあげ(以後、『ふるさとことば集成』と略述)、それを利用したどのような分析が可能かを模索することがプロジェクト研究のテーマであった。本稿では、分析の 1 例として、会話冒頭部の型に地域差があることを、大規模方言談話資料を用いた観察から帰納的に指摘する。

一般に、文法を意識せずに話者は言語を用いている。本稿が対象とする、会話冒頭部の使用傾向についても、おそらく話者が意識することは稀であろう。しかしながら、自然談話資料を観察することにより、こうした、ふだんは意識することのない表現法のありかたが観察可能になる。

談話の文法は、構文における文法のように、それを逸脱すると正文とならないような強固な文法だけではない。談話の文法は、談話性(テキスト性)に関わる強固な文法とともに、その言語らしい使用傾向(くせ)を体現する表現法のレベルにも存在している。後者は、適切性にかかわる文法であるといってよいであろう。談話が談話として構築される文法のことを結節法と呼ぶ(沖 2006,2010)が、結節法は、文文法とはレベルを異にしている。結節法は、談話性にかかわる談話文法と適切性にかかわる表現法を含む規則として位置づけられる。

本稿は、談話結節法の記述的研究およびその変異研究の一環として行うものである。

2. 談話論からみる『ふるさとことば集成』の性格と活用

『ふるさとことば集成』は、各都道府県 1 地点ずつ(沖縄県は 2 地点)、約 30 分前後の、親しい話者同士の方言会話を収録文字化している。当地生え抜きの方言話者による往時の生活の思い出話という点で談話種に共通性がみられるが、語られているテーマ、会話参加者の人数、話者同士の性別は、多様である。一般に談話研究に利用する談話資料には、おおむね(1)条件を統制した実験による談話、(2)自然談話、の 2 種がある。『ふるさとことば集成』は、(1)をゆるやかに適用した(2)のタイプの大規模方言談話資料として位置づけられる。

こうした自然談話資料を用いた研究では、比較に堪える観察視点を抽出することが

重要である。

方言談話資料（自然談話資料）は、音声・音韻、語彙、語法などの自然な使われ方の生きた用例集として利用されることが多いが、方言談話資料を、談話そのものの研究として活用する研究事例は、さほど多くはない。談話論そのものが研究途上にあるため、研究的な観察視点を立てにくいという事情があるうえに、「自然談話資料を利用してどのような談話研究が可能か」という問もまた積極的に問われることが少なかったからであろう。熊谷プロジェクトの研究の目的は、後者の問を立てるところに特長がある。

3. 受話法とは—本稿の目的—

大規模方言談話資料を用いた研究の1例として、本稿では、受話法に注目した分析を行いたい。受話法とは何かについて、まず、説明をしておきたい。

受話法とは、相手の会話を受けるときの結節法を指して用いる。会話は、相手発話を自発話のなかにとりこみ、位置づけながら展開していく。相手発話をどのように自発話のなかにとりこみ位置づけていくか、そのしくみの総称を受話法と名づけたい。

受話法についての具体的な記述のひとつは、あいづち研究に求められる。あいづちは、その形式、機能、打ち方について、種々の研究がなされている。あいづちは、会話という相互行為において、相手発話と自発話を関係づけるしかたのひとつであり、この点で、ひろくは受話法のひとつであるといつてよいと思う。

さて、本稿が観察対象とするのは、会話冒頭部である。発話者の交替に際して、冒頭に相手発話と自発話の関係づけを示す形式を用いるか否か、また、用いるとしたらどのように行うかを観察するものである。

当然ながら、会話冒頭だけではなく、続く実質的発話内容においても相手発話との関係づけが示されることがある。それを承知したうえで、本稿では、会話冒頭部のみに対象を限り、後続する談話との関係をひとまず切り離して、大規模方言談話資料から帰納的に観察される場所を分析、考察したいと思う。会話は、時間軸に沿って進行し、不可逆的である。各話者それぞれの短期記憶におさまる範囲内で再解釈や構造化が更新されながら推進されていくものと仮定されるが、話者交替した直後は、発話列が相手発話に直接に後続する箇所にあたるため、これをどのように続けるかについては、各方言における傾向性が端的に現れる部分ではないかと思われる。そのため、こうした相手発話と自発話の接続部分である会話冒頭部に着目するものである。

ちなみに、談話の結束性や整合性という概念は、テキストをテキストたらしめるしくみとして、斯会にすでに共有されているといつてよいと思うが、結束性や整合性は、文章あるいは独話のテキスト性を対象とした概念である。文章や独話では、表現者は、テキストを時間的制約から解放されたところで自己ひとりによって管理し、表現することができる（注2）ところが会話は、複数の話者によって推進、管理されていく。話者Aがそう推進させたいと思っても、話者Bがそう考えていなければ、話者Aひとりが考えるようには推進できない。すなわち、会話は、1者だけで管理すること

ができないものである。その点で、「会話のしくみ」は、文章や独話のテキスト性とは別の側面を考える必要が出てくるといえる。結束性や整合性を、異なる話者のテキストを結ぶ概念としても用いてよいかどうかは、なお慎重な議論を要することと考え、本稿では、異なる話者のテキスト相互の関係づけに際してこの用語を用いることを控えることにする。

繰り返しになるが、ここでは、話者交替の際に、他者テキストを、どのように自者テキストのうちに関係づけるか、その受話法を、会話冒頭部に限定して分析し、地域差の有無を観察しようとするところに、研究目的をおいた。

4. 対象資料

会話は、参加者数によって、その談話展開に異なったしくみが認められることが指摘されている。そこで、会話参加者数別にみると、『ふるさとことば集成』の地点数は、【表1】のようである。

【表1】 会話参加者数と地点数

2 者会話	3 者会話	4 者会話	5 者会話	6 者会話	合計
12 地点	28 地点	6 地点	1 地点	7 地点	48 地点

参加者2名からなる2者会話は、2者が参加することで会話が成立する形態である。参加者が2名であるため、両者ともが会話に参加しなければ、そもそも会話が成立しない。どうであれ、必ず相手発話と向き合う必要が生じるのが2者会話である。そのため、受話法の基本的様態を観察するためには、2者会話からはじめることがよいかと思われる。

『ふるさとことば集成』に含まれる2者会話は、次の12地点である。しかし、これらのなかには、調査員が会話に参加して結果的に3者会話になっている談話（下線を施した地点）が含まれている。それを除くと8地点が対象となる。

方言話者同士の2者会話の点（下線部は、調査員が参加した3者以上の会話）

岩手県、茨城県、千葉県、東京都、奈良県、兵庫県、岡山県、鳥取県、高知県、宮崎県、長崎県、沖縄県 A

本稿では、ここから、岩手県遠野市、東京都台東区、奈良県五條市の3地点をとりあげて分析考察を行いたい（以後、これらの談話資料を、岩手県、東京都、奈良県と略す）。なお、各地点の調査概要は、下記のように記されている。

岩手県談話資料

岩手県遠野市 1980 談話

収録地点 岩手県遠野市（とおのし）土淵町（つちぶちちょう）土淵（つちぶち）

収録日時 1980(昭和55)年8月7日

収録場所 岩手県遠野市土淵町土淵 土淵地区センターホール

話題 ご祝儀のこと

話者

A 女 1914(大正3)年(収録時 66 歳) 農業

B 男 1917(大正6)年(収録時 63 歳) 農業

調査者

男 (収録談話中に発話なし) 岩手県教育委員会職員

男 (収録談話中に発話なし) 高校教諭

男 (収録談話中に発話なし)

収録時間 (CD) 46 分 52 秒

東京都談話資料

東京都台東区 1980 談話

収録地点 東京都台東区

収録日時 1980(昭和55)年3月13日

収録場所 上野公園 東京都美術館 集会室

話題 年末年始, 初午, ほおずき市

話者

A 男 1911(明治44)年生(収録時 69 歳) 画版業

B 女 1907(明治40)年生(収録時 73 歳) 無職

調査員

女 (収録談話中に発話なし)

収録時間 (CD) 34 分 51 秒

奈良県談話資料

奈良県五條市 1981 談話

収録地点 奈良県五條市（ごじょうし）五條（ごじょう）

収録日時 1981(昭和56)年9月15日

収録場所 —————

話題 趣味と病気の話, 商売と跡取り, 害虫と自然

話者

A 男 明治 40 年生(収録時 74 歳)

B 女 大正 12 年生(収録時 58 歳)

調査員

男 (収録談話中に発話なし)

収録時間 (CD) 33 分 39 秒

5. 資料作成方法

ここでは、先に述べた資料を対象に、下記①から④の方法で観察資料を作成する。『ふるさとことば集成』の文字化方針を尊重し、交替箇所の実質的会話が続く冒頭部に注目する。

- ①「話者交替があった場合、その冒頭の語詞を、会話参加者別に集計して示す。
- ②「話者交替の箇所は、文字化資料を尊重して行う。
- ③「音声と照合した場合、話者交替の示し方における別の解釈が生じる場合があるが、②による。
- ④「実質的な発話が後続しないあいづちなどは、文字化資料では、括弧内に示されている。こうした発話は、対象としない。

①については、音声付談話資料を聞きなおし、文字化資料や注記を参照しながら、判断していく。後述するように、会話冒頭の語詞は俚言形が用いられるとともに、その機能や運用法に異なりがあり、各地域の言語体系をふまえた分析と分類が必要になる。共通語のあいづちには先行研究も多いが、方言のあいづちについては未解明な部分も多く、本稿の分類もそうした研究の進展に伴い、再分類される可能性を残すかと思う。

また、会話冒頭部の発話が、複数の分類が可能な場合もみられる。この場合は、イントネーション(句音調)、プロミネンス、ポーズなどの音声情報も参照しながら、最終的にひとつの用法を認めて分類した(注3)。この分類のしかたについても、判断がひとつに収束するかどうかを含め、再考の余地があるかもしれない。

6. 会話冒頭部における型の地域差

6. 1 とりこみ型と直截型の対立からみた地域差

岩手県、東京都、奈良県の会話冒頭部における相手発話との関係づけの有無をみたとき、大別すると次の2類が観察される。

とりこみ型：会話冒頭部に、相手発話との何らかの関係づけをあらわす語詞をとる
結節法

直截型：会話冒頭に、相手発話との関係づけを示す語詞をとらず、ただちに実質的会話内容に入る結節法

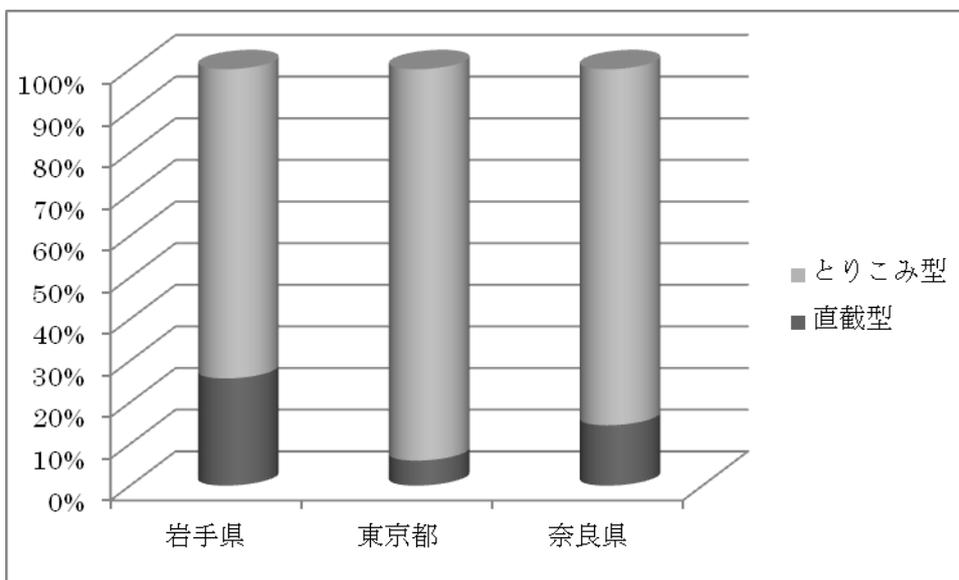
この、とりこみ型と直截型との割合の地域差を示してみたものが【図1】である。なお、第5節で記したように、本稿の分類は会話冒頭部におけるとりこみ語詞の有無のみに注目したもので、続く実質的会話部分に他者テキストとの関係づけを示す方策があっても、ここでは計量の対象としてはいない。あくまでも話者交替した直後の談話冒頭部に注目したものである。

【図1】に示したように、岩手県は、直截型が全体の25.8%であるのに対して、東京

都の直截型は6.0%しかない。これらに対して、奈良県は14.5%と中間的な値を示している。この数値は、何を示しているのだろうか。

【図1】会話冒頭部の受話法（岩手県・東京都・奈良県）

(%)



	岩手県	東京都	奈良県
直截型	25.8	6	14.5
とりこみ型	74.4	93.8	85.5
合計 (%)	100.2	99.8	100

	岩手県	東京都	奈良県
直截型	216	155	142
とりこみ型	75	10	24
合計 (度数)	291	165	166

談話は、時間とともに推進され、後戻りすることはない。時間軸に沿って展開していく性質を有している。話者交替したときの会話冒頭部に、相手テキストとの関係をつける語詞をまず置き、しかるのち実質的会話内容に入っていくのが、とりこみ型である。東京都は、このとりこみ型発話が徹底しているといってよい。つまりは、相手の発話をふまえて自分の発話を始めるという結節法が表現様式として確立している方言といつてよいであろう。それに対して、岩手県は、そうした結節法は徹底されず、話者交替がおこる発話冒頭において、相手テキストとの関係を示さず直截に自発話の実質的展開に入る結節法の比率が、東京都より高い方言である。(ただし、岩手県も全体の4分の3はとりこみ型であるので、とりこみ型が表現様式の基調をなしていることに変わりはない)

い。)

さて、1地域における「直截型／とりこみ型」の出現比率は、社会言語学的にみると、その方言が有している待遇意識の差に由来しているのではないかと考える。東京都は、会話冒頭部をみる限り、直截型の割合がたいへん低く、常に相手発話を意識した語詞で会話をはじめた談話展開になっている。それに対して、岩手県は、忖度せず、単刀直入に本題に入ることがある率直な談話展開がみられる。少なくとも、会話冒頭部における相手発話とのつながりをつける言語形式の出現頻度という観点から観察した場合に、こうした地域差が観察されるのである。換言すれば、相手への配慮のしかたが、方言によって異なっていると述べることができよう。

ちなみに、こうした実態は次のような接触上の問題を生む可能性があるかもしれない。当該言語共同体に属し、同一の言語文化を共有している場合は、会話様式を共有しているため何の問題も起こらないが、直截型の比率の高い言語話者（岩手県）と、直截型の比率の低い言語話者（東京都）が接触した場合には、お互いに違和感を持ちそうな会話様式の差異が存在しているといってもよいのではないだろうか。こうした差異は気づかれにくいために、いっそう、「説明のつきにくい違和感」となる可能性がある。

なお、「直截型／とりこみ型」の出現頻度は、地理的分布を示す可能性がある。『ふるさとことば集成』に多い3者会話を瞥見すると、直截型の出現頻度の高い地域が、地理的にまとまってみられる傾向があるからである。

6. 2 とりこみ型の出現率からみた地域差

つぎに、どのような語詞によって相手発話のとりこみを行っているか観察したい。

【図2】に示したのは、以下の①から⑦の地点別出現率である。なお、分析の具体例については、本稿末に【資料1～3】として掲げた。資料中の①から⑦は、下記の分類に対応している。

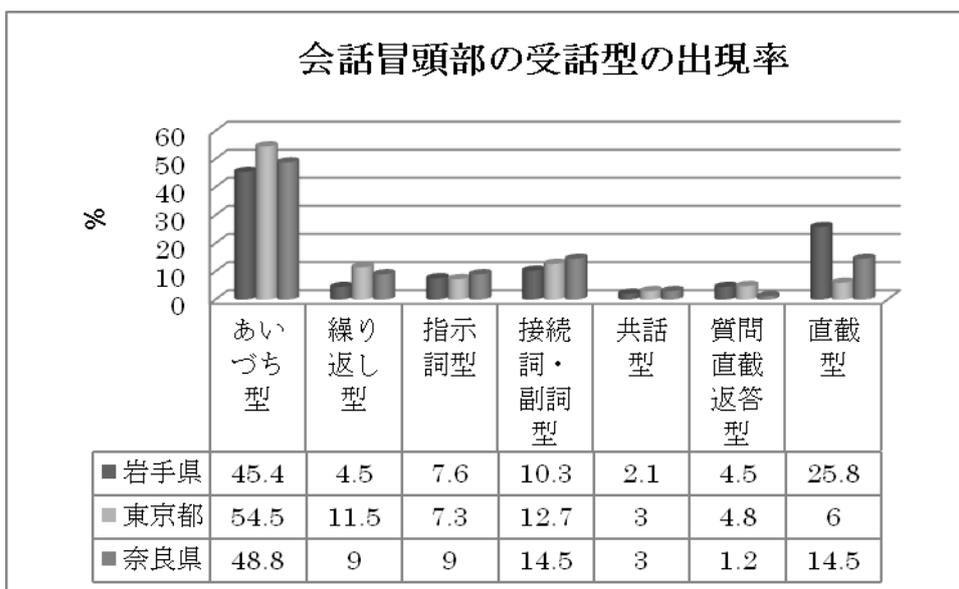
- ① あいづち型
- ② 繰り返し型
- ③ 指示詞型
- ④ 接続詞・副詞型
- ⑤ 共話型
- ⑥ 質問直截返答型
- ⑦ 直截型

直截型を除いたとりこみ型は、6種類が観察された。（対象地域を広げてみると、このほかにも、たとえば「ためらい型」などが出現するが、この3地点の2者会話をみる限りは、この6種類であった。）

あいづち型は、相手発話に対する反応を表現する語詞による関係づけである。②指示詞型は、照応による関係づけ、③繰り返し型は同一語句による関係づけ、④接続詞・副詞型は、語詞自体が、それより前の文脈と関係づけを行う意味を語義のうちに有しており、意

味的な関係づけを行っている。⑤共話型は協働的文構築、⑥質問直接返答型は隣接ペアによる関係づけである。なお、⑦直截型とは、関係づけを行う特段の形式がなく直接自発話文脈に入るものである。

【図2】 会話冒頭部の受話型の出現率 [2者会話：岩手県・東京都・奈良県]



	岩手県	東京都	奈良県
あいづち	132	90	81
繰り返し	13	19	15
指示詞	22	12	15
接続詞・副詞	30	21	24
共話	6	5	5
質問直截返答	13	8	2
直截	75	10	24
合計 (度数)	291	165	166

岩手県、東京都、奈良県を比較対照すると、【図2】からは次のようなことが分かる。

- (1) 岩手県は、⑥直截型の比率が比較的高く、②繰り返し型が他2地点と比べて、比較的低い。
- (2) 東京都は、①あいづち型、②繰り返し型、⑥質問直截返答型が、他2地点より比率が高く、⑦直截型の比率が低い。
- (3) 奈良県は、⑥質問直截返答型が他2地点より低い。

以上の観察をふまえながら、次節では、3地域の特徴を、各型に含まれる形式を具体

的にみることで分析考察していきたい。

7. 会話冒頭部における形式の地域差

7. 1 あいづち型に含まれる形式の地域差

あいづちの分類には、ザトラウスキー、ポリー (1993)、メイナード、K・泉子 (1993) 堀口純子 (1997) などの先行研究があり、諸説が提出されている。本稿では、あいづちそのものの体系的記述が直接の目的ではないため、談話資料の当該位置に出現するあいづちのみを帰納的に分類した。その結果、形式の点から観察すると、あいづちに次の2種が認められた。

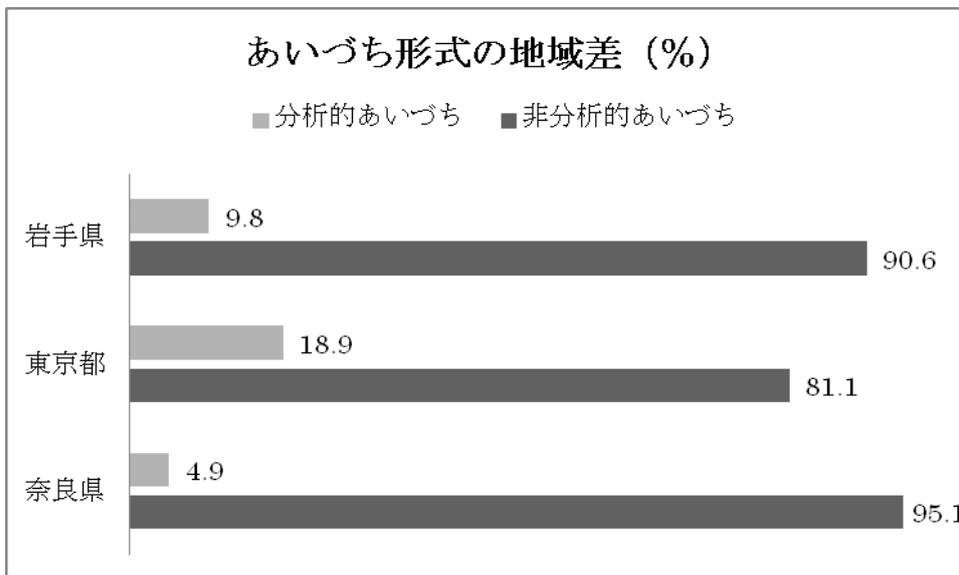
- (a) 非分析的あいづち
- (b) 分析的あいづち

非分析的あいづちとは、東京都資料から例をあげれば、「ネー、ア、アー、シー」「ウン、ソー、ハー、アー、ウーン」などのように、主として感動詞による表現である。また、分析的あいづちとは、「ソーナンダネー、ホントネ、ソーナノネー、ソーカモシレナイワネー、ホントー、ソレワソーデスネ」「ドコデモヤリマシタネ、ソーナノヨ、マッタク」などのように、1音調句で発話された句や文で表現されるあいづちである。これらは、相手発話の質問や確認に実質的に答えるというより、発話者の気分の表出や応答を表現することに主眼があり、あいづちの一種と考えられる。

これら、非分析的あいづちと、分析的あいづちの出現比率をみたものが、【図3】である。東京都では、分析的あいづちの出現率が、岩手県、奈良県よりも際立って高くなっていることが分かる。(東京都のこの傾向は、大規模方言データのひとつである日本放送協会(編)『全国方言資料』に収録された東京都自然談話資料をみてもそれが窺われる。)

なお、あいづちには、表出や応答などを始め、種々の機能があることが指摘されているが、方言におけるあいづち研究はさほど多くはない。先に、6.2 節【図2】で、岩手県は「同一語句の繰り返し」が他地域より低いことを指摘したが、あいづちの機能とかがかわる可能性がある。岩手県に多くみられるあいづち「ウン」「ハーハーハーハー」などの語詞(本稿の非分析的あいづち)は、相手の発話を聞いているという標識であることが多く、応答(返答)をする場合には、相手語句の繰り返しによって明示的にそれを示す傾向があるというのである(岩手県出身の方言研究者竹田晃子氏談・2013年3月20日於国立国語研究所)。「同一語句の繰り返し」がこうした機能をも担うとしたら、相手発話の質問がなければ出現しにくいことから、岩手県における【図2】の出現率の低さもうなずける。この点から、今後は、「あいづち型」に含めた語詞を再考する必要もあることと思う。

【図3】 あいづち形式の地域差



	岩手県	東京都	奈良県
非分析的あいづち	119	73	77
分析的あいづち	13	17	4
合計(度数)	132	90	81

7. 2 接続詞・副詞型に含まれる形式の地域差

次に、接続詞・副詞型に含まれる形式の地域差についてみたい。地域別にみた、接続詞・副詞型の種類を出現度数別に一覧したものが【表2】、また、それらをグラフ化したものが【図4】である。母数が少ないが、地域差の比較のために、図は、パーセンテージで示した。

これらを見ると、接続詞・副詞型に属する形式とその種別には、地域差があることがみてとれる。岩手県は、順接接続詞を用いることが多く、東京都は、理由接続詞を用いることが多く、また、奈良県は、「ホンデ」等の接続詞とともに副詞を多用していることが明瞭に読みとれる。

なお、「それで」「ほんで」等の接続詞は、意味・用法の地域差（気づかれにくい方言）があり、注意が必要である。「それで」については、東京語では、前件を理由として後件につなぐ用法であるのに対して、長野県伊那地方や関西方言の「それで」には、因果関係を示さずに、前件と後件を累加的に結ぶ用法があることが指摘されている（沖裕子 2008）。ただ、『ふるさとことば集成』の東京都談話をつぶさにみると、因果関係を示す用法とともに、一見したところでは因果関係がないまま前件と後件を結ぶ用法にみえる用法も含まれていた。そのため、ここでは、そうした気づかれにくい意味の差を措いて「ソレデ」「デ」「ホンデ」などは、理由接続詞に分類してあるが、これを用法ごとに検討し、順接接続詞にも厳密に分類すれば、東京都、奈良県の順接接続詞

の比率はあがることになる。

【表2】会話冒頭部に出現する接続詞・副詞の形式一覧

(凡例) 分類1：順接接続詞 2：逆接接続詞 3：理由接続詞 4：副詞

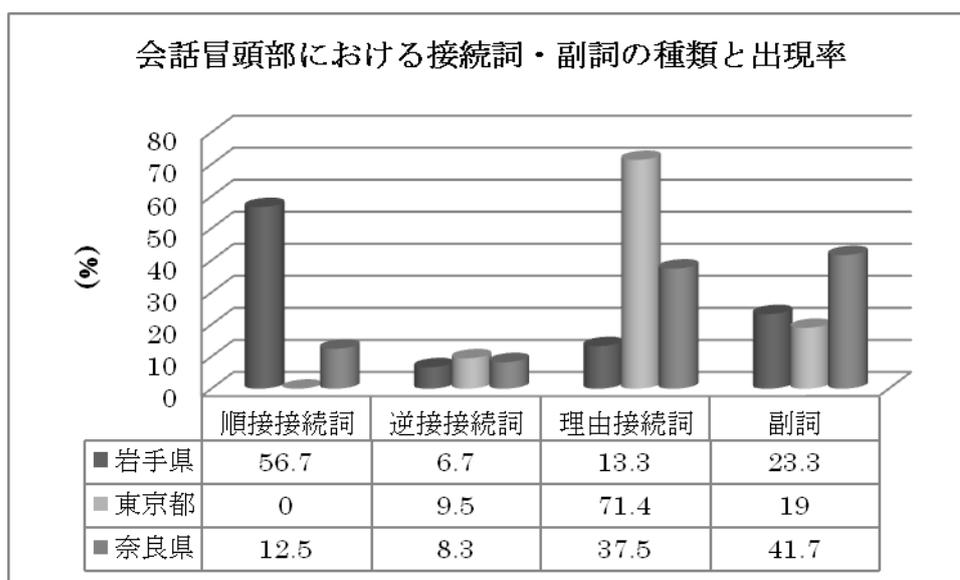
分類	岩手県	度数	分類	東京都	度数	分類	奈良県	度数
1	ソステ	11	2	デモ	1	1	ホテ	1
	ソーステ	2		ダケド	1		ソシテ	1
	ソスッテ	1	3	ホット	1		ホシテ	1
	ステ	2		ダカラ	2	セヤケド	1	
	ソステガラ	1		ダカラネ	1	ソヤケド	1	
2	デモナ	1	3	ダカラネ	1	3	ホタ	1
	ンデモ	1		ソイデ	1		ホンナラ	1
3	ンダガラ	2		ソエデ	1		ホンデ	3
	ンッデア	1		ソエデネ	1		ホンデー	2
	デネンバ	1		ンデ	1		フンデンー	1
4	マズ	1	4	ンデネ	1	ホデ	1	
	トニカグ	2		デ	5	マー	4	
	トニカングー	1		タダ	1	マ	1	
	ヤッパ	1		トニカク	1	モー	1	
	ヤッパリー	2		マッタク	1	モ	1	
合計	30		モー	1	モーナ	1		
			合計	21		チョード	1	
						ヤッパイ	1	
						合計	24	

さて、接続詞・副詞語彙による、相手発話の自発話へのとりこみを観察すると、おおむね、次のようなことが言えそうである。岩手県は、「ソシテ」を多用しつつ「トニカク」「ヤッパリ」なども用いながら、順接接続詞や副詞によって相手発話を自発話にとりこんでいる。東京都は、「ダカラ」「デ」などを多用して、理由接続詞によって相手発話を自発話にとりこんでいる。奈良県は、(累加用法の接続詞)「ホンデ」とともに、「マー」などの副詞類を利用して、相手発話を自発話にとりこんでいる。接続詞・副詞型の使用率は、3地域ともに大差はないが、それに用いられている形式そのものに焦点をあてると、地域差がみえてくるといえよう。

こうした視点は、早く久木田恵(1990)が指摘したことでもある(注4)。本稿の結果をみると、東京都、奈良県は、独話資料によって指摘された久木田恵(1990)と一部重なる様相が観察された。それに対して、岩手県は、久木田恵(1992)によれば、「ダカラ」が文頭に来ることが特徴的だとされていることと多少異なる結果になった。

話資料における会話冒頭部（本稿）と、独話部分（久木田氏）という違いも反映している可能性も否定できないが、「ソーシテ、ソシテ、ソーシット」を多用するとされる山形県の談話展開に近い（ただし、本稿の岩手県でも、ダカラは複数例使用されている）。談話展開の地域差の具体的な研究は、分析方法の開拓と資料を用いた検証を、今後も積み上げる必要がある。また、分布境界の解明にいたっては、手つかずといってもよい。談今後の課題として、記しておきたい。

【図4】会話冒頭部における接続詞・副詞の種類と出現率（%）



	順接続詞	逆接続詞	理由接続詞	副詞	合計(度数)
岩手県	17	2	4	7	30
東京都	0	2	15	4	21
奈良県	3	2	9	10	24

8. おわりに

会話冒頭部の受話法にみる地域差について、以上の観察と分析から考察したところをまとめておきたい。

大規模自然談話資料のひとつである『日本のふるさとことば集成』から、岩手県遠野市、東京都台東区、奈良県五條市を対象に、会話冒頭部の結節法を比較対照した。『日本のふるさとことば集成』は、1980年前後に文化庁が行った各地方言収集緊急調査における文字化資料をもとに、国立国語研究所が音声付談話資料として再文字化を行ったものである。本稿が対象とした3地点は、30分前後の生え抜きによる2者会話であり、思い出を語るという点で共通している。話者交替した直後は、発話列が相手発話に直接に後続する箇所にあたるため、これをどのように続けるかについては、各

方言における傾向性が端的に現れる部分ではないかと思われる。そのため、こうした相手発話と自発話の接続部分である会話冒頭部に着目して分析考察することで、地域差を明らかにしようとした。

会話冒頭部は、相手発話を自発話に関係づける語詞等ではじめる「とりこみ型」と、そうした語詞がみられない「直截型」に大別された。各地域の出現比率を比較すると、直截型の比率が高いのは岩手県（25.8%）で、低いのは東京都（6.0%）であり、奈良県（14.5%）は、その中間であった。東京都は、相手発話をふまえて自発話を始めるという結節法が表現様式として確立している方言といえる。

また、とりこみ型は、6種類に下位分類された。あいづち型、繰り返し型、指示詞型、接続詞・副詞型、共話型、質問直截返答型である。それぞれの型として表れる形式を詳しく観察すると、次のようなことが明らかになった。

あいづち型は、「ネー、ウン、ソー、ハー」などの主として感動詞による非分析的あいづちと、「アーソーデスカ、ホントネ、ソーナノヨ」などの1音調句で発話される句や文による分析的あいづちがある。後者の比率が高いのは東京都（18.9%）、低いのは奈良県（4.9%）で、岩手県（9.8%）は、その中間であった。

接続詞・副詞型に含まれる形式をみると、岩手県は順接接続詞、東京都は理由接続詞、奈良県は副詞の使用が特徴的であった。具体的には、岩手県は「ソシテ」など、東京都は「ダカラ」「デ」など、奈良県は「(累加型接続詞の) ホンデ」「マー」などを多用しており、地域差がみられた。この結果は、独話資料をもちいた先行研究で指摘されてきた談話展開の地域差の様相と部分的に重なるところがあった。

今後は、談話展開の地域差を解明するために、分析方法の開拓と談話資料による実証を進め、現代日本方言における分布についても明らかにしていく必要がある。

キーワード：自然談話資料 岩手県遠野市 東京都台東区 奈良県五條市
待遇意識 会話冒頭部 談話展開 談話の地域

謝辞 国立国語研究所独創・発展型共同研究プロジェクト「大規模方言データの多角的分析」（代表：熊谷康雄）および日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 C「発想と表現からみる日本語談話の対照談話論的研究」（2012～2014年、課題番号 24520498、研究代表者沖裕子）から助成を受けた成果の一部であることを記し、謝意を表す。また、本稿を成すにあたり、同プロジェクトによる公開研究会で行った発表に際し、席上、重要なご指摘を賜りましたことに感謝申し上げます。

注

注 1) 音声付文字化資料。文化庁が行った各地方言収集緊急調査（1977～1985年）から、各都道府県1地点（沖縄県は2地点）をとりあげ、国立国語研究所（井上文字子氏）がデータベース化し、国書刊行会から出版したもの。本データベースがまとめられ公刊されるまでには、文化庁の企画に協力した話者や調査者、最初の文字化資料作成者をはじめとして、文化庁文字化資料を聞きなおし再文字化した協力者ほか、実に多くの方の手を経ていると聞く。その恩恵を受けることに対して、

心より御礼を申し上げます。また、本稿を成すにあたっては、国立国語研究所共同研究プロジェクト「大規模方言データの多角的分析」の研究の一環として、プロジェクト代表者熊谷康雄氏による、同資料の利用の便を向上させたデータベースを利用させていただいた。合わせて深謝申し上げます。

注 2) ただし、すべての人が文章を巧みに管理し、表現できるとは限らない。また、テキスト性に欠ける文章でも、読み手は補完的に意味をくみとることがある。

注 3) 1 例として、岩手県 32A をあげておきたい。31B に「ハンベア」という語句があるため、32A の「ハンベアッテ」は②繰り返し型にもみられる。しかし、音声を聞いてみると、32A は、30A の「ガッタルハンベアッテナー」から続いており、31B を顧慮して「ハンベア」を繰り返したのではなく、自発話 30A の続きとして発話しているように聞こえる。そのため、⑦直截型と判断したものである。

X6 サンサ キッテ ナラエ、アノ

X6 さんのところへ 来て 習え あの

カミバ ユッテモラッテアッタ。(B ハハハハー)

髪を 結ってもらっていた。(B そうかそうか)

ソスッテ アノ、ガッタルハンベア [38] ッテナー。

そして あの「がったり半兵衛」ってね。

31B : ①ウン ウン ハンベ アッタ アッタ。

うん うん 半兵衛 [自動車]。 あった あった。

32A : ⑦ハンベア ッテ アノー、(B ハンベズンドシャ) ウン

半兵衛 って あの (B 半兵衛自動車) そう。

ジョーヨーシャ エンズンデエ アツタンダ アンドギアナ。

乗用車 [が] 1 台、 あったんだ、 あの時はな。

(B ウン ウン ウン) アレサ ノシェラレデ

(B うん うん うん) あれに 乗せられて [きた]

注4) 久木田恵 (1990) は、文頭、文中、文末の語詞に注目することで談話展開の地域差を解明する方法を開拓した。東京方言は「ダカラ」や「ホラ」を多用する談話展開であるのに対して、関西方言 (能勢方言) は「ヘテ」「ヘタラ」「ホイデ ナー」と、順接の接続詞によって説明を累加する形で談話展開すると指摘している。

参考文献

沖裕子 (1994) 「方言談話にみる感謝表現の成立—発話受話行為の分析—」『日本語学』13(8), 28-37, 明治書院 (沖 2006 に収録) .

沖裕子 (2006) 『日本語談話論』和泉書院.

沖裕子 (2008) 「気づかれにくい方言「それで」」『山口幸洋博士古希記念論文集 方言研究の前衛』304-322, 桂書房.

沖裕子 (2010) 「日本語依頼談話の結節法」『日本語学研究』28, 119-136, 韓国日本語学会.

沖裕子 (2012a) 「談話資料論と研究の可能性—生活談話資料の活用—」「大規模方言データの多角的分析」研究会 於国立国語研究所、2012 年 3 月 19 日.

- 沖裕子 (2012b) 「大規模自然談話資料の活用可能性—表現法と受話法の観点から受話冒頭に注目して—」 「大規模方言データの多角的分析」 公開研究会, 於東北大学, 2012年8月25日.
- 沖裕子 (2012c) 「大規模方言談話資料にみる受話法」 「大規模方言データの多角的分析」 公開研究会, 於全国町村会館, 2012年12月16日.
- 久木田恵 (1990) 「東京方言の談話展開の方法」 『国語学』 162,90-100.
- 久木田恵 (1992) 「北部東北方言の談話展開の方法」 『小林芳規博士退官記念 国語学論集』 777-797, 汲古書院.
- 久木田恵 (2008) 「愛知県岡崎市方言の談話資料」 『山口幸洋博士古希記念論文集 方言研究の前衛』 342-354, 桂書房.
- 国立国語研究所 (2001-2008) 『国立国語研究所資料集 13-1~20 全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』 全20巻, 国書刊行会.
- 小林隆・篠崎晃一 (2010) 『方言の発見—知られざる地域差を知る』 ひつじ書房.
- ザトラウスキー、ポリー (1993) 『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察』 くろしお出版.
- 佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一 (1997) 『文章・談話のしくみ』 おうふう.
- 日本放送協会 (編) 『CD-ROM版 全国方言資料』 全12巻, NHK出版.
- 水谷信子 (1985) 『日英比較話しことばの文法』 くろしお出版.
- メイナード、K・泉子 (1993) 『会話分析』 くろしお出版.
- 堀口純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』 くろしお出版.

【資料1】岩手県遠野市 (部分)

- 1B : ⑦ X1 オンバ [1] ァ ナンボノ、 ナッタ ドギー
 X1 おばさんは 何歳× [=に] なった 時に
 アノ、 イヨメゴニ ナッタッター。
 あの 嫁に なった？
- 2A : ⑥ アーレア X1 ゴダ [2] ズーリエガラナー、 (B ウン)
 あれは、 X1 というのは ずるいからな、 (B うん)
 ズット アドン ナッテガラダンジェ。
 [嫁に行ったのは] ずっと あとに なってからだぞ。
 (B ハー) オレド X2 オンズ [3] ド
 (B そうか) 私と X2 おじさんと
 ドッキューシェーダンドモナー、 (B ウン)
 同級生だけれどもな、 (B うん)
 オリア ハー [4] ホンートニ ワゲ ワガンネ
 私は もう 本当に わけ [が] わからない、
 アエズ。 ソステナー (B ウン) オレノ キョンデア
 あいつ。 そしてな、 (B うん) 私の 姉妹は
 オナコ° バリ ゴニンダンベー。 (B ウン)
 女ばかり 5人だろう？ (B うん)

ソスダ キョーンデーウズデ オレア エズバンノ
 そうしたら、姉妹 [の] 中で 私は いちばんの、
 ソノ オストムゲ [5] ダッタオンヤー。 (B ハハハハー)
 その お人好しだったからさ。 (B そうかそうか)
 ソンゴンディエ、 (B ウン) ソノ オレー ナニーヌモ
 そこで、 (B うん) その 私は なんにも、
 ソンナナ キモ ネア ッシャネ ウズヌ、
 そんな [=嫁に行く] 気も ない、知らない うちに
 (B ウン) オヤダンズァ キメダモンダ。
 (B うん) 親たちは [縁談を] 決めたものだ。
 3B : ⑦ナ ナニノ ゴドナンダ ソノ キモ ネア、 ドガ
 × なんの ことなんだ、その、気も ない とか、
 ナント ユー ゴドアヨー。 ン
 などと いう ことはよ。 うん
 4A : ⑥オードゴノ ッキモ ヨメゴノ ッキモ
 男の [いる] 雰囲気も 嫁の 気 [=嫁になる気] も
 (B ハハハハハー ソノゴドガー アー) ナ {笑}、
 (B そうかそうか そのことか ああ) × {笑}、
 ナンニモ エッコーニ ッシャネガッタノヨ。
 なんにも 一向に 知らなかったのよ。
 5B : ①ハー。 ヤパリ ナゴンドマガシェガ。
 そうか。 やっぱり [結婚は] 仲人任せか。
 6A : ⑥ナーゴーンドーマガーシェ、 ナ ソッターラー ソリエ、
 仲人任せ、だ。 そしたら、 ほら、
 キョーンデアウンズデナー、 (B ウン)
 [親の気持ちでは] 姉妹のうちでね、 (B うん)
 エンズバン ソノ アダマー ケアネー [6] ガラ、
 [私は] いちばん、その 頭 [が] よくないから、
 ヌダヨナ ムンゴデモ トッテー [7] (B ウン)
 似たような 婿でも 取って (B うん)
 ウ ソノー、 タモ ハダゲモ イッペ アッカラ ソノ、
 うん その 田も 畑も たくさん あるから その、
 (B ウン ウン) ササコ° ヤ [8] ッコンデモ タンデデ
 (B うん うん) 簡単な小屋でも 建てて、
 オグキダッタタンダンド。
 [私と相手を] 置くつもりだったんだって。
 7B : ①ハー ウン ベッケ [9] ニデモナ。 ウン
 ああ、 うん、 別家にでもな。 うん。
 8A : ①ウン ソースタ ドゴロァ ソノ、 ノサギ [10] ノ
 うん。 そうした ところが、 その 野崎の

X3 ドツカラ エッタワゲダ。
X3 [=Aの夫] の家から [縁談が] 行ったわけだ。
(B ウン) ソスタドゴロア X3 ア、
(B うん) そうしたところが、 X3 は
ソレー、 クラスンデモ、 ユーシユンダッタモンヤ。
それ クラスでも 優秀だったものね。
(B ウン ウン ウン ウン) コートーカンデモ
(B うん うん うん うん) 高等科でも
キューチョダッタガラ。 (B ハハハハハハハ)
級長だったから。 (B そうかそうか)
オラー [11] ゴネンシエノ ドギ、 アノシッタズア
私が 5年生の時、 あの人たちは
コッ、 コートーニネンデアッタモ。 (B ハハハハハ)
×× 高等2年だったもの。 (B そうかそうか)
ソステー、 キューチャー ヤッテラ フトダッタガラナー。
そして、 級長 [を] やってた 人だったからな。
(B ウン) オメミダーナ、 ソノ
(B うん) [私の親が言うには]「おまえみたいな、 その、
アンダマノ ケアネ ヤズ [12] ワ、 ソノ
頭の よくない 者は、 その、
アンダマノ エー シトサ エンゲンバー、 (B ウン)
頭の いい 人に [嫁に] 行けば (B うん)
ソノ、 コンドモモ マコ° モ、 (B ウン) ヨノナガサー
その、 子どもも 孫も (B うん) 世の中に
ソノ、 マンツ ジューニンナミンデア ナクッテモ、
その、 まあ、 十人並みではなくても
(B ウン ウン ウン) デハルヨーナ ヤズ
(B うん うん うん) [世に] 出るような 者 [を]
モズンダガラ (B ハハハハハ) ニダヨーナ ンドーシンデワ
持つんだから (B そうかそうか) 似たような 者同士では
ソノー、 ワガネ [13] ンダガラ ンズ [14] ンノデ ソノ
その、 だめなんだから」というので その、
オヤンドースカ° キメンダワンゲンダ。 (B ハー)
親同士が [縁談を] 決めたわけだ。 (B そうか)
サイウエア アソツカラ キタツカラ
幸い、 あそこ [の家] から [縁談が] 来たから。
アソゴノ ウンズア ホンタァ ビンボーンデナ、 (B ウン)
あその 家は 本当は 貧乏でね。 (B うん)
ビンボンデ カシエガネンバ カレネアガラ ホンタァ
貧乏で、 働かなければ 食べられないから 本当は

シンデンダンドモ、 (B ウン)

[嫁ぎ先としては] つらいんだけど、 (B うん)

コーダノ マコ[°] ワ ソノ、 タメヌア ソノ

子だの 孫は その ためには その

9B : ①アー エガニモ

ああ 確かに。

10A : ⑦エーダガラ ッテナ。 (B ウン ウン)

[この縁談は] いいんだから ってね。 (B うん うん)

ナンヌモ キノ ネアノヌサ。

[私は] なにも [結婚する] 気の [=が] ないのにね。

(B ハー) アルドンギ マンツツ、

(B そうか) ある時、 まあ。

オリエ ヨル ネンベット シタドゴロア ソノ

私が 夜 寝ようとしたところが、 その

オヤンズド オフグロド デー [15]、

父親と 母親と いて、

ハナス アッカラー アダレ

「話 [が] あるから [ここへ来て火に] あたれ」

ズワゲダ (B ウン ウン ウン ウン)

と言うわけだ、 (B うん うん うん うん)

ミンナ ネデスマッテガラサー。 ッタ、

みんな [が] 寝てしまってから。 そしたら、

キョー オミエオ、 ソステ コーユードゴサ

「今日、 おまえを こういうわけで こういう家へ

ケル ゴドヌ スッタガラ、 (B ウン)

[嫁に] やる ことに したから、 (B うん)

アーンダノ コーンダノッテー イヤネンデ

ああだの こうだのって [文句を] 言わないで

イゲ ッテサ。

[嫁に] 行け」 って [言うの] ね。

(B ハハハハー) ソステ、 オヤンダズアー ソノ、

(B そうかそうか) そして、「親たちは その、

オメエオ アンズツカラ、 ミンデエ

おまえを 心配するから [相手を] 見て [決めた]。

オヤンダズノ キメダ メンガンワ [16]

親たちの 決めた / / / / は

クルッテルモンデネーガラ、 (B ウン) エゲヨ

狂っているもので [は] ないから (B うん) [嫁に] 行けよ

キモノンバ エッペア カッテケッ [17] カラ、 ッテサ。

着物を たくさん 買ってやるから」 ってね。

{笑} (B ウン) {咳} ソステ マンツ、
 {笑} (B うん) {咳} そして まあ、
 サドサレダワゲダ。(B ウ ウン)
 さとされたわけだ。(B うん うん)
 ハーデ、 フェンズ スタラ エンダガ
 はて、 返事 [を] したら いいのか、
 フェンズ サネンダラ エンダガ マンツ
 返事 [を] しないほうが いいのか、 まあ
 ワゲェ ワガンネガッタンドモ (B ウン ウン ウン)
 わけが わからなかったけども (B うん うん うん)
 マンツ、 ソノママ、ヌ ステ、 シ (B ウン)
 まあ、 そのままに して、 うん (B うん)
 ソステ スンバラグ タッタドコ° ロアナ、 (B ウン)
 そして しばらく 経ったところがね、 (B うん)
 オレア イネア アドヌ アレア、 サゲタンデ [18]
 私が いない あとで [=時に] あれは、 結納 [を]
 スタンダフンダッケ。(B ハー)
 した様子だったよ。(B そうか)
 ソノ サゲタンデモ ッシャネンダー。(B フーン)
 その [結納の] 儀式も [私は] 知らないんだ。(B ふうん)
 ソステー、 メアノトースーノ ホンダナ
 そして、 [結婚の] 前の年の、 そうだな、
 ジューエズカ° ズッコロ ソノー、 サゲタンデダンダンベ。
 11 月頃、 その 儀式をしたんだらう。
 (B ハー) ツク° ノトスノ、 カンゾエンデ
 (B そうか) 次の年の 数え [年] で
 ジュースンズノ トスンダッタモヤー、 (B ハー)
 [私が] 17 の 歳だったもんね、 (B そうか)
 イヨ、 イヨメコ° ニ ヨゴサエダ ヤンズア。
 ×× 嫁に、 よこされた 歳は。
 11B : ①ハー ジュースンズナー。
 ああ、 17 [歳] な。

【資料2】東京都台東区（部分）

1A : ⑦ウチンナカデサ (B エー) アノー ススハラ イヤルデシヨ。
 家の中でね (B ええ) あの 煤払い [を] やるでしょう。
 2B : ⑥ヤリマス。
 やります。
 3A : ①ネー。(B エー) デ コレワ コー ナンテ ユーノカナ
 ねえ。(B ええ) で これは こう なんて 言うのかなあ

(B {咳}) ソレゾレノ ウチデ キマッテ ナインダヨネ
(B {咳}) それぞれの うちで 決まって ないんだよね
ヒワネー。

日はねえ。

4B : ①エー シニチワネ。

ええ 日にちはね。

5A : ①ネー。 シコ° トノ ヤリクリ (B アイマニネ) デネー
ねえ。 仕事の やりくり (B 合い間にね) でねえ

(B エー) デモ カナラズ イチネンジューノ コノー

(B ええ) でも 必ず 1年中の この

ススオ ハラウンダ ッテンデ (B ハラッテサ スッカリ)

煤を 払うのだ というので (B 払ってね すっかり)

コレワ ナカ° ヤデモ ヤッタモンネ。

これは 長屋でも やったものね。

6B : ①ドコデモ ヤリマシタネ。

どこでも やりましたね。

7A : ①ネ (B エー) ホトンド オーダナー オーダナーデ コー
ね (B ええ) ほとんど 大店 大店で こう

デイリノ オトコシューヤナンカ ヤッテ (B エー) コー

出入りの 男衆やなんか [が] やって (B ええ) こう

バカニ ケーキヨク ヤルケドネー。 (B エー エー)

ばかに 景気よく やるけれどねえ。 (B ええ ええ)

エー ナカ° ヤー ナカ° ヤデー コドモワ コドモノ オー

えー 長屋 [は] 長屋で 子供は 子供の ××

ミブンデ テダスケ シテネ。 (B ソー) エー ケッコー。

身分で 手助け してね (B そう) えー けっこう。

ホントニ ススハライッテ スス デンダネ。

ほんとうに 煤払いって 煤 [が] 出るんだね。

8B : ⑥デマスヨ (A ネー) タクサンネー。 (A ネー)

出ますよ (A ねえ) たくさんねえ。 (A ねえ)

ダッテ モー ドッカラ ドコマデデスモノー。

だって もう どこから どこまでですもの。

(A ソーダネー ソイデ)

(A そうだねえ それで)

エンノ エンノシタカラ テンジョーカラネー。 (A ソーナンダヨ)

××× 縁の下から 天井からねえ。 (A そうなんだよ)

トダナノ オクカラ ナニカラ (A ウン) ナニマデデショー。

戸棚の 奥から 何から (A うん) 何まででしょう。

9A : ④ソイデ アンナカデー クモノスカ° オーインダカラ

それで あの中で クモの巣が 多いんだから

アンナニ クモカ° イタノカネー。
あんなに クモが いたのかねえ。

10B：⑥ムカシワ イタンデスヨ。 (A ネー)
昔は いたんですよ。 (A ねえ)
ダッテサー アノ ウラノネ (A ウン)
だってね あの 裏のね (A うん)
ウラカ° サー コー エンカ° ワカ° アッテサー (A ウン)
裏がね こう 縁側が あってね (A うん)
ソノ シタカ° コー トーリン ナッテルデショー。
その 下が こう 通りになっているでしょう。
(A ウン ウン ウン ウン)
(A うん うん うん うん)

ジブンノ ウチー ミンナ イロンナ アノー ナスダトカサ {笑}
自分の うち [に] みんな いろんな あの ナスだとかね {笑}
インキ° ンダトカ マイトクノヨー。 (A ウン ウン ウン)
インゲンだとか 蒔いておくのよ。 (A うん うん うん)
アサノ オツケノ ミニ ナルヨーニネ。
朝の おみおつけの 実に なるようにね。
(A ソー ソー ソー ソー)
(A そう そう そう そう)

ソーイ トコロノネー ウエノ ホー ミルデショー。
そういう ところのねえ 上の方 [を] 見るでしょう。
(A ウーン) ト クモノ コンナ オーキーノカ° イタワネ。
(A うーん) すると クモの こんな 大きいのが いたわね。
(A イタンダナー) ダカラ ムカシワ クモ イマシタヨ。
(A いたんだなあ) だから 昔は クモが いましたよ。

11A：①ソーナンダネー。 ソエデ アレー クモダッテネー
そうなんだねえ。 それで あれ クモだってねえ
ズイブン シュルイカ° チカ° ウンダナー。 (B エー)
ずいぶん 種類が 違うんだなあ。 (B ええ)
ダッテー アノー コー ローカノネ (B エー) エー スミッコ
だって あの こう 廊下のね (B ええ) えー 隅
エンノシタノ スミッコナゾワ アノ サンカクン ナッテッタ
縁の下の 隅などは あの 三角になっていた
トコロエ コー クモノス ヤンデショー。 (B エー)
ところへ こう クモの巣 やるんでしょう。 (B ええ)
ソーカト オモート エニ カイタ クモノスミテーナー
そうかと思うと 絵に 書いた クモの巣みたいなのは
タイカ° イ ノキサキダヨネ。 (B エー) ンー
だいたい 軒先だよ。 (B ええ) んー

ソエデ ソノ ホカニ マタ ダイドコロノ ヨコッパラアタリダト
それで その ほかに また 台所の 横あたりだと
ナンカ シラネー イ アノ アヤトリノ イトカ°
何か 知らない × あの 綾取りの 糸が
コンカ° ラッタヨーナ スーノ。
こんがらかったような 巢の。

12B : ①ソー。 イロンナ スカ° アンノネ (A アンダヨネー)
そう。 いろいろな 巢が あるのね (A あるんだよねえ)
スニモネ。
巢にもね。

13A : ①ウン。 ソエデ クモダッテ オーキーンダノ チーチェーンダノ
うん。 それで クモだって 大きいのだの 小さいのだの
ウー アノー オシリノ デケーンダノ アシノ ナケ° ーンダノネ
うー あのう おしりの 大きいのだの 足の 長いのだのね
(B ソー。 エー) ニンソージャー ネー
(B そう。 ええ) 人相ではない

マー クモソーマデニ イッパイ アラーネー。
まあ クモ相/// いっぱい あるわねえ。

14B : ⑦クモダッテ イロイロ シュルイカ° アッテ (A アー)
クモだって いろいろ 種類が あって (A ああ)
イロンナ シロイノト クロイノト (A アー アッテネー)
いろいろな 白いのと 黒いのと (A ああ あってねえ)
マジッテルダノ ムジダノネ (A ウン)
混じっている [の] だの 無地だのね (A うん)
イロイロ イマスヨ。
いろいろ いますよ。

15A : ③ソナ ススカ° ミンナ イッペンニ イチネンジュー
そんな 煤が みんな いっぺんに 1年中
デチャウンダモンネー。 (B エー デモ アレ)
出してしまうものねえ。 (B ええ でも あれ)

16B : ④デモ アレデショー。
でも あれでしょう。

イマワ コノ トーキョーナンテ ユー トコロワ
今は この 東京なんて いう ところは
ソーユー クモナンテ ソー イナインデショ。
そういう クモなんて そう いないんでしょう。

17A : ②イナイケド アノー ホラ エー ハイトリク° モ ッテ ユーノ。
いないけれど あの ほら えー ハエ取りグモ っていうの。
(B エー) アノ コーユー グアイニ
(B ええ) あの こういう 具合に

アノー ナンテ ユーノカナー アノー
 あの 何と いうのかなあ あの
 クチバシーミテーナ テー モッテル ヤツカ° (B エー)
 くちばしみたいな手 [を] 持っている ものが (B ええ)
 アレ ピョッピョッテ トブンダケドサ。
 あれ ピョッピョッと 跳ぶんだけどね。
 デ ジッサイニ アノー ンー
 それで 実際に あの んー
 ハイオ コー ツカマエルンダケドサ (B エー)
 ハエを こう つかまえるんだけどね (B ええ)
 ウー ナンカ ツチイロノ クモ アレワ イルネ
 うー 何か 土色の クモ あれは いるね
 カンダアタリデモ。
 神田あたりでも。
 18B : ①アー ソーデスカー。
 ああ そうですか。

【資料3】奈良県五條市（部分）

1A : ①アー。 (B ンー) ソノ、 X1 サントー オンナジ
 ああ。 (B んー) その、 X1 さんと 同じ
 ***デ ソノー X2 サンモナー。
 ***で その X2 さんもねえ。
 (B フーン。 フン フン フン) アルモー、 ンー、 ワリヤイニ、
 (B ふうん。 ふん ふん ふん) あれも、 んー、 割合に、
 ノンキソーニ ヤッテ ヤットルラシーナ。
 暢気そうに やって、 やっているらしいね。
 2B : ①アー アー チョーム [1] サンナ。
 ああ ああ 長夢さんね。
 3A : ③アノヒトモ アシー タタンノヤー。
 あの人も 足 [が] 立たないんだ。
 4B : ①ソー ソー ソー。 (A ナ) セヤケ アタマワナ、
 そう そう そう。 (A ね) だけ [ど] 頭はね、
 ワルイナイサカイナ。
 悪くないからね。
 5A : ①ウン、 ソラ ソー、 アタマ ワルナイ。
 うん、 それは そう、 頭 [は] 悪くない。
 6B : ②アタマ ワルイナイシ ホテ テーガー イゴイテ ジー
 頭 [は] 悪くないし そして 手が 動いて 字 [を]
 カケルサカイナ。 (A ン ソー ソー ソー ソー) ホンデ
 書けるからね。 (A うん そう そう そう そう) それで

アシダケガ マー イゴ、ケヘン テ ユー、ダケデナー。

足だけが まあ 動かない というだけでねえ。

7A：①ハー ハー ハー ハー。カタメーワー ワルインデケド コラー

はあ はあ はあ はあ。片目は 悪いんだけど これは

マエカラヤハカイナー。

前からだからねえ。

8B：①アー メー ワルハンノケ。

ああ 目 [が] お悪いんですか。

9A：①ハー。 (B フーン) ドクガンリ्यूア アノヒトワ。

はあ。 (B ふうん) 独眼龍だ あの人は。

10B：①アレー。 (A ハー) フーン。

あれ。 (A はあ) ふうん。

11A：④セヤケド ソラー、ソノー、サイキンニ ワン ナッタワケデナイシ。

だけどそれは、その、最近に 悪く なった訳ではないし。

(B フン) アノ モー ソラ モー ナラサレトルサカイニ、

(B ふん) あの もう それは もう 慣れておられるから、

(B フン) ン ヒトツデ モー ジューブン ヨーワ タセルンデ。

(B ふん) うん ひとつで もう 十分 用は 足せるので。

(B アー) タダ アルカレン チュダケノコトデナー。

(B ああ) ただ 歩けない というだけの事でねえ。

12B：①フン。ホンデ アノヒトカッテ モー ソノ タッシャナトキカラナ、

ふん。それで あの人だって もう その 達者な時からね、

マー エー カイタリナ、 (A ソ) センリ्यू ツクツタリ、

まあ 絵 [を] かいitariね、 (A そう) 川柳 [を] 作ったり、

ソンナー アノー シュミー、モットルサカイナ アナイシテ

そんな あの 趣味 [を]、持っているからね ああして

ビョーキナッタカッテナー (A アー アー アー アー)

病気になったってねえ (A ああ ああ ああ ああ)

ソレオ マー イキガイニ シテナー。 (A アー ソエデ マー)

それを まあ 生きがいに してねえ。 (A ああ それで まあ)

マー ソノー クヨクヨ クヨクヨ マイニチ セントナー、

まあ その くよくよ くよくよ 毎日 しないでねえ、

(A アー アー) スゴシテ イケルケオ コレガ ナンニモ

(A ああ ああ) 過ごして いけるけど これが 何も

シュミノナイシト アナイ ナッテ ミナハレ。モー ホンマニ

趣味のない人 [が] ああ なって ごらんない。もう 本当に

ウツビョーニ カカルカダッセ、 (A ダンダン モ スス)

うつ病に かかるかですよ、 (A だんだん もう xx)

ボケテシマウカナー アタマ。

ぼけてしまうかねえ 頭。

13A : ☆⑦ススンデシマウバッカリン ナンネナー。

[病状が] 進んでしまうばかりに なるんだねえ。

14B : ①フン。 ソナイ ナリマス (A フーン) ホンデ モー
ふん。 そう なります。 (A ふうん) それで もう

アーユーヒトノホーガ、 モー、 ソンナ

ああいう人の方が、 もう、 そんな

シュミノナイヒトノホーガナー、 ビョーキ (A フーン)

趣味のない人の方がねえ、 病気 [の] (A ふうん)

ススムノ ハイシ (A フン) ヨワンノ、

進むの [が] 早いし (A ふん) 弱るの [が]、

ハヨ ナリマスワナー。

早く なりますよねえ。

15A : ①フン。 ソー。 ソーナル ト オモウワナー。 (B ンー)

ふん。 そう。 そうなる と 思うよねえ。 (B ふうん)

ンデ アノヒトワー ショーギン スキエ。 (B アー)

それで あの人は 将棋が 好きで。 (B ああ)

ホナ、 ショーギノトモダチガー、 アノー チョイチョイ

そしたら、 将棋の友達が、 あの ちよくちよく

キテクレルソーナー。 (B ハー) オンデー キテクレントキワ

来てくれるそうだ。 (B はあ) それで 来てくれない時は

ワガメ ヒトリデ サスンヤ。

自分 ひとりで さすんだ。

16B : ①アッレー。 (A ハー) ヒトリデ ショーギ デキマンノケー。

あらあ。 (A はあ) ひとりで 将棋 [が] できるんですか。

アイテ ドー {笑}

相手 [が] ×× {笑}

17A : ④マー ゴーデモ ショーギデモ デケルラシ アレ シンブンニ

まあ 碁でも 将棋でも できるらしい あれ 新聞に

チョイチョイ、 ノットルワナー。

ちよくちよく、 載っているよねえ。

18B : ①ハーン。 ホデ コー ウッタラ アイテガ コー、

はあん。 それで こう 打ったら 相手が こう、

クル ッチョヨニシテ アイテノブンモ ウチマスンヤロ。

くる というようにして 相手の分も 打ちますんでしょう。

(A ソア ソア ソヤ。 {笑}) フーン。

(A そうだ そうだ そうだ。 {笑}) ふうん。

19A : ④ホンデ、 マー イツマデ イテモー カツモンモ マケルモンモ

それで、 まあ いつまで いても 勝つ者も 負ける者も

デケランカモワカランケドー。 (B フーン) イヤ コーユー

できないかもしれないけど。 (B ふうん) いや こういう

キテモ アル、 (B フン) コーユー テモ
きて [=打ち手] も ある、 (B ふん) こういう 手も
アル ッチューコトワ (B フン) ジブンデ ヤッパリ、
ある ということは (B ふん) 自分で やはり、
ヤットリヤー ハッケンスルンヤロナ。 (B アー) イママデ
やっていたら 発見するんだらうね。 (B はあ) 今まで
キー ツカンダケドモ (B フン フン。 フン)
気 [が] つかなかったけれども (B ふん ふん。 ふん)
コー ナッタトキニワ コー ヤッタラ (B フン フン)
こう なった時には こう やったら (B ふん ふん)
タスカルト。 (B フン) ユーフナコト
助かる と。 (B ふん) [そう] いうふうなこと [が]
ワカッテクンネン タブン。
わかってくるんだ たぶん。

20B : ①アー。 アンナ ショーギヤ ゴーデモ ソラ モー オクワ フコテ
ああ。 あんな 将棋や 碁でも それは もう 奥は 深くて
フコテ (A {笑}) ヘンナモン、 ナー。
深くて (A {笑}) そんなもの、 ねえ。

(A ソーラシー **ヤ) ハテシナイサカイ、 ンー ドコマデー
(A そうらしい **だ) 果てしないから、 んー どこまで
アノー デ [2] モー エー ッチューコト アレシマヘンワナ。
あの でもう いい ということ [が] ありませんよね。
(A アー) ナンボナト、 テー ア アルラシーサカイ。
(A ああ) いくらでも、 手 [が] × あるらしいから。
(A アー) ナー。 フーン。
(A ああ) ねえ。 ふうん。

21A : ⑦ワシラ ソナイ ソー、 ショーギモ アカナー、 ゴーモ
私 [は] そう その、 将棋も だめなら、 碁も
ヨー ウタン ナー。 (B ホー) モ コレ サッパリ ソノ、
打てない、 ねえ。 (B ほう) もう これ さっぱり その、
ソナハナシ デタトキニワ モー {笑} タダ
そんな話 [が] でした時には もう {笑} ただ

22B : ⑦ソノカーリ ホカノコト ミナハレ ナンデモ シハリマスワナ。
そのかわり 他の事 ごらんなさい 何でも なさいますよね。

23A : ①イーヤ ナンデモ ッテユーコト ナイ モ、 ダンダン
いや 何でも っていうこと [は] ない、 も、 段々 [と]
オトロシナッテモーテ。 {笑}
じゃまくさくなってしまって。 {笑}

用言準体法の分布と形式

大西 拓一郎
(国立国語研究所)

1. はじめに

日本語のコピュラ（断定辞）は名詞句を受ける。動詞句や形容詞句など述語相当の要素をコピュラが受ける場合には、現代日本語では助詞「の」を述語形式とコピュラの間に入れる。

(1) そんな時代もあった の だ

したがって、この「の」は、名詞句を形成するためのマーカーとして位置づけられる。一方、方言によっては、「の」を入れずに述語形式とコピュラをつなぐことができる。

(2) ソンナ ジダイモ アッタダー (そのような 時代も あったんだ。) 長野県上伊那郡高遠町山室 (旧三義村) (NHK『全国方言資料第2巻関東・甲信越編』)

理由を表現する接続助詞「ので」の「の」も「のだ」の「の」と同じで、名詞句を形成するためのマーカーである。

(3) まだそんなに遅くない の で、いいよ

これに対しても、「の」を使わない方言がある。

(4) マンダ ソー オソカー ネーデ イーワイ (まだ そう おそくは ないから いいよ。) 愛知県南設楽郡作手村菅沼 (NHK『全国方言資料第3巻東海・北陸編』)

次の例のように「の」を介さないで述語が格成分を伴う名詞句を形成することも当然関係する。

(5) ソレコサ ソレガ コメオ ヒクガ エライダヨ (それこそ それが 米を 挽くが 大変なのだよ。) 山梨県塩山市中荻原 (国立国語研究所『全国方言談話データベース日本のふるさとことば集成第8巻』)

これらの方言の例は、標準語から見ると「の」が脱落したように見える (国立国語研究所 2004 : p. 145)。ただし、本来は脱落ではなく、用言の有していた名詞句形成機能の残存であるとともに、各地方言で独自の変化が発生したものと考えられる。

本発表は、このような述語形式が「の」のような助詞を介さず直接的に名詞句を構成することについて、以下の2つの観点で扱うことを目的とする。

I 全国分布の概観

II 特に盛んに行われる中部地方の接続形式の整理

「行くだ」「高いだ」などは、よく知られた現象でありながら、先行研究は非常に少ない。彦坂 (2006) はその嚆矢であり、金田一 (1967) や山口 (1985) を参考に準体助詞も含めて、全国を概観する。本発表は、特に中部地方に焦点を当てながら、さらに詳しく踏み込むものである。

2. 準体法の定義・位置づけ

前節で述べたような用法をここでは「準体法」と呼び、次のように定義する。

述語（動詞・形容詞・形容動詞・名詞述語）が、準体助詞や形式名詞などの句形成マーカーを用いないで名詞句を構成すること。

表層的には、現象そのものは比較的単純なもので、現代日本語（標準語）において、名詞句を構成するための「の」が現れるべきところにそれが現れないものが対象となる。したがって、基本的な語順としてのシンタクスに特異なものはないのが基本であるが、構成がやや標準語とは異なるものがあり、それについても扱う。

なお、前節でも触れたように準体法は、一見「の」の脱落のように見える。「脱落」とした場合、次のような歴史を想定することになる。

「米を挽くのが大変だ」→「米を挽くが大変だ」

しかし、これは通時的には正しくない。古典日本語において、述語の連体形には、連体句形成のほかに、名詞句形成の機能があり、その機能により作られるのが準体法による名詞句である。連体形と終止形が形態上、連体形に統合された後も、名詞句形成機能を維持するのが現在の方言に残る準体法であるにとらえられる。

一方、名詞句形成機能を維持できなくなった方言においては、「の」のような句形成マーカーを導入することで新たに名詞句形成手段を持つようになった。現代標準語などはそのような過程を経て形成されたものである。

したがって、次のように通時的变化をとらえるべきである。

「米を挽くが大変だ」→「米を挽くのが大変だ」

3. 準体法の全国分布概観

ここでは、1980年頃の高年層男性を対象に全国807地点で行われた調査に基づく『方言文法全国地図』（GAJ）のデータをもとに準体法の分布を概観する。

3.1 行く（の）だ

用例(2)のように、日本語における基本文型である「のだ」文において「の」が現れない地域を図1に示した。この項目は地図としては公刊されていないものの調査結果データは公開されており、そのデータに基づく。中部・関東の周辺・山陰に分布していることが分かる。



図1 「行くだ」型の全国分布

3.2 な（の）で

図2は、(4)の例に該当する理由の「ので」の「の」が現れない形の分布である。この

場合、「ので」には名詞述語が前接する文脈であるため、全体として～ダデのような形で現れることになる。中部・近畿の周辺・山陰・九州南部に分布する。

なお、このような「で」については、次節でも述べるが、接続助詞化している可能性を考慮する必要がある。その場合、九州南部や近畿の周辺部は、もはや生産性を持たなくなった準体法が、接続表現の中で化石化して残っていると見られる。

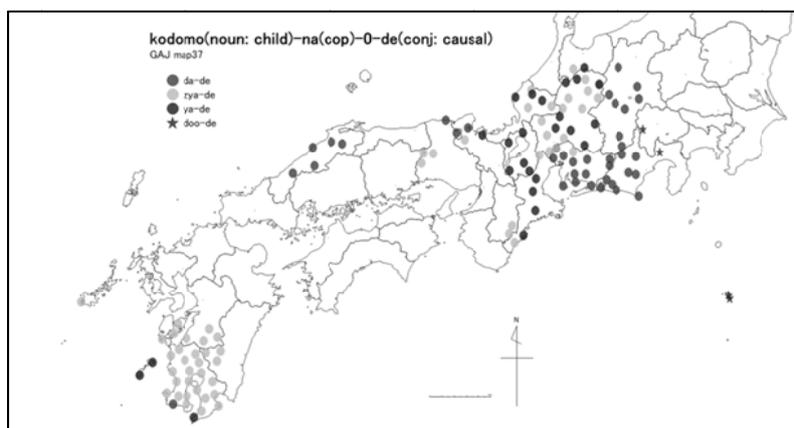


図2 「子どもだで」型の全国分布

3.3 植えた(の)に

図3は、逆接構文の『木を植えたのに枯れてしまった』という文脈における「のに」の「の」が現れない形の分布である。準体法相当と見られる「植エタニ」は、中部・山陰・四国南部・九州東部と広い。ただし、この場合も3.2の「で」同様に、「の」を介さないニが接続助詞化している可能性を考慮する必要がある。

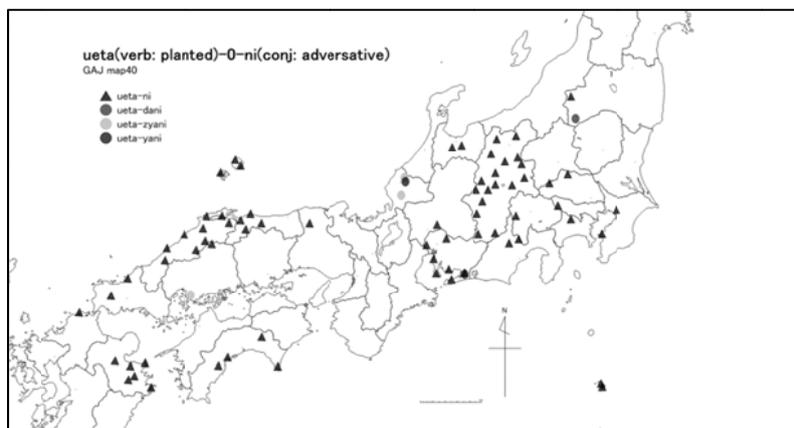


図3 「植えた(だ)に」型の全国分布

3.4 ある(の)は

図4は、「ここにあるのは何か」という文脈における「のは」の「の」が現れない形の分布である。この場合、「は」は、主格的役割を持つ提題辞として機能している。したがって、地図上に示した地点では、用言が名詞句として用いられているととらえられる。分布は、これまで上げた中で最も狭く、中部と山陰ならびに伊豆諸島の一部に限られる。

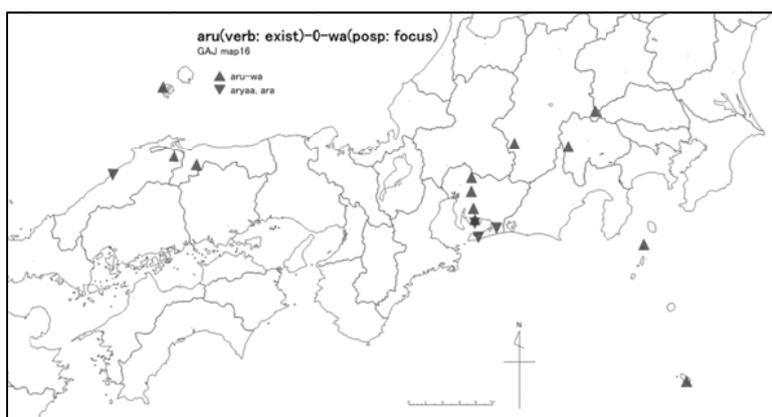


図4 「(ここに) あるは」型の全国分布

4. 中部地方における準体法の用法と分布

談話資料をもとに中部地方における準体法の現れ方を見る。

全国レベルで編纂された談話資料は、NHKによる『全国方言資料』と、国立国語研究所による『方言談話資料』『全国方言談話データベース日本のふるさとことば集成』が知られる。その中から今回調査した範囲を次の表に記した。なお、時間的制約により、該地域のすべての資料を網羅的に調査できてはいないこと(また用例の見落としもありえること)を断っておく。

談話資料調査対象一覧

収録地点	编者*	刊行年
神奈川県愛甲郡宮ヶ瀬村	NHK 2	1967
山梨県塩山市中荻原	KKK(b) 8	2005
山梨県南巨摩郡早川町奈良田	NHK 2	1967
山梨県北都留郡上野原町西原	NHK 2	1967
長野県上伊那郡高遠町山室(旧三義村)	NHK 2	1967
長野県上伊那郡中川村大字葛島	KKK(a) 1	1978
長野県木曾郡開田村大字西野	KKK(b) 8	2005
長野県西筑摩郡新開村黒川西洞	NHK 2	1967
長野県更級郡大岡村芦ノ尻	NHK 2	1967
岐阜県中津川市	KKK(b) 9	2005
岐阜県揖斐郡久瀬村西津波	NHK 3	1967
岐阜県郡上郡白鳥町石徹白	NHK 3	1967
岐阜県吉城郡古川町黒内	NHK 3	1967
静岡県静岡市足久保奥組	KKK(b) 8	2005
静岡県吉原市吉永	NHK 3	1967
静岡県掛川市上西之谷	NHK 3	1967
静岡県安部郡井川村田代	NHK 7	1967
愛知県常滑市	KKK(b) 9	2005
愛知県海部郡立田村小家	NHK 3	1967
愛知県南設楽郡作手村菅沼	NHK 3	1967

*HNK:『全国方言資料』, KKK(a):『方言談話資料』, KKK(b):『全国方言談話データベース日本のふるさとことば集成』。数字は巻。

4.1 準体法と非準体法の現れ方

準体法はすべての地点で同様に現れるわけではない。準体法と非準体法（標準語同様に句形成マーカを用いて名詞句を形成するもの）の両方が資料の中で現れることがある。また、準体法・非準体法に基づく述語基盤名詞句の現れる頻度にも差があるようだ。

図5には、談話資料に現れた述語基盤名詞句の頻度とその中での準体法と非準体法の割合を合わせて表示した。山梨・静岡・愛知で頻度が高いこと、またこれらの地域で準体法の割合も高いことがわかる。

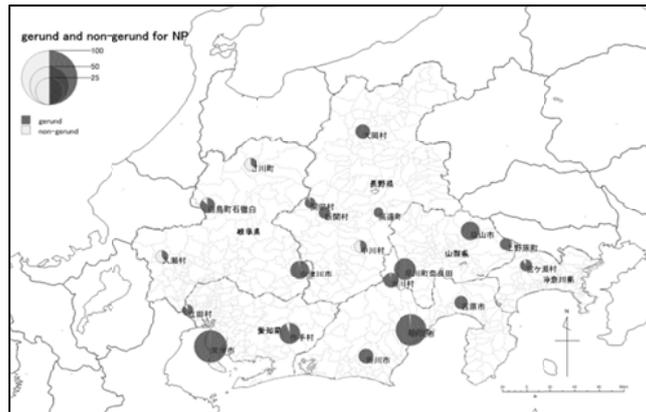


図5 準体法と非準体法

4.2 「するだ」と「するで」

先に全国分布を概観した3.2でも述べたように、理由の「で」には真性の準体法ではないものが含まれる。

図6には、「のだ文」に該当する「準体法+だ」と、理由の従属節「ので」に該当する「準体法+で」の割合を示した。「ので」節に対して、「のだ」節の割合が低い地域は、長野県南西部～岐阜県である。これらの地域の「ので」の「で」は、接続助詞化したもので、換言すれば、準体法ではない可能性が高い。つまり、「述語+で」の現れは、準体法の存在を保証するものではなく擬似準体法が含まれるということである。それは、同時に準体法の名残でもある。すでに準体法が生産性を失っているものの、「で」節の中にその名残を見せていることになる。そう考えるとデ節の地域はかなり広く、準体法は、かつてはかなり広く存在していたことを示していることになる。

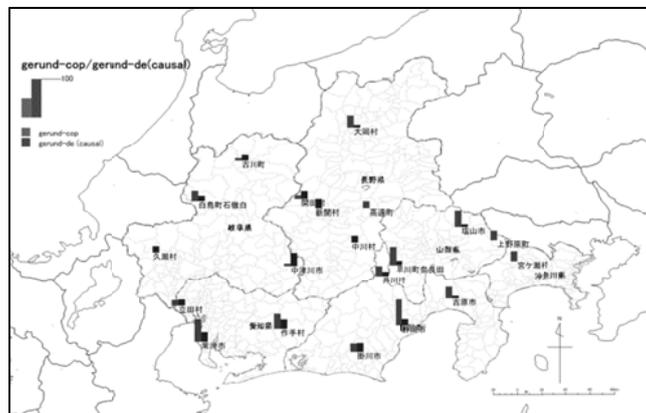


図6 「スルーだ」と「スルーデ」

4.3 コピュラの形

この地域は、コピュラの形の東西対立の境界地帯であることが古くから知られている。東日本のダに対し、西日本はジャもしくはヤである。コピュラに準じた形を示す形容動詞の分布を図7に示す (LAJ46 図(Q270)「(いい天気)だ」はデータ化未完了のため)。



図7 「静かだ」

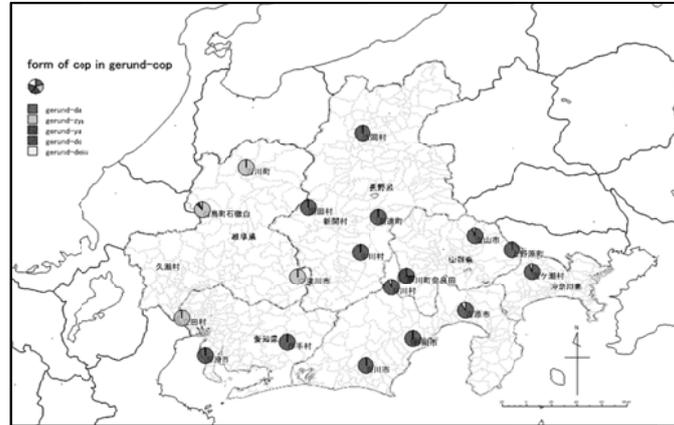


図8 「スルだ」における断定辞

図8には、典型的な準体法である「用言+だ」(すなわち「のだ」文)で用いられているコピュラの形(の割合)を示している。図7と比べると、コピュラの形に応じて「のだ」文が現れていることが分かる。これは当然の結果のようだが、接続詞等においてずれが生じることがあるので注意が求められる。なお、「のだ」文の場合の準体法は真性である。

準体法のような統語機能と表層的なコピュラの形の間には、理論上の関係が見いだせない。実際、準体法の存在とコピュラの形がダ・ジャ・ヤのいずれであるかの間には、関係がないことを図8は示している。つまり、「スルダ」は耳立ちやすい形であるが、それがそのまま隣接地域に受け入れられるものではないらしい。文法現象に関する共有ならびに接触による影響は、どのように進行するのかを考える鍵がこの図には含まれている。

4.4 コピュラの連続

「のだ」文は、その前に述語が現れる。これは、「の」の前のスロット([]で提示)に述語が入るものとして、次のように図式化できる。もちろん準体法を持つ方言においては、「の」は不要である。

[述語]の-コピュラ

しかし、その述語が「のだ」文であることは、標準語では回避される。

(6) *飲むのなのだ

ただし、前接の「のだ」文のテンスが過去だと適格性が上がる。

(7) 飲むのだったのだ

準体法の場合、スロットに「のだ」文が入ると、コピュラが重複して、「するダダ」のような形が現れることになる。彦坂(2006: p.9)は、このタイプの現れは準体法が存在する地域では一般的であるとする。しかしながら、図9が示すように、実際には現れ方に偏りがある。山梨県・静岡県・愛知県に多く現れるのに対し、長野県・岐阜県には現れな

い。なお、標準語が有するようなテンスによる適格性には差が見られない。

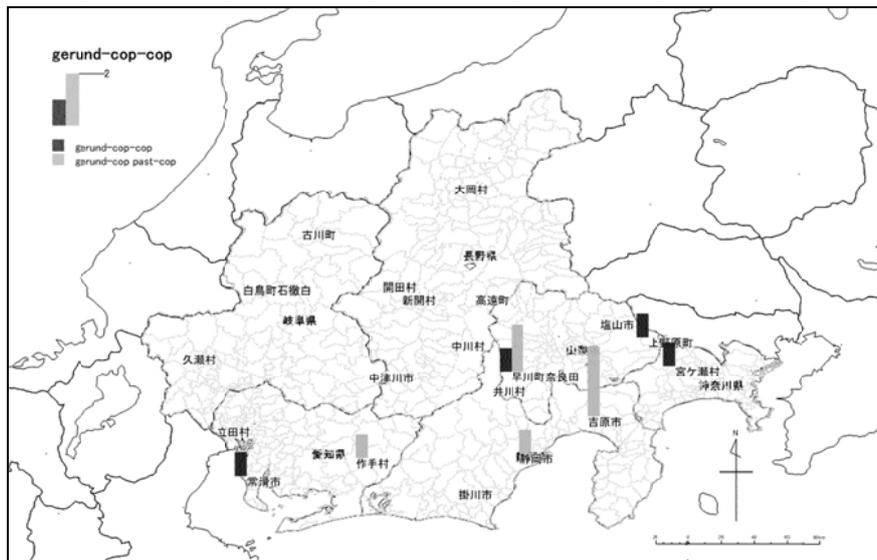


図9 「するダダ」型

野田 (1997 : p. 147) の記すように、標準語では、形式上の重複を避けるため、「のだ」文は、「ので」に前接することができない。

(8) *飲むのなので

この場合も、前接の「のだ」が過去だと適切度が上がる。

(9) 飲むのだったので

図10では、「述語+ダデ」型は、ばらつきながら広く認められ、過去形が多いということはない。先にも記したようなデの接続助詞化を考慮すると、単にノダ文が理由の従属節で用いられただけのこととも考えられる。

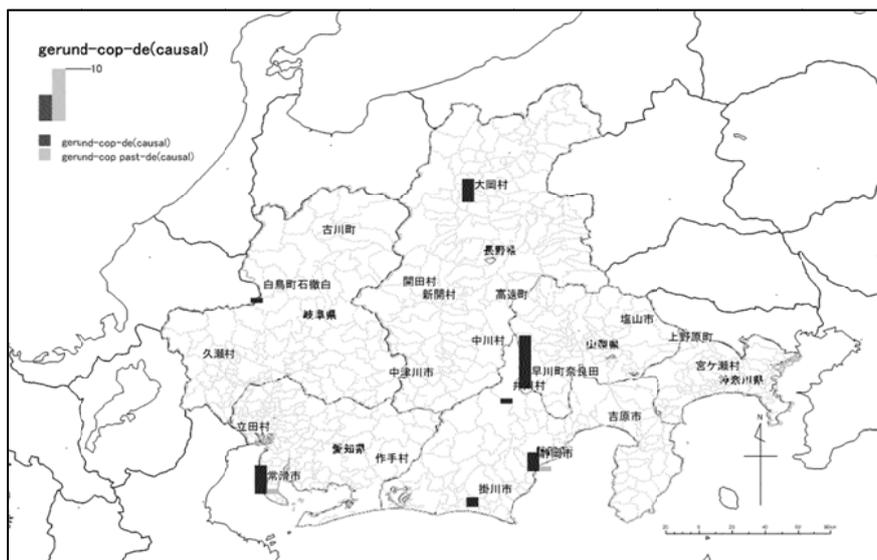


図10 「するダデ」型

なお、先のダダ文はさらに理由のデに前接することがある。

(10)アソコデ クーキリドードーデ (あそこで 食べるだけなのですから。) 山梨県南巨摩郡早川町奈良田 (NHK『全国方言資料第2巻関東・甲信越編』)

(11)コンダー シャミョー ヒーデ ウタウタイドードーデ (今度は 三味線を ひいて 歌うたいなのですから。) 山梨県南巨摩郡早川町奈良田 (NHK『全国方言資料第2巻関東・甲信越編』)

(12)ソラー ホントニ ソーダッタダデノー (それは ほんとうに そうだったんだからね。) 愛知県常滑市 (国立国語研究所『全国方言談話データベース日本のふるさとことば集成第9巻』)

ただし、例は少なく、これら3例に限られる。稲垣ほか(1957)は、現象そのものの存在を記述するものの、詳細な意味は不明である。

いずれにせよ、ダダ型やダダデ型は本当に「(の)だ+ (の)だ」や「(の)だ+ (の)だ+ (の)で」として機能しているのだろうか。表面的には「(の)だ (の)だ」「(の)だ (の)だ (の)で」であるが、その有する内容は、「のだ」や「ので」相当ということはないだろうか。先に、デの接続助詞化に触れたが、そのほかに、重複する場合の前半のダの準体助詞化(名詞句形成マーカージ化)のようなことが発生しているのではないだろうか。詳細な検討を要する。

4.5 一般名詞句の構成

準体法が格的性質を持つ助詞に前接するもので、構文上これが真の準体法に近いものである。図11に頻度の分布を示した。全域で現れるが、東側の方に多い傾向がある。

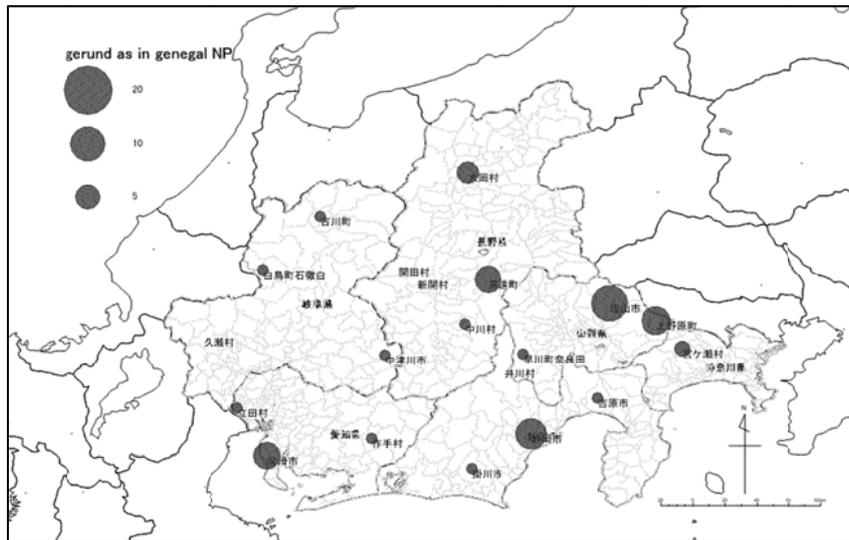


図11 「する+格成分」

5. 関連事象—ズラとラ—

準体法は、次のようなケースでも現れる。

長野県中南部から山梨県にかけては、推量の助動詞としてズラとラが両方用いられる。ズラとラには接続の制限の差があり、ズラは用言と体言の両方に接続できるのに対し、ラは用言にしか接続できない(馬瀬1971: p. 52)。

(13)これは、机ズラ

(14)明日, 行くズラ

(15)*これは, 机ラ

(16)明日, 行くラ

用言に接続するズラとラには意味の差があることが知られている(小林 1978, 諏訪実業高校 1961)。標準語と対照すると, ラは「だろろう」, ズラは「のだろろう」に対応するとされる(柴田 1954 : pp. 379-381, 吉田 1996, 吉田 2009)。

(17)いつも通り, 勉強するラ

(18) (わざわざ図書館から重い本を借りてきた。) やっと勉強するズラ

この場合, 「するズラ」の「する」は, 単に用言「する」に対応するのではなく, 意味的には「するの」に対応するものであり, この場合の用言「する」は準体法である。つまり, ラが「だろろう」ズラが「のだろろう」にあたるというのは正確ではなく, ラもズラも「だろろう」相当であって, 前節する用言がラの場合は非準体法(する)であり, ズラの場合は準体法(するの)であることに根本的な違いがあるとすべきことになる。

以上から, 従来明確ではなかったズラの起源に考えが及ぶ。ズラの体言接続は, コピュラ的なものが含まれていることを想定させる。そこからズの部分には奈良田等のコピュラのドーから変化した可能性が浮上する。四つ仮名を有する奈良田ではズラであって, ダ行に該当すること(稲垣ほか 1957)がそれを裏付ける。ここから次のような変化過程が推定される。なお, ド>ヅは高い頻度で前節する動詞末尾ウ段音による順行同化が考えられる。

*ドー→ラ→ヅラ(奈良田)→ズラ(長野・山梨・静岡)

6. むすび

GAJ のデータを活用した全国の概観を通して, 準体法は特に中部地方に多く見られることが分かった。

次に中部地方の方言談話資料の分析を通して, (1)それぞれの方言ごとの準体法の異なり, (2)表面的に準体法に見えるものの中に真の準体法と擬似的準体法があること, (3)準体法の変化に伴う接続助詞化や名詞句形成辞化をとらえた。

関連して, 推量助動詞のラとズラの異なりは, それらが「だろろう」「のだろろう」に相当することにあるのではなく, ラが用言の非準体法に, ズラが体言もしくは用言の準体法に接続することにあることを明らかにし, またその起源に言及した。

資料の積み残しとともに, 文法的意味内容の扱いが不十分な点は, 課題である。

文献

稲垣正幸・清水茂夫・深沢正志(1957)『奈良田の方言』甲斐民俗の会, 甲府。

金田一春彦(1967)「関東・甲越信地方方言の特徴」日本放送協会編『全国方言資料』2, 日本放送出版協会, 東京, pp. 15-29.

国立国語研究所(2004)『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成 8 長野・山梨・静岡』国書刊行会, 東京

小林伸子(1978)「長野県茅野方言の推量表現について—「～ズラ」と「～ラ」の違い」『日本語研究』1(東京都立大学国語学研究室), pp. 223-230.

柴田武(1954)「方言調査法」東條操編『日本方言学』吉川弘文館, 東京, pp. 367-433.

- 諏訪実業高校（1961）『諏訪方言集』諏訪実業高校，諏訪。
- 野田春美（1997）『「の（だ）」の機能』くろしお出版，東京。
- 彦坂佳宣（2006）『「行クダ」などの言い方をする方言群とその性格』『名古屋・方言研究会会報』23，pp. 1-11.
- 馬瀬良雄（1971）『信州の方言』第一書房，東京。
- 山口幸洋（1985）「方言体系」『新居町史3 風土編』新居町，新居町，pp. 655-946.
- 吉田雅子（1996）「山梨西部方言における推量表現」『国文学論集』29（上智大学国文学会），pp. 87-102.
- 吉田雅子（2009）「山梨県」『都道府県別全国方言辞典』三省堂，東京，pp. 138-145.

『日本語地図』にみる牛の鳴き声のオノマトペ

竹田 晃子

(国立国語研究所)

1. はじめに

「大規模方言データの多角的な研究プロジェクト」では、『日本語地図』の元カードに基づくデータと、略図作成が可能なデータを整備しつつある。本稿では、そのデータを用いて、『日本語地図』で公開されている方言地図のみでは分析の難しかった調査項目を取り上げ、新たに略図を作成しながら分析を試みるものである。

項目として、牛の鳴き声のオノマトペを取り上げる。『日本語地図』には、「牛の鳴き声」「ふくろうの鳴き声」「雀の鳴き声」の3種類が収載されている。このうち「牛の鳴き声」の図では、牛と子牛の両方の鳴き声が、記号を変えて図示されている。そこで、本稿は、この2種類の回答を分けて方言地図を作成し、一般名称としての「牛」「子牛」と比較しながら、動物の名称とその鳴き声のオノマトペの関連を考察する。

2. 動物の名称と鳴き声のオノマトペの関係

『日本語地図』の調査結果をめぐって、牛の鳴き声のべー類と牛・子牛を意味するベコの種類に関連を指摘する記述には次のものがある。

国立国語研究所(1972)「5-206 うし(牛)」『日本語地図 第5巻 解説』(pp.18-21)

同 上 「5-206 こうし(子牛)」同上 (pp.25-30)

同 上 「5-210 もうもう(牛の鳴き声)」同上 (pp.30-33)

澤木幹栄(1979)「物とことば」徳川宗賢(1979)『日本の方言地図』中央公論社 (pp.93-97)

佐藤亮一編(2002)「うし(牛)」『方言の地図帳—お国ことばを知る』小学館 (pp.248-249)

同 上 「こうし(子牛)」同上 (pp.254-255)

これらの記述には、共通して、牛の鳴き声と牛・子牛の名称との関係と、擬声語の分布の分析について指摘する内容が含まれている。以下では、図1・図2に佐藤(2002)の略図、図3に澤木(1979)の略図を示しながら、上記の内容を紹介し、論点をまとめておく。

2. 1 牛の鳴き声と牛・子牛の名称の歴史的関係

歴史的関係について、特に国語研究所(1972)「5-206 うし(牛)」には、次の3つの考え方が示されている。

- ・中央語で子牛を表すベコが、東北に伝播するときに牛の意味になった。東北では子牛を表すのに、これにベコツコと指小辞を付けて区別するようになった。
- ・中央語で牛を表すベコのコが子と理解されるようになり、子牛を表すようになった。東北や石川のベコは古い中央語の残存と解釈される。
- ・全国的にべーが牛や子牛を表しており、それにコを付けたベコが各地で生まれた。したがって伝播と考えない。

上記3つの考え方は他の文献でも指摘されているが、結論は見いだされていない。

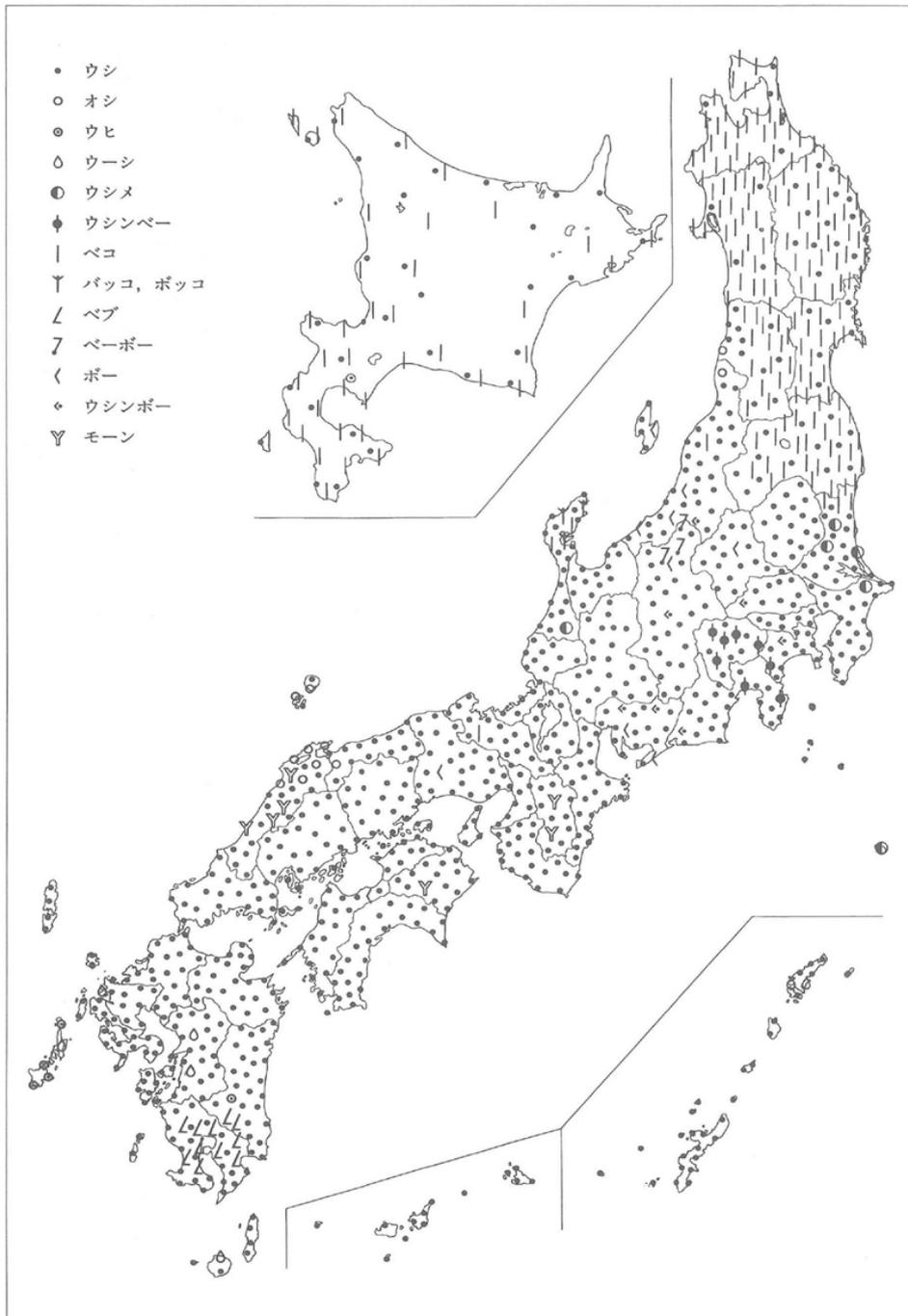


図1 うし (牛)

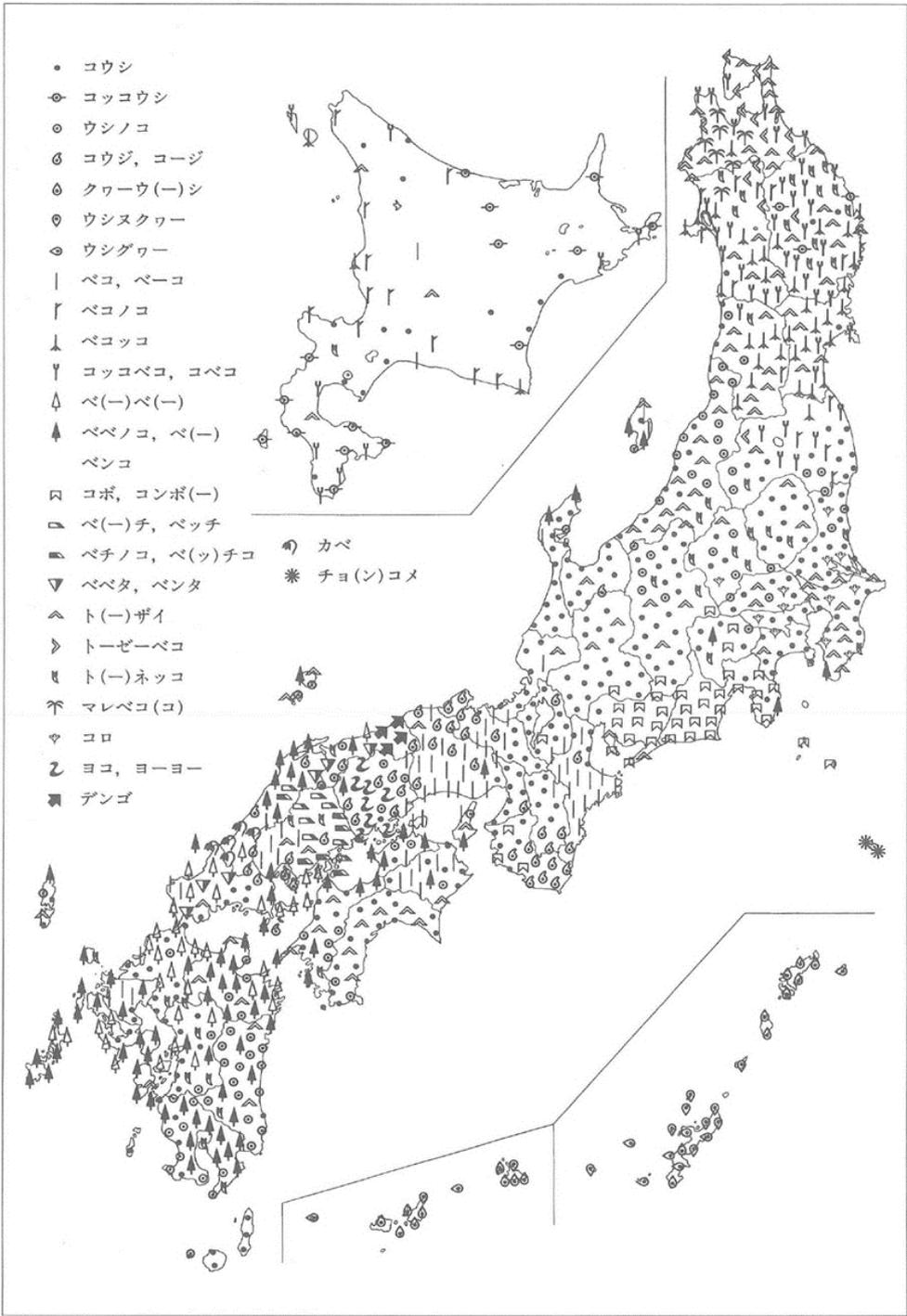


図2 こうし (子牛)

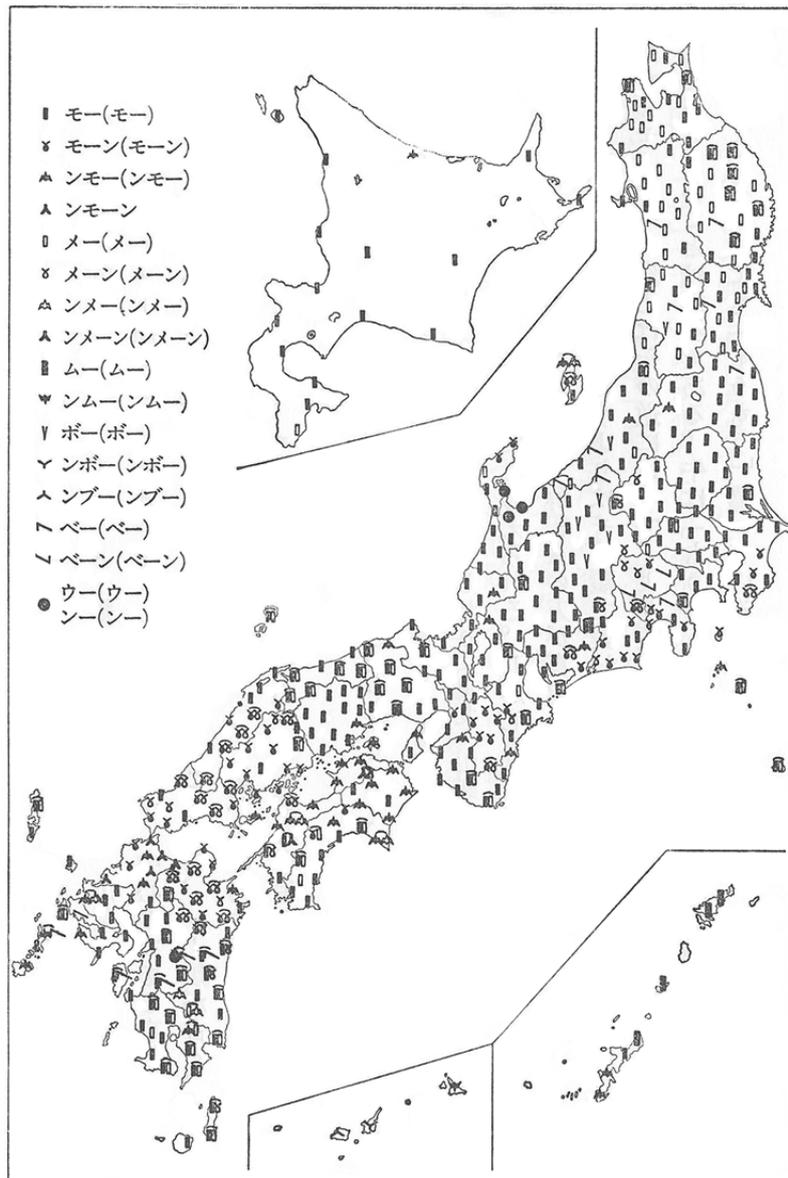


図3 もうもう (牛の鳴き声)

さらに、国語研究所(1972)「5-206 うし(牛)」では、牛の鳴き声と牛・子牛の名称に関連があることは認められるものの、擬声語そのものを名称として用いることが好まれなかったため、幼児語などとして用いられ、一般的な語としては使われなかった可能性が指摘されている。その上で、擬声語に接辞コなどがついた形が安定した形として、名称として用いられたとみている。後述するが、この指摘は、オノマトペが名称(名詞)として一般化する一つの可能性を示したものと考えられる。

2. 2 擬声語の分布が伝播かどうか

擬声語の分布が伝播によるものかどうかについて、国立国語研究所(1972)「5-210 もうもう(牛の鳴き声)」では、他の言語項目と比べると、各地で独自に生まれた語形である可能性が高いことが指摘されている。

また、本図は擬声語の分布図であるという点に特色があり、この場合に、言語地理学的解釈の一般原則が適用できるか否かも問題になろう。意味と形式との結合が恣意的であり、それにもかかわらず一定の地理的分布が認められるところに“解釈”の根拠があるとすれば、擬声語にあつては、その対象の固有の音（声）をいわば模倣するわけであり、形式選択の恣意性について、かなりの程度に制約を受けるであろうと思われる。したがって、同一形式が相互に離れて分布している場合に、両者がそれぞれの地域で独自に生まれた可能性が他に比例して圧倒的に強いことに注意しなければならない。（pp.32-33）

澤木幹栄(1979)にも次のようにある。

（前略）同じものを表す擬声語同士、言語や方言が違ってもどこか似てくるのは擬声語の「模倣」という性質上、当然であろう。「わんわん」と bowwow にしても、響きの似ているところがないわけではない。この「もうもう」の分布図を見ても、牛の鳴き声を表す語形はどれも同じようなものである。語形の種類はもとの『日本言語地図』ではかなりあるのだが、イ段・ア段の母音はあまり使われないし、語頭に出てくるのはバ行かマ行の子音か、そうでなければ「ン」と大体決っていて、変異の幅があまり大きくない。それに、これは擬声語としての形式上の制約から来ると思われるのだが、語形の長さがほぼ一定していて、語末は長い母音か、「ン」しか立たない。このような場合、飛びはなれた地点に同じ語形があつても、それが古い語形の残存かどうかは、なお検討を要する。同一の語形が独立に生まれる可能性が、ほかの場合に比べてずっと大きいからである。（ここまで p.94）（中略）擬声語の場合の言語地理学的解釈にひそむ問題については、前に述べたとおりだが、この地図では、当否はともあれ解釈が可能だけのはっきりした分布があるという事実が大切だと思われる。（p.97）

同様に、佐藤亮一編(2002)にも「鳴き声のような擬声語については、ベーのような表現が伝播ではなく、各地で自然発生的に生まれた場合もありえよう。」（p.248）とある。

確かに、実際の声や音を模して発生するものである以上、擬声語・擬音語は、お互いの関係がない地点において同時多発的に発生する可能性があることは否めない。また、その可能性が名詞や動詞など他の語に比べて高いこともしかりである。しかし、擬声語・擬音語であっても、いったん語形として成立してしまえば、それが伝播して一定の分布を形成するということはあり得るだろう。

本稿で扱うのは牛の鳴き声であるため、同時多発的に発生した擬声語である可能性は否定できない。しかし、オノマトペの中でも、擬態語は動きや状態を表すものであり、同時多発的に各地で同じ語形が発生するとは考えにくいから、分布形成について論じる場合には、擬声語・擬音語よりも適切であると思われる。残念ながら『日本言語地図』には擬態語の調査項目は含まれていないため、調査を含め、今後の課題となる。

3. 『日本言語地図』の資料

3. 1 牛に関連する地図

『日本言語地図』には、「牛の鳴き声」「ふくろうの鳴き声」「雀の鳴き声」の3種類が収録されている。牛にかかわるデータには、第5集に次のものがある。

210 図 もうもう (牛の鳴き声)

206 図 うし (牛)

207 図 おうし (牝牛)

208 図 めうし (牝牛)

209 図 こうし (子牛)

このうち210図は、牛と子牛で記号を変えて地図化されているが、元となったカードにおいてもこれが区別されている。そこで、牛と子牛とでデータを分けながら、地図化を行う。なお、本稿では「おうし(牝牛)」「めうし(牝牛)」は対象から除外する。

3. 2 「もうもう(牛の鳴き声)」の語形

最初に、この項目の調査方法を確認しておく。「もうもう(牛の鳴き声)」の質問文は、『日本言語地図』第5巻の図210によると、「牛の鳴き声を言い表すのに何と言いますか。子牛の鳴き声を何と言いますか。(質問番号222)」とあり、じっさいの調査票『日本言語地図作成のための調査票—第2調査票—』では、これに「コウシに特別の鳴き声があれば、注記してそれも記入する。」という注意書きがある(p.26)

得られたデータについて、『日本言語地図解説—各図の説明5—』の「210. もうもう(牛の鳴き声)」の冒頭には次のようにある(p.30)。

牛の鳴き声一般、および子牛の鳴き声について質問し、子牛の鳴き声に特別の言い表し方が認められれば、それを注記するという形で報告を求めたものである。したがって、この項目は「牛の鳴き声一般」(以下、「牛の鳴き声」と略称する)と「子牛の鳴き声」との2枚の図に分けることも可能であるが、子牛の鳴き声の特称が認められない地点がかなり多かったので、両者を1枚の地図にまとめて登載し、子牛の鳴き声の特称が認められる地点のみそれを「子牛の鳴き声」(凡例B)として地図上に表示することにした。したがって、牛の鳴き声と子牛の鳴き声とが同一形式の地点や、牛の鳴き声のみをカードに記載し、「子牛のは別でない」「子牛はNR」などと注記のある地点の語形は、それを「牛の鳴き声」(凡例A)として地図上に登載してある。1地点に2つ以上の語形が併記してあって、しかも、牛の鳴き声、子牛の鳴き声に関する注記のない場合も、「牛の鳴き声」(凡例A)どうしの併用として地図上に登載した。なお、本図では数地点でMOO MOO・MOONなどの語形について「共」「新」「希」の注記があった程度なので、<併用処理の原則>は適用しなかった。また、「未調査」の地点については202図の解説に一括して触れてあるので参照されたい。(以下略)

上記のことから、牛の鳴き声の回答地点に比べて、子牛の鳴き声を回答していない地点が多いことに注意が必要である。カードデータを確認したところ、子牛の鳴き声はのべ398

語、牛の鳴き声はのべ 2346 語が回答されており、約 6 倍もの差がある。なお、他に NR が 34、未調査が 132 地点あるが、これらを除外して本稿の分析を進める。

この項目に回答された語形のバリエーションについて、多い順に左から並べつつ、牛と子牛の語形数を区別すると、図 4 のようになる。

牛にはモーオ・モーなどのモー類が多いが、子牛にはメー・メーメー・メーンなどのメー類が多い。繰り返し語形かどうか、最後にンがつくかどうかなど、オノマトペ語形としての特徴について、牛と子牛の間に目立った違いはみられない。

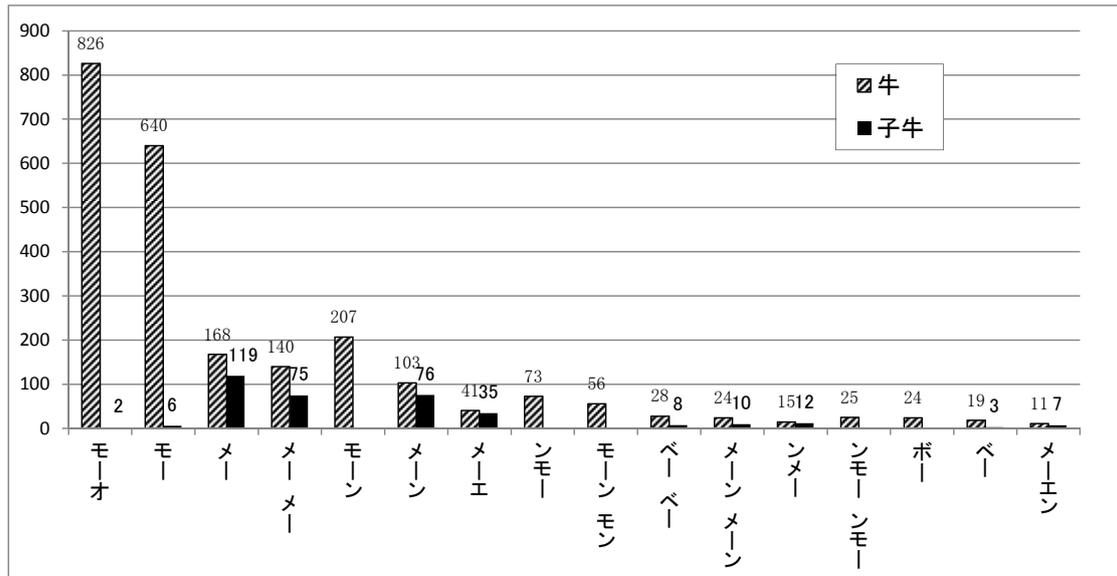


図 4 LAJ5-210 図「もうもう（牛の鳴き声）」
(回答地点の多かった語形 16 位までの内訳)

3. 3 牛・子牛の鳴き声

子牛の鳴き声を除外し、共通語と同系のモー類を除外した上で地図化し、図 5 に示した。繰り返し語形は 1 回に単呼化して示した。これによると、メー類は、主に東北地方（福島を除く）にまとまった分布があり、西日本に点在している。べー類は、山梨・新潟と、東北中央部・九州西部に点在している。中部地方にはポー類があり、その分布の北端の新潟、南端の山梨に、べー類が比較的まとまって認められる。琉球地方では、北部にムー類、南部にムー類とポー類がみられる。

子牛の鳴き声の回答を抽出し、共通語と同系のモー類を除外した上で地図化し、図 6 に示した。これによると、メー類は西日本に分布しており、東日本には点在している。ほかに、べー類が九州に点在する。

牛の鳴き声に対して子牛の鳴き声の回答数は著しく少ないと前述した。このことをふまえて図 5 と図 6 を比べると、子牛の鳴き声ののべ回答数が牛の 6 分の 1 と少ないのに対して、図 6 の西日本に地点が多いが、これは牛の鳴き声に比べて子牛のほうには共通語形のモー類が少なかったことと、牛と子牛を区別して回答した地点が西日本に多かったためである。次に、メー類が、牛では東北、子牛では西日本、というようにまとまって分布しているが、この分布は、相補的である。また、べー類を回答した地点は、中国地方に 2 地点と、九州中央部に点在するのみで、多くはない。

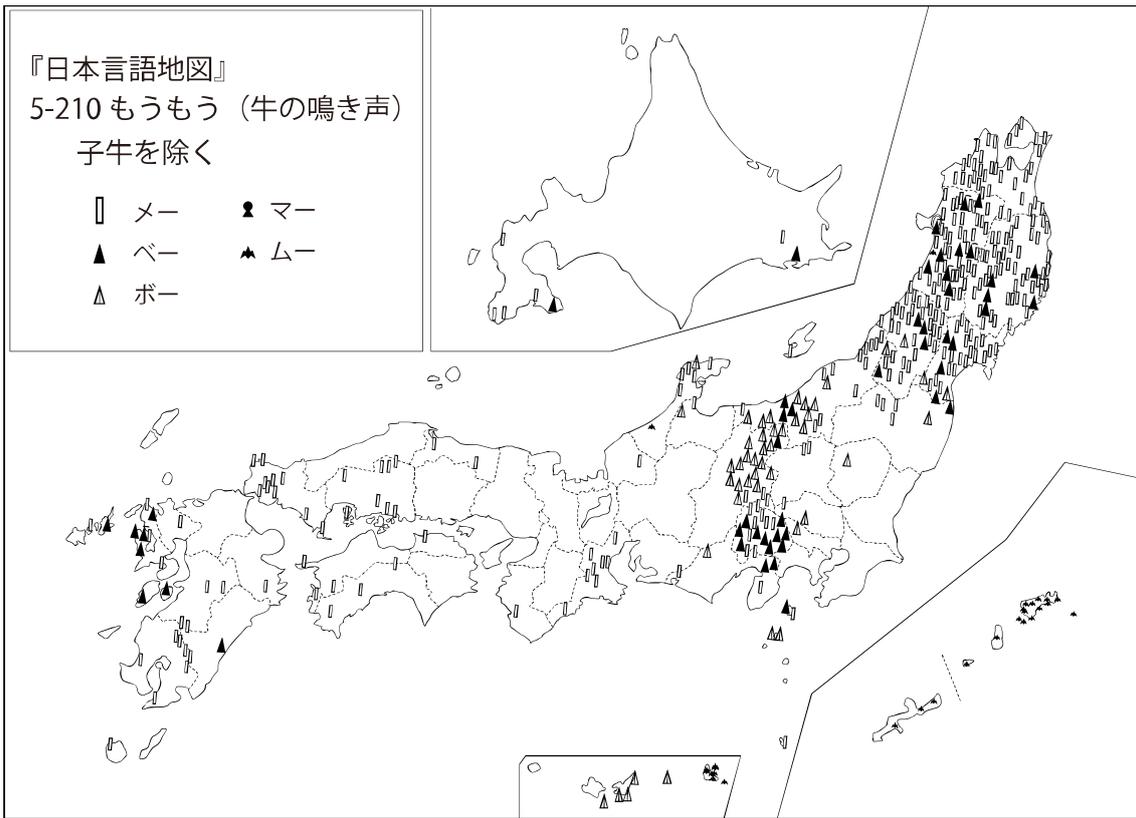


図5 牛の鳴き声

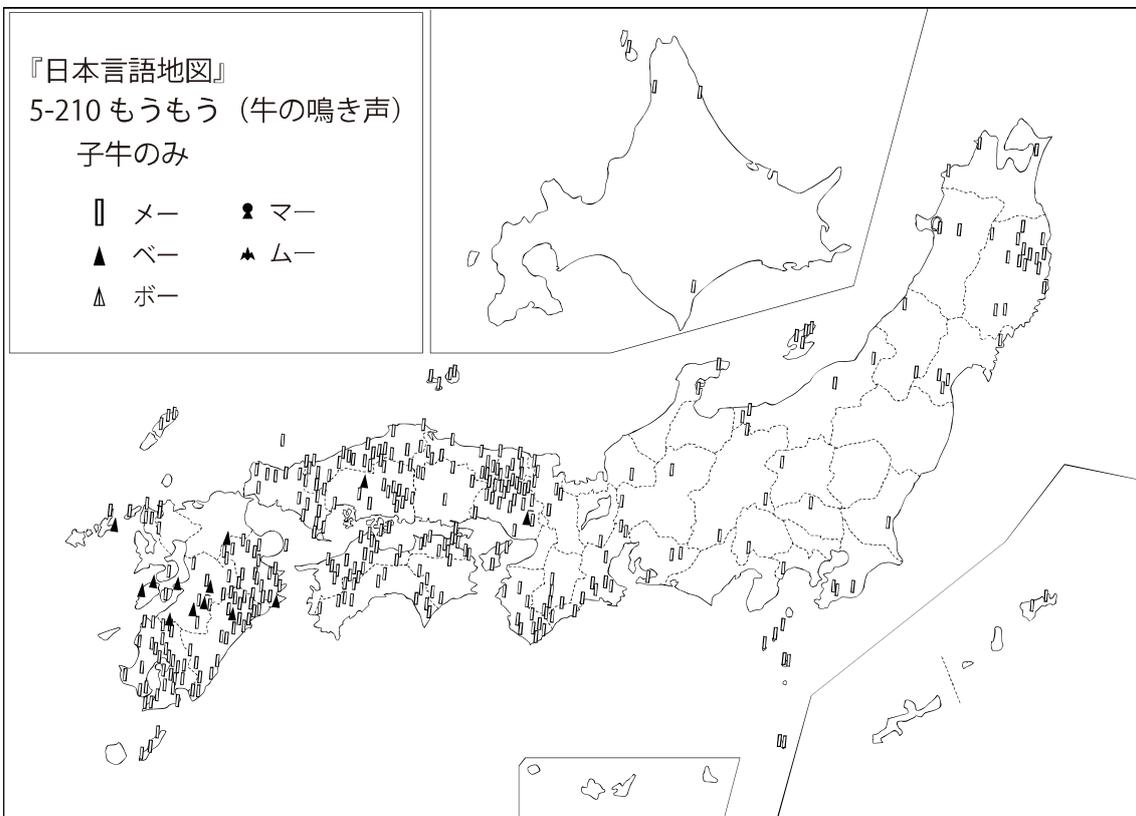


図6 子牛の鳴き声

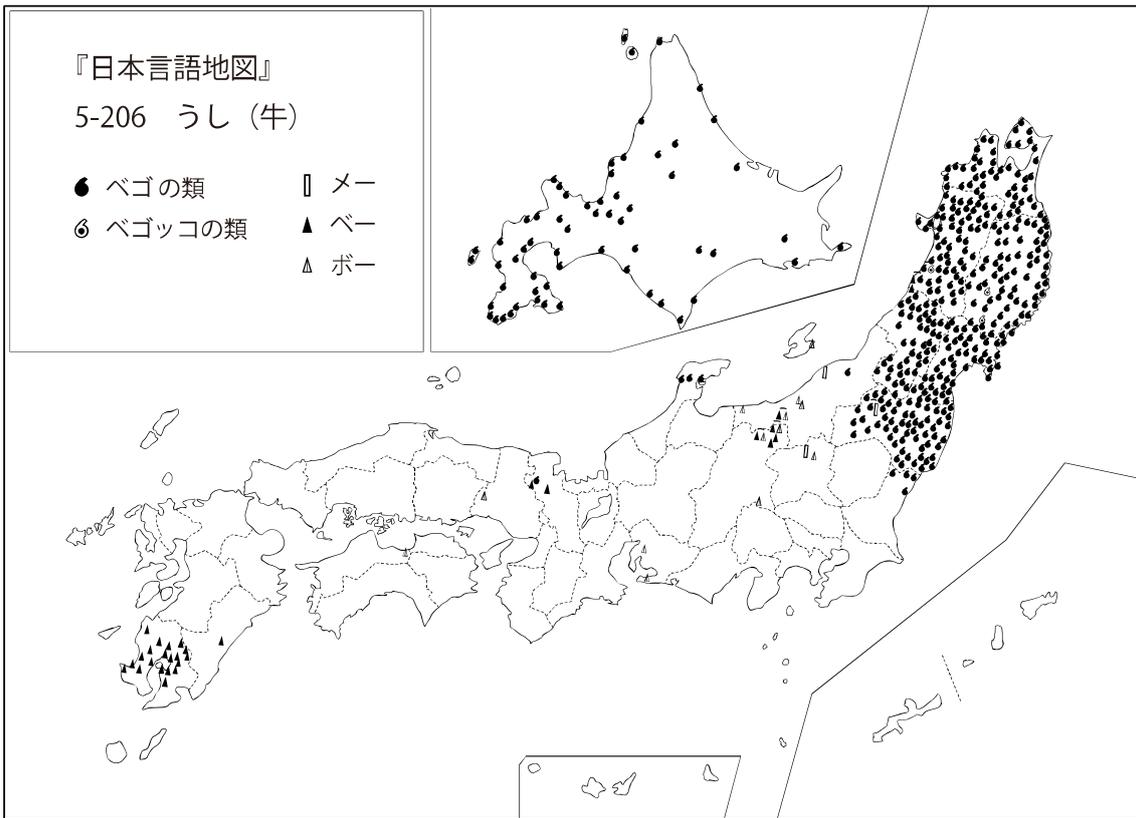


図7 牛 (名称)

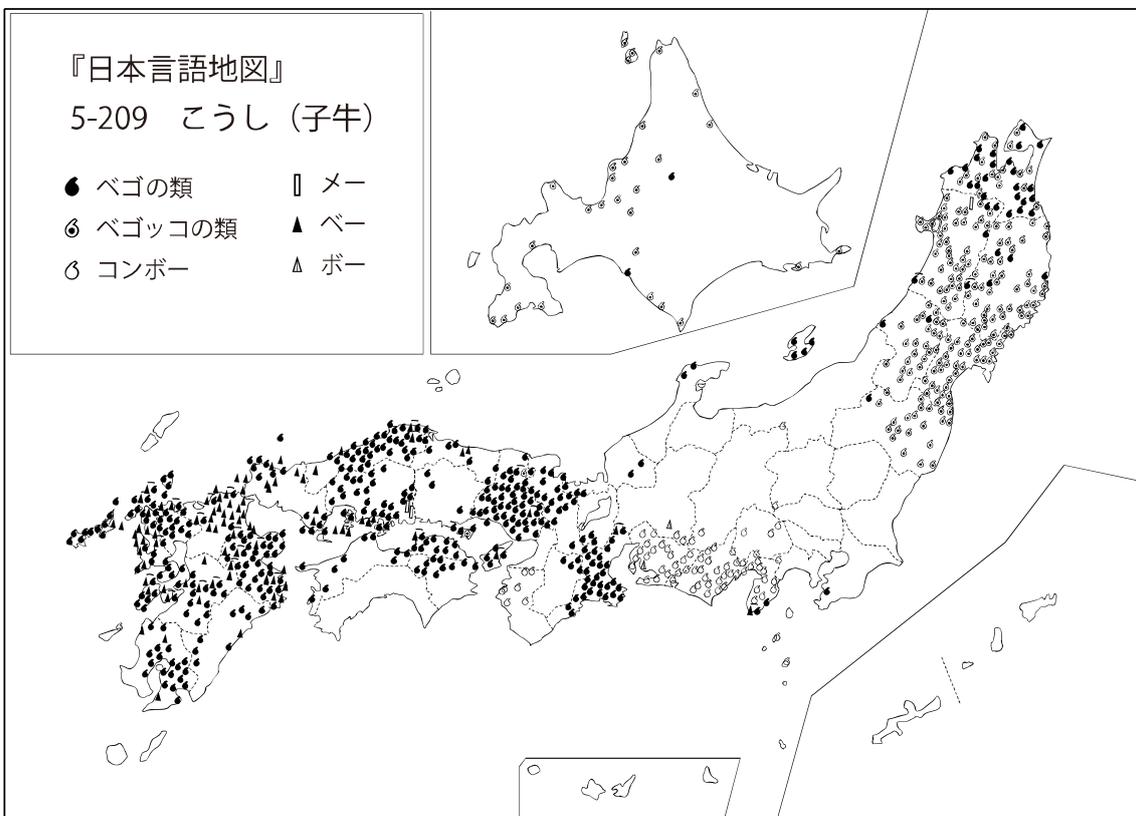


図8 子牛 (名称)

3. 4 牛・子牛の名称

牛・子牛の名称のデータから、鳴き声のオノマトペに関連があると思われるベ・メ・ボの類を抽出して地図化したのが、図7(牛)、図8(子牛)である。共通語形と同系のウシ類・コウシ類を除外したほか、子牛の名称を尋ねる質問文に「今年生まれたばかりの牛」とあったことによるトーネンコ(当年子)などの回答も除外した。

図7の「牛」では、新潟県から長野県にかけての地域にベー・ボー、鹿児島県にベーと回答した地点が分布している。新潟県から長野県にかけての地域では、牛の鳴き声もベー・ボーと回答されていたことから、牛の名称と鳴き声が同じ語形であることがわかる。べに指小辞コが付いたと思われる形をベコ類としたが、このベコの類は北海道・東北地方全域に色濃く分布している。

図8の「子牛」では、静岡県・愛知県・和歌山県などにコンボー/コボーの類が回答されている。ベコの類は、偏りつつも西日本に広く分布しており、東日本では青森県など東北北部に点在している。このベコに指小辞コが後接したとみられるベコッコの類が、北海道・東北地方に分布している。図7と比べると、北海道と東北地方(青森県の一部を除く)では、牛はベコ、子牛はベコッコと呼び分けることがわかる。関東・中部地方が抜けており、青森にベコ類/ベコッコが混在している点でやや強引ではあるが、これをABA分布ととらえることができそうである。少なくとも、東北地方にベコ類が分布した後にベコッコが生じたということはいえるだろう。また、山口県・福岡県・長崎県のあたりに、子牛をベー類と呼ぶ地点が比較的まとまって分布しているが、図7で「牛」をベー類と呼ぶ地点とは異なる。これも、ベコ類の分布域の中央部にベー類を回答した地点があるようにみえる。

図7と図8を比べると、多くの地点で牛と子牛の名称で語形が異なるのに対して、語形で区別しない地点は青森県にやや多い。ベコの類は、北海道・東北地方では牛、西日本では子牛に回答されており、相補分布的である。

3. 5 鳴き声のオノマトペと動物の名称の関係

ここで、図5「牛の鳴き声」と図7「牛(名称)」、図6「子牛の鳴き声」と図8「子牛(名称)」について、それぞれの関係をみる。

図5「牛の鳴き声」のベー類は、東北地方、新潟・山梨・静岡、長崎・熊本に点在しており、図7「牛(名称)」のベコ類は、東北地方に分布している。図6「子牛の鳴き声」のベー類は、西日本の兵庫・広島と九州中央部に点在している。他に、図8「子牛(名称)」のベコ類は西日本に分布しており、青森に比較的まとまった分布域がある以外は、東日本に点在している。

これらの分布に対応関係をみると、鳴き声にベー類が回答されている地域では、動物の名称としてベコ類が回答されていると考えられる。実際の回答地点をカードデータによって照合すると、牛の鳴き声にベー類を回答した48地点中、牛をベコ類と回答した地点は41地点である。子牛の鳴き声にベー類を回答した14地点中、子牛をベコ類と回答した地点は13地点である。これは、鳴き声をベーとする動物の呼び名がベコ類である地点が多いということである。ただし、全国的に見ると少なく、この対応関係が古いものであるかどうか、また、擬声語と名称のどちらが先に成立したかについては、現時点では不明である。

3. 6 まとめ

牛の鳴き声 (図 5) , 子牛の鳴き声 (図 6) , 牛の名称 (図 7) , 子牛の名称 (図 8) の分布の特徴をあげると次のようになる。

(1)牛の鳴き声を表す東北地方のメー類と、子牛の鳴き声を表す西日本のメー類は、相補的に分布している。

(2)牛の鳴き声を表す東北・中部地方のメー類と、子牛の鳴き声を表す西日本のメー類の分布域に、ベー類が点在している。

(3)牛を意味する北海道・東北地方のベコ類と、子牛を意味する西日本のベコ類は、相補的に分布している。

(4)北海道・東北地方では、子牛の名称にベコッコ類 (ベコ+指小辞コ) を回答しており、牛はベコ類、子牛はベコッコ類という対立が確認できる。

(5)北海道・東北地方では、子牛を表すベコッコの分布域にベコ類が点在している。特に、青森県では子牛を意味するベコ類が多い。西日本にはベコッコはほとんどない。これらのことから、次のようなことが考えられる。

(1)(2)については、メー類の分布域で、メー類がベー類に交替しつつあるか、あるいはベー類が新たに生じつつあると考えることができる。

(3)から、ベコ類の成立について、西日本で成立した子牛を意味するベコ類が東北地方に伝わる際に牛を表すようになったか、あるいは鳴き声がベーである動物 (あるいはその子ども) をベコ (ベ (オノマトペ) +コ (指小辞)) と呼んだか、両方の可能性がある。

(4)(5)で、ベコッコの分布域にベコ類が点在することから、牛・子牛の名称としてベコ類が成立してから、北海道・東北地方で子牛を意味するベコッコが成立したと考えられる。東北地方では、動物の子どもをコッコと呼ぶが、これはコ (子) に指小辞コが付いた語形と考えられる。ベコが牛の名称として成立した後、その子どもの名称として指小辞コを付けたベコッコが生じた可能性もあるが、ベコが子牛の名称として成立した後に、コを付けたベコッコを子牛の名称としたために、ベコが牛の名称となった可能性も否定できない。

最後に、鳴き声と名称の関係についてまとめる。3. 5で述べたように、鳴き声にベーを回答した地点には牛・子牛をベコと回答した地点が多いが、国語研究所(1972)の記述では、擬声語そのものを名称として用いることが好まれず、幼児語などとして用いられ、一般的な語としては使われなかった可能性が指摘されており、擬声語に接辞コなどがついた形が名称として用いられたとある。このことは、オノマトペが動物の名称として用いられる際には、幼児語として用いられるか、何らかの変形が必要であるということである。

方言においては、オノマトペそのものが何らかの規則によって変化した語形がその鳴き声・状態の動物・人物を表す名詞として用いられることがある。鹿児島県喜界町の南西部では、オノマトペの繰り返し語形を短縮化し、その語形の末尾を長音にした語形が、名詞として使われている。たとえば、「猫」が喉を鳴らす音をあらわすオノマトペ「グルグル」に対応する形で、猫を意味する「グルー」が用いられており (中本正智(1981)(1987)) , 猫を呼び寄せるときに使う「グルグル, グルグル」を変化させた形「グルー」が、その動物の名称として用いられていると考えられる。他にも、アドゥナアドゥナ (のろのろ) とアドゥナー (のろま) , ヨーガリヨーガリ (ひよろひよろ) とヨーガリー (痩せた人) などの対応関係が確認された (竹田晃子(2011)) 。

他地域でも、音から生じた語形から呼び寄せ語ができ、呼び寄せ語に指小辞コを付けることで名詞化するという事例がある。宮城県鳴子・鬼首地区から山形県最上地方にかけての一带で、猫を呼び寄せるときの舌打ち音を「言語化」した感動詞チャッチャツから、猫の名称としてのチャコ・チャペ・タコなどが生じた可能性が指摘されている（小林隆(2011)）。この場合は、チャにコが付いた語形が名詞として用いられる。繰り返す語形が短縮され、コを付けた形が名詞として用いられることから、鳴き声のオノマトペ「ベー」に指小辞コの付いた「ベコ」の類例と考えられる。

オノマトペ由来の名詞は、幼児語にとどまる場合もある。喜界町城久（ぐすく）方言では、鶏を呼ぶときに「トゥートゥー、トゥートゥー」と言い、幼児語として「トゥートゥー（鶏）」が用いられている。しかし、大人語は「トウイ（鶏）」で、オノマトペ由来の名詞「鶏」に相当する語形、たとえばトゥーのようなものは確認できなかった（竹田(2011)）。

ベーとベコ類の場合もこれらと同様に、鳴き声を表す語形は、オノマトペそのものか幼児語の名詞であり、それを一定の規則によって変化させた語形が一般的な名詞として用いられると考えられる。

4. 今後の課題

以上、牛・子牛の鳴き声のオノマトペと牛・子牛の名称について、新たに略図を作りながらその関係について考察したが、本稿ではカードデータを参照したが、諸事情でカード画像は確認しなかった。カード画像には、回答語形の新古や共通語・幼児語などの情報があり、次の段階ではこれらを反映させた分析が必要である。

牛・子牛の鳴き声の調査結果を地図上に示すと分布が認められることは事実であるが、それがどのように形成されたかについては不明である。オノマトペや感動詞のような形式が、方言においてどのように存在しているのか、あるいはどのように他の語を作り出すのか、不明のことは多い。今後の課題としたい。

参考文献

- 小野正弘編(2007)『日本語オノマトペ辞典—擬音語・擬態語 4500』小学館
国立国語研究所編(1972)『日本言語地図』第5巻，財務省印刷局（1984 再版）
国立国語研究所編(1972)『日本言語地図 第5巻 解説』財務省印刷局（1984 再版）
国立国語研究所編(1982)『日本言語地図作成のための調査票—第2調査票—』
小林 隆(2011)「感動詞「猫の呼び声」」『宮城県・山形県陸羽東線沿線地域方言の研究』
pp.162-172. 東北大学大学院文学研究科国語学研究室
佐藤亮一編(2002)『方言の地図帳—お国ことばを知る』小学館
澤木幹栄(1979)「物とことば」徳川宗賢『日本の方言地図』中央公論社，93-97.
竹田晃子(2011)「鹿児島県喜界町方言におけるオノマトペの語彙的特徴」木部暢子・窪菌
晴夫・下地賀代子・ローレンス ウェイン・松森晶子・竹田晃子『「消滅危機方言の
調査・保存のための総合的研究」喜界島方言調査報告書』，139-162. 国立国語研究所
中本正智(1981)『図説 琉球語辞典』金鶏社
中本正智(1987)「喜界島方言の言語地理学的研究」『日本語研究』9，54-71. 東京都立大学
国語学研究室

全国方言調査データから見た感動詞の地域差

澤村 美幸

(和歌山大学)

1. 目的と方法

感動詞や感嘆表現にも地域差があることは、『瀬戸内海言語図巻 下』、『方言文法全国地図 5・6』などの方言地図や、方言研究ゼミナール(2006)の研究などで知られているところである。しかし、そうした地域差を扱う際の問題については、開拓され始めたばかりの分野であるだけに十分な議論が行われているとは言い難い。

本稿ではこのような現状をふまえ、感動詞(感嘆表現も含む)の地域差についていくつかの事例を紹介し、その上で従来の分野とは異なる「地域差」へのアプローチの仕方や、こうした分野を扱う際の問題について考えてみたい。

まず初めに、地図化のもととなった調査の概要や、その結果のデータベース化について概要を述べた上で、調査結果によって作成した方言地図を紹介する。その上で、感動詞や感嘆表現などの地域差を扱う際の特徴や問題点などについて、現段階での考えをまとめてみたい。

2. 調査の概要

まず初めに、東北大学方言研究センター(代表:小林隆)で2009年度に行われた全国感動詞調査の概要について紹介する。

○調査方法:通信法

○調査時期:2009年度1月

○調査地点:全国2000の市町村(市町村合併等の関係により、一部公民館を含む)に配布。

⇒回収率は約50パーセント程度

○インフォーマント:回答者の条件として、こちらが指定したのは以下のとおりである。

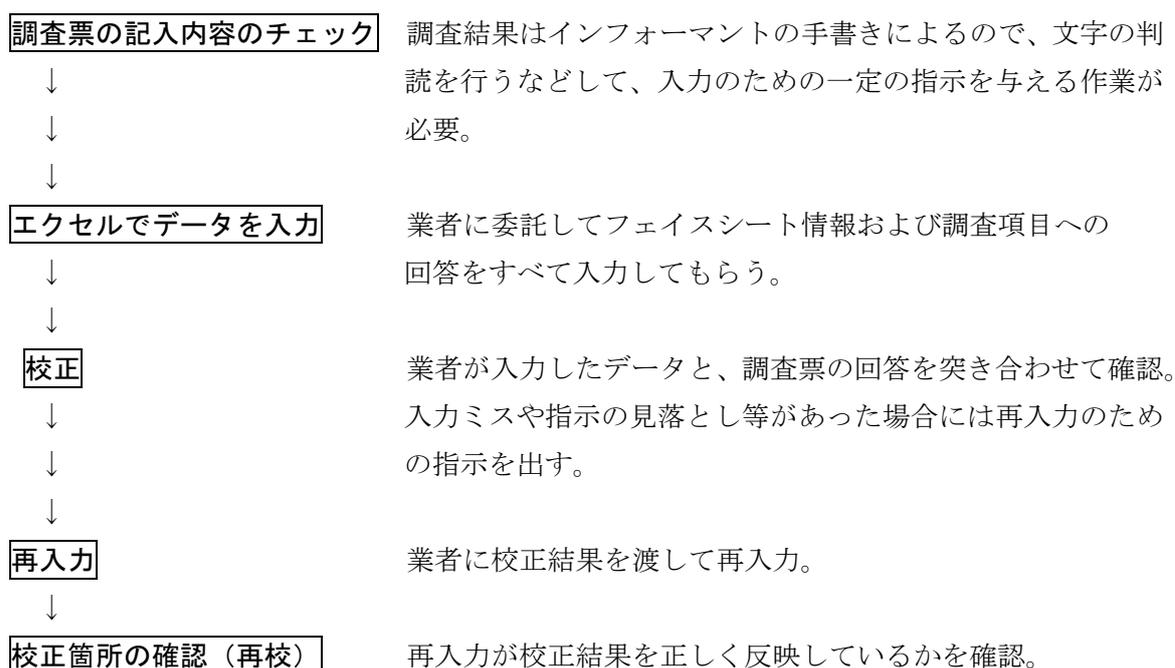
- ・ご当地(同市町村)に生まれ育ち、成人してからほとんど他市町村に出たことのない方。
- ・男性の方(ご無理な場合は女性の方でもけっこうです)。
- ・60歳以上で、方言をよく残していると思われる方。
- ・質問は簡単な内容ですが、感動詞の調査ですので、驚いた場面や喜んだ場面など、その場にいるようなつもりで回答していただく必要があります。その点では、なるべく勘のよい方をお願いできれば幸いです。

○調査項目数:第1調査票59項目、第2調査票55項目。

3. 調査結果のデータベース化

2の調査の結果を分析・地図化するため、結果はすべて電子的にデータベース化を行った。

調査票の回収からデータベース作成までの流れは以下の通りである。



4. 「暑さ」・「熱さ」・「辛さ」・「汚さ」に見る感動詞の地域差

今回は新たに、東北大学方言研究センター（代表：小林隆）で2009年度に行われた全国感動詞調査の結果をもとに、感嘆表現の地域差とその方言形成について検討していく。ここでは、感動詞および感嘆表現について尋ねた第1調査票から、知覚・判断に関わる4つの項目の調査結果を利用する。なお、これらの調査方法と分析結果については既に澤村（2012）で詳しく述べているので、ここでは繰り返さない。

この調査によって、集まった調査票907件のうち、回答者が「生え抜き」の条件を満たすもの825件を対象とし、方言分布図を作成したのが次ページ以降の図1～図12である（注）。なお沖縄における分布は、今回の論点には深く関わらないものが多かったため割愛した。

4. 1. 語幹（●）と終止形（／）

まず、4つの項目について、形容詞の語幹による感嘆用法が回答された地点（●）と、終止形で感嘆を表現する地点（／）によって地域差が見られた。図1「暑い（アツ-アツイ）」、図2「熱い（アツ-アツイ）」、図3「辛い（カラ-カライ）」、図4「汚い（キタナ-キタナイ）」である。

なお、分類に際しては、「アツッ」と「アツー」など、語形の細かな違いは全て捨象して統一した。また、九州に見られるカ語尾の形も終止形という点では等価であると見なし、終止形のグループにまとめて分類した。

これら4つの地図から、形容詞語幹の感嘆用法の形式は近畿地方を中心とした西日本に多く見られることが明らかである。しかし、よく分布を見ていくと九州では、それほど顕著な形容詞語幹の感嘆用法の分布は見られない。また、図4を除く図1～図3は、東北地方にも比較的まとま

った分布が見られることも特徴的である。

4. 2. 感動詞の前接（●）と前接なし（／）

今回の回答では、「アツ」や「アツイ」といった感動詞のみの回答が多く見られたものの、一方で「ウワー＋アツイ」など、感動詞が形容詞に前接するか否かという点に関して、項目ごとに違いが見られた。この点に着目し、感動詞が前接するもの（●）としないもの（／）とに分けて地図化したのが図5～図8である。これらの地図でまず目に付くのは、図6「熱い」ではないだろうか。図6は、形態的に同じ図5「暑い」と同じような分布を描いてもよさそうなものだが、図5については「ウワー＋アツイ」などの感動詞が前接する形態が一定数見られたのに対し、図6では感動詞が前接しない形式が圧倒的であった。また、図7「辛い」や図8「汚い」は感動詞が比較的前接しやすい傾向が見て取れる。

4. 3. 「その他（●）」

ここまでは「アツイ」「カライ」「キタナイ」などの形容詞に由来する感動詞を中心に見てきたが、感動詞のみなど形容詞に由来しない形式は「その他」に分類した。この「その他」のみの分布を示したのが図9～図12である。

これらの中で初めに目につくのは図10「熱い」であろう。他の地図に比べると、極端に分布が少ない。一方、分布が最も多いのは図12「汚い」であり、この2枚の地図にはかなりの違いが見て取れる。具体的に数字にしてみると、「その他」に分類した回答は、図9で277件、図10で69件、図11で366件、図12で531件あった。すなわち、感動詞に由来しない形式の回答という点において、項目ごとにかかなりの相違が見られることは明らかである。

5. 感動詞の地域差をどう捉えるか

4. 1から4. 3では全国感動詞調査の結果について、3つの観点から見た場合にさまざまな地域差や、項目ごとの偏りがあることを述べた。

それぞれの分布の解釈や、分布形成の経緯についても検討しておきたいところだが、ここでは感動詞を対象として地域差を捉える際の別の問題について論じたい。

少し穿った見方をすれば、ここまで見てきた感動詞の地域差は、こちらが様々な「切り口」を用意したことによって見えてきた地域差であり、実際の調査結果はもっと煩雑なものであることの方が多い。裏を返せば、そうした切り口なしでは地域差と言えるようなものは浮かび上がってこないのである。とりわけ感動詞の場合は、語彙の方言地図を作成する時のように、単語を記号に置き換えるだけの作業だけでは地域差が見えてこないのが実状である。

この問題を考えるために、以下に澤村（2011）から、感動詞の地域差についての事例を二つ紹介してみる。調査の詳細については、ここで詳しく述べることはできないため、小林・篠崎（2003）をご覧いただきたい。

5. 1. 失敗の感動詞の地域差

まず、失敗に際してどのような声を上げるかについての方言分布(図13)をご覧いただきたい。

- ①シマッタ類(シマッタ/シモータ/シモタ/チョッシモタ/アイタシモタ): 共通語的な言い方である「シマッタ」と、その変種である「シモータ」「シモタ」は、いわゆる東西境界線を境目とし、その東側と西側とに分かれて分布している。ただし、「シマッタ」は関東よりもむしろ岐阜・愛知などの中部地方を中心とした分布を見せている。それに対して「シモータ」「シモタ」は西日本の広範囲を覆っており、強い勢力を持った語であることがわかる。また、「チョッシモタ」が鹿児島に、「アイタシモタ」が九州各地に散在している。
- ②アイター類(アイター/アター): 「アイター」は、東北や関東にも見られるものの、その分布は近畿以西に多く、九州での回答も目立っている。また、「アター」は、東北・関東に点在するほか、西日本でも数地点の分布が見られる。これらはいずれも「アイター」の周辺に分布していることから、「アター」は「アイター」の転訛形であると思われる。
- ③ヤッター: 関東地方を中心とした分布を見せるが、中国地方や九州北部にも数地点分布が見られる。
- ④シクジッタ類(シクジッタ/シクッタ): 「シクジッタ」、またその転訛形と思われる「シクッタ」は、特に岩手県北部に集中した領域を持ち、その分布は青森・秋田・宮城の県境にまで及んでいる。
- ⑤マイッタ: 群馬・栃木・茨城といった関東地方中心に分布するほか、全国に数地点散在する。
- ⑥ヨワッタ: 近畿地方に分布しており、特に和歌山県における分布が顕著である。
- ⑦チクショー: 関東・東海地方を中心とした分布を見せるが、全国にも散在的に分布する。
- ⑧サーサ類(サーサ/アッサーサ/サイ): 「サーサ」と「アッサーサ」は、長野・新潟から東北にかけて分布しており、特に日本海側の分布が顕著である。「サイ」は、青森・岩手・秋田にそれぞれ数地点の分布が見られる。
- ⑨アチャー類(アチャー/アリヤー/アヤー): 「アチャー」「アリヤー」はいずれも全国的な広がりをもって分布しているが、近畿・四国九州における分布は少なく、概して西日本よりも東日本における勢力が強いようである。また、「アヤー」は東北地方中心の分布を見せており、沖縄を除き、西日本には分布が見られない。
- ⑩ヤイヤイ類(ヤイヤイ/ヤイヤ): 「ヤイヤイ」の分布は、静岡県西部に特に顕著である。「ヤイヤ」は長崎・鹿児島などに見られるほか、福島にも2地点分布している。
- ⑪バツサリ: 高知に3地点のみであり、極めて局所的である。
- ⑫アキサミヨー: 沖縄本島と多良間島にそれぞれ1地点ずつ見られる。
- ⑬ダー: 山形・福島に各1地点のみの分布である。
- ⑭チェツ: 東京・静岡・長野・岐阜にそれぞれ1~2地点、島根と広島の間境に1地点の分布が見られる。

以上のように、回答された形式はきわめて多様で、全国的な広がりをもつものは少なく、全体として「だから失敗の感動詞にはこういう地域差がある」とひとくくりにもとめることが難しい。それを以下のような切り口で整理したときに初めて東西差という大きな地域差が立ち上がってくる。

概念系感動詞 動詞・形容詞・名詞など概念的なことばに由来するもの

「①シマッタ」類～「⑦チクショー」

⇒西日本に顕著

非概念系感動詞 指示語やオノマトペ、あるいは生理的な音声など非概念的な要素に由来するもの

「⑧サーサ類」～「⑭チェツ」

⇒東日本に顕著

5. 2. 痛みの感動詞の地域差

次に、痛みを感じた時にどのような声を上げるかについての地域差（図 14）について取り上げる。ごく簡単にまとめると、痛みの感動詞についての分布は、以下のような東西対立として捉えることができる。

西日本中心の分布：「イタ」・「ア+イタ」・「アイタ」

東日本中心の分布：「イタイ」・「ア+イタイ」・「アイタイ」

⇒形容詞語幹の感嘆用法、およびそれに由来する形式が西日本に、形容詞の終止形によるものが東日本に多く分布するという点では比較的シンプルな東西対立を描く。

「失敗の感動詞」に比べると「痛みの感動詞」の分布は、形容詞語幹の感嘆用法か終止形かという点で2つのグループに分かれるためにシンプルなものだが、いずれにしても形式そのものではなく、一段階上のレベルでグループ化した時に東西差が見えてくる点については他と変わらないとも言える。

以上のように、「切り口」を工夫しないと見えてこない地域差というのはいったい何なのだろうか。感動詞の地域差を扱っていると、このような問題に常にぶつからざるを得ない。その理由の一つには、感動詞調査における回答の多様さが指摘できる。「痛みの感動詞」や、先に見た「暑い」「熱い」「辛い」「汚い」などは形容詞レベルでは共通した回答が見られる点でむしろ特殊な事例であり、実際には「失敗の感動詞」のように、きわめて回答のバリエーションが豊富なものの方が多い。これは感動詞が〈机〉を「ツクエ」と呼ぶような語レベルの問題とは異なり、表現法のレベルに属するものであることや、そのために話者の感動詞に対する規範意識が希薄であるなどの特徴によって生じてきている問題なのかもしれない。あるいは、今回の調査法のために生じた問題である可能性もあり、考えるべき点は多い。

また、感動詞の問題に限ったことではないが、全国的な地域差を捉える上では、その「切り口」をどうやって見つけ出すかということも大きな問題となる。これまで筆者自身はデータを整理する過程で、「こういう観点でグループ化してみれば地域差が出るのではないか」という思考錯誤の末にいわば「地域差を発見する」のが常であった。しかし、こうした方法はともすれば主観的な分析に陥ってしまいがちであり、他にも分析の観点があった可能性などを否定することは難しい。例えば多変量解析などを用いて、どのような観点で見た場合に地域差が現れたり現れなかったりするののかということを計量的に分析してみるという方法もある。いずれにせよ、大規模なデータ

によって地域差を扱う場合には、分析方法をより客観化することで、地域差の「切り口」が必然的なものであることを明らかにしていくべきであると思われる。

さらに、調査結果では感動詞としての回答ではなく、感嘆文として答えられたものも多く、それらを地図化にあたってどのように整理するのかということも今後の課題となる。

いずれにしても、感動詞の研究は始まったばかりであり、その地域差について検討していく際には、まだまだデータが必要である。さらに、調査だけでなく、それを実施する際の調査法そのものについても、船木（2009）などにより提示されているものの、まだまだ精査が必要となってくるであろう。

注 作図には、国立国語研究所の地図とプラグインを使用した。また、地図化にあたっては、竹田晃子氏（国立国語研究所非常勤研究員）、川口良介（和歌山大学大学院生）、藤岡沙季・堀祐輔（和歌山大学学生）の協力を得た。

文献

- 小林隆・篠崎晃一（2003）『消滅の危機に瀕する全国方言語彙資料』科学研究費報告書
- 澤村美幸（2011）『日本語方言形成論の視点』岩波書店
- 澤村美幸（2012）「感嘆表現の地域差と方言形成」日本語学会シンポジウム「方言形成論の展開」日本語学会 2012 年度秋季大会予稿集
- 船木礼子（2009）「感動詞—詠嘆表現 2」国立国語研究所全国方言調査委員会編『方言文法調査ガイドブック』3，私家版
- 方言研究ゼミナール（2006）『日本語立ち上げ詞の研究』方言資料叢刊 9，私家版

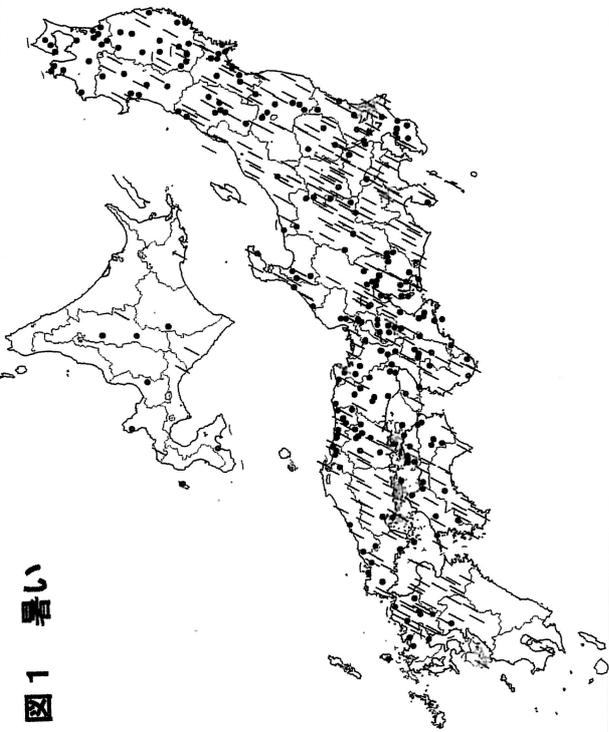


図1 暑い

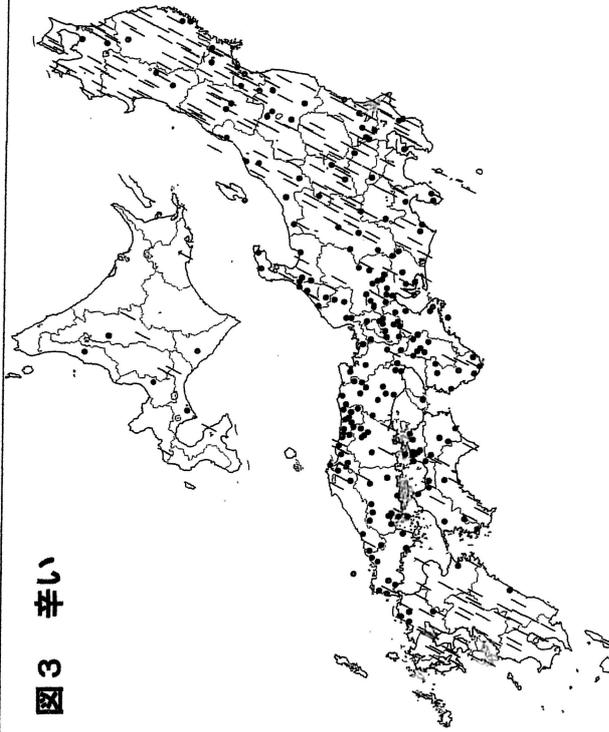


図3 辛い

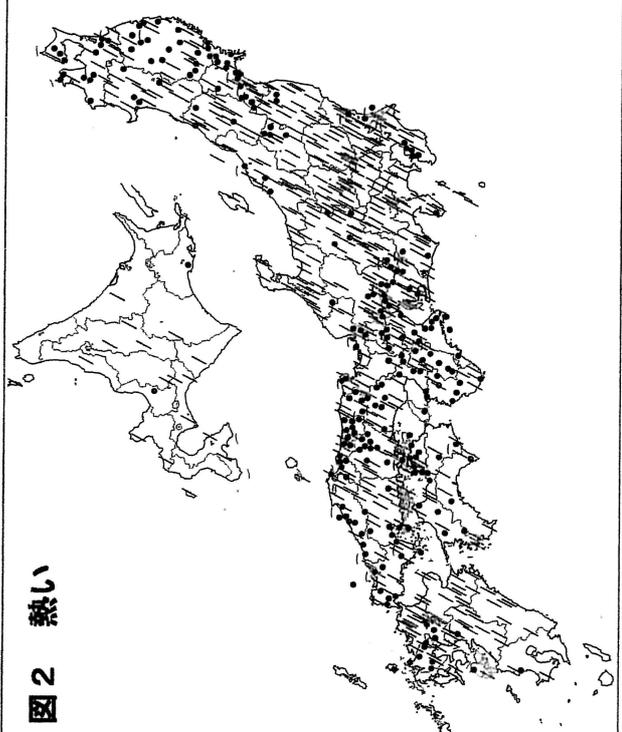


図2 熱い

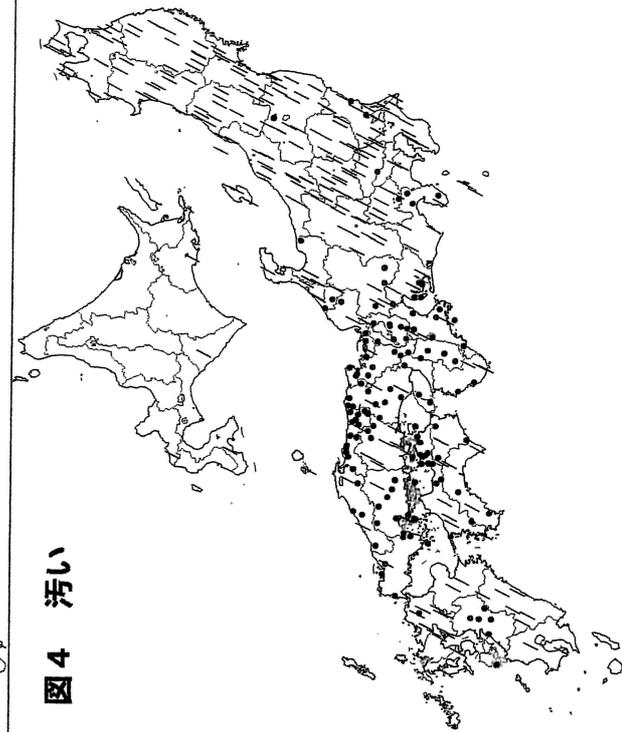


図4 汚い

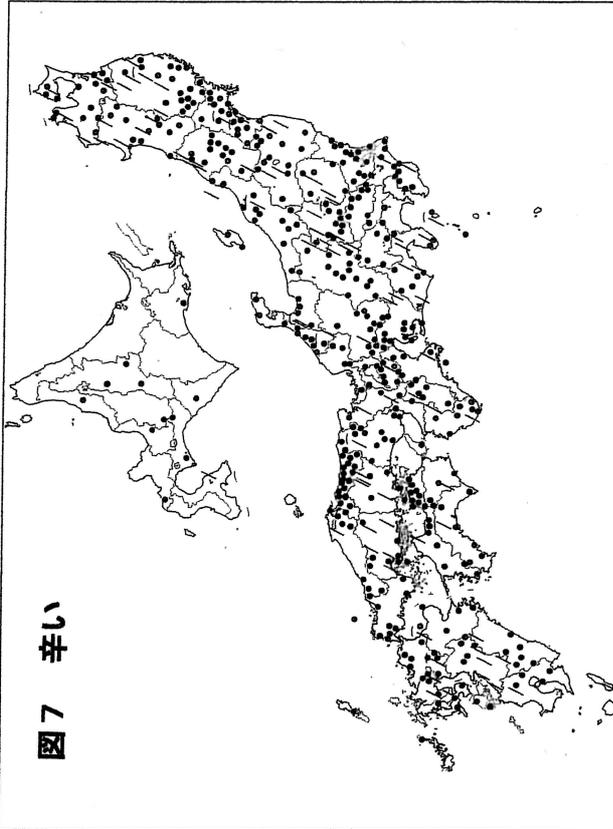


図7 辛い

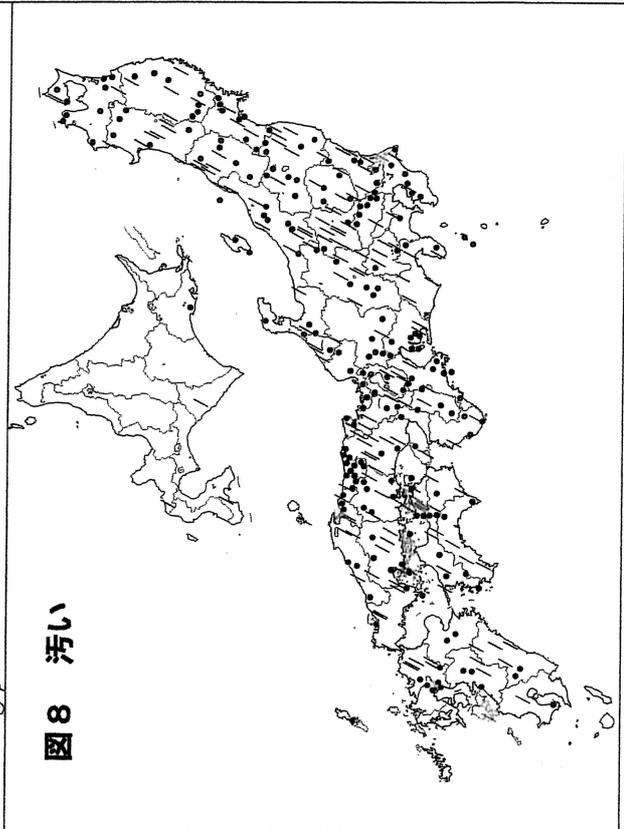


図8 汚い

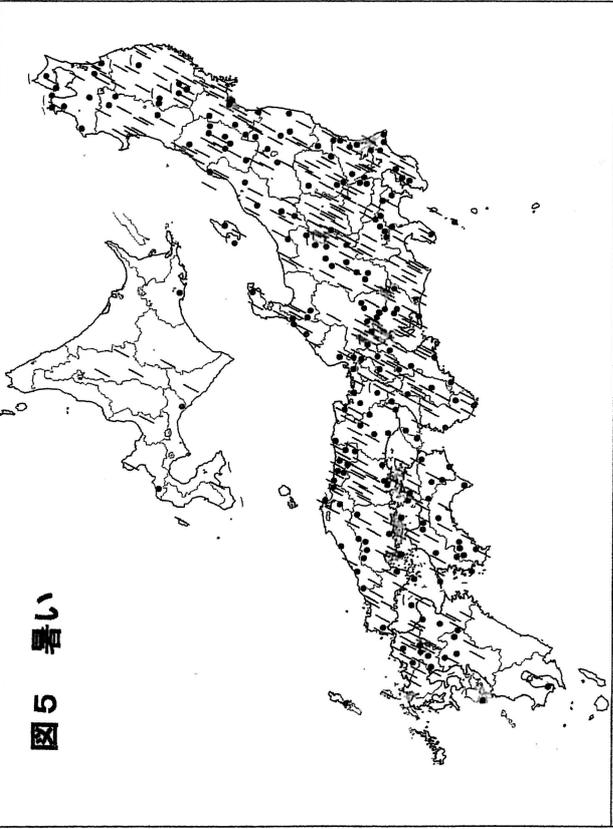


図5 暑い

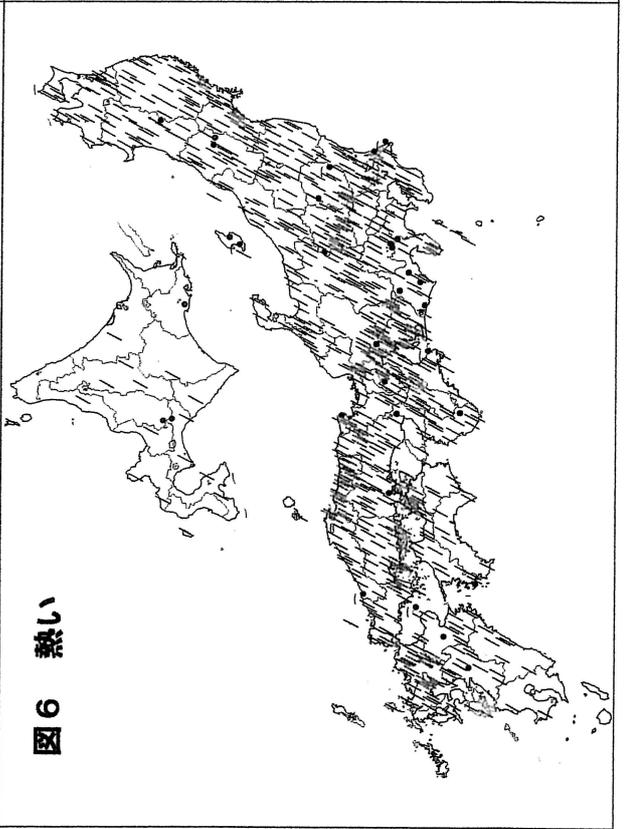


図6 熱い

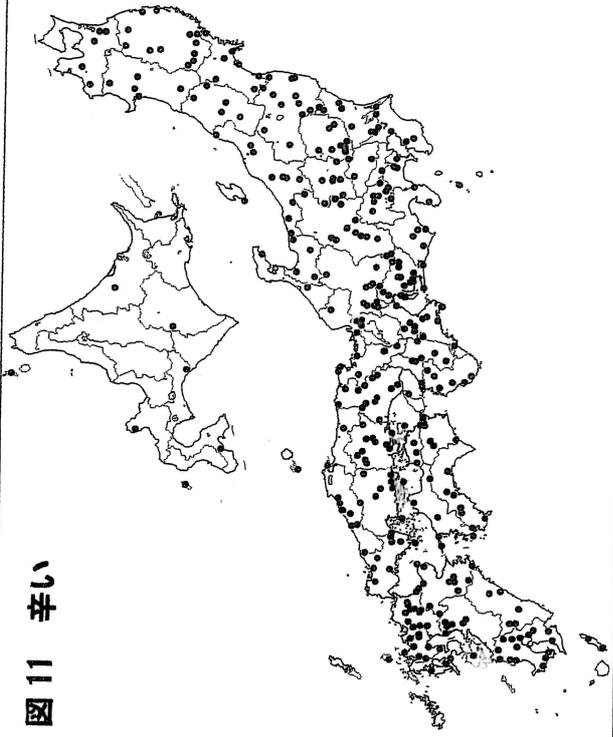


图11 辛い

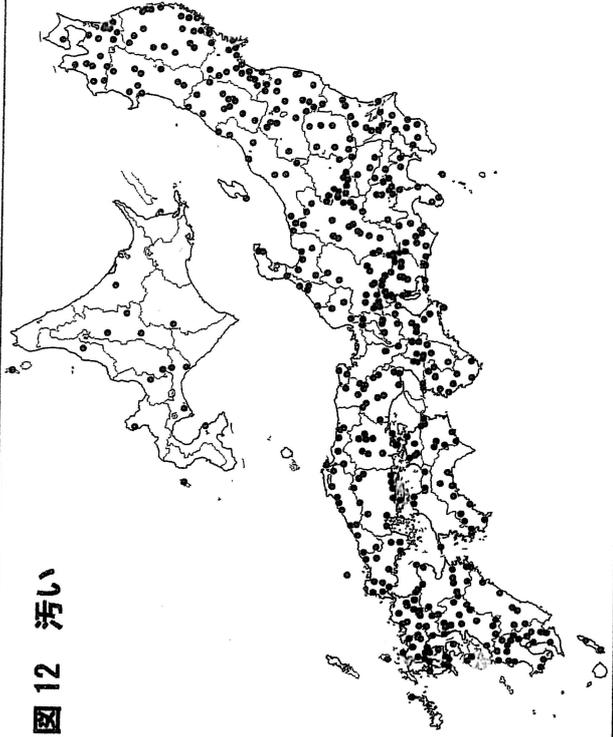


图12 汚い

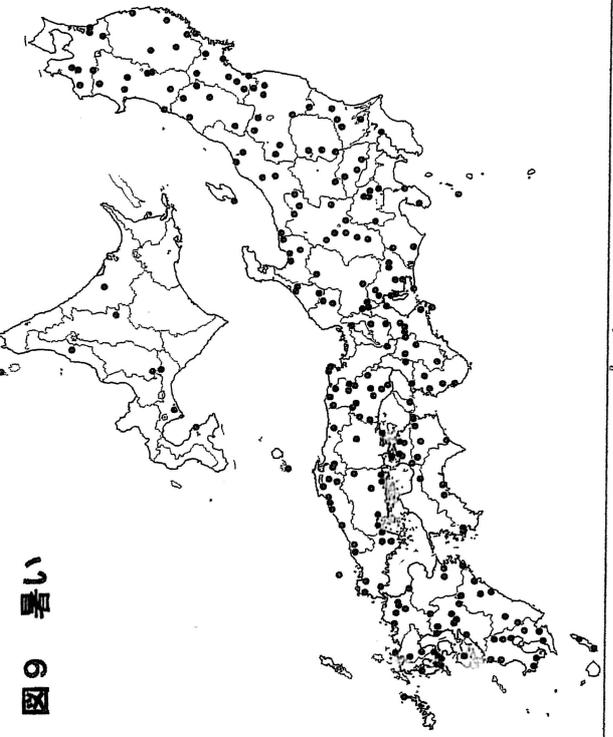


图9 暑い

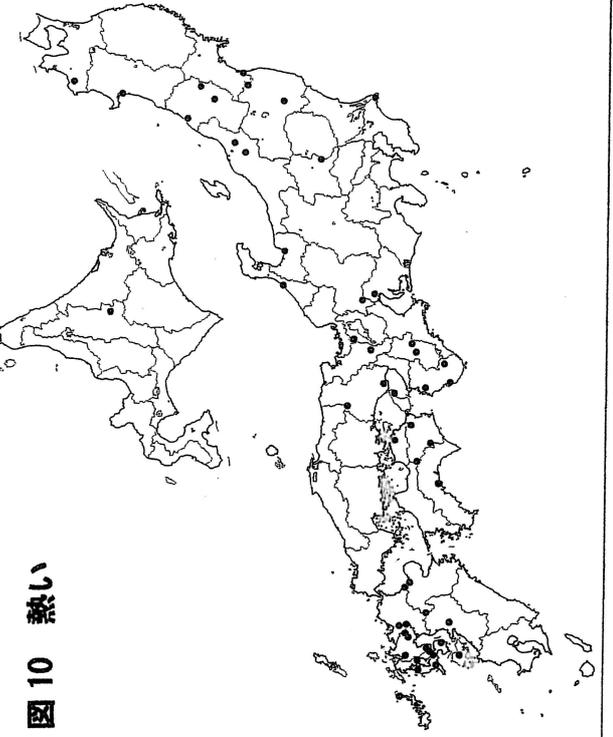
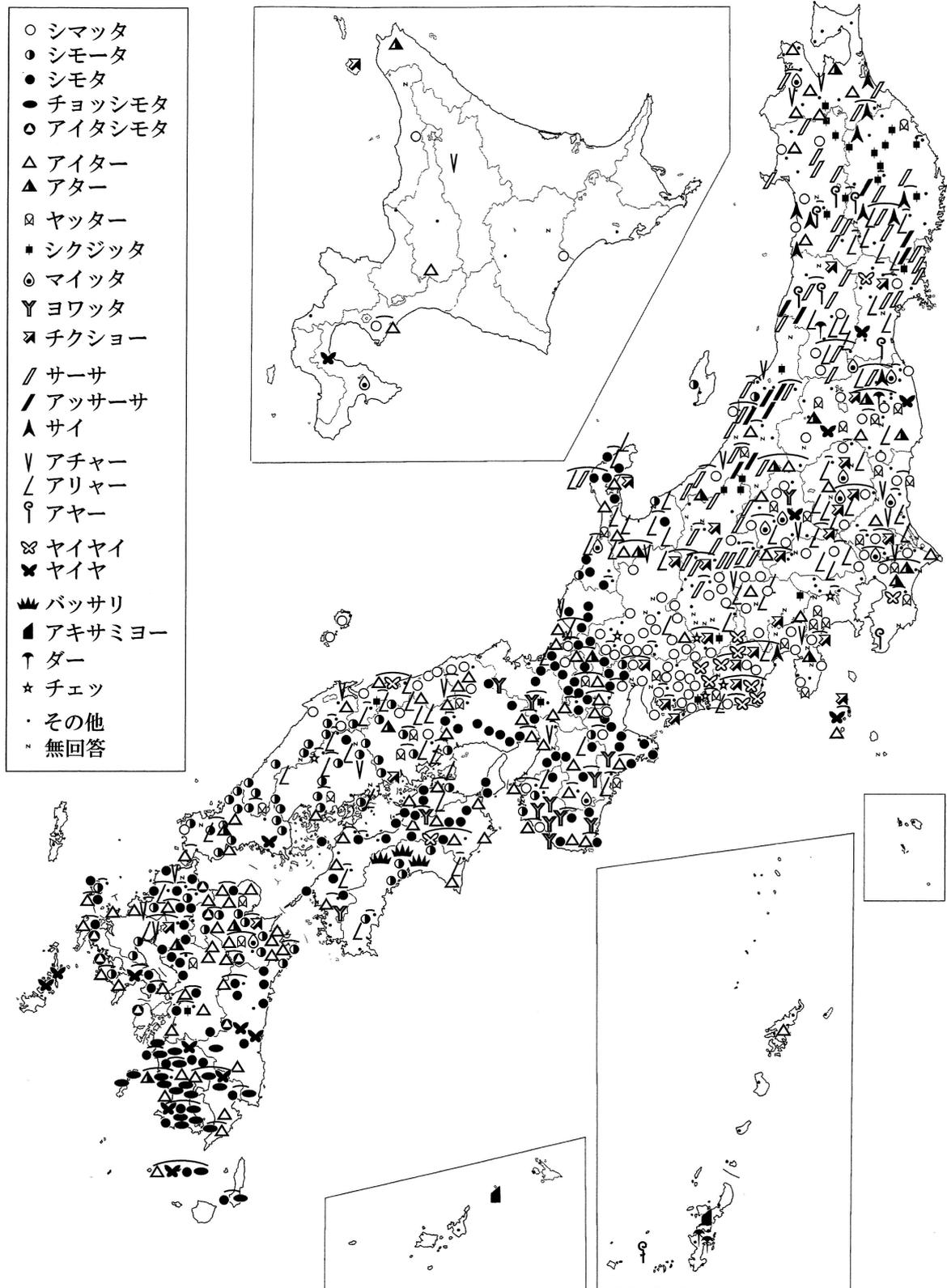


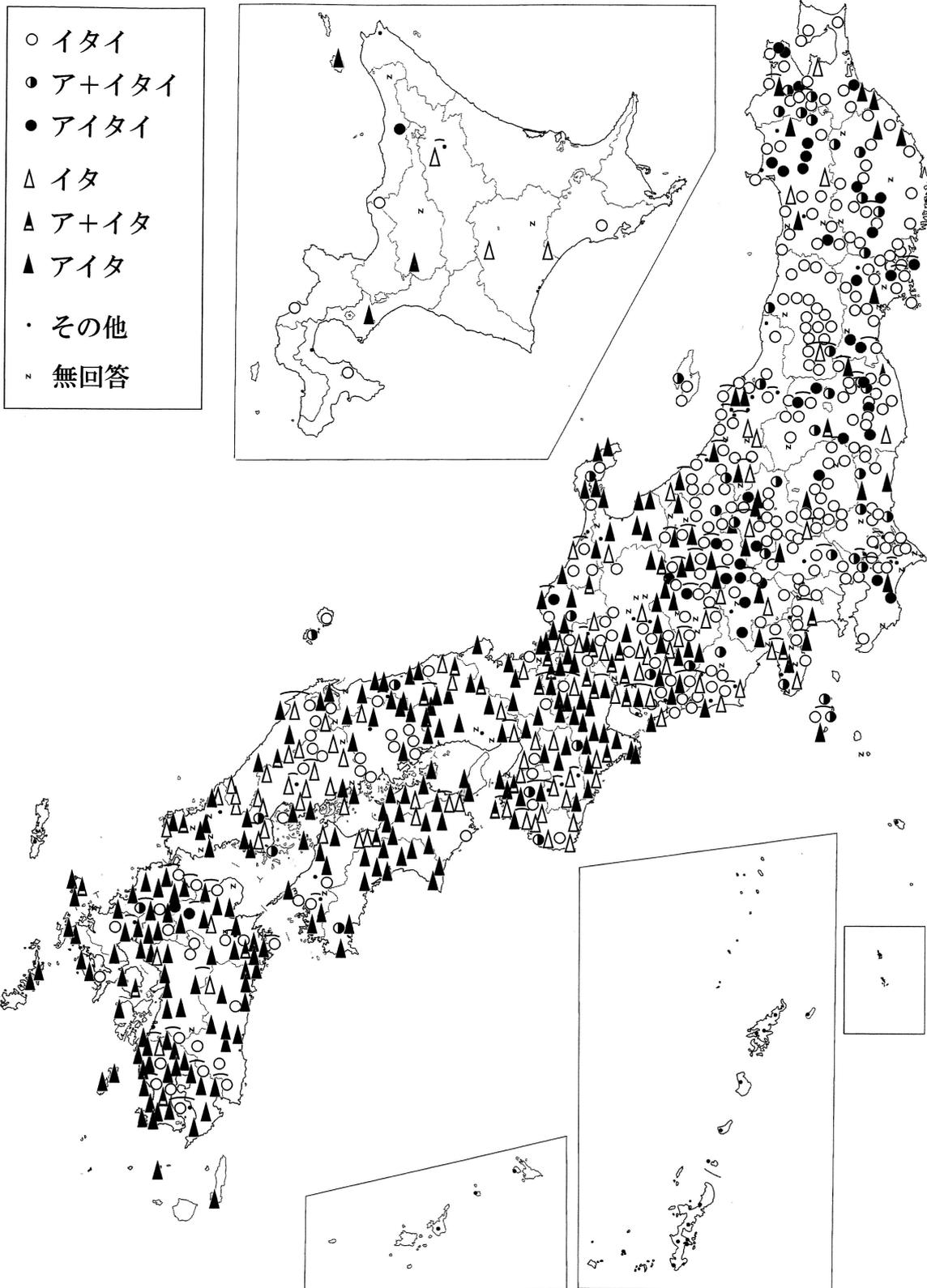
图10 熱い

図 13 失敗の感動詞の方言分布



「消滅する方言語彙の緊急調査研究」2003年度調査結果より地図化

図 14 痛みの感動詞の方言分布



「消滅する方言語彙の緊急調査研究」2003年度調査結果より地図化

孤例についての諸問題

沢木 幹栄
(信州大学)

1. 孤例についてのこれまでの研究

孤例については徳川 1974 が先駆的研究で、ここで提示された問題に真剣に向き合う必要がある。さらに、沢木 1988 はコンピューターを用いることによって、新たな知見が得られる可能性があることを示した。しかし、徳川も沢木も LAJ の項目の一部だけを使っていたためにそれが全体を代表しているかどうかはまったく不明であった。

2. 電子化された LAJ データによる研究

1. に述べた先行研究とは違って、今回 LAJ 全データの大部分を利用することができた。もちろん、作業にはコンピューターを活用（プログラムは awk で書いた）した。今回得られた結果は、全データを使ったものとおそらく大きく変わることはないだろう。その意味では、先行研究と同じことをしても得られた結果の重みははるかに大きい。

3. n 例の統計的分布

孤例とは、ある言語地図で 1 地点でしか出現しない語形のことである。徳川は 2 地点で出現した語形を 2 例と呼んでいる。数学的に一般化した言い方をすると、n 地点で得られた語形は n 例ということになる。

徳川 1974 でも、沢木 1988 でも、一枚の言語地図では孤例の数が一番多く、2 例 3 例と n 例の n が大きくなるにつれて、数が減っていくことが示されている。また、個別の地図では一定の法則に従って統計的分布が生じていた。

また、調査地点が少なければ、異なり語形数も少なくなるはずである。

逆に、異なり語形数と調査地点が同じであれば、全く同じ孤例数になるということもない。項目それぞれの個性があるからである。

したがって、異なり語形数と調査地点数をもとに項目をグループ分けして、そのグループのなかで平均を取ることによって、この二つの条件による統計的分布の特徴を知ることができるはずである。

そのようにしてグループごとの統計的分布を示したものが、表 1 である。ちょっとわかりにくいかもしれないので、表の見方についてすこし説明する。

地点数 1600 以下で語形数（その地図に現れた語形の異なり数）が 100 未満の項目は 5 であった（項目数 5）。そして、1 地点のみで使われた語形数の平均は 18.93 である。2 地点で使われた語形数の平均は 7.5 である。この表はこのように読んでいただきたい。

この表に示された結果は徳川 1974 と沢木 1988 で示されたものとほぼ同じである。孤例の数は 2 例から n 例のその延長上にあると言える。あくまで延長上であって、突出して多いわけではない。

4. 孤例と2例を多く産出する地点

孤例がn例の延長上にあるとすると、孤例に一番近いのは2例である。そこで、今回利用できた項目を通して地点ごとに孤例の数と2例の数を計算した。

そのうえで、2例を多く産出した順に地点名と2例と孤例の数を表示したのが、表2である。なお、すべてを表示すると2400地点のほとんどになってしまうので、ここに取り上げたのは上位74地点だけである。

この表からいくつかの点を指摘できる。

まず、孤例数で1位と2位を占めるのは与那国島と波照間島であるが、どちらもその島のなかで1地点だけしか調査されていない。一般的に琉球地域は島が違えば大きく方言が違ってくる。しかも、与那国も波照間ももともと特異な方言であることが知られているところであり、孤例数が多いことは十分説明がつく。与那国は孤例にくらべて2例が少ないが、これも他から隔絶した与那国方言のゆえであろう。

また、琉球地域の孤例の多さも特筆のものである。これは沢木1988でも指摘されていることであるが、今回LAJの項目の大部分を対象にして確認できたことに意味がある。琉球地域は80地点あるが、孤例数が2で、もっとも少ない奄美大島佐仁でも2例は14ある。孤例数の順位77でも孤例数は5ある。

一方で、本土方言地域で孤例の数が最上位の地点は八丈島中之郷である（でも孤例数の順位は39）。これも八丈島方言の特異性を考えると納得のいくことである。

また、孤例出現数では最上位クラスでなかった宮古地域（多良間島をのぞく）では、2例が多く出ているのも興味深い。

孤例と2例の関係で言うと、孤例が多い地点は2例も多い。一方で琉球地域の一部のように孤例と2例が相補的に分布していることもある。

孤例が2例から連続した性質を持つことがここからも見て取れる。

5. 2例や3例はどれくらいの範囲に散らばっているか

2例は孤例に非常に近い存在である。2例の地点のどちらかがその語形を失えば、それは孤例になる。ところが、2例で上位を占めているにもかかわらず、孤例が多くない地点がある。非常に近い方言の地点が近くにあるために2例はあっても孤例は出にくいということかもしれない。

それでは、2例の地点は近接しているのだろうか。それも今回のデータを使って比較的容易に調べることができる。

知られているようにLAJの地点番号は6ケタの数字で表され、最後の2ケタは5万分の1の地形図を10×10の升目に区切ったときにどこにあるかを示す。6ケタの最初から数えて奇数番目の3つの数字は南北、偶数番目の3つの数字は東西の位置を表す。

そこで、2例の2つの地点間の距離はピタゴラスの定理を使って、南北の距離、東西の距離のそれぞれ自乗を合計したものの平方根で表すことができる。

もちろん、この距離は実際の距離を正確に反映したものではない。5万分の1の地形図は縦横同じ長さではないからである。とは言っても、縦横の比率は1:1.5を超えることはないので、実際の距離と違うことを意識していれば、ここで算出した距離は十分実用に耐える。

ここで距離 10 であれば、最小の四角形（国土地理院の 5 万分の 1 の地形図）の東西方向あるいは南北方向の長さということになる。

さらに 3 例の地点（3 地点）についても調べてみたい。n 例から孤例への連続性を考えれば、当然のことである。ただし、4 例以上についてはサンプルが少なくなるので今回は調べない。

3 例については、3 地点相互の距離を測るのに 3 地点の重心をまず計算し（3 地点の縦座標と横座標の数をそれぞれ合計し、それぞれ 3 で割ったものが重心となる）、そのうえで重心からそれぞれの地点までの距離を計算する。これは 2 例と同じくピタゴラスの定理で計算できる。

2 例の 2 地点相互の距離は上に述べた手順で計算できるが、3 例とおなじ条件で比較するためにその距離を 2 で割ったものを用いることにする。

そこで、このようにして 2 例と 3 例の地点距離を算出した結果は表 3 のようになる。例によって、結果の一部しかここに示せない。表 5 を作るにあたっての作業手順は以下の通りである。

各項目で 2 例および 3 例のすべての語形について上記の手順で重心からの距離を計算した。3 例の場合には 3 地点それぞれからの距離がばらばらであることが普通だが、ここではこの語形を代表するものとして、重心からの距離が最大であるものを記録した。

一つの項目のなかには、2 例でも 3 例でも語形の数だけの「重心からの距離」があり、そのなかで最大値と最小値を見つける。さらに平均と標準偏差を計算する。

こうして調べた結果では、2 例と 3 例に大きな差はない。また、平均の距離もそんなに大きなものではない。それでは 2 例や 3 例は隣り合うぐらいに近接した 2 地点あるいは 3 地点で生じているのかと言え、これもそうではないことがわかる。

2 例が 2 つの地点で全く無関係に生じたものであれば、2 地点が離れて存在してもいいはずである。実際は距離 100 より小さい距離で存在することが多いことがわかる。全く無関係と思われる、非常に遠く離れたものもあるが、大部分は互いに関連を持って生じたものだと考えられる。

なお、この表で、項目として示した番号は LAJ の質問番号である。

6. 終わりに

LAJ の資料が大部分電子化されたおかげで、いままで懸案だったこと（統計的な分布など）についてかなり明確な結論を出すことができたと思われる。ここでは、この共同研究のなかで生まれた結果のうち、特に重要だと思われるものについて速報的に発表することにした。

いずれ、もっと詳しい報告をすることにしたい。

参考文献

- 徳川宗賢（1974）「言語地図における孤例」『ことばの研究』4号，133-150。
沢木幹栄（1988）『日本言語地図』の語形の数量的性質『方言の諸相』三省堂，15-39。
沢木幹栄（2010）「言語地図の孤例についての再検討」『日本語研究の12章』大修館，48-53。

表1 地点数と語形数によってグループ分けしたものの統計的分布

地点数	1600 以下		1600～2199	
	100 未満	100 以上	100 未満	100～199
項目数	5	16	14	11
1 地点	18.93	59.2	24.78	68.72
2～3	7.5	22.8	10.92	26.18
4～7	4.68	12	6.28	10.18
8～15	3.5	7.4	4.5	7.72
16～31	2.62	5	2.35	5.45
32～63	1.81	4.8	1.64	2.63
64～127	1.31	2.4	1.07	1.63
128～255	0.93	0.8	0.28	1.27
256～511	1.06	0.4	0.5	0.54
512～1023	0.43	0.2	0.071	0.63
1024～			0.92	0.27

語形数	地点数 2200 以上			
	100 未満	100～149	150～199	200～249
項目数	20	19	16	9
1 地点	32.4	59.31	92.62	116
2～3	16.25	24.63	34.62	42.55
4～7	8.2	12.89	16.81	24.55
8～15	5.25	8.42	11.31	16.66
16～31	3.55	6.21	6.31	9.33
32～63	3.4	3.63	5.31	5.55
64～127	2	2.68	3.12	4.33
128～255	1.4	1.68	2.06	2.11
256～511	0.9	0.94	1.06	0.88
512～1023	0.5	1.05	0.75	0.66
1024～	0.9	0.36	0.31	0.22

表2 調査地点における2例と孤例の語形数

	2例	孤例		2例	孤例
2095.60 竹富町波照間富嘉	22	47	1261.01 中頭郡北谷村字吉原	13	4
0256.76 大島郡瀬戸内町与路	21	18	9312.42 上屋久町宮之浦中町	12	18
0256.89 大島郡瀬戸内町池地	19	16	2085.69 (八重山)竹富町黒島仲本	12	32
0294.93 大島郡知名町大字瀬利覚	19	13	0276.50 徳之島町大字亀徳	12	22
2076.99 大浜町字白保(石垣島)	19	21	1211.69 島尻郡伊平屋村字田名	12	33
1261.16 中頭郡勝連村字平敷屋	18	20	0247.31 大島郡宇検村田検	12	17
0340.00 大島郡喜界町早町	18	20	0238.55 大島郡竜郷村赤尾木	12	26
0275.36 大島郡天城町瀬滝	18	25	6403.60 八束郡美保関町大字福浦	12	7
1221.47 島尻郡伊是名村字勢理客	17	19	4637.68 岩船郡山北村大字笹川	12	3
0246.48 大島郡宇検村阿室	16	24	1231.72 国頭郡伊江村字東江上	12	36
2075.22 竹富町字鳩間	16	18	1167.01 島尻郡仲里村字比嘉	12	6
2150.07 伊良部村字仲地	16	5	2141.71 (宮古)平良市字島尻	12	19
1232.29 国頭郡国頭村字辺野喜	16	22	3688.82 酒田市飛島字勝浦	12	2
0256.08 大島郡瀬戸内町瀬武	15	18	5508.19 珠洲郡松波町字小木	11	2
0249.17 大島郡喜界町湾	15	22	7659.62 八丈町中之郷向里	11	16
1232.75 国頭郡大宜味村字喜如嘉	15	11	6550.96 神戸市生田区楠町6丁目	11	—
1242.00 国頭郡屋我地村字饒平名	15	18	1156.89 具志川村(久米島)字仲地	11	17
0294.66 大島郡和泊町大字和泊	15	18	6397.62 徳山市大字徳山字西今宿	11	1
2150.17 (宮古)伊良部村字伊良部	15	7	2086.03 竹富町字竹富坡座間	11	29
7659.53 八丈町末吉	15	8	0237.79 名瀬布入船町	11	10
1241.49 国頭郡名護町字城一班	15	25	6638.14 三浦市三崎町花暮	11	—
7659.31 八丈町三根	14	10	6527.22 一宮市本町8丁目	11	3
1271.20 島尻郡玉城村字奥武	14	7	2068.08 (宮古)多良間村塩川	11	35
0228.96 大島郡笠利町佐仁	14	2	2076.98 (八重山)大浜町字宮良	11	16
2072.20 与那国町祖内	14	56	6595.32 北牟婁郡海山町島勝	11	1
7659.51 八丈町大賀郷八戸	14	10	2074.69 (八重山)竹富町字租納	11	36
1271.05 島尻郡知念村字久高	14	23	6655.51 賀茂郡松崎町松崎	11	2
1231.88 国頭郡今帰仁村字与那嶺	14	29	1213.76 大島郡与論村大字茶花	11	26
1241.96 国頭郡恩納村字名嘉真	13	11	7266.60 南松浦郡若松町若松郷	11	—
2067.52 石垣市字平久保	13	22	1242.22 国頭郡羽地村字源河	11	18
5576.60 勝山市下元禄	13	2	6458.40 揖保郡御津町室津	11	—
1251.27 国頭郡金武村字金武	13	26	8229.96 薩摩郡里村里	11	15
6413.29 西伯郡大山町宮内	13	3	4675.45 西蒲原郡卷町甲	10	5
8239.31 薩摩郡鹿島村藺牟田	13	10	8331.12 川内市平佐町加治屋	10	3
6547.79 碧南市字築山	13	3	7318.04 熊毛郡上関町大字室津	10	1
1251.04 国頭郡恩納村字恩納	13	24	6606.89 愛甲郡清川村宮ヶ瀬落合	10	1

表3 2例と3例の分布のひろがり

項目	3例					2例				
	語形数	最大値	最小値	平均値	標準偏差	語形数	最大値	最小値	平均値	標準偏差
1	36	120	0	22.47	5.50	18	255	3	48.67	15.80
5	61	153	0	24.82	5.12	33	227	1	34.45	8.54
6	24	252	1	44.25	14.16	12	99	3	30.50	9.33
7	69	448	0	37.61	9.36	29	423	3	58.34	16.65
12	30	74	2	18.50	3.53	14	218	1	51.71	14.34
31	12	228	1	32.83	17.56	6	69	5	22.00	8.92
32	35	336	1	26.23	10.83	15	254	3	40.20	15.89
36	19	334	2	76.58	22.68	11	373	3	82.09	33.07
37	1	2	2	2.00	-					
38	18	376	0	74.22	26.15	5	300	18	90.20	47.45
39	11	238	0	37.09	19.58	6	160	5	50.67	21.31
42	20	390	2	53.50	20.81	4	21	6	11.75	2.88
47	11	226	3	87.00	27.82	3	139	2	56.33	34.30
48	8	410	12	114.50	45.14	4	248	55	167.00	35.36
51	6	103	3	26.33	14.27	3	345	19	129.00	88.19
56	22	220	1	22.86	10.16	6	81	3	23.50	11.18
57	6	39	12	25.33	4.38	5	60	10	34.00	7.55
60	9	210	1	39.22	21.38	8	175	2	59.63	20.44
61	6	77	4	27.83	12.44	3	101	5	41.33	24.55
63	10	102	1	34.80	10.45	11	104	3	48.00	9.57
64	16	275	0	46.81	18.51	7	81	3	32.29	11.07
66	28	293	1	54.00	12.94	13	429	5	80.38	31.75
67	24	92	2	10.58	3.66	13	279	3	71.38	24.64
68	8	161	1	33.38	17.86	7	264	3	81.00	36.70
72	10	332	1	47.90	30.33	16	85	1	21.06	6.73
74	9	48	1	12.89	5.09	3	68	24	41.33	11.05
75	17	310	0	53.41	22.38	7	203	1	63.00	26.12
76	17	290	0	47.76	19.52	8	163	1	63.88	20.10
80	12	273	1	41.25	20.61	3	40	6	26.67	8.55

項目	3例					2例				
	語形数	最大値	最小値	平均値	標準偏差	語形数	最大値	最小値	平均値	標準偏差
83	21	148	0	17.67	7.01	15	403	3	95.67	35.14
89	21	189	0	36.00	11.11	19	287	1	76.37	20.42
90	9	173	2	52.56	20.42	8	270	2	100.00	36.01
91	26	155	1	29.58	8.74	9	788	10	120.67	79.61
92	10	56	1	16.70	4.95	6	95	1	44.17	14.89
95	15	175	0	24.13	11.75	7	134	3	35.29	16.64
103	14	236	0	54.36	16.67	3	140	1	57.67	34.40
104	11	133	0	22.91	11.44	8	188	3	67.13	21.36
105	26	126	0	26.50	6.28	11	215	5	53.00	21.71
108	4	76	2	41.75	13.49	2	172	7	89.50	58.34
109	5	116	0	33.20	19.46	1	114	114	114.00	-
110	16	164	0	31.38	12.85	9	73	3	14.44	7.02
111	24	63	0	15.96	3.86	10	143	3	51.70	15.73
113	22	206	1	27.50	9.92	7	106	5	32.43	12.52
116	23	128	0	25.26	7.06	10	119	2	32.10	11.80
117	3	17	1	11.67	4.35					
118	24	81	0	19.88	4.70	14	287	4	72.93	20.10
119	38	211	0	30.26	7.32	9	246	5	63.44	25.33
122	20	243	0	62.95	18.38	7	265	1	69.14	33.42
124	12	140	0	28.67	13.15	15	177	3	57.73	12.41
125	2	217	26	121.50	67.53	3	61	3	36.33	14.12
127	8	304	1	52.25	33.75	4	343	19	116.25	66.31
129	34	388	1	49.85	14.59	15	427	4	60.60	27.73
131	8	20	2	8.13	2.02	5	94	1	43.40	14.55
132	9	148	1	31.22	15.44	8	97	1	28.88	12.01
134	14	280	1	63.14	22.71	4	377	7	142.00	75.79
135	1	0	0	-	-	1	7	7	7.00	-
148	4	26	1	10.75	5.09	6	294	10	90.50	39.29
149	6	174	2	36.83	25.19	7	145	3	39.14	17.13
153	11	215	1	62.64	22.77	9	412	3	81.44	41.32
155	18	391	1	50.33	20.75	9	253	4	42.67	25.28

項 目	3 例					2 例				
	語 形 數	最 大 值	最 小 值	平 均 值	標 準 偏 差	語 形 數	最 大 值	最 小 值	平 均 值	標 準 偏 差
156	31	119	0	21.52	5.22	16	251	5	80.94	19.16
157	12	90	2	29.25	9.23	9	176	18	55.56	16.07
165	8	55	1	15.50	6.88	3	333	10	119.33	87.24
166	9	54	1	11.33	5.22	5	124	7	66.60	17.95
169	18	299	0	45.67	18.49	8	383	4	137.38	39.55
173	2	12	1	6.50	3.89	1	208	208	208.00	-
174	22	116	0	23.68	6.59	10	887	5	140.90	81.04
176	20	185	4	43.30	11.71	11	246	7	80.00	19.57
179	13	240	1	49.92	19.13	7	510	5	85.71	65.52
182	18	144	1	25.89	8.15	10	184	1	63.70	18.23
184	22	204	1	40.09	10.96	6	155	4	33.50	22.26
185	19	172	2	33.32	10.00	7	172	3	45.71	21.33
186	24	106	2	23.25	5.55	17	264	2	31.82	14.66
187	24	187	0	20.00	8.60	15	219	5	52.53	15.70
188	11	88	1	23.64	9.40	10	235	3	48.50	21.67
190	24	54	1	11.08	2.68	12	242	4	39.17	18.79
191	13	174	2	25.85	13.48	5	371	6	115.00	58.97
192	11	94	0	33.73	9.35	6	316	8	82.17	43.64
194	27	233	1	36.37	11.44	14	406	4	106.36	31.80
195	20	398	2	54.25	20.29	8	254	12	96.88	33.16
200	13	170	0	41.15	15.95	4	153	3	56.75	30.66
214	15	376	3	103.13	28.55	6	198	10	63.50	30.33
215	17	254	2	42.29	14.98	3	47	26	36.00	4.97
216	22	178	0	35.18	9.86	11	410	4	132.55	44.39
217	12	275	1	76.58	28.13	9	409	3	96.44	41.94
218	7	229	2	39.14	29.57	4	818	30	302.25	152.18
219	22	216	0	43.36	13.34	16	213	1	61.56	15.39
220	20	276	0	33.30	14.55	12	321	4	70.42	28.24
221	30	172	1	25.40	6.97	12	362	4	82.83	34.16
222	21	297	0	83.71	21.01	10	274	8	100.80	28.76
223	17	137	2	30.00	9.76	9	105	4	43.22	10.88

項目	3例					2例				
	語形数	最大値	最小値	平均値	標準偏差	語形数	最大値	最小値	平均値	標準偏差
228	16	196	0	30.25	14.86	11	373	3	91.45	34.51
229	14	325	0	113.36	23.85	12	704	18	309.17	59.60
231	10	99	1	29.70	10.86	4	210	8	70.00	40.91
233	22	132	1	38.68	8.76	10	128	5	37.70	12.23
235	13	72	1	13.54	4.98	6	90	12	39.83	11.31
237	4	11	1	6.50	1.79	1	467	467	467.00	-
239	1	15	15	15.00	-					
240	5	15	3	9.60	1.87	2	126	50	88.00	26.87
241	15	206	1	24.60	12.82	4	166	40	80.00	25.16
244	3	19	15	17.00	0.94	2	15	15	15.00	-
248	7	340	1	62.43	43.61	1	8	8	8.00	-
250	3	74	7	29.33	18.24	2	262	9	135.50	89.45
252	5	70	2	27.20	13.38	6	325	1	79.00	45.33
253	6	16	0	9.83	2.11	6	121	5	59.00	19.53
261	8	87	1	33.75	10.67	3	135	18	86.67	28.80
264	4	22	1	8.25	4.11	3	31	8	18.33	5.50
265	6	92	1	24.83	14.04	6	121	8	58.00	19.95
266	14	68	1	16.36	5.43	7	159	6	74.00	19.17
268	1	12	12	12.00	-	3	58	11	26.67	12.79
284	13	10	2	4.85	0.57	8	80	7	30.00	8.23

言語地図にみる方言変化・共通語化 — LAJDB編

鎌水 兼貴
(国立国語研究所)

1. はじめに

言語地図において、話者は「土地の代表」である。通常は、生まれた集落から1度も転居しておらず（近年は範囲が緩和されることが多い）、質的にも、地域のことばや文化に詳しい人が話者に好ましいとされる。そのため言語地理学的調査は、社会調査とは異なり、1地点1話者であっても、回答に対して高い信頼性を与えている。

集落の構成員は時代を経れば必ず入れ替り、「土地の代表」もまた変化する。そのため調査時点での話者の世代をそろえないと、回答が不統一になる可能性がある。しかし言語地図においては、話者の選定作業に労力を要することから、世代の幅については、あまり問題にされていないように思われる。

そこで本稿では、LAJDBを用いてLAJの世代別の言語地図を試行的に作成し、その中から言語変化の観察が可能かどうか、何がわかるかについて考察する。

2. 言語地図内の世代差

2. 1 言語地図とグロットグラム

日本の言語地理学においては、面的にみる言語地図以外にも、線状に世代差をみるグロットグラム（地域×年齢図）という手法がある。これは世代差に着目するため、話者の世代は厳密に扱われる（近年は世代より厳密に生年でプロットすることが多い一方で、地点については等間隔のままという、地理のほうでやや厳密さに欠ける傾向がある）。

国立国語研究所による『日本言語地図（以下LAJ）』『方言文法全国地図（以下GAJ）』の話者は、19世紀末～20世紀初頭に生まれた人々であり、現代では得ることができない時代の日本語方言の地域差を知ることができる。しかし、LAJやGAJの話者の生年には数十年もの幅がある。たとえば、図1の左側のように、ある語形がグロットグラムにおいて「斜めの等語線」を描く地域で、右側の同一地点の言語地図で生年に幅があると、地図B・Cの話者の世代によっては、二つの語形（●・□）が混在しているように見える可能性がある。

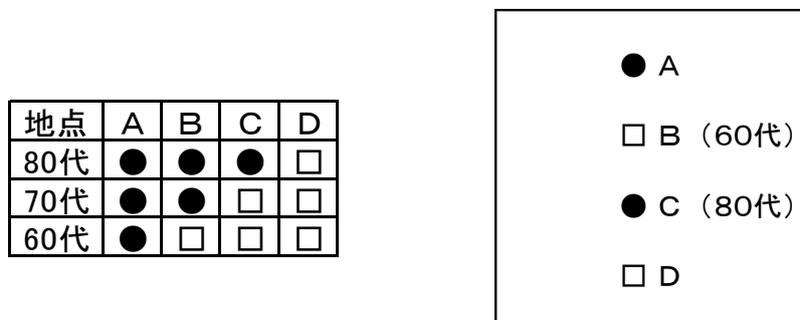


図1・グロットグラム(左)と言語地図(右)

2. 2 GAJでの検討

GAJは、LAJより調査・刊行時期が遅いこともあり、作成時からコンピュータが使用された。そのため、刊行終了時には、全データが電子データとして公開されている。

鎌水(2010)では、GAJの電子データから、話者を3世代に区分した地図を作成し、元の地図中に複数語形が混在して分布している地域がある場合、話者の世代による影響があるかどうかについて検討を行った。図2は、GAJ第117図「される(受身形)」における、四国地方のサレルとセラレルの世代別分布である。第1世代と第3世代とで大きく変化していることがわかる。関西地方に分布するセラレルの影響を考えると、妥当な変化にみえるが、GAJは日本全国で807地点と少なく、3世代に分けるとさらに地点密度が低くなるため、結局は誤差の範囲になってしまうという問題があった。

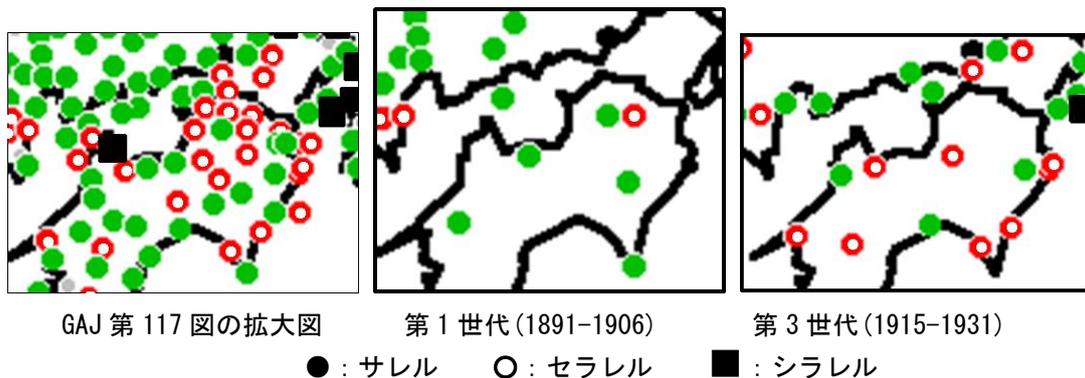


図2・GAJの世代別分布における四国地方のサレル→セラレルの変化

3. LAJの話者の世代区分

3. 1 LAJの話者の時代

LAJは2403地点とGAJの3倍であり、調査時期も1957～1964年と、GAJより約20年さかのぼる。LAJの話者は、1887年以降、1903年以前の出生の男性が推奨されている。下の表に、日本における全国規模の方言調査の一覧を示す。LAJは全体では3回目の全国調査にあたり、話者は、最初の国語調査委員会による調査(1903)の時代に子供だった人たちに相当する。

LAJの話者の基準となる1887年生まれの人は、言語形成期を5～15歳とすると、1882～1902年の言語を反映していることになる。明治維新(1868)以降、教科書検定制度(1886)や国定教科書制度(1903)が制定され、就学率が95%に達した(1905)時代である。LAJの話者は、江戸時代の色が薄くなり、近代化が進行している世代といえるだろう。

(1) 1903	国語調査委員会	→	1905～1906	『音韻分布図』『口語法分布図』
(2) 1908	国語調査委員会	→	1923	関東大震災により焼失
*1927	柳田國男			「蝸牛考」
*1928	東條操			『方言採集手帖』
(3) 1957～1964	国立国語研究所	→	1966～1974	『日本言語地図(LAJ)』
(4) 1979～1982	国立国語研究所	→	1989～2006	『方言文法全国地図(GAJ)』
(5) 2010～	国立国語研究所			(実施中)

表・全国規模の方言調査と言語地図一覧

3. 2 LAJにおける話者の生年分布

前述のように、LAJの話者は1887～1903年生まれであることを条件としている。調査は複数年にわたるため、調査時点で55～70歳の話者という条件もある。LAJ第1集の解説によれば、

「文久・元治・慶応の生まれの人でもよいのだが、あまり高齢な人は調査の対象として適当でない場合が多い。全国の水準をそろえる上からも、明治20年以降生まれの人が望ましい。」(LAJ第1集『日本語地図解説—方法—』「調査の手引き」p.132)

とあるため、調査開始時点で90歳以上となる江戸時代生まれの人は除いたが、明治初期の話者はある程度許容していたようである。1887年以降という条件も、世代をそろえる面もあつただろうが、同解説で、

「高年者はいったいに精神活動が劣え、知的な作業に適当でない人の率が増加する。」
(同「被調査者」p.24)

とあるように、むしろ高年者の回答の質に対する懸念が大きかったように思われる。

図3にLAJの話者の生年分布を示すが、基準となっていた1887年より前に生まれた話者(図中囲み部分)が297人と多いことがわかる。1878～1886年生まれの話者が259人と、大半を占めるが、最高年は明治初年の1868年生まれである。実際の調査では、話者としての信頼がある場合は、土地のことばに詳しい高齢者をあえて排除しなかったのだと思われる。

一方で若い世代については、基準の1903年より後に生まれた話者は29人しかいない。標準語化などの変化の影響を考慮して、生年の下限は徹底していたものと思われる。

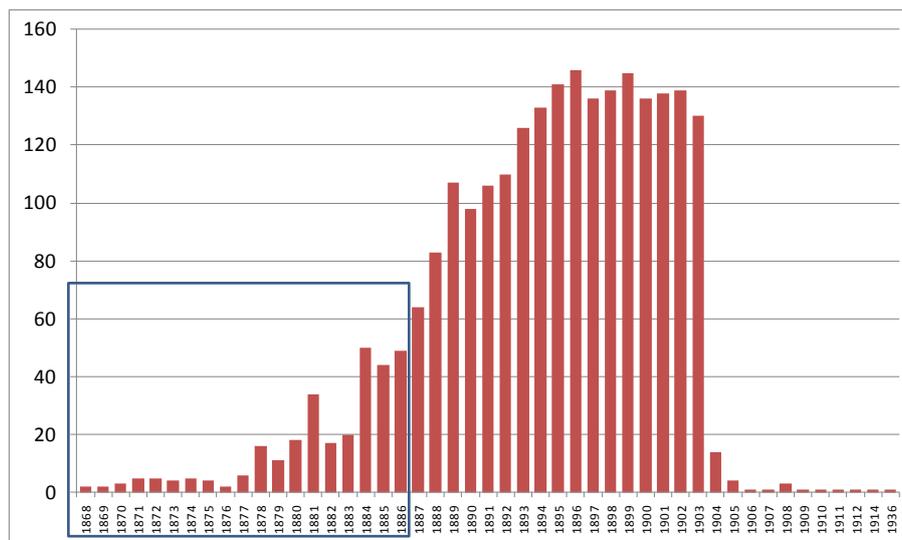


図3・LAJの話者の生年分布

3. 3 LAJの話者の4区分

LAJの話者の生年は1887～1903年という基準が設けられているが、その幅は17年と広い上に、実際1886年以前の話者が多いため、話者間で親子に相当するような年齢差があることになる。

そのため本稿では、LAJの話者を4世代に区分して地図を作成することにする。それぞれを、第1世代(1868～1889年生まれ,551人)、第2世代(1890～1894年生まれ,573人)、第3世代(1895～1899年生まれ,707人)、第4世代(1900年以降生まれ,572人)に分けた。図4に、世代ごとに調査地点をプロットした地図を示す。第1世代で東北南部や九州南部でやや地点が少ないのが気になるが、おおむね全国に均等に配置しているといえるだろう。第1世代に北海道内陸部出身者がいない、といったこともわかる。

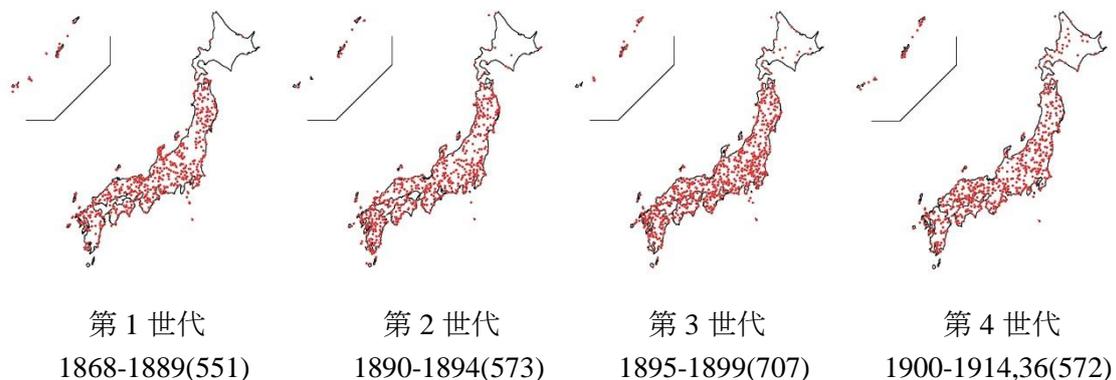


図4・LAJ 4世代区分の話者分布

4. 考察

4. 1 かたつむり (蝸牛)

LAJの中で、一定範囲内に複数語形が混在している地図を探したのち、代表語形に記号をあたえた4世代の言語地図を作成して、考察をおこなう。

まず、LAJ第236図の「かたつむり(蝸牛)」を取りあげる。方言圏論で有名なかたつむりだが、俚言形が多く、関西中心に分布するデンデンムシは、調査当時から全国各地にも分布がみられる。

ここでは関東地方における4世代の比較を行う。関東では、デンデンムシ・カタツムリの2勢力のほかにも語形が多く(マイマイツブロなど)、その他の語形をひとまとまりと捉えると、3勢力が混在している。

図5に、関東地方の部分で4世代に分けた地図を示す。最も古い第1世代(1868～1889年生まれ)ではデンデンムシはやや少なく、カタツムリもその他の語形と勢力が拮抗している。しかし若い世代(1890～1936年生まれ)では、3勢力の均衡状態にあるように見える。デンデンムシが増加し、カタツムリも勢力を維持した結果、その他の語形が徐々に減少しているとも考えられ、第4世代(1900年以降生まれ)ではその傾向が強い。

関東地方において共通語化(デンデンムシも俗語として共通語的に普及か)が徐々に進行しているのではないかと思われる。

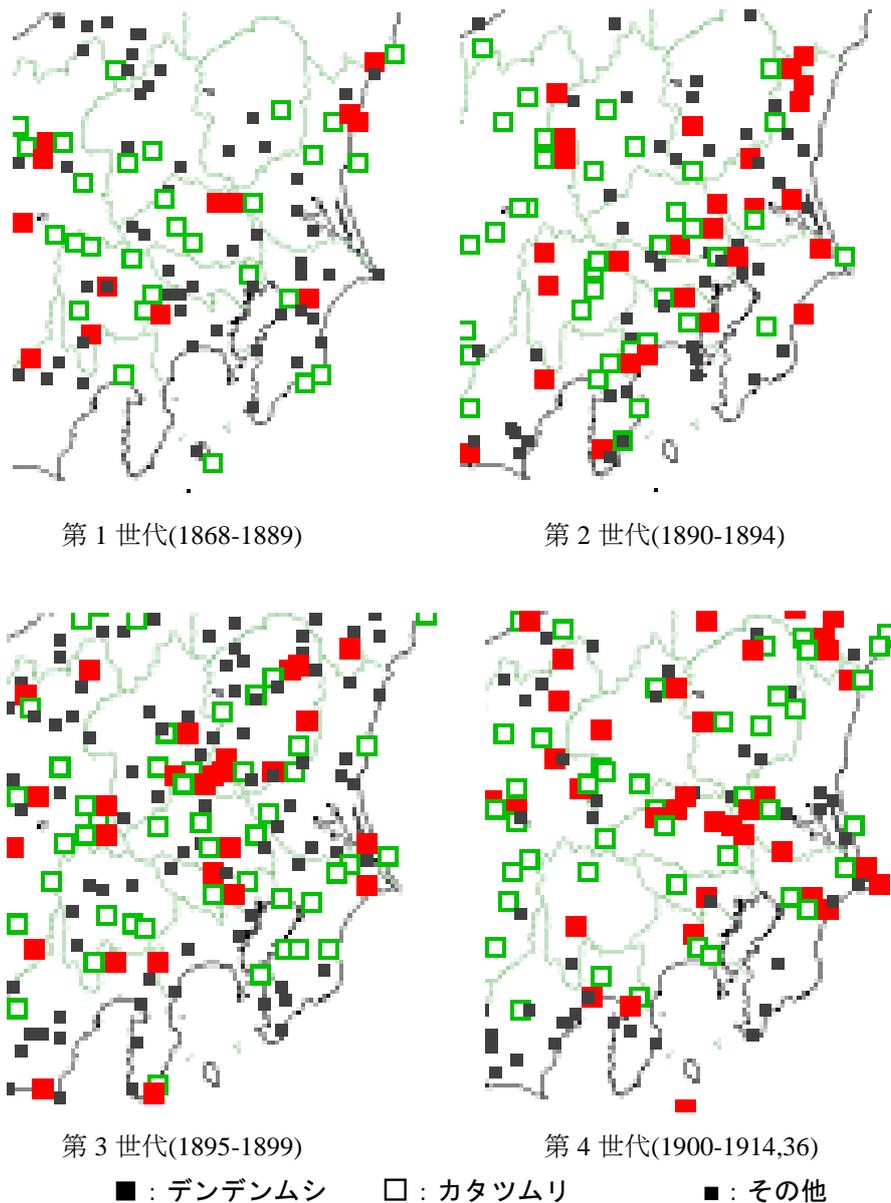


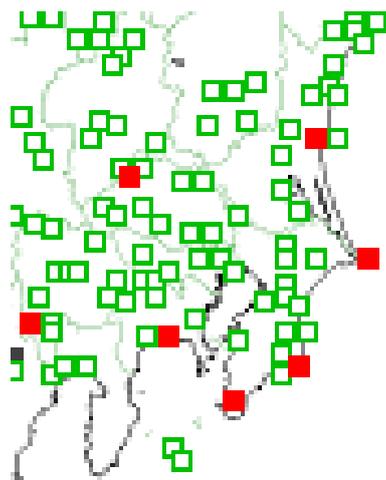
図5・かたつむり（蝸牛）の4世代地図

4. 2 うろこ（鱗）

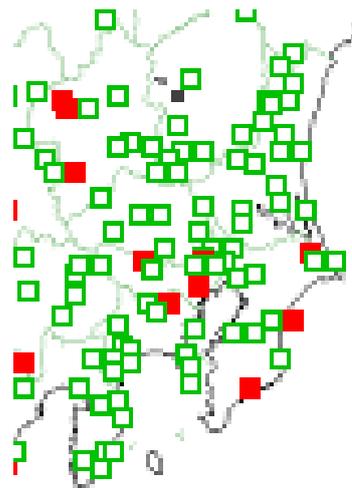
つづいて、LAJ 第217図の「うろこ（鱗）」をとりあげる。東西対立の語形であるが、西日本に分布するウロコが共通語となっている。東日本にもウロコが点在しているため、その点在の状態について、4世代に分けた言語地図から考察する。

図6に4世代に分けた地図を示す。沿岸部では大半の世代でウロコがみられるため、内陸部での分布に着目すると、第1世代（1889年以前生まれ）では少ないが、第2世代以降（1890年以降生まれ）になると増加していることがわかる。

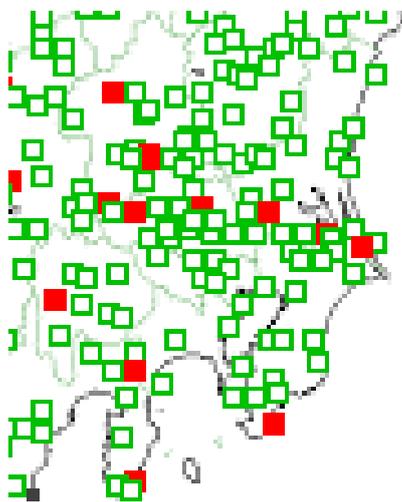
共通語形がウロコであるため、上述のかたつむりと同様に、関東地方において徐々に共通語化が進展しているとみることができる。



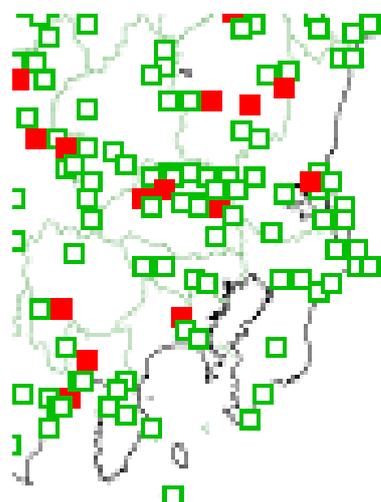
第1世代(1868-1889)



第2世代(1890-1894)



第3世代(1895-1899)



第4世代(1900-1914,31)

■ : ウロコ・ウルコ □ : コケ・コケラ ■ : その他

図6・うろこ（鱗）の4世代地図

5. まとめ

LAJの「かたつむり（蝸牛）」と「うろこ（鱗）」の2語について、4世代に分けた言語地図の分布の違いから、現行の1枚の言語地図に方言変化を内包する可能性について検討した。その結果、明確ではないものの、第1世代（1889年以前生まれ）、第4世代（1900年以降生まれ）といった両極の世代に、他の世代と異なる特徴がみられた。2語とも共通語化の傾向がみられ、第1世代に古い特徴、第4世代に新しい特徴がみられた。このことから、4世代に分けて言語地図を作成する意義はあると思われる。今後もさらに語を増やして検討をしたい。

ただし注意すべき点もある。第1世代は人数の関係で1868～1889年としたが、もともとLAJの話者は1887年以降という原則があるため、551人中、1887年前後の5年間

(1885-1889年)の話者が6割強(347人)を占める。そのため異なった分布に見えていても、実際には第2世代寄りの話者の誤差の反映に過ぎないということも十分考えられる。そのため、全体の分布をみるだけでなく各地点の生年情報を参照して検討する必要がある。

第1世代では、他の世代よりも内部の年齢差が22年と広く、その広さが古い方向であるため、かつての分布の残存が表れやすいとも考えられる。前述のLAJの解説でも、

「19世紀最終年以前出生とでもした方がよかったかもしれない、いまは考えている。さらに高年者(たとえば1893年以前出生)に限定してもよかったかもしれないが、それでは多分被調査者がさらに選びにくくなるだろう。」

(LAJ第1集『日本語地図解説—方法—』「被調査者」p.24)

と、話者選びの困難は認めつつも、古い世代の結果を残しておけばよかったと述懐している。おそらくは調査を通じて高年層の回答を記録する意義を感じたためであろう。言語地図としては、内部に世代差があることは問題だが、方言資料としてみた場合、古い記録が残ることは好ましいことになる。とはいうものの、その古い語形を適切に位置づけるためには、生年情報は重要であると思われる。この点についても、詳細な検討が必要であろう。

6. 今後の課題

試行の結果自体は、誤差の範囲内という感をぬぐえない面もあった。その原因と今後の課題について考察する。

複数語形の混在地域を選んだのは、冒頭のグロットグラムの説明にもあるように、斜めの等語線、すなわち変化の急激な部分で世代差が出やすいと仮定したからである。しかし、それを言語地図で検証する場合、地点密度と変化の速度についても考えなければならない。言語の伝播速度については、徳川(1993,1996)や、井上(2003)による考察があるが、とりあえず年速1kmと考える。本稿のLAJの4世代区分において、第1世代と第4世代の平均年齢差は17年であるため、もし変化がみられるとしても地点間隔が17km以上あれば、差は見えなくなってしまうことになる。LAJの4世代区分の中で、ちょうどよく合うような速度で変化している語を探すことは困難な作業であろう。

そういった誤差の問題は残るが、試行の2語はともに、共通語化の流れがあり、第1世代においては、他の若い世代の地図と比較して、古い特徴を残していた。共通語化現象は、LAJ以降の世代に急激に進展することがわかっているため、変化の方向については読み取りやすい。第1世代が共通語化の遅れた状態であるとすれば、第1世代の回答を詳細にみることで、かつての分布状態を発掘できる可能性がある。

この場合、現状のLAJの地図データだけではなく、調査整理時のカードデータまで戻ることが重要である。カードには地図作成時に不採用となった「本人は使用しないが聞いたことがある」という情報や、採用語形の「新」「古」といった注記が記録されている。徳川(1993)は、理解語彙が使用語彙より分布範囲が広いことを述べているが、地理的範囲だけでなく、世代的範囲についても同様であると思われる。カード情報から古い使用語形を掘り起こすことで、かつての方言分布の再構成に近づくことができるだろう。

う。親世代の使用情報などは、第2世代以降のデータからも得られると思われる。

カード情報は LAJDB からアクセスできる。回答情報の整理作業にはそれなりの労力を要すると思われるが、そもそも画面上でカードを利用できること自体が労力の大幅な軽減といえる。

以上、言語地図データから言語変化をみる方法について検討してきた。全国規模で明治初期の言語の使用分布を知ることは LAJ 以外で行うことができないものであり、意義のあるものといえるだろう。また、今後整備されるさまざまな言語地図のデータベースにおいても話者の生年情報の重要性を喚起することに貢献すると思われる。

課題点についてさらなる検討を加え、今後も発展させていきたい。

参考文献

- 井上史雄(2003)『日本語は年速1キロで動く』講談社現代新書。
国語調査委員会(1906)『口語法分布図』国書刊行会(1985年の復刻版)。
国立国語研究所(1966-1974)『日本言語地図』財務省印刷局。
国立国語研究所(1989-2006)『方言文法全国地図』財務省印刷局。
柴田武(1969)『言語地理学の方法』筑摩書房。
徳川宗賢(1993)『方言地理学の展開』ひつじ書房。
徳川宗賢(1996)「語の地理的伝播速度」『言語学林 1995-1996』三省堂。
鎌水兼貴(2010)「『方言文法全国地図』における話者の年齢差にあらわれる文法変化」
日本語学会 2010 年度秋季大会予稿集。

『日本言語地図』のデータベース化と計量的分析

—併用現象、標準語形の分布と交通網、方言類似度の観察—

熊谷 康雄

(国立国語研究所)

1. はじめに

『日本言語地図』データベース（以下、LAJDB）は、1999年頃より本格的にデータベースの構築に取り組み始めたもので、この3年間は国立国語研究所共同研究プロジェクト「大規模方言データの多角的研究」の柱の一つとして、データベースの整備と分析を進めた。本稿では、まず、『日本言語地図』のデータベース化の概要を簡単にまとめてLAJDBの特徴を説明する。次に、このLAJDBのデータの一部を利用し、LAJDBを活用した『日本言語地図』の計量的な探索、分析の試みを報告し、LAJDBの可能性の一端を示したい。

国立国語研究所編『日本言語地図』（全6巻、収録地図300枚、以下LAJ）は、方言研究の基盤的な資料のひとつであり、広く研究に使われてきている。全国規模の日本初の本格的な言語地理学的調査による言語地図であり、1966年から1974年にかけて刊行された。調査項目は語彙を中心とし、調査は1957年から1965年にかけて臨地調査により行われた。調査項目数285（地図化された項目240項目）、調査地点数2400、昭和30年代の日本全国の方言の地理的分布を捉えた方言研究における基礎資料である。LAJの調査開始から数えて今年（2013年）で57年目になる。LAJの原資料であるカード（約54万枚）は国立国語研究所に保管されている。

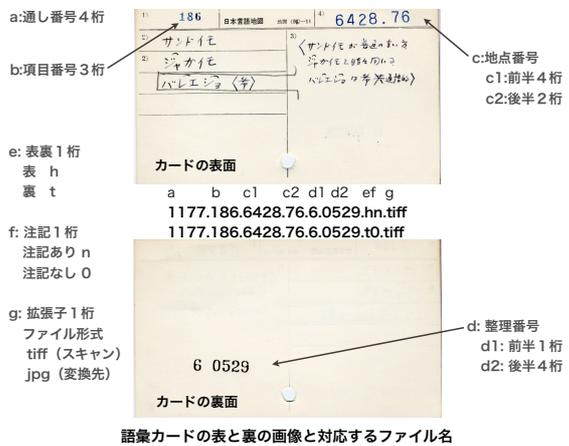
LAJの刊行期間はコンピュータの利用が普及する以前の1966年から1974年であり、すべて紙と手で行われた。これまで、LAJを用いた計量的な分析は、多くの場合、刊行された地図に基づいて、個々の研究者が、個別に必要な部分を地図から数えて直接集計したり、必要な範囲のデータを作成して集計・分析したりしたものがほとんどであった。利用可能なデータの制約は、研究の方法にも影響する。例えば、計量的な分析に関しては、全国的な分析では、県を集計の単位としたものが多いことや、地点を単位として集計したものは地域が限定されていることなどにも影響していると思われる。全国規模の等質的な方言分布データとしてLAJの持つ可能性を発揮させるには、LAJの全体に渡る一貫したデータ化が必要である。

2. 『日本言語地図』データベース（LAJDB）

LAJDBは、資料の保存と利用の高度化を目指すもので、1999年頃より本格的にデータベースの構築に取り組み始め、データベース科研の補助を受けて構築を進めた（熊谷2007）。前述のように、この3年間は、この国立国語研究所共同研究プロジェクト「大規模方言データの多角的研究」の柱の一つとして、LAJDBの整備と分析を進めてきた。LAJDBの構築では、原カードの画像のスキャンを工程の第一段階としており、これまでに全体の9割近くまでカードの画像データ化を進めたが、ここ3年間では、特に、既に原カードの画像化の済んでいる項目をデータベースとして使えるようにするための作業の部分に注力して、

番号, (4) 整理番号, (5) 項目名, (6) 県名, (7) 凡例の語形, (8) 併用語形数, (9) 語形の併用パターンである)。

表 1 『日本語地図』 データベースの構築状況



	項目数	A	B
調査項目数	280		
原カードスキャン	244	87%	
画像処理	230	82%	94%
チェック用DB作成	229	82%	94%
チェック用DB目視チェック	208	74%	85%
機械チェック&修正・確認	119	43%	49%

A:調査項目数に対する割合,
B:スキャン済みのファイルに対する割合
(『日本語地図』に地図化されている項目数は240)

図 4 原カード情報のデータベース化

表 2 LAJDB の処理済み項目一覧

LAJ_Q001 : かまきり	LAJ_Q083 : たけうま	LAJ_Q165 : まわた	LAJ_Q233 : くるぶし (課)
LAJ_Q005 : かたつむり	LAJ_Q089 : かくれんぼ	LAJ_Q166 : いと	LAJ_Q235 : すてる
LAJ_Q006 : なめくじ	LAJ_Q090 : おかね (貨幣)	LAJ_Q167 : きぬいと	LAJ_Q237 : おそろしい (恐ろしい)
LAJ_Q007 : おたまじやくし	LAJ_Q091 : おつり (釣銭)	LAJ_Q169 : はたいと (機糸)	LAJ_Q238 : なのか (七日)
LAJ_Q012 : とかげ (蜥蜴)	LAJ_Q092 : かぞえる (お金を)	LAJ_Q173 : こめ (米)	LAJ_Q239 : ここのか (九日)
LAJ_Q031 : あたま	LAJ_Q095 : やる	LAJ_Q174 : うるち	LAJ_Q240 : ひまご
LAJ_Q032 : つむじ	LAJ_Q103 : きのう	LAJ_Q176 : はんまい (飯米)	LAJ_Q241 : やしやご
LAJ_Q036 : ものもらい	LAJ_Q104 : おとどい	LAJ_Q179 : ぬか (糠)	LAJ_Q244 : いえ (家)
LAJ_Q037 : はな (鼻)	LAJ_Q105 : さきおととい	LAJ_Q182 : あぜ	LAJ_Q248 : ふすま
LAJ_Q038 : におい (芳香)	LAJ_Q108 : あした	LAJ_Q184 : とりおどし	LAJ_Q250 : きれいだ
LAJ_Q039 : におい (悪臭)	LAJ_Q109 : あさって	LAJ_Q185 : かかし	LAJ_Q252 : とうがらし
LAJ_Q042-7 : においをかぐ (前部分)	LAJ_Q110 : しあさって	LAJ_Q186 : じゃがいも	LAJ_Q253 : おいしい
LAJ_Q042-8 : においをかぐ (後部分)	LAJ_Q111 : やのあさって	LAJ_Q187 : さといも	LAJ_Q261 : おんぶする (幼児を負う)
LAJ_Q047 : くちひる	LAJ_Q113 : あしたのばん	LAJ_Q189 : さつまいも	LAJ_Q264 : かつぐ (材木)
LAJ_Q048 : した	LAJ_Q116 : つき	LAJ_Q190 : とうもろこし	LAJ_Q265 : かつぐ (天祥棒)
LAJ_Q051 : うすい	LAJ_Q117 : あめ (雨)	LAJ_Q191 : かぼちゃ	LAJ_Q266 : かつぐ (二人で)
LAJ_Q052 : あまい	LAJ_Q118 : つゆ (梅雨)	LAJ_Q192 : すみれ	LAJ_Q268 : いる
LAJ_Q056 : ほほ	LAJ_Q119 : ゆうだち	LAJ_Q194 : つくし	LAJ_Q280 : カガミ (鏡) の-G之音
LAJ_Q057 : かお	LAJ_Q122 : いなずま	LAJ_Q195 : すぎな	LAJ_Q282 : なす
LAJ_Q059 : あざになる	LAJ_Q124 : にじ	LAJ_Q200 : とげ (いばら等の)	LAJ_Q284 : とんぼ (蜻蛉)
LAJ_Q060 : ほくら (小)	LAJ_Q125 : ゆき	LAJ_Q214 : おうま	
LAJ_Q061 : ほくら (大)	LAJ_Q127 : こおる : 水が凍る	LAJ_Q215 : めうま	
LAJ_Q063 : おやゆび	LAJ_Q129 : つらら	LAJ_Q216 : こうま	
LAJ_Q064 : ひとさしゆび	LAJ_Q131 : こみ (目にはいるもの一塵)	LAJ_Q217 : たてがみ	
LAJ_Q066 : くすりゆび	LAJ_Q132 : こみ (掃除の対象一塵芥)	LAJ_Q218 : うし	
LAJ_Q067 : こゆび	LAJ_Q134 : こみ (川のごみ一塵芥)	LAJ_Q219 : おうし	
LAJ_Q068 : しもやけ	LAJ_Q135 : じしん	LAJ_Q220 : めうし	
LAJ_Q072 : すわる (座る)	LAJ_Q148 : たく	LAJ_Q221 : こうし	
LAJ_Q074 : あか (垢)	LAJ_Q149 : なる	LAJ_Q222 : もうもう	
LAJ_Q075 : ふけ	LAJ_Q153 : ゆけ (飯の場合)	LAJ_Q223 : もぐら	
LAJ_Q076 : うろこ	LAJ_Q155 : すりばち	LAJ_Q228 : すずめ	
LAJ_Q080 : おとこ	LAJ_Q156 : すりこぎ	LAJ_Q229 : ちゅんちゅん	
LAJ_Q081 : おんな	LAJ_Q157 : せともの	LAJ_Q231 : はげる (禿げる)	

LAJDB では, 言語地図の電子データと原カードの画像データの両者があることにより, 凡例の形に統合される前の個々の語形の前表記, 注記などの地図化されなかった情報や併用処理の記録などにも簡単に触れることができる。LAJとして分類整理された情報の原情報に戻ることや, LAJには載っていない調査の情報に容易に触れることができる。LAJDBの工程の概念図を図3に示す。この他, 付随データ, 関連データの整備も行っている。

LAJDB構築にあたっての基本的な考え方は熊谷(2007)に述べた。現在は, 最終的な処理の工程や機械チェックの方法, 文字データの形式など, 当時と変更点もあり, また, 最終的な機械チェックと修正・確認の過程では, 作業の中で, 新たに手順を整理した点多々あるが, 根本的な考え方は熊谷(2007)に示してあるので, 本報告書に再録した(p.165)。

LAJDB の詳しい解説は、「『日本語地図』データベース解説」として、作成中である。

3. 『日本語地図』データベースの計量的分析

LAJ の計量的分析としては、LAJ の県別の標準語形使用率を集計した河西データ（河西 1981）に多変量解析や計数的な手法などによる分析を加えた井上史雄による一連の多角的な研究（井上 2001 など）がある。現在の LAJDB の 119 項目段階では、河西データ 82 項目と一致するのは 52 項目であり、河西データを用いた井上の分析と十分な比較をするには、さらにデータの増補が必要な段階である。LAJDB のデータが揃えば、河西データでは対象としなかった項目も含めた全体的な位置付けを考えることもできる。今回の分析は、暫定的、探索的な性格のものである。

本発表では、LAJDB を利用して、LAJ における語形の併用現象、併用処理、標準語形の分布、語形の共通度から見た調査地点間の類似度による領域などを取り上げ、相互関係や交通網（道路網）などとの関係を見ることによって、LAJDB を探索的に扱った。

4. 『日本語地図』における併用現象の地点別集計の地理的分布

語の併用は言語の接触、伝播、変化に関わる現象である。言語地理学な分析においても、併用は、重要な情報のひとつであり、併用回答における語の新古や使い分けに関するインフォーマントの判断の情報は分析の重要な手がかりの一つであり（柴田 1969）、また、そのような判断の分布の様相自体が言語の動態を考える上で興味深い研究の対象と言える。

LAJ における併用について、稲垣（1980）、井上（2004）がある。稲垣（1980）はいくつかの項目の LAJ の地図で言語接触と併用の在り方を具体的に考察した。井上（2004）では、併用を言語変化の中間段階とし、この併用自体を考察する意味を主張し、標準語の普及過程に併用を位置づけ考察している。また、LAJ における「併用処理」についても言及している。回答地点が 1 地点しかない語形は「孤例」（徳川 1973、澤木 1988 など）と呼ばれ、併用との関係でも興味深い。徳川（1973）は『日本語地図』における孤例を扱う中で、その関係において併用に触れている。

LAJ では「併用処理」が行われている。「併用処理」とは「同一地点から二個以上の回答があつて、一方の標準語と一致する回答に、共通語的である・新しい・上品である・改まった場合に使う・まれにしか使わない、およびこれに準ずる説明がある限り、原則としてその回答を地図に記載しなかった」（LAJ 第 1 集解説書 方法 p.33）というものである。

稲垣（1980）の中で、井上史雄氏は、LAJ の併用処理や、調査員の差などの論点を上げ、編集当時、いわゆる標準語形、共通語形について、「共新上希の注のあるものは、ある県とか地方にかたまつて、それ自体面白いということが分かっている、それは載せなかったはず」と、編集時に併用に関して、その分布、地域的な違いが意識されていたことに触れている。また、同時に調査員による標準語形、共通語形の調査における扱いの違い、個人差の可能性についても指摘している。佐藤（1986）は、共通語形の俚言形地域への伝播、侵入の分析との関係で併用処理を取り上げ、「スッパイ」を事例として、併用処理された地点を復活させると、地図上で共通語形の伝搬の傾向がより明瞭になったとしている。

LAJ の併用を多数の項目について集めてみるような分析は、これまでほとんどないようである。小西（2007）では方言文法全国地図（GAJ）に関して回答数の分析をしている。

小西（2007）では、GAJにおける回答数の地理的な分布には、調査者との関係が強く、地理的に有意なパターンは見いだせなかったとしている。

LAJDB のデータを使い、いくつかの項目について個別に併用の起きている地点の分布を見たところ、交通網との関係などで意味のある分布が期待できる観察がされた。具体的な内容に踏み込む前に、併用回答の地点の現れ方に地理的な分布の傾向が現れるのかどうかを探った。LAJ では調査期間中に項目の削除や追加があり、調査地点数が異なる項目がある。データの集計作業時点での LAJDB から調査地点数がほぼ 2400 あった 55 項目（表 3）で暫定的に集計し、地点毎の語形が併用になっている項目の数の分布を観察した。

併用の回答のあった項目の数を各地点について集計し、地図に示したものが図 5 である。全国的にばらつくようなことはなく、地理的な分布を見ることができる。ほぼ県単位で分担されている調査員の分布についても地図化し、図 5 と比較したが、併用現象の分布には調査の分担区域を超えたひろがりでも連続する分布がある様子が観察され、また、同一調査員による調査地域内でも、後述する道路網などとの関係をはじめ、有意な関係の中で分布を読み取ることができ、単なる調査員の差ではないことが確認できる。

5. 『日本語地図』における併用処理項目数の地点別集計の地理的分布

LAJ には上で述べた併用処理により除かれている併用がある。この〈共新上希〉の併用はどのように分布しているか、これらは、図 5 の分布に対して、どのような分布を示すか。

LAJDB では画像を参照して併用処理を確認することができるが、併用処理のデータ化には、国立国語研究所に保管されている『日本語地図注記一覧』を利用した。これには、「A：普通注記」、「B：除いた共通語」、「C：除いた特殊語」に分けて（B,C を区別していないものもあるが）記録が残されており、編集作業時の判断の記録として扱える。この情報をデータ化し、LAJ の併用と同様に集計して地図上に描いた。B と C を区別せずに地点毎に除かれた併用の項目の数を集計し地図にしたものが図 6 である。結果は、図 5 に類似し、パターンの骨格的な部分に領域を狭めながら図 5 の分布の中にはまるような分布を見せる。LAJ の併用語形が削除される処理の前の併用の分布を見るとすれば、この図 5 と図 6 を合わせたものが対応することになる。

さらに標準語形に関する「併用処理」のみの分布をみたものが図 7 である。上の「B,C」を区別していないものについて、注記一覧および必要に応じて LAJDB の原カード画像を参照し、「B」、「C」を切り分けたデータを作成した。この図 7 では、LAJ において併称処理との関係で認定されている標準語形がひとつになっている項目を選択して取り上げた。項目によっては、複数の標準語形を認定している場合があり、併用処理がなされていない項目もある。55 項目（表 3）から、標準語形が LAJ の解説で複数認められている項目（表 3 の○印）と標準語形が LAJ の解説では特定されず、併用処理も行われていない項目（表 3 の□）を除き、標準語形がひとつ認定されている項目数は 42 項目ある。ここから、注記一覧がないものや併用処理がなされていない項目を除いた 37 項目に関して、各地点において標準語形が併用処理された項目数の分布を地図化したのが図 7 である。なお、個々の項目の標準語形と併用処理の分布も有意な分布を見せているが、ここでは全体をまとめて傾向を扱う。（なお、作成した個々の項目毎の標準語形と併用処理の分布図の一部は、本報告書所載の小林・熊谷の報告に掲載してある。）

表3 『日本語地図』の併用地点数の項目別集計 (B/A 順) 55項目

	質問項目	(A)調査地点数	(B)併用地点数	B/A*100 [%]		質問項目	(A)調査地点数	(B)併用地点数	B/A*100 [%]
○	Q186: じゃがいも	2400	724	30.2		Q124: にじ	2399	235	9.8
	Q038: におい (芳香)	2400	546	22.8		Q223: もぐら	2399	229	9.5
○	Q122: いなずま	2400	502	20.9		Q129: つらら	2399	227	9.5
	Q118: つゆ (梅雨)	2400	492	20.5		Q066: くすりゆび	2400	216	9.0
	Q048: した	2399	490	20.4	○	Q165: まわた	2400	216	9.0
	Q057: かお	2400	484	20.2		Q076: うろこ	2400	212	8.8
○	Q005: かたつむり	2399	428	17.8		Q179: むか (糠)	2400	211	8.8
	Q191: かぼちゃ	2399	426	17.8		Q149: にる	2400	209	8.7
	Q219: おうし	2400	422	17.6	○	Q001: かまきり	2400	196	8.2
○	Q056: ほほ	2400	412	17.2	○	Q012: とかげ (蜥蜴)	2400	196	8.2
○	Q187: さといも	2399	408	17.0	○	Q188: さつまいも	2400	195	8.1
	Q116: つき	2400	406	16.9		Q200: とげ (いばら等)	2400	189	7.9
	Q119: ゆうだち	2399	384	16.0	○	Q127: こおる: 水が凍る	2400	186	7.8
□	Q104: おととい	2400	360	15.0		Q194: つくし	2400	186	7.8
	Q007: おたまじゃくし	2400	356	14.8	□	Q105: さきおととい	2400	183	7.6
	Q221: こうし	2400	354	14.8		Q006: なめくじ	2400	171	7.1
	Q220: めうし	2400	344	14.3		Q032: つむじ	2400	171	7.1
	Q185: かかし	2400	333	13.9		Q060: ほくろ (小)	2400	169	7.0
	Q051: うすい	2400	325	13.5		Q052: あまい	2400	146	6.1
	Q036: ものもらい	2400	312	13.0		Q083: たけうま	2400	139	5.8
	Q072: すわる (座る)	2399	311	13.0		Q148: たく	2400	132	5.5
	Q059: あざになる	2400	307	12.8		Q089: かくれんぼ	2399	130	5.4
	Q039: におい (悪臭)	2399	292	12.2		Q067: こゆび	2400	130	5.4
	Q214: おうま	2400	291	12.1		Q063: おやゆび	2401	101	4.2
	Q215: めうま	2400	282	11.8		Q064: ひとさしゆび	2400	86	3.6
	Q174: うるち	2401	270	11.2		Q110: しあさって	2400	63	2.6
	Q103: きのう	2400	266	11.1		Q111: やのあさって	2400	13	0.5
○	Q216: こうま	2400	264	11.0		合計	131991	15328	11.6

併用回答の割合 (B/A×100) [%]

質問項目の枠の下の罫線が太い項目は河西データ82項目と一致する項目

○印: 標準語形が LAJ の解説で複数認められている項目

□印: 標準語形が LAJ の解説では特定されず、併用処理も行われていない項目

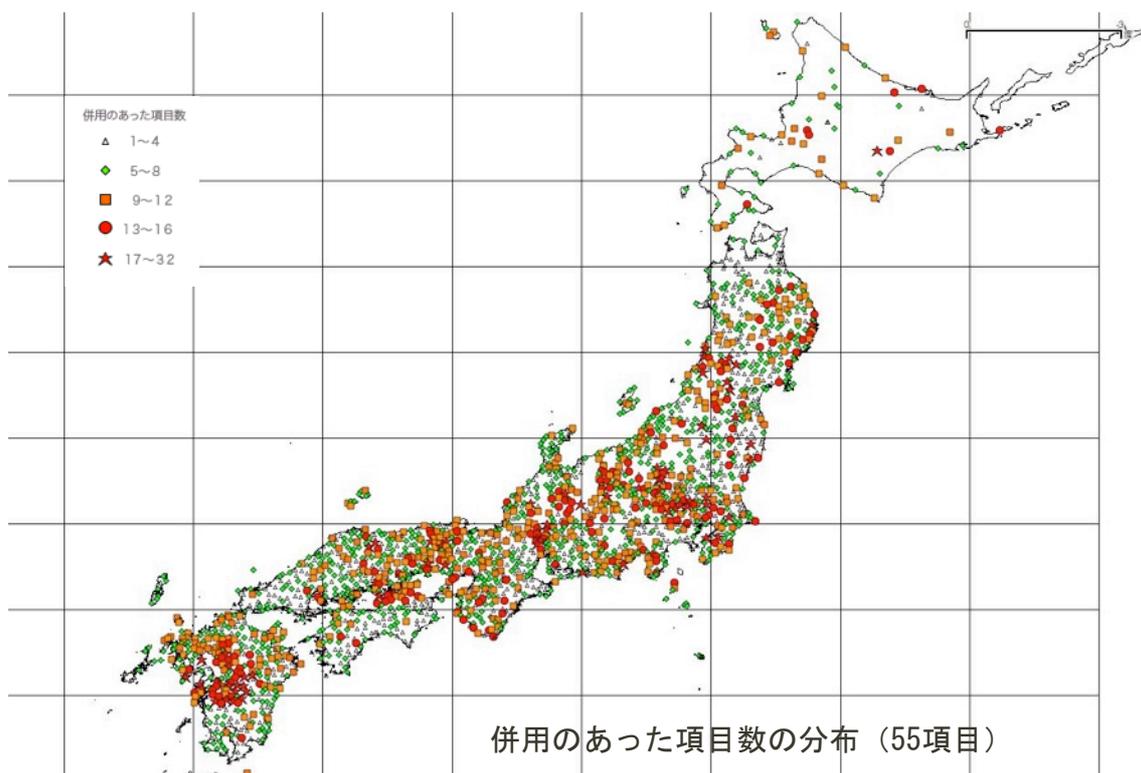


図5 併用のあった項目数の分布

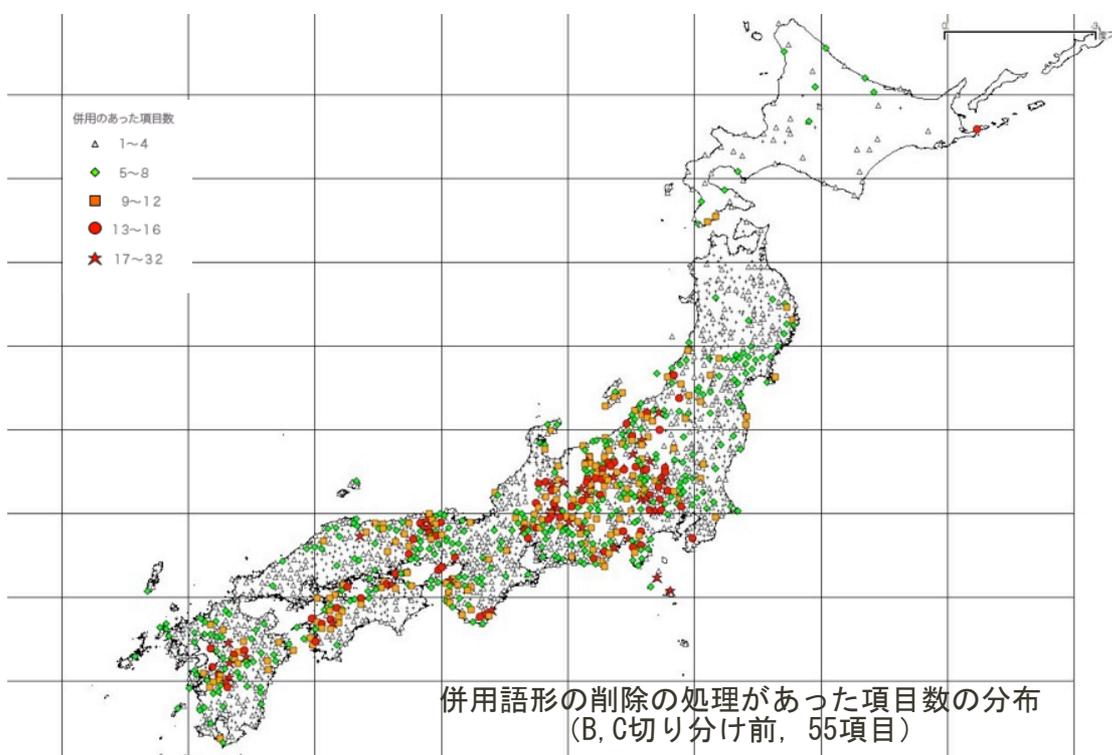


図6 併用語形の削除のあった項目数の分布 (標準語形以外の場合を含む)

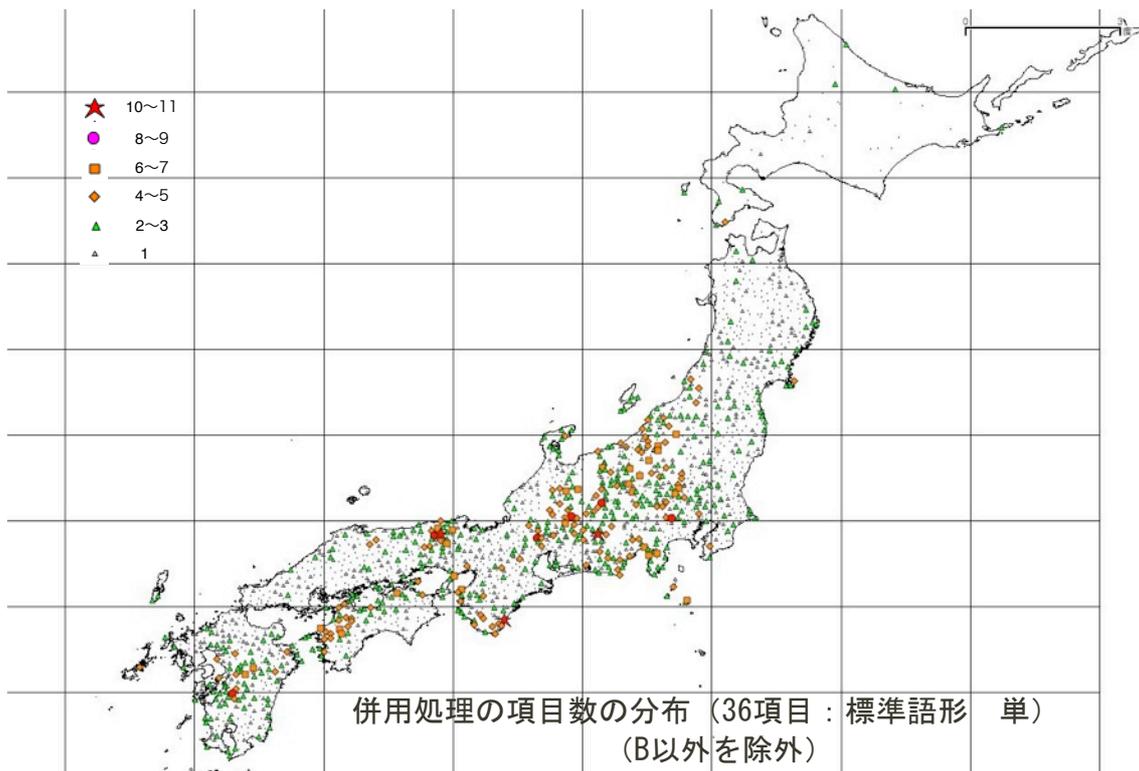


図7 併用処理の項目数の分布 (標準語形の併用処理のみ)

6. 『日本語地図』における標準語形数の地点別集計の地理的分布

井上 (2004) は LAJ の県別標準語形使用率を分析しているが、データは標準語形ではあるが、方言体系の中に根をおろした語形である。〈共新上希〉の併用は、語形としてはおなじ標準語形でだが外されたものであるが、図7の分布からは地図化された方言形と連続した位置にあり、地理的な要因に関係なく空からばらまかれたような分布ではない。LAJ 上の併用の出現の仕方に、LAJDB の部分的なデータによるものではあるが、併用処理の場合も含め、LAJ 上で併用現象全体に地理的な分布が観察される。これは、井上 (2004) の主張を補う。

LAJ の計量的分析としては、LAJ の県別の標準語形の使用率のデータ (河西データ) を分析した井上史雄による一連の研究がある。河西データに多変量解析や計数的な手法による様々な分析を加えている。今回のデータは LAJDB から 55 項目を選んだものである。項目は LAJ 6 巻全体にある程度ばらついており、見通しを得ることはできる。

図8に上の42項目の標準語形の地点毎の度数を地図化したものを示す。河西 (1981) の表にある標準語形の県別使用率のデータを地図化したものが図9(左)である。河西 (1981) の地図では、段階化して表示されているが、ここでは、連続的な濃淡の変化として表示してある。図8の LAJDB の42項目について、同様に、県別に集計して県別使用率のデータを地図化したものが図9(右)である。河西データと今回の LAJDB のデータを用いた集計は全体的には非常によく似たパターンが得られていることが分かる。図10に河西データと LAJDB の42項目との県別の標準語平均使用率による県の順位を比較したグラフを示す。

大局的によく似たパターンが得られている。差異を伴いつつも、大きくは類似している様子を示しているが、ここの集計はあくまでも暫定的性格であるので、河西データと同じ項目に関するデータの整備が整った段階で、さらに詳細な検討に入っていくこととしたい。

LAJ の 2400 地点のデータを地点別に集計すると県別の集計では見られなかった細かさで分布の様子が捉えられている。

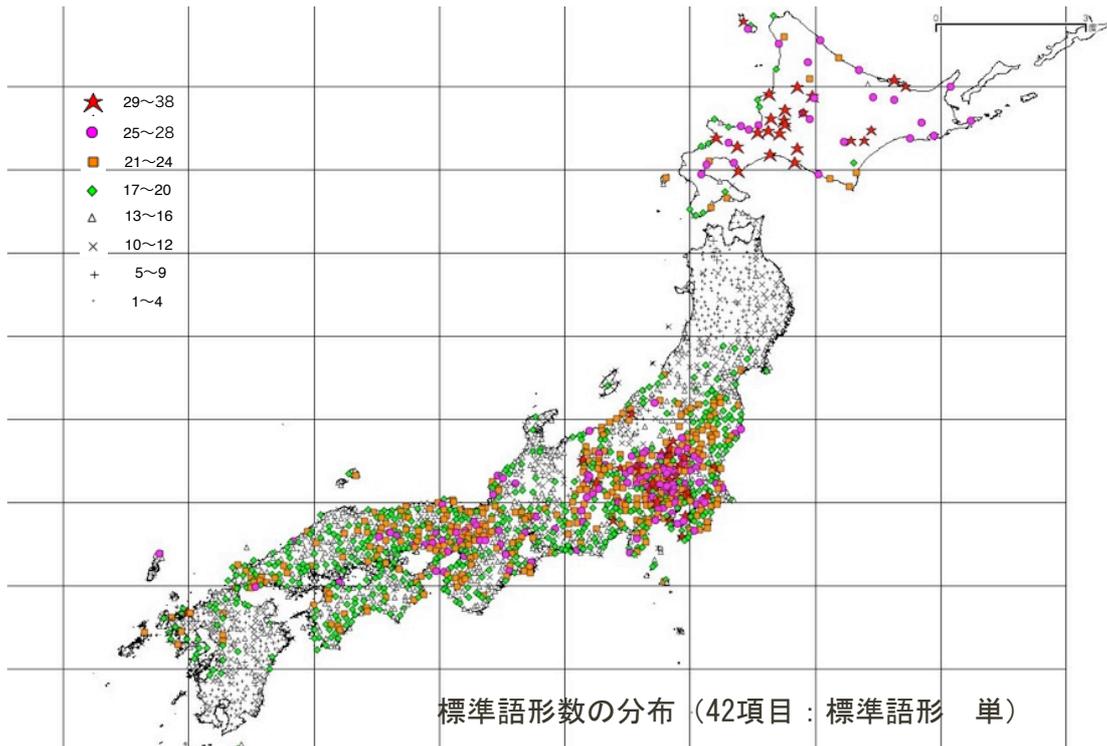


図8 標準語形数の分布

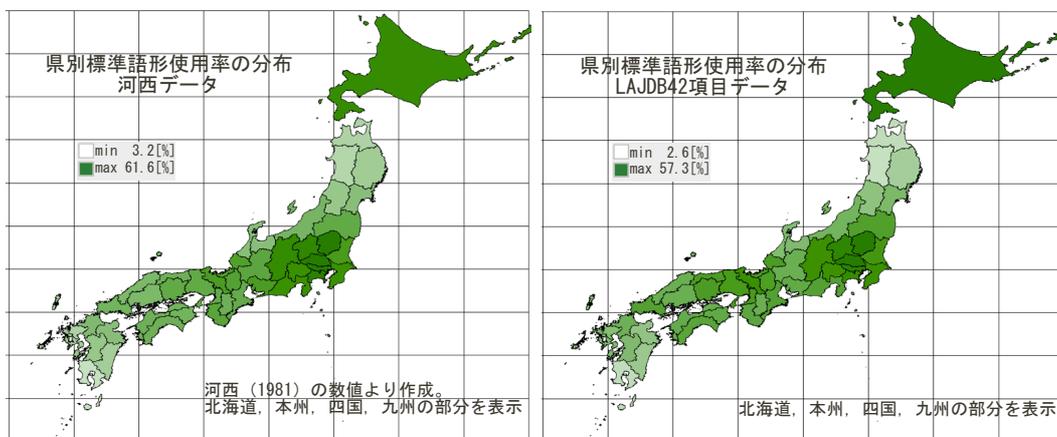


図9 標準語形県別使用率の分布 (河西データと LAJDB 42 項目)

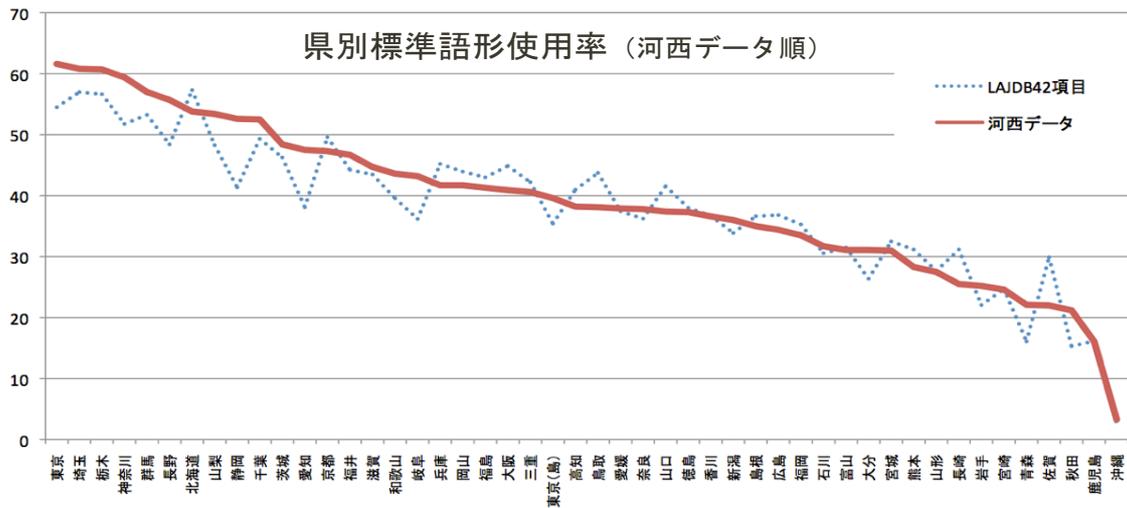


図10 県別の標準語形使用率 河西データ順

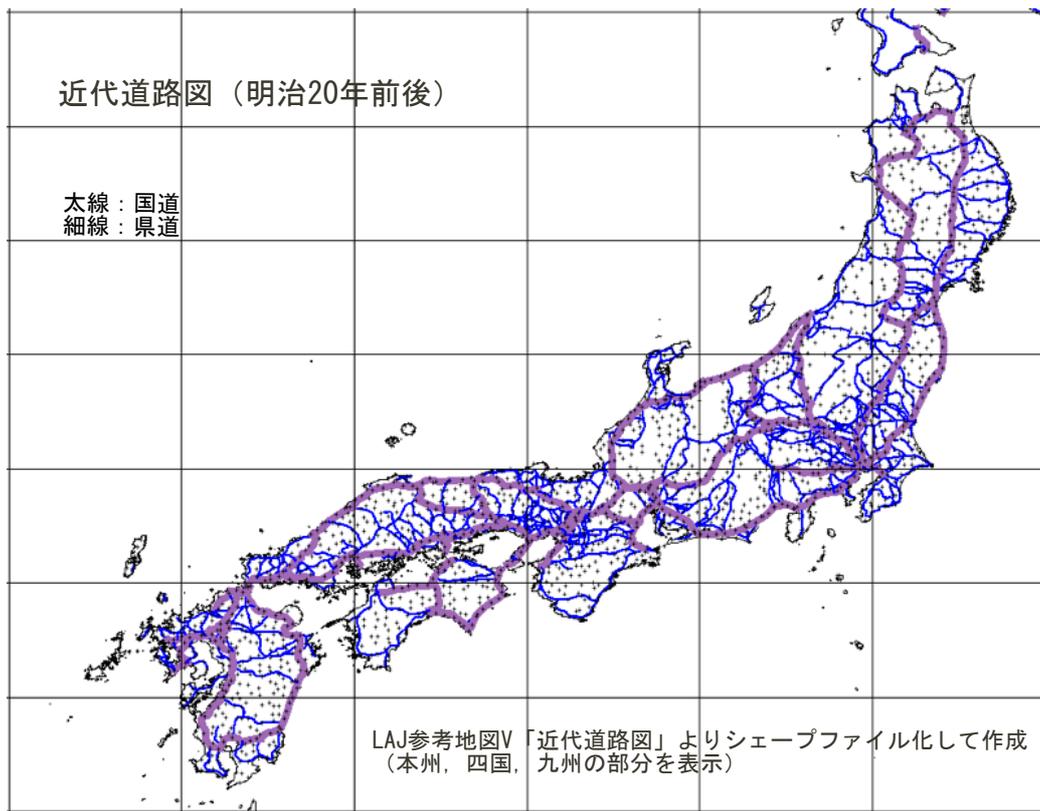


図11 近代道路図（LAI参考地図Vより作成）

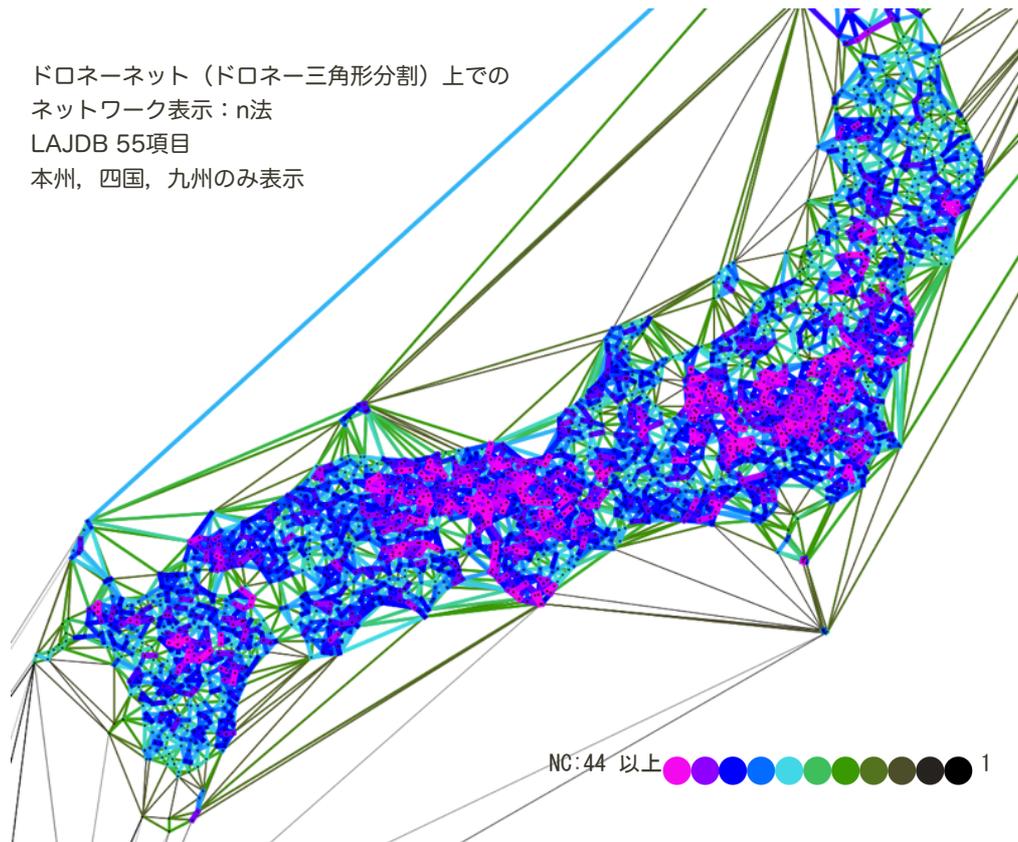


図12 ドロネーネット上でのネットワーク表示：n法，55項目

7. 併用現象, 併用処理, 標準語形の分布と交通網, ネットワーク法の観察

図11はLAJ参考図Vの「近代道路図」をシェープファイル化したものである。シェープファイルはGISなどで標準的に利用されているファイルの形式である。LAJの分布の分析に役立つために、LAJの参考図6枚の中から、調査地点番号図、地勢図、藩領図、近代道路図を電子地図化した中の一つである。この近代道路図は「明治中期（1890年・明治23年ごろ）の日本における道路網と、調査地点との関係を概観することを目的として作成した。この地図は、日本言語地図作成のための調査に被調査者として方言資料を提供した人たち（その生年は1889年・明治22年から1903年・明治36年までの15年間に集中している。—中略—）の育った時代、ないしは、かれらの養育者たちの活躍した時代の陸上交通路の概要を示したものと見えよう」（『日本言語地図』参考地図Vの凡例欄の解説より）というものである。この「近代道路図」のシェープファイルを用いて、LAJDBのデータを用いた集計と重ね合わせて、道路網との関係を観察した。

標準語形数の分布（図8）と近代道路図（図11）を重ねて見ると、標準語形の分布と街道の関係をはっきり観察できる。これは、言わば、多数の項目についての集計をLAJの「2400地点の解像度」による分布として見ることができることによる。都道府県別の数が47であるから、約51倍の「解像度」で集計値の地理的な分布を見ることができることになる。これは、これまでのデータの状態に対して、LAJDBがもたらす利点である。

関東と近畿の関係を見てみると、東海道やそれ以上に中山道が強く浮かんでくる様子が見える、脇街道など、より仔細に追うこともできる。街道筋のネットワークに沿った分析

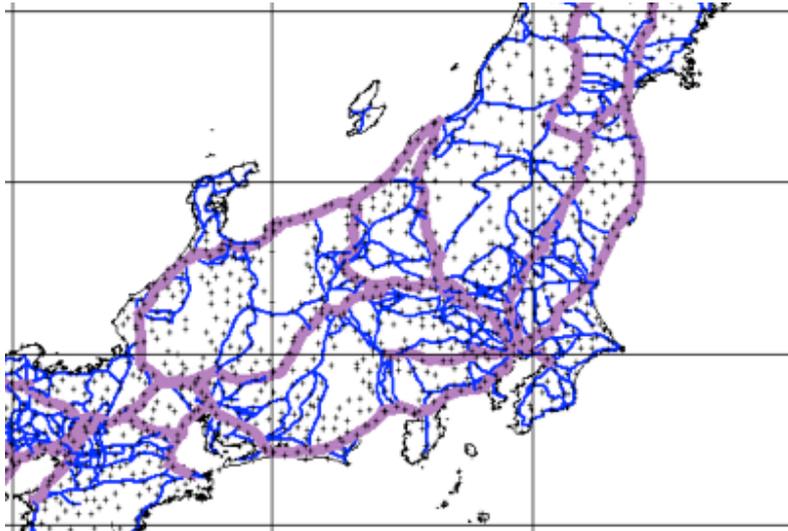
も可能性がある。脇街道の事例としては、一つあげれば、中仙道の脇往還である三州街道（別名伊那街道。中馬の通商の路として盛んに利用された。塩尻と岡崎を結ぶ。）は中山道と同等あるいはそれ以上に強く浮かんでいる様子が観察できる（他にも興味深い対応がある）。図13に関東から近畿にかけての「標準語形数の分布」と「近代道路図」の比較のための図を示す。図13(3)は、「標準語形数の分布」上へ「近代道路図」の重ね合わせた図です。見やすくするため、図13(1)上の道路の線幅を調整して表示した。このような観察は今後の伝播のルートを追跡する分析の可能性を示す。また、交通網は人口の分布とも関係する。これらも含めたより総合的な検討は語の伝播の分析につながる。

併用現象の項目数の図について見てみると、大括りだが、関東が山なら近畿は谷（あるいはカルデラ）のような様子を示している。その様子は図5（俚言形も含む併用）、図6（削除された標準語と特殊語）、図7（削除された標準語）とよりはっきりする。図14に関東から近畿にかけての部分での比較の図を示す。図7や図14(3)（標準語形で併用処理された項目数）を見ると、近畿地方では、近畿地方の周辺に、関東地方は関東から新潟方面に向かってあるいは、中山道にそった方面の分布が目立つ。井上史雄をはじめ、すでになされている関東と近畿との比較、対比と突き合わせて見ることもできる。語形の分布の中心別の集計なども未着手だが、語の伝播を探る分析全体の中で位置付けていきたい。

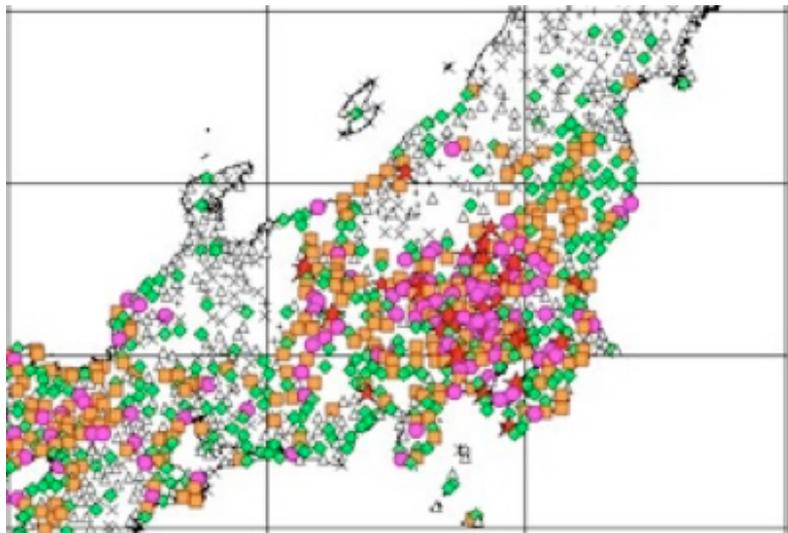
標準語と併用処理の関係は直接的である。図8（標準語形数分布）と図7（併用処理の項目数の分布：標準語形の併用処理のみ）を比較してみる。標準語形の分布の山と谷の部分と併用処理の分布の山と谷の対応を見ると、同じ方向の部分と逆方向の部分とが見られる。図7、図8を交互に表示するアニメーションを作成して観察したが、紙の上での表示の仕方を工夫する必要がある。図15の(1)、(2)を比較すると、例えば、いくつか図15(3)の○印をつけたところは、図15(1)の標準語形数の分布の山の空きにはまり込むように、あるいは接するように、標準語形の併用処理の項目数の山が分布している。一方、図15(3)の◇印のところは、標準語形の山と併用処理の山がほぼ重なっている。語の地理的伝播の先端部分で併用（併用処理）の現象が起きているか、そうならその様子を明瞭に視覚化してみようと考えているが、○印や◇印のより詳しい位置付け、分析を続ける。

図12はLAJDBの55項目を使ったネットワーク法によるドロネーネット上でのネットワーク表示(n法)である(熊谷2002)。言語的に類似した地点が連続する様子を地点間の近似的な隣接関係のネットワーク上で捉えたものである。より類似している(n法では地点間で語形が一致した数が多い)地点同士がより太い線で結ばれている。ここでも上で見た街道との関係が再度見えている。図8をはじめ上の各図との突き合わせもできる。

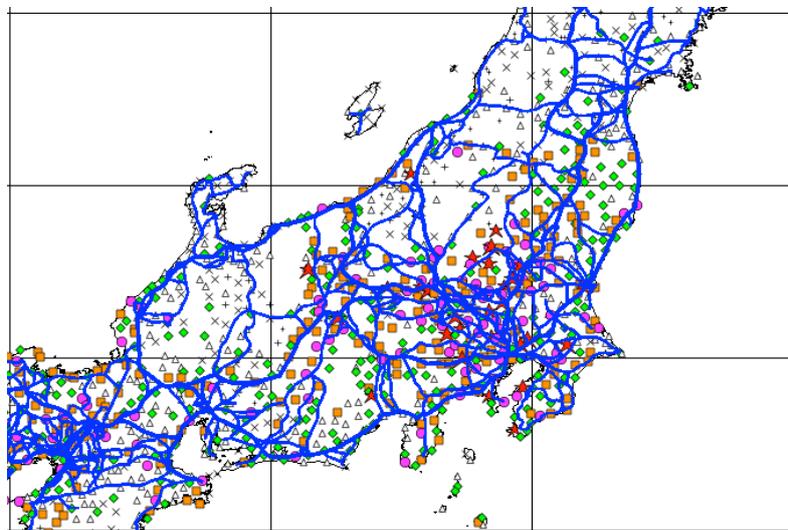
図16に関東から近畿にかけての部分で、ドロネーネット上でのネットワーク表示と近代道路図、標準語形使用数を比較できるようにした図を示す。俚言形（標準語形も含む）の語形の一致の度合いによって描かれた地点間の言語的な類似関係のネットワークの表示(図16(1))の上に観察できる、言語的に類似した領域のつながっていく様子と標準語使用数(図16(3))とを比べることができる。例えば、俚言形（標準語形を含む）で相互に類似した地点の連続が観察される領域の広がりや標準語形数の分布が示す広がりや、関東方面ではかなり重なるが、近畿方面では異なる。近代道路図(図16(2))との関係も相互に比較できる。これら3つの図の異同関係の分析、位置付けも進めていく。



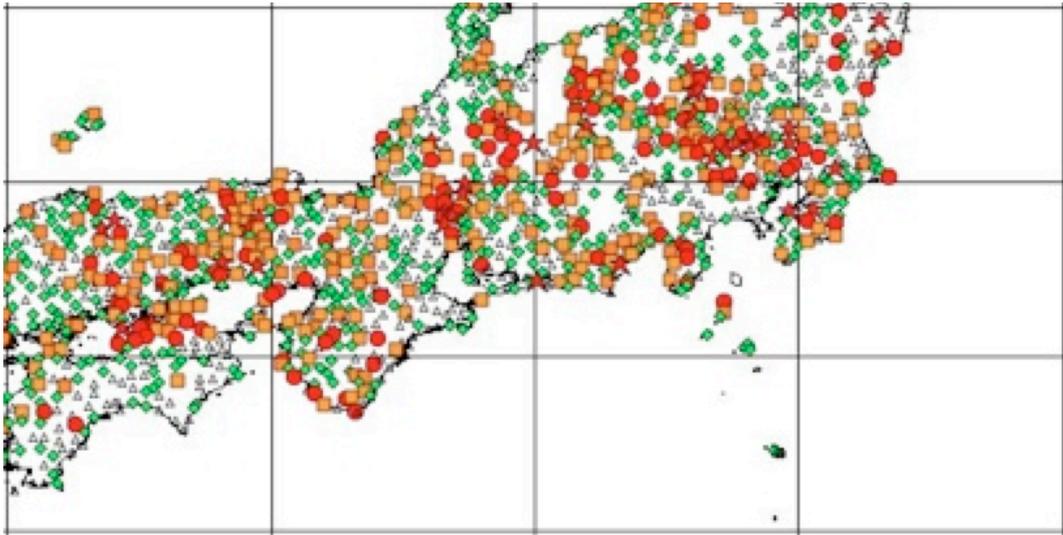
(1) 近代道路図 (図11部分表示)



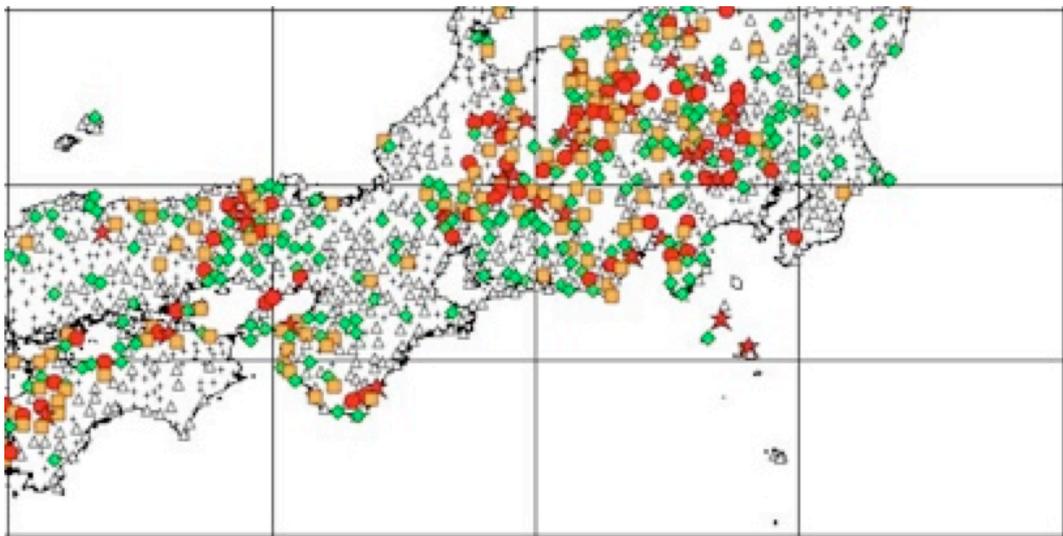
(2) 標準語形数の分布 (図8部分表示)



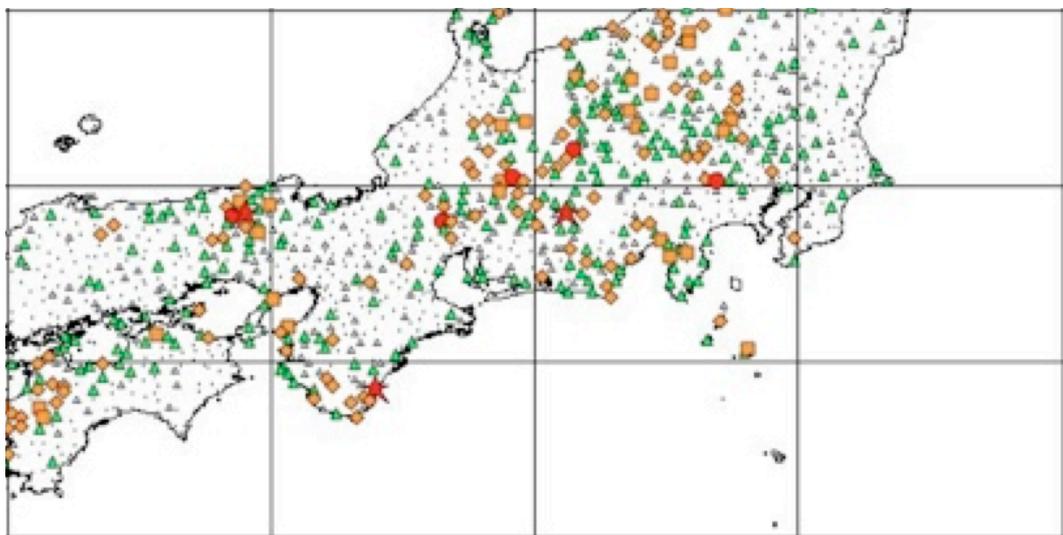
(3) 「標準語形数の分布」上への「近代道路図」の重ね合わせ (道路の線幅を調整)
 図13 標準語形数の分布 (図8部分表示) と近代道路図 (図11部分表示) の比較



(1) 図5 (俚言形も含む併用) の部分表示



(2) 図6 (削除された標準語あるいは特殊語の併用) の部分表示

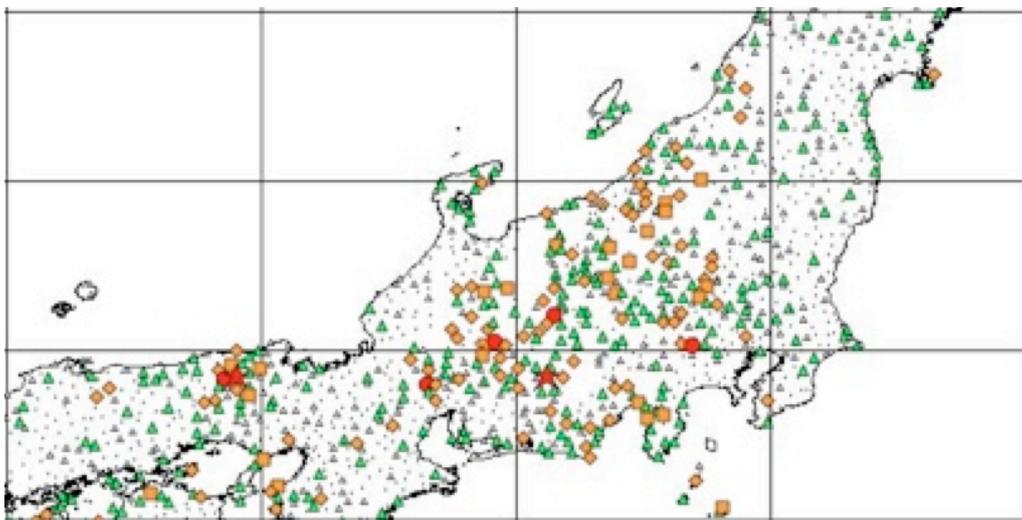


(3) 図7 (削除された標準語の併用) の部分表示

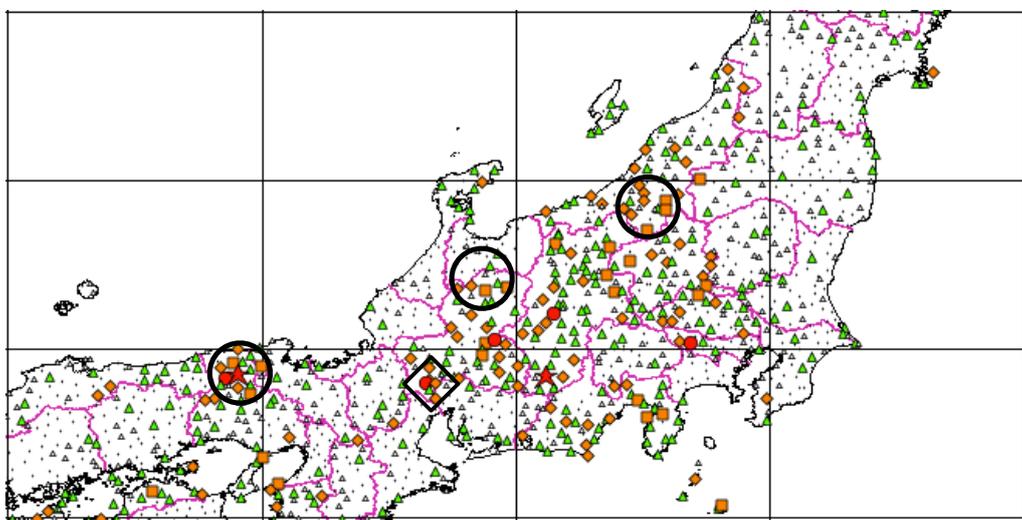
図14 関東と近畿の併用現象の比較 (図5, 6, 7)



(1) 標準語形数の分布 (図8の部分表示)

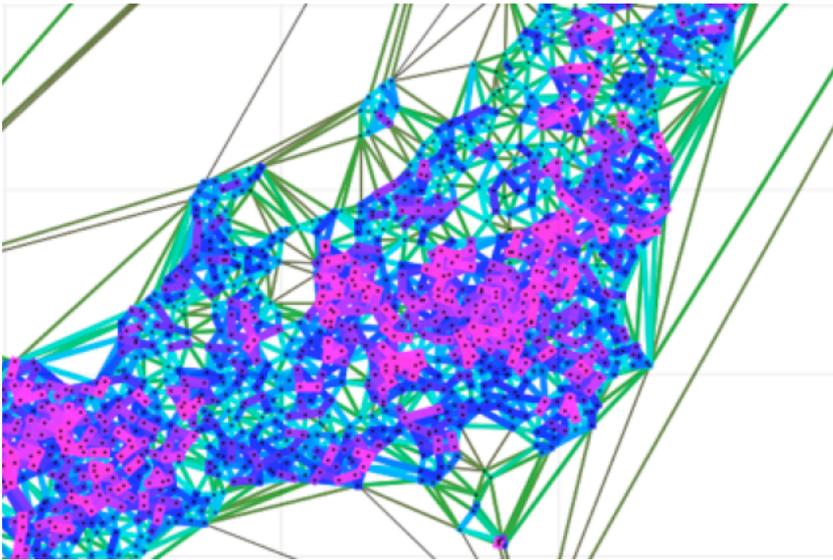


(2) 標準語形の併用処理の項目数の分布 (図7部分表示)

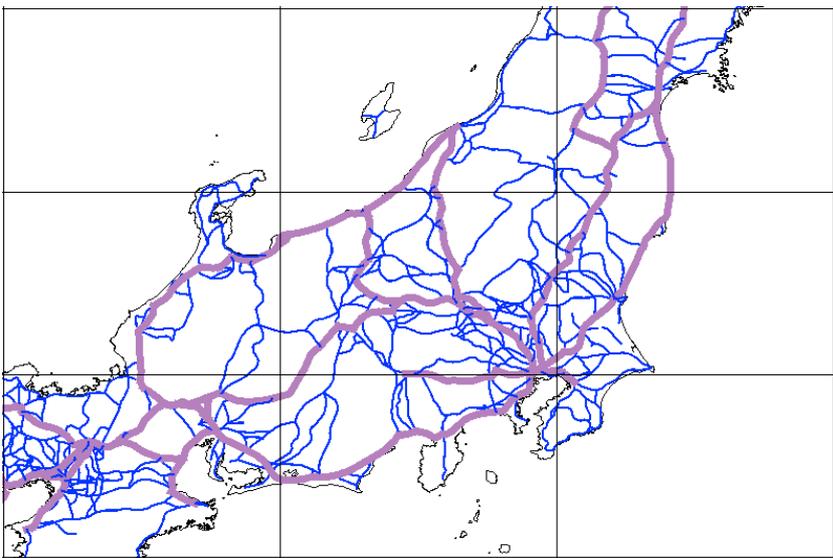


(3) 標準語形の併用処理の項目数の分布 (図7部分表示) に県境を表示

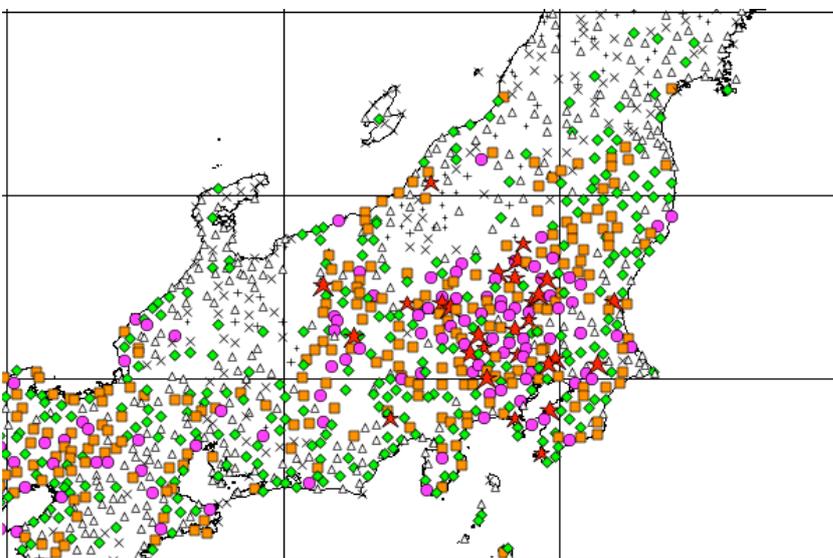
図15 標準語計数の分布と併称処理の項目数の分布



(1) 図12部分表示



(2) 図11部分表示



(3) 図8部分表示

図16 ドローネーネット上でのネットワーク表示と近代道路図，標準語形使用数

県別のデータでは得られなかったLAJ2400地点のデータの描く詳細な模様は、併用現象、併用処理、標準語形、交通網、地点間の方言的な類似度という関係の中でも、より詳しい観察が可能である。伝搬経路との関係を追跡し、語の伝播の分析につながる。言語地図では調査地点の回答のから面としての広がりを持つ分布パターンが描かれ、観察されるが、これは地点間の接触（交通網、人的交流等）を背景に形成されたものである。LAJの2400地点の細かさで、多数の項目を扱うことで、逆に、その面的な分布の背後にある交通網などネットワーク的な関係、その関係の上での語の伝播の様相が全国的な広がりの中で浮かび上がってくる。可能性を発掘していきたい。

8. おわりに

本稿ではLAJDBによる新たな可能性を探った。LAJDBにより、『日本言語地図』2400地点の項目別のデータが使える、また、注記や原表記が記載されている原資料であるカードに簡単にアクセスできる。このことにより、これまでは見えなかったより詳細な現象の観察、新たな観点による分析、これまでになされて来た研究の再評価や位置付けなど、さまざまな可能性があるが、全体像を明確に描き出し、現象の観察、分析を進めるには、LAJDBの完成を目指してデータの項目数を増やす必要がある。今回は、現状の暫定的な段階であり、データを詳細に分析、追跡し、結論を導くことには控え目であるべき段階だが、LAJDBの整備を継続して、完成を急ぎ、詳細な分析につなげたい。

本発表は国立国語研究所の共同研究プロジェクト「大規模方言データの多角的分析」（プロジェクトリーダー：熊谷康雄）の研究成果の一部である。なお、LAJDBには科学研究費研究成果公開促進費（データベース）〔平成13,14,15,16,17,20年、『日本言語地図』データベース（研究代表者：熊谷康雄）〕の補助を得た。地図の描画にはQGIS 1.6.0を利用した。また、本稿は、JLVC2013で報告した原稿（熊谷2013）にさらに加筆したものである。

参考文献

- 稲垣滋子（1980）「方言接触と語形併用—「日本言語地図」の分布から—」『都立大学方言学会会報』92, 1-10.
- 井上史雄（2001）『計量的方言区画論』明治書院.
- 井上史雄（2004）「併用現象と言語変化の中間段階—河西データ3クラスターの普及過程」『語学研究所論集（東京外国語大学語学研究所）』9, 1-18.
- 河西秀早子（1981）「標準語形の全国分布」『言語生活』354, 52-55.
- 熊谷康雄（2002）「方言区画論と方言地理学—計量的方言区画のためのネットワーク法の開発を通して—」馬瀬良雄監修『方言地理学の課題』明治書院, 150-164.
- 熊谷康雄(2007)「『日本言語地図』のデータベース化」『日本方言研究会第85回研究発表会発表原稿集』, 27-34.
- 熊谷康雄(2012)「言語地図の計量的分析:『日本言語地図』データベースによる併用現象の地理的分布の探索」『日本行動計量学会 第四十回大会抄録集』, 411-414.
- 熊谷康雄(2013)「『日本言語地図』のデータベース化と計量的分析」『国立国語研究所時空間変異研究系合同研究発表会 JLVC2013 予稿集』, 73-82.

- 国立国語研究所 (1966-1974) 『日本言語地図』(全6巻) 大蔵省印刷局 (縮刷版 1981-1985).
- 小西いずみ (2007) 「『方言文法全国地図』における回答語形数」『日本語学』26(11), 35-43.
- 佐藤亮一 (1986) 「地域社会の共通語化」飯豊毅一, 日野資純, 佐藤亮一編『講座方言学3 方言研究の問題』, 145-178.
- 澤木幹栄 (1988) 「『日本言語地図』の語形の数量的性質」, 『方言研究法の探索』秀英出版, 15-40.
- 柴田武 (1969) 『言語地理学の方法』筑摩書房.
- 徳川宗賢 (1973) 「言語地図における弧例」『ことばの研究』4, 秀英出版, 133-150.

共通語形の分布と伝播について

小林 隆

(東北大学)

熊谷 康雄

(国立国語研究所)

1. 考察のねらいー共通語形は伝播するか？

共通語形は伝播するのだろうか？

この場合の「伝播」とは接触性伝播、いわゆる「地を這う伝播」のことである。一般に、共通語形の広まり方は、マスメディアや教育などによって、全国に一律に広まる伝播様式をとると言われる。いわゆる「空から降る伝播」である。しかし、この点に関して、佐藤亮一（1986）は、『日本言語地図』（LAJ）の「酸っぱい」の地図を例として、共通語形にも地を這う伝播が認められるのではないかと指摘した。

今回の考察のねらいは、佐藤のこの仮説を多くの地図によって検証することにある。佐藤は、1枚の地図によって仮説を提示した。ここでは、同じことが他の地図でも言えるかどうかを見ていきたい。

ただし、検討に入る前に注意しておくべきことがある。それは、「共通語形」とは何かということである。これには、「共通語と認識されている語形」というとらえ方と、「共通語と一致する語形」というとらえ方があると思われる。このうち、普通、方言地図から把握できるのは後者の意味での共通語形である。共通語形を共通語と認識しているかどうかは、意識調査を併用しないかぎり、わからない。もし、共通語形が共通語と認識されずに使用されるとすれば、それは方言語形（いわゆる俚言形）と同じ扱いになる。方言語形ならば、「地を這う伝播」を起こして不思議はない。方言地図を見たときに、共通語と一致する語形という意味での「共通語形」に一定の分布傾向が見られたとしても、取り立てて注目する必要はないことになる。

そういう問題を含むものの、佐藤の研究で注目すべきは、「併用処理」によって削除された共通語形を地図上に復活させて見せた点である。この処理によって削除された共通語形とは、話者の意識としてその語形を共通語として認識していることがわかる語形である。つまり、上で述べたもうひとつの共通語形であり、共通語と認識されている共通語形である。この共通語形にも一定の分布があることを突き止めた点が興味深い。

併用処理とは？：ここで、「併用処理」について解説しておこう。『日本言語地図解説一方法一』の33頁に次のようにある。

同一地点から二個以上の回答があつて、一方の標準語と一致する回答に、共通語的である・新しい・上品である・改まった場合に使う・まれにしか使わない、およびこれらに準ずる説明がある限り、原則としてその回答を地図に記載しなかった。

これらの注記を同列に扱ってよいか疑問も残るが、共通語（標準語）と意識された共通

語形を地図から排除するという方針が読みとれる。

興味深いのは、この説明に続けて次のようにも言っている点である（同じ頁）。

標準語と一致する表現を、これらの状況でしか使わないということは、この説明を記録しなかった他の地点でも同様なことがありうる。記録のありなしを根拠に、地図に記載するかしないかを決定することは、かえって混乱をまねくと考えたためである。

ここからうかがえることは、『日本言語地図』の作成者たちは、共通語としての共通語形の回答は恣意的であり、それらを地図上に表示しても、一定の分布は現れないであろうと予想していたと思われることである。

2. 共通語形の分布－「併用処理」語形の復活

併用処理された共通語形は、共通語と認識されている共通語形である。それらが、もし、全国一律に現れるならば、それはいわゆる「空から降る伝播」によるものに違いない。しかし、何らかの分布傾向が現れるならば、それは「地を這う伝播」などの伝播様式を考えなければならない。

LAJDB を使って、併用処理された共通語形を復活させてみた。その結果は、後ろに掲げる図 5～20 のとおりである。これらの図には、次の情報を表示してある。

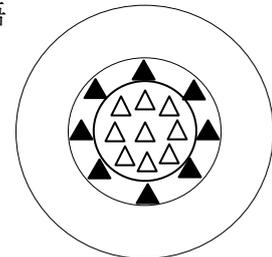
	例
項目名	かお（顔）
地図番号	106
項目番号	057
共通語形（標準語形）	KAO
白三角記号△	LAJ に表示されている共通語形（標準語形）
黒三角記号▲	LAJ では併用処理された共通語形（標準語形）

さて、これらの図を概観すると、大局的に見て、下の模式図のように、白三角記号の領域の端に黒三角記号が分布することがわかる。すなわち、併用処理された共通語形は、LAJ の共通語形の分布の周辺部に現れる。一方、併用処理された共通語形が、LAJ の共通語形の分布と無関係に全国一律の現れ方をしたり、LAJ の共通語形の分布を離れて独自の領域を形成したりするということはない。

ただし、LAJ の共通語形の分布が複雑な形状をなす場合には、併用処理された共通語形はそれらの中に現れることもある。また、LAJ の共通語形の分布が点在的である場合は、併用処理された共通語形はそれにかからむように出現する場合もある。いずれも上の模式図の変形として解釈できる。

このような分布はどのようにしてできあがったのだろうか。

まず、全国一律に現れるわけではないので、「空から降る伝播」によるものでないことは明らかである。次に、LAJ の共通語形の分布と接するように併用処理された共通語形が現れるということは、前者から後者への影響があったことを物語る。その影響とは接触性伝播、つまり、「地を這う伝播」である。佐藤の仮説はこの点で妥当と判断される。



3. 共通語形の伝播—その伝わり方のメカニズム

「地を這う伝播」はどのように起こったのか、そのメカニズムについて考えてみる。地図に示されている地域の特徴を、共通語形の使用場面を考慮に入れて説明すると次のようになる。

X 地域 (△) : 共通語形 (「共」) を下位場面 (「下」) でも、上位場面 (「上」) でも使用する地域。方言語形 (「方」) は使わない。

Y 地域 (▲) : 共通語形を上位場面で使用する地域。下位場面では方言語形を使用する。=併用処理地域

Z 地域 (空白) : 共通語形を使用せず、方言語形のみ使う地域。

この特徴を、地域と場面のかけあわせで整理すると次のようになる。

	X	Y	Z		X	Y	Z
上 :	共	<u>共</u>	方		カオ	<u>カオ</u>	ツラ
下 :	共	方	方	←LAJ の位相→	カオ	ツラ	ツラ

LAJ が見せてくれるのは下位場面での使用語彙の分布である。しかし、Y 地域においては、上位場面での使用語彙である共通語形 (囲み) も合わせて回答されており、これが併用処理を受けたと理解される。

なお、下線を引いた部分の語形は、直接的には地図からわかる情報ではなく、推定形である。X 地域においては、下位場面でさえ共通語形を使用するわけだから、上位場面はもちろん共通語形と考えられる。一方、Z 地域は、もし上位場面で共通語形を使用するなら注記付きで回答がなされたはずであるが、それならば Y 地域と同じになってしまうので、上位場面も方言語形とみなされる。

さて、X・Y・Z の地域は地理的に見てこのように並ぶので、その方言形成は次のように説明される。すなわち、Z 地域に向けて X 地域から接触性伝播が起こる。Z 地域では X 地域の共通語形を受容するが、下位場面の方言語形はそのままに、受容した共通語形を上位場面に位置づける。その結果、Y 地域のような状態が生じる。その後、上位場面の共通語形は下位場面にも進出し、結果として、場面に関わらず共通語形を使用する X 地域と同じ状態に至る。

	X		Z	Y	X
上 :	共	→	方	共	共
				⇒ ↓ ⇒	
下 :	共		方	方	共

共通語形の「地を這う伝播」の様子は、図 1~3 などのグロットグラム調査や図 4 のような狭域地図などによっても把握された事例がある。図 3 のグロットグラムでは、上位場面と下位場面の両方が設定されており、上の図のような変化が具体的にとらえられている。

伝播の時期的問題：ところで、佐藤はこうした共通語形の伝播の時期的な側面について、次のように言及している。

少なくとも『日本言語地図』の時代（同書で調査対象とした人たちの言語形成期、すなわち、明治末～大正初期から調査当時〈昭和 30 年代〉にかけて）における共通語形の伝播は、いわゆる「地を這うような」方言形の伝播とかなり類似する面があると言えよう（テレビ・ラジオの影響が戦前と比較にならない現時点における共通語の伝播にも地域性があるかどうかについては、また別に調査してみるべきである）。（佐藤 1986、152 頁）

テレビの普及は 1960 年代に入ってからであり、『日本言語地図』の調査は、それ以前、ないしはそれと重なる 1957 年から 1964 年にかけてであるから、佐藤の指摘は説得力があるように思われる。

ただし、それ以降の状況については、佐藤も言うように十分考えてみなければならない。例えば、先のグロットグラムが示すように、現代に近い時代においても共通語形の「地を這う伝播」の様子が認められる地域がある。図 3 の場合、調査は 1980 年前後の調査であり、70 歳代から 10 歳代の話者たちに、共通語形の「地を這う伝播」をうかがわせる斜めの線が現れている。

この点については、各地のグロットグラムの様相を総合的に把握したり、新旧の方言地図を比較したりすることでなお考えてみたいが、ひとつの予測として、項目や地域によっては、つい最近まで、いわゆる共通語化が理解語彙のレベルにしか及ばず、上位場面も含めて、使用語彙としては共通語形を用いないという状況が続いていたのではないかと思われる。「空から降る伝播」は知識としての共通語形を全国に振りまいたが、それは理解語彙のレベルにとどまるものであり、使用語彙のレベルの共通語化には、周囲の地域からの「地を這う伝播」が有効であった可能性が考えられるのである。この点に関して、アクセント共通語化について語った馬瀬良雄（1965）の発言は示唆的である。

小田切少年層のアクセント変化の方向は、優勢な長野市街地若年層への同化と見ることができ。共通語化と見えたのも、共通語アクセントの小田切への直輸入ではなく、市街地の関門を通り、そこで新しい勢力として地盤を獲得したもののみが、小田切方言の共通語化に影響を及ぼす。（引用は『論集日本語研究 10 方言』有精堂、166 頁）

4. まとめと課題—分布と伝播の諸相

以上、述べてきたことをまとめると次のようになる。

- ① 併用処理された共通語形を復活させると、その分布は、全国一律に現れるのではなく、LAJ の共通語形の分布の周辺部に出現する。
- ② これは、共通語形は空から降るように伝播するという従来の見方では説明できないものであり、共通語形も「地を這う伝播」（接触性伝播）によって普及すると言える。
- ③ そのような伝播においては、共通語形は、まず上位場面に入り込み、その後、下位場面に進出することで伝播が前進すると考えられる。
- ④ マスメディアや教育等による「空から降る伝播」は、知識としての共通語形を全国に振りまいたが、使用語彙のレベルの共通語化は周囲からの「地を這う伝播」によって行われるという状況が、つい最近まで続いていた可能性がある。

LAJにおける共通語形の伝播が、方言語形と同様に説明できるということになると、共通語形のそうした面での特徴をあえて検討する必要はないことになる。しかし、そのように速断することは待った方がよい。想像で言えば、共通語形の伝播速度は一般の方言語形よりも早いのではないか。あるいは伝播様式の問題として、都市間を優先的に伝播する「飛び火的伝播」(階層性伝播)が認められやすいのではないか。こうした点を検討した上で、方言語形の伝播との違いを確認していくべきである。

今回の考察は多分に原理的な内容であり、あらためて作成した地図をもとに、分布の特徴を綿密につかむことから始めなければならない。その際には、分布の広がり具合や位置、形状、およびそれに関わる社会的要因などの分布論的な観点と、接触を起こす共通語形と方言語形との言葉としての関係を見る言語的観点とが重要になってこよう。

今後、論を進めていきたい。

文 献

- 井上史雄(1983)「山形県内陸地方の《新方言》」井上史雄編『《新方言》と《言葉の乱れ》に関する社会言語学的研究—東京・首都圏・山形・北海道』科研費報告書
- 岸江信介・中井精一・鳥谷善史編、真田信治監修(2009)『大阪のことば地図』和泉書院
- 国立国語研究所(1966)『日本言語地図解説—方法—』大蔵省印刷局
- 佐藤亮一(1986)「地域社会の共通語化」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学 8 方言研究の問題』国書刊行会
- 徳川宗賢(1985)「地域差と年齢差—新潟県糸魚川市早川谷における調査から—」国立国語研究所『方言の諸相—『日本言語地図』検証調査報告』三省堂
- 半沢康(2003)「現代の方言」小林隆・篠崎晃一編『ガイドブック方言研究』ひつじ書房
- 馬瀬良雄(1965)「アクセント変化の要因」『都大論究』5

図 1

表 24 蛸蚪 - オタマジャクシ ◡ メメント * ドロ 〃 無答
△ ベベタナゴ * ロコ ● ギャルッコ

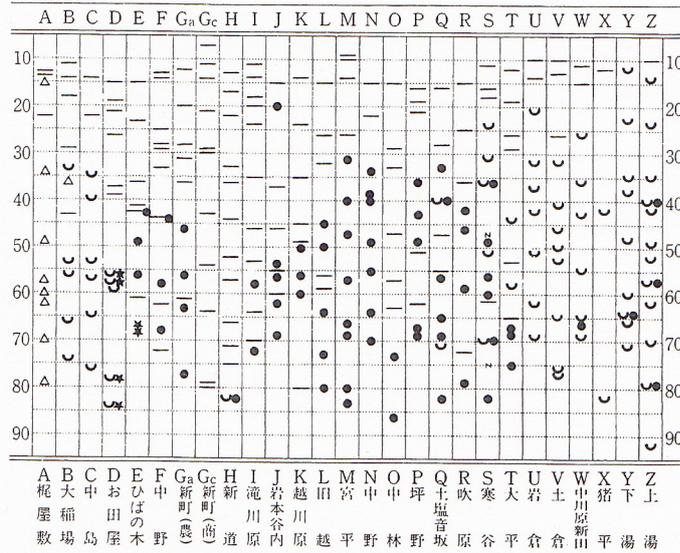


図 2

市町村	地点	70代	50代	40代	30代	20代
福	竜田	○	○	○	○	○
	楢葉町	○	○	○	○	○
廣野町	廣野	○	○	○	○	↑
島	いわき市	久ノ浜	○	○	○	↑
		四ツ倉	○	○	○	↑
		いわき	○	↑	○	↑
		湯本	○	○	↑	↑
		泉	○	↑	○	↑
茨	北茨城市	○	○	○	○	○
	大津港	○	○	○	○	○
城	日立市	磯原	↑	↑	↑	↑
		高萩市	↑	○	↑	○
		川尻	○	○	○	○
		小本津	○	○	○	○

図 3 共通語形の普及の地域差

《凡例》
○ ナンボ
↑ イクラ

図 3

(テレビ場面)

集落	70代	60代	50代	40代	30代	20代	10代
尾花沢市 芦沢							
大石田町 井出							
村山市	土生田						
	楢岡	×					
東根市	六田						
	羽入						
天童市	天童	×					
山形市	漆山						
	落合						
	宮町						
	香澄町	×	×				
上山市	松原						
	金瓶						
南陽市	上ノ山						
	中山						
高島町	小岩沢						
	郡山		×				
米沢市	福沢						
	窪田						
	大町						
福島市	閩根						
	大沢						
福島市	板谷						
	庭坂						
福島市	宮下町						

《凡例》
■ 方言形を使う
■ 共通語形と方言形を併用する
■ 共通語形(カタグルマ)を使う
× 回答なし

(家場面)

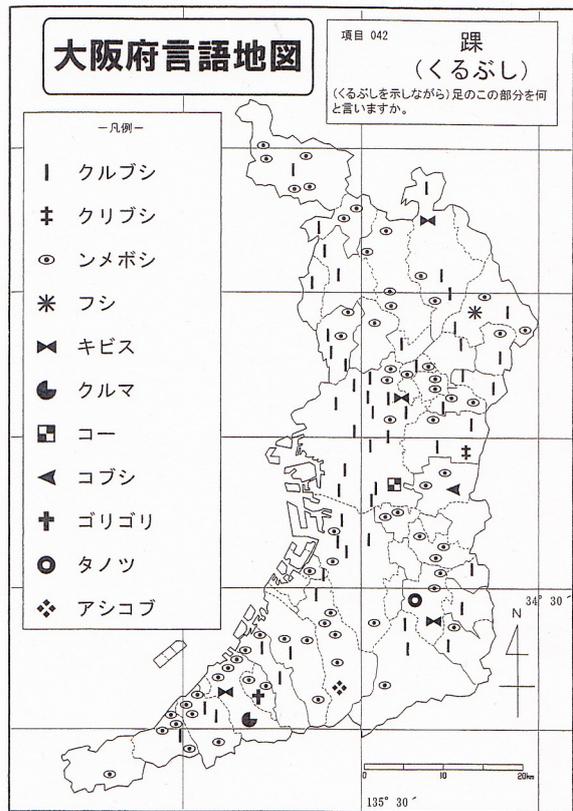
集落	70代	60代	50代	40代	30代	20代	10代
尾花沢市 芦沢							
大石田町 井出							
村山市	土生田						
	楢岡						
東根市	六田						
	羽入						
天童市	天童						
山形市	漆山						
	落合						
	宮町						
	香澄町	×	×				
上山市	松原						
	金瓶						
南陽市	上ノ山						
	中山						
高島町	小岩沢						
	郡山						
米沢市	福沢						
	窪田						
	大町						
福島市	閩根						
	大沢						
福島市	板谷						
	庭坂						
福島市	宮下町						

図 5 方言形衰退の場面差と地域差 (井上史雄 1983 の図を改変)

図の出典

- 図 1 徳川宗賢 (1985)
- 図 2・図 3 半沢康 (2003)
- 図 4 岸江信介ほか (2009)

図 4



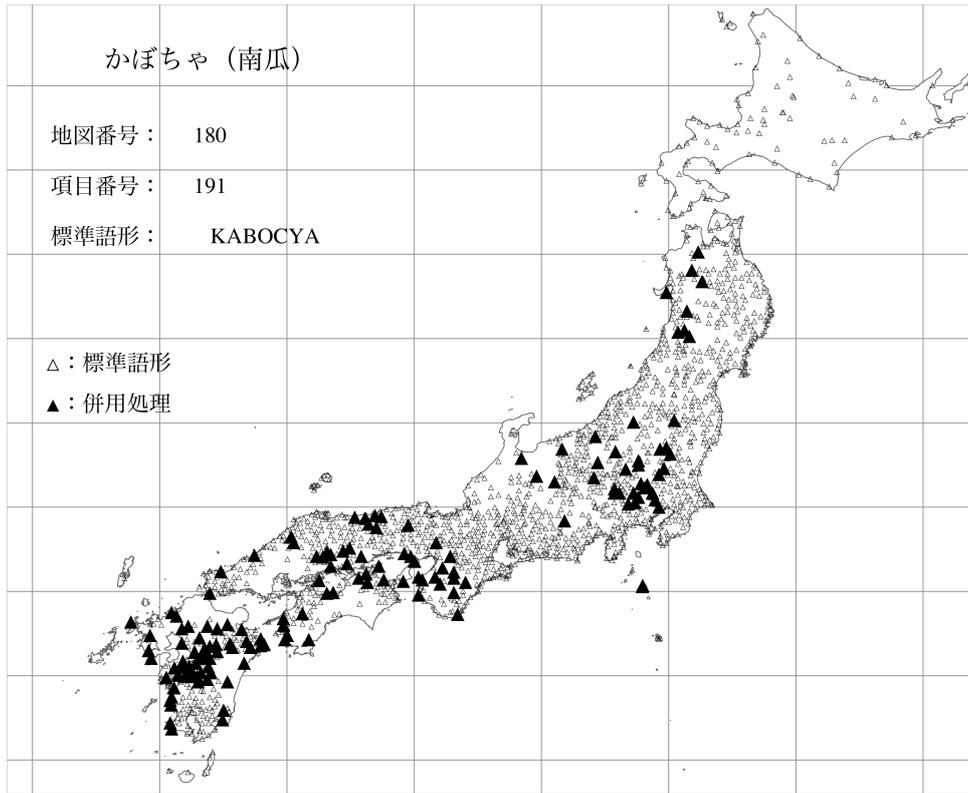


図5 標準語形と併用処理：かぼちゃ

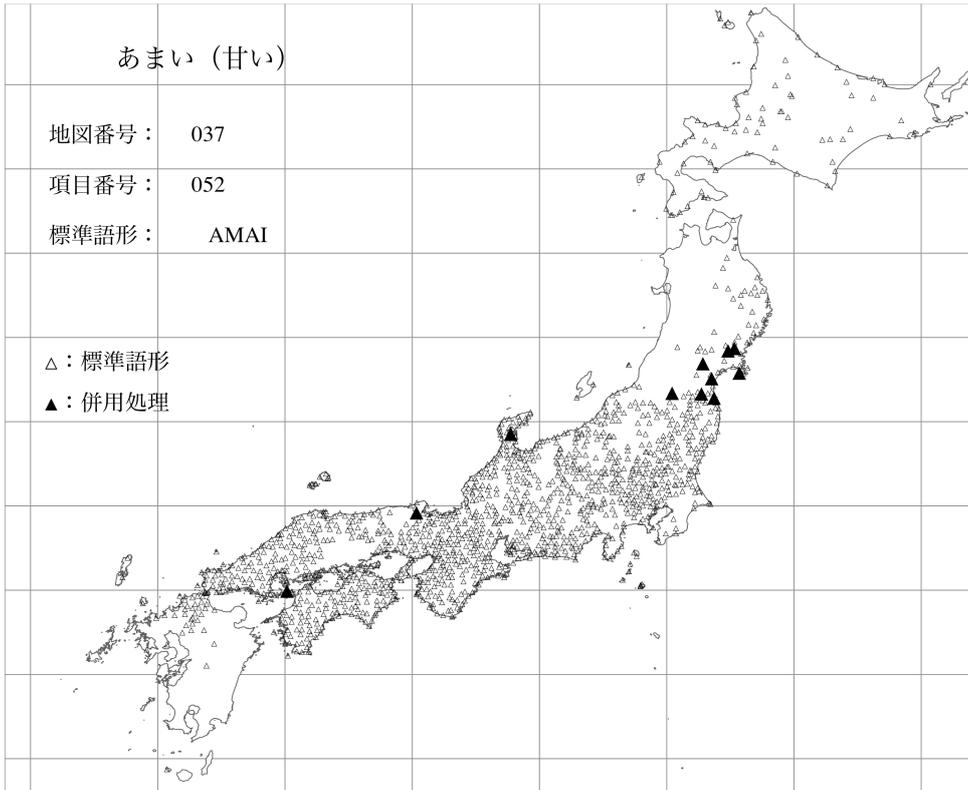


図6 標準語形と併用処理：あまい

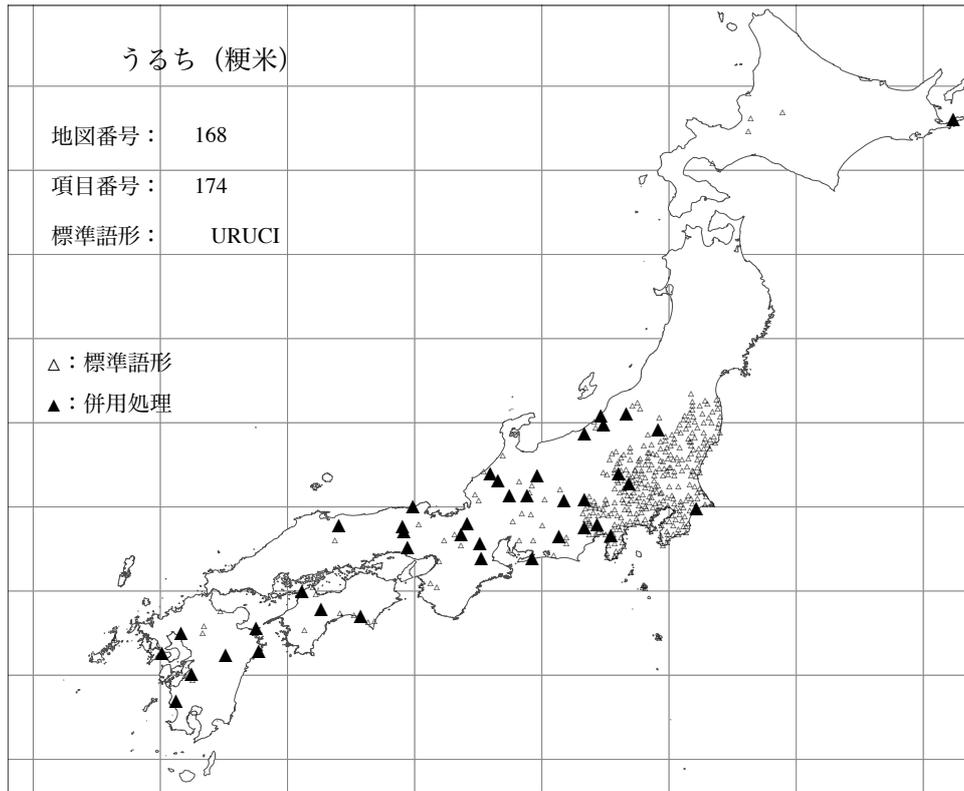


図 19 標準語形と併用処理：うるち (粳米)

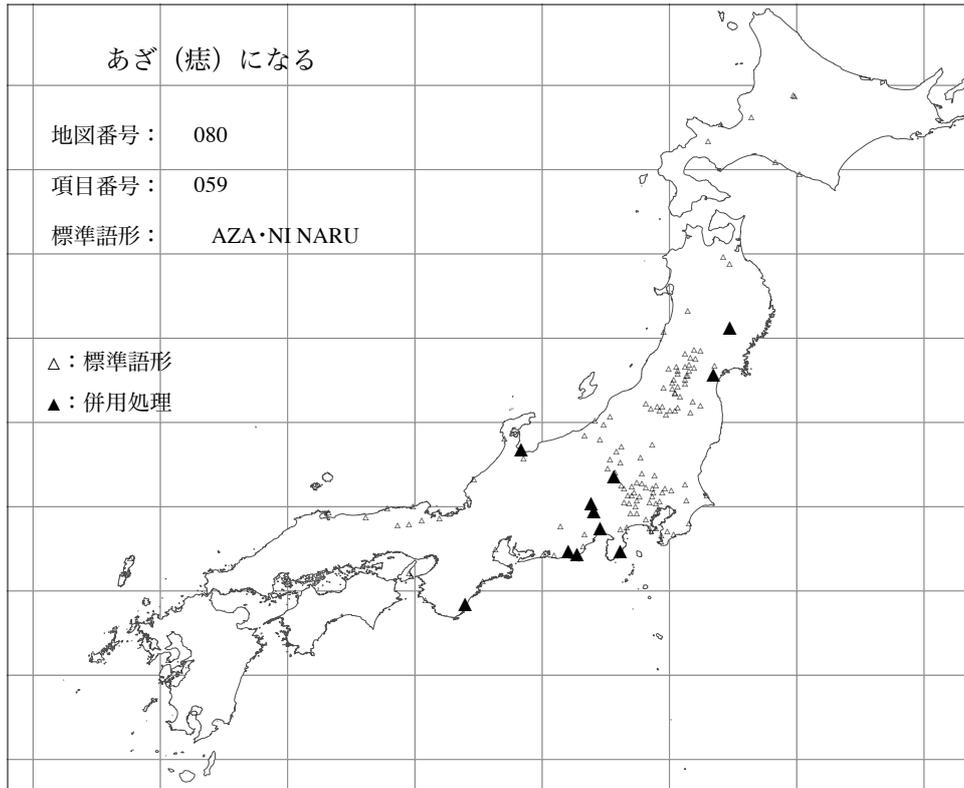


図 20 標準語形と併用処理：あざ (痣) になる

大規模方言分布データの構築に向けて

—東北大学方言研究センターの全国分布調査—

小林 隆
(東北大学)

1. 報告の趣旨

熊谷氏が代表を務めるプロジェクト「大規模方言データの多角的分析」は、特に『日本言語地図』を構成する大量のデータを整備し、さまざまな角度から研究に役立てようとするものである。この「大規模方言データ」という点では、私たちの研究室（東北大学方言研究センター）が長期にわたって取り組んでいる調査も該当するので、ここで紹介する。特に、どのようなねらいで、どんな項目を調査しているかを紹介したい。

ここで報告する調査の目的は、大きく2つある。

(1) 消えゆく日本語方言の記録

方言の記録には記述調査と並んで分布調査が不可欠である。方言の衰退が著しい今日、これまで取り上げられなかった項目について全国的な視野に立つ調査を実施し、分布データを蓄積する必要がある。

(2) 新しい分野の開拓

従来の調査内容は音韻や語彙、文法が中心であった。これまであまり調査が行われていない表現法や言語行動に関わる分野を新たに開拓し、知られざる地域差の発見につなげる必要がある。

2. 消えゆく日本語方言の記録

2. 1 語彙項目を中心とした調査

まず、2002年までに行った語彙項目を中心とする調査について述べる。

語彙に関する全国的な分布調査ということになると、日本ではほとんど『日本言語地図』しかないのが実情であり、この地図の跡を襲うような日本の東西をカバーした分布調査が待たれていた。そこで、第二の『日本言語地図』の作成をめざすべく、2002年までに次のような全国調査を実施した。

1986年調査：『日本言語地図』との関連意味項目を中心とした調査

1991年調査：『日本言語地図』との関連意味項目を中心とした調査

2000年～2002年調査：通称「危機言語調査」と呼ばれているもので複数の視点から項目を設定した調査（調査項目の設計にあたっては、篠崎晃一氏の協力を得た）。

2. 2 調査項目の方針

この調査では計8冊の調査票を使って425項目を調査した。基本的に、従来の調査で対象にならなかった項目であり、全国的な分布の解明が期待されるものである。主として次の3つの観点から項目を選定した。

- ① 『日本言語地図』の項目を直接的に補完する項目
- ② 方言地理学的調査が遅れている分野の項目
- ③ 先行研究で成果のあげられている項目

以下、順に解説する。

① 『日本言語地図』の項目を直接的に補完する項目

『日本言語地図』には身体部位に関する項目が収められている。しかし、それは身体部位を網羅的にカバーしたものにはなっていない。例えば、足部では「くるぶし」「かかと」の2項目しかなく、「足」「もも」「ひざ」「ひざがしら」「すね」「ふくらはぎ」「足首」「足の甲」「足の裏」「土踏まず」といった項目は取り上げられていない。そこで、これらの項目を補うことを考えた。方言地理学では分布の興味を優先するあまり、調査項目間の関連性や体系性への配慮が弱いと言われる。例えば、「くるぶし」を表す語形は「ひざがしら」を表す語形と歴史的な交渉をもつが、「ひざがしら」の地図がないため、その点を分布によって考察することが難しかった。記述調査との有機的な連携をはかるためにも、同一意味分野の項目を充実させておくことは必要である。

② 方言地理学的調査が遅れている分野の項目

上で述べたのは、すでに『日本言語地図』にいくつかの項目が取り上げられている分野への追加という観点である。一方、分野自体『日本言語地図』では対象にされていないという項目もある。例えば、意味分野では、職業、性格、料理、習慣・行事、地形、あいさつ言葉など、品詞では副詞（オノマトペ）や感動詞などが該当する。これらは、『日本言語地図』だけの問題でなく、全般に方言地理学的調査が遅れているものである。もちろん、これらが分布調査の対象とされにくかったことには理由がある。例えば、人の性格を表す言葉や副詞・感動詞の類は、その意味を正確に把握しにくく、方言間の比較も難しいことがひとつの障害になっていた。しかし、そのような問題を抱えながらも、ここでは分布の概観をとらえることの意義を優先し、一定の例文により意味を細かく指定するといった工夫を行うことで、調査項目に採用することにした。

③ 先行研究で成果のあげられている項目

これは上の2つの観点と矛盾するように見えるが、正確には、「先行研究では成果があげられてきたものの全国的な分布調査がなされておらず、その結果との対比が待たれている項目」と言うべきものである。この「先行研究」の中には、地方ごとの分布研究はもちろんのこと、文献学的な語史研究なども含めて考える。どのような項目が先行研究で取り上げられてきたのかは、佐藤喜代治編（1983）、柳田征司（1991）、小林隆・白沢宏枝（2002）などの目録類を利用して調査した。

例えば、「ありじごく」「あめんぼ」「みずすまし」「彼岸花」「末っ子」「お転婆」などといった項目は地域別の方言地図ではよく対象とされているが、全国調査がまだ行われていない。また、「新しい」「もったいない」といった項目は文献による語史研究では有名であるものの、方言分布からの検討がなされていなかったものである。これらの項目を調査することにより、従来の研究を深めることが可能である。

このほか、語形を固定しその意味のパラエティをみる項目を多めに取り入れたり、通信法による調査の可能性を探るために文法項目を一部試みたりした。以上の観点から選ばれ

る項目はかなりの数になるため、さらに、方言量の豊富なものや分布類型上興味深いものを優先するといった措置をとった。

《調査項目一覧》

語彙に関する調査項目を、大まかな意味分類、品詞分類をほどこして以下に掲げる。項目の配列は『日本言語地図』を参考にしてある。

○感覚・感情・状態 —— けむたい、にがい、しぶい、えがらっぽい、だるい、調子が悪い、痛い、痛む、賢い、ずる賢い、ずるい、生意気だ、かわいい、かわいそうだ、はずかしい、さびしい、退屈だ、苦しい、うらやましい、もったいない、みつともない、新しい、粗末だ、不潔だ、汚い(幼児語)、美しい(幼児語)、忙しい、面倒くさい、だらしない、いやだ、とんでもない、意外だ、たやすい、やかましい、「トゼンダ」の語形と意味、「メンコイ」の語形と意味、「ムゴイ・ムゾイ」の語形と意味、「エズイ」の語形と意味、「ショーシー」の語形と意味、「オゾイ」の意味、「ガオル」の語形と意味、最下位、逆さま、裏返し、反対、めちやくちゃ(以上、46項目)

○行為・存在 —— 歩く、走る、這う、かがむ、しゃがむ、あおむく、うつむく、あおむけ、うつぶせ、うつぶす、かぶる、抱く、持つ、搔く、産む、育てる、死ぬ、話す、さけぶ、泣く、食べる、疲れる、怒る、あわてる、騒ぐ、甘える、叱る、だます、からかう、いじめる、仲間に入れる、嘗める、破る、壊す、転ぶ、失敗する、困る、弁償する、ふざける、すねる、盗む、片付ける、へらず口をたたく、おしゃべりをする、いる[あそこに～]、いる[休んでいる子供が～]、いる[姉には子供が～]、いる[どこに～]、いる[船が～]、いる[金魚が～]、ある[出目金が～]、ある[大根が～]、「イル」の語形と意味、「イテル」を〈すわっている〉の意で使うか、「ネマル」の意味、いたずら、でたらめ、冗談、悪口(以上、59項目)

○身体 —— 頭、頭[～を横に振る]、頭[～をなでる]、頭[～を洗う]、頭[～がいい]、頭[～が痛い]、頭頂、頭蓋骨、脳みそ、髪の毛、ひよめき、顔[顔面]、顔[人相]、顔[表情]、顔[器量]、驚いた顔、ひたい、眉間、目玉、ひとみ、まぶた、まつ毛、眉毛、眉[眉墨]、下あご[全体]、下あご[先]、下あご[脇]、下あご[角]、上あご、あご全体、あご[動物]、えら、歯茎、ほお骨、首、首[～を出す]、のど、のどぼとけ、のどひこ、うで[全体]、うで[ひじから手首]、うで[肩からひじ]、ひじ、手首の関節、手の甲、手の平、からだ、背中、内臓、へそ、尻、男性器、睾丸、女性器、肛門、足、もも・ひざ、ひざがしら、すね[全体]、すね[前側]、ふくらはぎ、足の甲、足の裏、土踏まず、けづめ、「アタマ」の語形と意味、「アタマダ」を〈おおげさだ〉〈おおまかだ〉の意で使うか、「カシラ」の語形と意味、「コーベ」の語形と意味、「ナズキ」の語形と意味、「カオ」を〈スタイル〉の意で使うか、「マミ」の意味、「マミエ」の意味、「カマチ・カバチ」の語形と意味、「アゴ」に関する表現、〈牛馬のつむじ〉をツムジ・ツジと言うか(以上、76項目)

○生理・病気・怪我 —— まばたき、めくばせ、声、せき、せきばらい、くしゃみ、しゃっくり、たん、嘔吐、乳、月経、性交、小便、大便、[大便を]する、糞(幼児語)、屁、すかし屁、[屁を]する、居眠り、出産、病気、風邪、喘息、眼病、下痢、痔、中気になる、てんかん、湿疹、できもの、あばた、あかぎれ、そばかす、しみ、こぶ、いぼ、怪我、傷

あと、こむらがえり、〈腫れ物・吹き出物〉を「オモクサ・オモガネ・オモカニ」と言うか、「ナズキヤミ」の語形と意味（以上、42項目）

○人間・職業・性格 —— 父、母、祖母、曾祖母、兄弟、兄、姉、弟、妹、末子、伯母・叔母、主婦、赤ん坊、子供、乳母、親類、本家、分家、大工、木こり、猟師、神主、僧侶、乞食、漁師、いたずらっ子、おてんば、泣き虫、おしゃべり、がんこもの、ばか、うそつき、おくびょうもの、けちん坊、道楽者、なまけもの、すけべえ、おっちょこちょい、乱暴者、欲張り、わがまま、間抜け（以上、42項目）

○生活・習慣・農業 —— 自分の家、いろり、かまど、台所、炊事、井戸、下水、便所、土間、みぞ、墓場、針の穴、衣類、衣類（幼児語）、鳥もち、斧、天秤棒、財産、金持ち、へそくり、おつり、熊手、備中鍬、たきぎ、おにぎり、餅、おはぎ、赤飯、五目飯、雑炊、味噌、鮮魚、おやつ、田植え終了の祝い、収穫祝い、出産祝い、婚礼、葬式、お化け、どんど焼き、返礼の品、労働交換、飢饉、稲掛け、稲むら、開墾地、肥料、焼畑、もみがら、ぬか、麦の実の殻、ふすま、しいな、稲穂のくず、麦穂のくず、〈もみがら〉と〈ぬか〉をまとめて「ヌカ」と言うか、「スクモ・スクボ」の意味、「スクモ」の語形と意味（以上、58項目）

○動物・植物 —— 雄、雌、雄馬、雌馬、馬の子、河童、きつつき、つばめ、みそさざい、こうもり、「コマ」の語形と意味、蟻、蟻地獄、毛虫、さなぎ、蝶、蚕、こおろぎ、きりぎりす、蜂、ごきぶり、あめんぼ、みずすまし、「スガリ」の意味、蚊、ぶゆ、つくつくぼうし、ぼうふら、さざえ、おおぼこ、いたどり、すいば、ひがんばな、桑の実、どんぐり、もろこし、麻、こずえ（以上、38項目）

○自然・時間・空間 —— 天気雨、にわか雨、みぞれ、吹雪、入道雲、空、明星、北極星、北斗七星、明け方、夕方 [早い時間]、夕方 [遅い時間]、夜、大晦日、周囲、側、湿地、泉、堰、藪、峰、山の斜面、麓、谷、峠、崖、平地、砂、山頂、十字路（以上、30項目）

○副詞（オノマトペ） —— 非常に、たくさん、少し、全部、突然、すぐに、ゆっくり、いつも、時々、一日中、一晩中、全然、いろいろ、一生懸命、やっと、結局、わざわざ、わざと、必ず、無理やり、もう、かわるがわる、大声で泣く様子、しくしく泣く様子、溺れる様子（以上、25項目）

○感動詞 —— 話しかけの言葉、驚きの言葉、失敗したときの言葉、痛いときの言葉、ののしりの言葉（以上、5項目）

○あいさつ —— 別れのあいさつ、客送りのあいさつ、入店のあいさつ、客迎いのあいさつ（以上、4項目）

2. 3 調査方法

この調査は小林隆（1998）の成果を踏まえ、通信調査法で実施した。具体的には、郵便を使ってインフォーマントとの間で調査票をやりとりした。ただし、直接インフォーマントに調査票を送るのではなく、各市町村の教育委員会に協力を依頼した。すなわち、調査票は教育委員会に送り、教育委員会の判断でインフォーマントとして適当な高年層話者を選び、その人に調査票を渡してもらおうという方法をとった。

調査地点は、全国約 3200 市町村の中から 2000 市町村を選定した（2009 年度の調査で

は市町村の数が 2000 を割り込んだため、公民館を協力機関に追加した)。その際、分布調査一般の方法に倣い、特定地域に集中させるのではなく、日本全土をまんべんなく覆うように対象市町村を配置した。それぞれの市町村の範囲でインフォーマントが選ばれるので、正確にはそのインフォーマントの居住地（生育地）が調査地点という扱いになる。回収率は調査票によって異なるが、大体 6 割から 5 割程度である。

インフォーマントは原則として各市町村一名ずつとした。方言地理学調査の一般に倣い、在外歴の少ない生え抜き高年層男性を指定した。実際には、この条件に合わない人がインフォーマントに選ばれてしまった場合もある。

以下に、調査文の一例を掲げる。

1、頭に生えている毛を何と言いますか。

参考 アカマジ、アマジ、アンモ、オゴシ、カシラ、カシラガミ、カマチ、カミゲ、カミスジ、カミヒゲ、カラジ、カンザシ、ガンタ、クシ、ケバ、コーズカ、センガ、ツブリ、ヒゲ、ビンタ、ビンズラ、メメ

質問は上の例のように基本的に「なぞなぞ式」を採用し、なぞなぞによる説明が難しい場合は「共通語翻訳式」を用いた。また、必要に応じて挿し絵を利用した。さらに、インフォーマントが方言形を思い出す手がかりになるように、各地で使用されている方言形を「参考」として示した。通信調査の場合、なぞなぞ式に参考語形の提示を組み合わせることによって回収率が向上することは、小林（1988）の実験的な調査で検討済みであり、その成果に従った。

調査票に示す参考語形は、次の方法で選んだ。

- a. 全国で広く使用されている方言形を選ぶ。具体的には、『日本方言大辞典』索引編において、太字で示された語形（本編の見出し語形）で、2 つ以上の使用地域情報が上がっているものを選定した。
- b. 中央語史（文献に基づく）の上で使用された語形、いわゆる古語を選ぶ。具体的には、いちいちの語史研究の成果を利用するとともに、2000 年以降の調査では、『古語類語辞典』（芹生公男編、1955、三省堂）に上がっているものを選定した。

前者は全国から方言形を引き出すための一般的な工夫であるが、後者は、文献と方言との対照による語史研究に役立てようとしたものである。

2. 4 資料の整理と分析

これらの調査の概要については、1986 年の調査については小林（2004）に、2000 年から 2002 年にかけての調査については小林・篠崎（2004）に報告した。それらの報告では調査票も公開しているので、詳しくはそちらを見てほしい（東北大学方言研究センターのホームページにも掲載）。

調査結果については、2000 年調査のうち第 1 調査票の分（身体部位、生理・病気・怪我など）を整理し、小林・篠崎（2004）に掲載している。そこに示すデータは、ほとんど加工を行っていない、いわば「生」の状態に近い性格のものである。すなわち、インフォーマントから返送された調査票の回答を、フェイスシート項目を除き、ほぼそのまま掲載

している。このような方式をとったのは、『日本言語地図』の反省を踏まえた『方言文法全国地図』の方式がそうであるように、データ提示のあり方として、分析前の基礎的なデータの公表が重要な意味をもってくると考えたためである。利用者は、データの最初の段階から、それぞれの興味や方針に基づいて、自由に整理や分析を行うことができる。

現在のところ、資料は蓄積されつつあるが、整理・公開が追い付いていない。分析については、まだ体系的にはなされていないが、次のような研究が生み出されている。

【項目別論文一覧】

- 「死ぬ」
澤村美幸（2010）「「死」をめぐる言葉—方言学の視点から—」『東北文化研究室紀要』51
- 「女性器」
中井精一（2008）「女性器の方言にみる列島の地域史—方言分布論序説—」山口幸洋博士の古希をお祝いする会『方言研究の前衛』桂書房
- 「弟」
澤村美幸（2007）「方言伝播における社会的背景—「シャテー（舎弟）」を例として—」『日本語の研究』3 - 1（澤村 2011『日本語方言形成論の視点』岩波書店に再録）
- 「「スガリ」の意味」「蟻」
澤村美幸（2009）「方言形成と意味変化—「スガリ」を例として—」『東北文化研究室紀要』50（澤村 2011『日本語方言形成論の視点』岩波書店に再録）
澤村美幸（2009）「意味変化と地域差・位相差—「スガル」を例として—」『国語学研究』48（澤村 2011『日本語方言形成論の視点』岩波書店に再録）
- 「葬式」
澤村美幸（2007）「ジャンボンの謎—社会的背景と方言—」『日本語学』26 - 11
澤村美幸（2008）「〈葬式〉を表す方言分布の形成と社会的要因」『日本語の研究』4 - 4（澤村 2011『日本語方言形成論の視点』岩波書店に再録）
- 「焼畑」
澤村美幸・小林隆（2009）「方言の分布と文化的背景—『焼畑』の名称を例に—」『日本語学会 2009 年度春季大会予稿集』
- 「桑の実」
新井小枝子（2011）「〈桑の実〉を表す語彙—造語法と方言分布—」『国文学 言語と文芸』127
- 「大声で泣く様子のオノマトペ」
小林隆（2010）「オノマトペの地域差と歴史—「大声で泣く様子」について—」小林隆・篠崎晃一編『方言の発見』ひつじ書房
- 「失敗の感動詞」
澤村美幸・小林隆（2005）「『しまった！』に地域差はあるか？」『月刊言語』34 - 11
澤村美幸（2010）「感動詞の地域差と歴史—「失敗の感動詞」を例として—」小林隆・篠崎晃一編『方言の発見』ひつじ書房（澤村 2011『日本語方言形成論の視点』岩波書店に再録）

○「痛み」(感動詞)

澤村美幸 (2011)『日本語方言形成論の視点』岩波書店

○「入店のあいさつ」

小林隆 (2012)「あいさつ表現の発想—買い物言葉— (柳田国男没後 50 周年記念シンポジウム)」『日本方言研究会第 95 回研究発表会発表原稿集』

3. 新しい分野の開拓

3. 1 表現法・言語行動に関わる分野の開拓

いわゆる語彙的・文法的な項目ではなく、表現法・言語行動に関わる分野を新たに開拓し、これまで知られていなかった地域差を発見したいと考える。そのため、2009 年以降、表現法や言語行動関係の分野について、調査を進めている。

現在、次のような調査を実施済みである。

2009 年調査：感動詞〈感情系・感覚系・行為系〉を中心とした調査

2010 年調査：表現法・言語行動を中心とした調査

2011 年調査：感動詞〈談話系 - 応答詞・声かけ・談話標識〉を中心とした調査

3. 2 感動詞〈感情系・感覚系・行為系〉を中心とした調査

感動詞を次のように分類する。

- A. 感情系感動詞 (感動詞らしい感動詞)
- B. 感覚系感動詞 (生理的な音を含む)
- C. 行為系感動詞 (掛け声の類を含む)
- D. 談話系感動詞 (応答詞や声かけ・談話標識など)

このうち、A・B・Cの分野については、2009 年度に 2 冊の調査票 (第 1 調査票 59 項目、第 2 調査票 55 項目、計 114 項目。澤村美幸氏との共同研究) で調査を実施している。

【第 1 調査票】 (数字は調査票における調査項目番号)

1. 驚き、2. 失敗 (反省的)、3. 失敗 (瞬間的)、4. 狼狽、5. 落胆 (大)、6. あきれ、7. 感激、8. 悲嘆、9. 落胆 (小)、10. 期待、11. 恐怖、12. 意外 (落胆)、13. 意外 (感激)、14. 不審、15. 安堵、16. 感嘆 (自然)、17. 感嘆 (美人)、18. 賞賛、19. 満足、20. 悔しさ、21. 非難、22. 嫌悪、23. 不満、24. 恐縮、25. 憤慨、26. 困惑、27. 諦め、28. 苛立ち、29. 思い出し、30. 暑さ、31. 熱さ、32. 痛さ、33. 辛さ、34. 汚さ、35. 勢いづけ (荷物)、36. 車引き、37. 船こぎ、38. 息合わせ、39. 御輿担ぎ、40. 攻撃、41. バランスとり、42. 勢いづけ (体勢)、43. 弛緩、44. 快感、45. 満腹、46. せき、47. せきばらい、48. くしゃみ、49. しゃっくり、50. 痰吐き、51. げっぷ、52. いびき、53. あくび、54. 溺れる様子、55. 驚いた顔、56. 汚い (幼児語)、57. 糞 (幼児語)、58. 衣類 (幼児語)、59. 美しい (幼児語)

【第 2 調査票】

1. 叱る、2. 叱る (幼児)、3. 制止する、4. 制止する (幼児)、5. 褒める、6. 可愛がる、7. あやす、8. いないないばあ、9. 寝かす、10. 非難する、11. 静かにさせる、12. からかう、13. 反発する、14. 拒絶する、15. 降参する、16. 訪問する (一般)、17. 訪問に答える、

18.家の中に招く、19.訪問する(商店)、20.促す、21.引き取る、22.引き受ける、23.渡す、24.謝罪する、25.感謝する、26.感謝へ返答する、27.辞退する、28.会う、29.別れる、30.厄除けする、31.祈る、32.飛びかかる、33.万歳する、34.応援する、35.綱を引く、36.スタートを切る、37.じゃんけんをする、38.あいこのとき、39.勝負から抜ける、40.数を数える、41.豆を撒く、42.鶏を呼ぶ、43.鶏を追う、44.雀や鳩を追う、45.猫を呼ぶ、46.犬を呼ぶ、47.犬を追う、48.犬をけしかける、49.馬を呼ぶ、50.馬を追う、51.牛を呼ぶ、52.牛を追う、53.牛を進ませる、54.牛を止まらせる、55.驚いたときの言い方

3. 3 感動詞〈談話系 - 応答詞・声かけ・談話標識〉を中心とした調査

2011年に実施した調査は、上記Dの分野「談話系感動詞(応答詞や声かけ・談話標識など)」を対象とした。

この調査でも2冊の調査票を用意した。第1調査票46項目、第2調査票44項目、計90項目である。全体は次のように分類される。

- a. 応答グループ(第1調査票1~57、第2調査票31~41)
- b. 声かけグループ(第2調査票1~30)
- c. その他(第2調査票42~44)

調査項目は、主として『日本方言大辞典』における感動詞の情報を手がかりに、談話系感動詞の網羅的な把握をめざす立場から設定した。*印は、特に、方言研究ゼミナール事務局編「日本語方言立ち上げ詞の研究」調査票を参考にした項目で、慣用句的な感動詞にあたる。

場面設定は「親しい友人を相手に話すくだけた言葉遣い」を中心としたが、一部に待遇的な観点を取り入れた項目もある。

【第1調査票】

1. 「うん、そうだよ。」(肯定応答・対友人)
2. 「はい、そうです。」(肯定応答・対目上)
3. 「いや、違うよ。」(否定応答・対友人)
4. 「いえ、違います。」(否定応答・対目上)
5. 「よし、わかった。」(承諾・対友人)
6. 「はい、わかりました。」(承諾・対目上)
7. 「いや、だめだ。」(拒否・対友人)
8. 「いえ、できません。」(拒否・対目上)
9. * 「よっしゃ、わかった。」(決意的承諾)
10. * 「ほいきた。おやすいご用だ。」(歓迎的承諾)
11. 「うーんもう、わかったわかった。」(降参的承諾)
12. 「そうこなくっちゃ。」(期待的承諾)
13. 「いやだ、誰にもやるもんか。」(強い拒否)
14. 「うん、そうだな。」(同意)
15. 「いや、降らないだろう。」(弱い不同意)

16. 「いや、降るはずないよ。」(強い不同意)
17. 「いやあー、降らないんじゃないかなあ。」(迷いの不同意)
18. 「うーん、降るかなあ。」(疑い)
19. 「うーん、どうしようかな。」(迷い)
20. 「とんでもない、おれじゃないよ。」(反発的否定)
21. 「おう、おれがやったんだよ。」(開き直りの肯定)
22. 「いやいや、そんなはずはないよ。」(熟慮的否定)
23. * 「いやいや、とんでもない。」(恐縮的否定)
24. 「なんのこれしき。」(忍耐的否定)
25. * 「なーに、たいしたことないさ。」(放任的否定)
26. 「うん、いいよ。」(許可)
27. 「いや、だめだ。」(不許可)
28. * 「そうは間屋がおろさんぞ。」(強い不許可)
29. 「なにを一、このやろう。」「なめんなよ、この一。」(憤慨的反発)
30. 「なんだよ、文句あつか。」(威圧的反発)
31. 「何言ってやがる。」「ばか言ってんじゃないよ。」(憤慨的非難)
32. 「よく言うよ。」(あきれ)
33. 「よくもそんなことが言えるな。」(あきれの反発)
34. 「またそんなことを言う。」「ほんとにもう。」(あきれの抗議)
35. 「いやはや、参ったな。」(あきれの降参)
36. 「うーん、もういいよ。」(困惑的あきらめ)
37. * 「へん、勝手にしやがれ。」(憤慨的放任)
38. * 「冗談じゃないよ。」(憤慨的突き離し)
39. 「うーんと、どうだったかなあ。」「えーと、なんだっけなあ。」(記憶検索)
40. 「さて、どーしたもんかなあ。」(思案)
41. 「まあ、行ってみたらどうだ。」(曖昧判断)
42. 「ほう、そうか。」(単純納得)
43. 「ふーん、そうか。」(感心納得)
44. 「へー、そうか。」(予想外納得)
45. 「は一、なるほどなあ。」(深い感心納得)
46. 「そうか、そうだったのか。」(得心納得)

【第2調査票】

1. 「おい、落としたりよ。」(声かけ〈注意喚起・対友人〉)
2. 「おい、落としたりぞ。」(声かけ〈注意喚起・対妻〉)
3. 「ねえ、落としたりわよ。」(声かけ〈注意喚起・対夫〉)
4. 「もしもし、落としましたよ。」(声かけ〈注意喚起・対目上〉)
5. 「もしもし、落としましたよ。」(声かけ〈注意喚起・対見知らぬ人〉)
6. 「おい、ちょっと来てくれ。」(声かけ〈呼び寄せ・近距離〉)
7. 「〇〇」(応答〈近距離〉)

8. 「おい、ちょっと来てくれー。」(声かけ〈呼び寄せ・遠距離〉)
9. 「〇〇」(応答〈遠距離〉)
10. 「おい、ちょっと待ってくれ。」(声かけ〈呼び止め・近距離〉)
11. 「おい、待って来てー。」(声かけ〈呼び止め・遠距離〉)
12. 「おい、やめろよ。」(声かけ〈制止〉)
13. 「これこれ、やめなさい。」(声かけ〈制止・対目下〉)
14. 「あの一」(遠慮的声かけ)
15. 「そうそう、そういえば」(思い出しの声かけ)
16. 「さあ、帰ろう。」(促し)
17. 「さあさあ、帰ろう帰ろう。」(強い促し)
18. 「さて、始めようか。」「どれ、始めるか。」(開始)
19. 「なあ、頼むよ。」(懇願)
20. 「なあ、そうだろ。」(同意要求)
21. 「なっ、そうだろ。」(念押し的同意要求)
22. 「なっ。」(念押し)
23. 「どれ、見せてみろ。」(引き取り)
24. 「ほら、あいつだよ。」(記憶喚起)
25. 「そら、見てみろ。」「ほら、言わんこっちゃない。」(的中非難)
26. 「では、また。」(切り上げ)
27. 「そんなら、よろしく。」(切り上げ〈依頼〉)
28. 「もしもし」(「もしもし、佐藤さんですか。鈴木ですが。」)(声かけ〈電話〉)
29. 「はい、佐藤です。」(応答〈電話〉)
30. 「〇〇」(切り上げ〈電話〉)
31. 「そうそう、そのことそのこと。」(的中表明)
32. 「そう、そのとおりだ。」「まったくだよ。」(感激同意)
33. 「当たり前だ!」「知れたことよ!」(当然同意)
34. 「うん」(単純情報受容表示)
35. 「そう」「そうそう」(同意的情報受容表示)
36. 「ほんと?」(確認)
37. 「えっ、何て言った?」「えっ、何だって?」(聞き返し)
38. 「えっ、どうして?」(呆然的聞き返し)
39. 「えっ、そんなあ。」(落胆的反発)
40. 「おっ、やったあ。」(感激的受容)
41. 「ほう、それでそれで。」(話の催促)
42. 「いや」(言い直し)
43. 「あれ、なんだっけ」(失念)
44. 「えーと、あの一」(言葉検索)

3. 4 表現法・言語行動を中心とした調査

表現意図を軸にしたさまざまな場面についての調査項目や、話術(言語的技法)のバラ

エティに関する調査項目などからなる（調査項目の構築は岸江信介氏、西尾純二氏と共同で行った）。

【第1調査票】

1. 受託／拒否：役員を頼む
 - 1.1.受託の表現形式
 - 1.2.受託時における謙遜表明の必要性<追加>
 - 1.3.受託の明言の必要性（⇔謙遜表現のみ）
 - 1.4.拒否の表現形式
 - 1.5.拒否時における理由説明の必要性<追加>
 - 1.6.拒否の明言の必要性（⇔理由表現のみ）
2. 依頼／受託／拒否／感謝：お金を借りる
 - 2.1.依頼の表現形式
 - 2.2.理由説明の必要性
 - 2.3.恐縮表明の必要性
 - 2.4.効果補強の必要性
 - 2.5.感謝の表現形式
 - 2.6.拒否への応答の表現形式
 - 2.7.受託の表現形式
 - 2.8.感謝への応答の表現形式
 - 2.9.拒否の表現形式
3. 命令：静かにさせる
4. 勧め／受託／辞退：食事を勧める
 - 4.1.勧めの表現形式
 - 4.2.受託の表現形式
 - 4.3.辞退の表現形式
5. 謝罪：粗相をわびる
 - 5.1.謝罪の表現形式
 - 5.2.謝罪への応答の表現形式
6. 依頼：道を尋ねる（中学生の男の子）
 - 6.1.依頼行動の有無
 - 6.2.依頼の表現形式
 - 6.3.依頼の際の気遣い
7. 依頼：道を尋ねる（急ぎ足のサラリーマン）
 - 7.1.依頼行動の有無
 - 7.2.依頼の表現形式
 - 7.3.依頼の際の気遣い
8. 要求：値切る
 - 8.1.要求（値切り）行動の有無
 - 8.2.要求（値切り）の表現形式

- 8.3.要求（値切り）の日常化
- 9. 拒否：新聞購読を断る（見知らぬ販売員）
 - 9.1.拒否行動の有無
 - 9.2.拒否の表現形式
 - 9.3.拒否の際の気遣い
- 10. 拒否：新聞購読を断る（親しい友人）
 - 10.1.拒否行動の有無
 - 10.2.拒否の表現形式
 - 10.3.拒否の際の気遣い
- 11. 感謝：落とし物を届けてもらう
 - 11.1.感謝の表現形式（その場）
 - 11.2.感謝行動の有無・種類（後日）
 - 11.3.感謝の表現形式（後日）
 - 11.4.感謝行動の内容（後日）
- 12. 感謝：醤油さしを取ってもらう
 - 12.1.配偶者への感謝
 - 12.2.息子への感謝
 - 12.3.娘への感謝
 - 12.4.息子の嫁への感謝
 - 12.5.娘の婿への感謝

【第2調査票】

- 1. 話のつなぎ（会話の場への配慮）
- 2. 盛り上げ（会話の場への配慮）
- 3. ボケ（会話の場への配慮）
- 4. ツッコミ（会話の場への配慮）
- 5. 自分の失敗談（会話の場への配慮）
- 6. 水向け（会話の場への配慮）
- 7. うなずき・あいづちなど（会話の場への配慮）
- 8. 譲歩（会話の場への配慮）
- 9. 予防線
- 10. 冗談めかした非難
 - 11. 気まずさの解消＜謝罪・開き直り・言い逃れ・冗談・ボケ・知らない振りなど＞
 - 12. 気まずさの解消＜指摘・ツッコミ・庇う・冗談・ボケ・知らない振りなど＞
 - 13. 言い訳＜謝罪・質問・理由説明・うそ・冗談など＞
 - 14. 意識的な褒め
 - 15. 深刻な事態への対応＜感謝・感情吐露・冗談＞
 - 16. 婉曲的な依頼
 - 17. 間接的な注意
 - 18. あいまいな返事

19. お世辞
20. 不快な事態への対応<我慢・催促・うそ・婉曲的な催促・いやみなど>
21. 好意の受託<率直発言・恐縮・感謝・遠慮・辞退など>
22. 祝儀の事情尋ね（私事への立ち入り）
23. 行く先尋ね（私事への立ち入り）
24. 行く先尋ねへの回答（私事への立ち入りへの対応）
25. 不本意な結果への対応<指摘・発見・予想外・なぐさめ・励まし・比較など>
26. 不本意な結果への対応<指摘・発見・予想外・落胆・負け惜しみ・比較など>
27. 店員との会話<会話回避・お世辞・冗談・うそ・正直発言・会話への付き合いなど>
28. しつけ<諭し・自覚強要・周囲への配慮・脅し・期待持たせ・叱り・体罰など>
29. 体面繕い<小声・身体言語・実力行使など>
30. 見知らぬ人への声掛け<質問・挨拶・不接触など>
31. 赤ちゃんへの声掛け<直接・間接・身体接触・不接触など>
32. 質問の前置き
33. お祝いへの返答<感謝・苦労話・謙遜など>
34. 謝意の方法<電話・メール・手紙・品物など>

4. おわりに

今回の報告は調査内容の紹介、および経過報告が中心となり、特に、後半の新しい分野の取り組みについては解説が不十分であった。いずれ機会を得て詳しく説明したい。

今後の調査としては、表現意図を軸にしたさまざまな場面についての調査や、話術（言語的技法）のバラエティに関する調査を充実させる必要があると思っている。今のところ、一部の項目しか取り上げていないオノマトペについての全国調査も、近いうちに企画したいと考えている。

文 献

- 小林隆（1988）「通信調査法の再評価」国立国語研究所『方言研究法の探索』秀英出版
- 小林隆（2002）「方言学のパースペクティブ」日本方言研究会編『21世紀の方言学』国書刊行会
- 小林隆（2004）『方言学的日本語史の方法』ひつじ書房
- 小林隆・篠崎晃一（2004）『消滅の危機に瀕する全国方言語彙資料』科学研究費報告書
- 小林隆（2005）「第二の『日本言語地図』をめざして」『国文学』50-5
- 小林隆・白沢宏枝（2002）「方言地図項目一覧－主要語彙項目－」馬瀬良雄監修『方言地理学の課題』明治書院
- 佐藤喜代治編（1983）『語彙研究文献語別目録』明治書院
- 柳田征司（1991）『室町時代語資料による基本語詞の研究』武蔵野書院

『日本言語地図』 データベース

『日本言語地図』 データベースの概要

熊谷 康雄
(国立国語研究所)

1. はじめに

『日本言語地図』(以下 LAJ) の目的や基本的な考え方は、再録した「『日本言語地図』のデータベース化」(p.165) および本報告書の熊谷 (p.111) に記してある。また、『日本言語地図』データベース (LAJDB) の詳細については、別途に「『日本言語地図』データベース 解説」を作成する。ここでは上述の記述への補足を含め、簡単に概要を示す。

2. データベースの構築状況

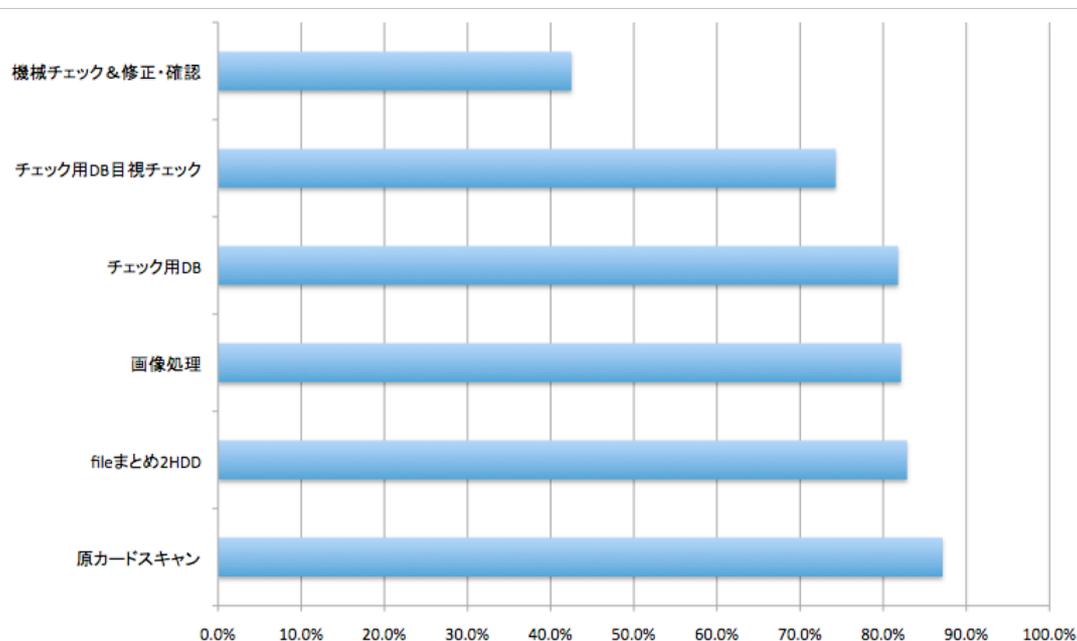


図1 『日本言語地図』データベースの構築状況
(調査項目数に対する各処理段階の済んだ項目の割合)

LAJDB は、1999 年頃から本格的に取り組みはじめた。現在の状況は上の通りであり、整備完了の項目は 119 項目、全調査項目数に対する割合は 43%、LAJ として地図化、刊行された項目 240 項目に対しては 49%である。

3 画像データベース

山カードの表面、裏面、語彙カードの表面、裏面の画像と対応する文字データをデータベース化してある。LAJDB の画像データベースの文字データの項目は、「カード番号」、「項目番号」、「地点番号」、「面記号」、「見出し語形数」、「県名」、「備考」、「項目名」、「語形 (LAJ 凡例)」、「画像ファイル名」である。「備考」には、データやデータベース化の作業に関する注記が入力してある。

画像データベースはファイルメーカーを利用して作成してある。データベースの提供形態や利用方法の詳細は、後述のLAJDBの公開ページ（および別途に作成する「『日本言語地図』データベース 解説」）に記す。



図2 山カード サンプル画面

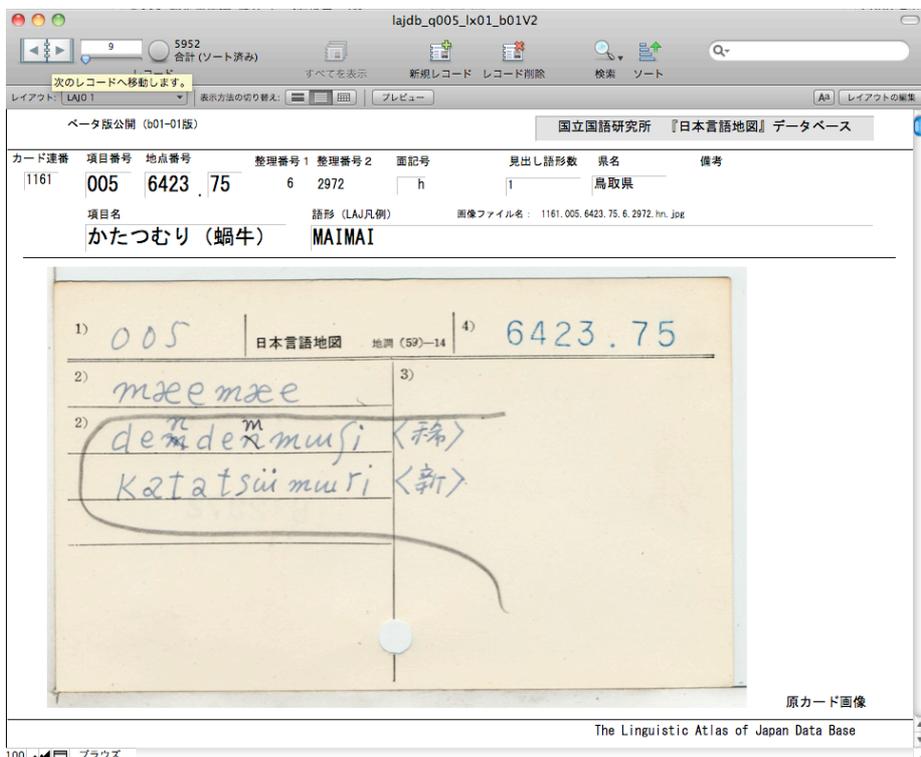


図3 語彙カード サンプル画面

4. 文字データ (EXCEL ファイル)

文字データは目的に合わせて使いやすいうように、形式1と形式2の2通りの形で作成した。

形式1：1地点、1レコード、複数回答の場合は、語形欄に複数回答

形式2：1地点、複数レコード、複数回答は回答毎に1レコード。回答欄は1語形のみ

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K
1	no	item_id	loc_a	loc_b	code_a	code_b	項目名	県名	語形	併用語形数	
2	2319	005	0228	96	6	2542	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CINNYA(N)	1	
3	2320	005	0237	79	6	2536	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CINNYAMA	1	
4	2321	005	0237	84	6	2721	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CINMYAA	1	
5	2322	005	0238	55	6	2535	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CINNYAMA	1	
6	2323	005	0246	48	6	2491	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CINMO	1	
7	2324	005	0246	97	6	2500	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CINDARI	1	
8	2325	005	0247	31	6	2499	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CINDARI	1	
9	2326	005	0247	56	6	2541	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CINNYA(N)	1	
10	2327	005	0248	00	6	2533	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CIN'YAMA	1	
11	2328	005	0249	17	6	2544	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CUNNYAAGUU	1	
12	2329	005	0256	08	6	2498	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CINDARI	1	
13	2330	005	0256	76	6	2503	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CUNDARI	1	
14	2331	005	0256	89	6	2502	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CUNDARI	1	
15	2332	005	0257	12	6	2497	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CINDARI	1	
16	2333	005	0257	43	6	2496	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CINDARI	1	
17	2334	005	0265	96	6	0056	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CINMYANDERA	1	
18	2335	005	0275	36	6	0054	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CINNYANDEERA	1	
19	2336	005	0275	97	6	2540	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CINNYA(N)	1	
20	2337	005	0276	50	6	2539	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CINNYA(N)	1	
21	2338	005	0294	66	6	2494	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CINTAI	1	
22	2339	005	0294	93	6	2493	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CINTAI	1	
23	2340	005	0340	00	6	2725	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CUNMYAAYUU	1	
24	0001	005	0716	46	6	1726	かたつむり(蛸牛)	北海道	DENDENMUSI	1	
25	0002	005	0724	12	6	1725	かたつむり(蛸牛)	北海道	DENDENMUSI	1	
26	0003	005	0724	58	6	1724	かたつむり(蛸牛)	北海道	DENDENMUSI	1	
27	0004	005	0724	95	6	0468	かたつむり(蛸牛)	北海道	KATACUMURI.DENDENMUSI	2	
28	0005	005	0737	94	6	1723	かたつむり(蛸牛)	北海道	DENDENMUSI	1	
29	0006	005	0747	70	6	0201	かたつむり(蛸牛)	北海道	NAMEKUZI.KATACUMURI	2	
30	0007	005	0776	88	6	1722	かたつむり(蛸牛)	北海道	DENDENMUSI	1	
31	0008	005	0779	03	6	1721	かたつむり(蛸牛)	北海道	DENDENMUSI	1	
32	0009	005	0789	95	6	1720	かたつむり(蛸牛)	北海道	DENDENMUSI	1	

図4 エクセルファイル (形式1)

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K
1	no	item_id	loc_a	loc_b	code_a	code_b	項目名	県名	語形	併用語形数	語形(併用パターン)
2	2319	005	0228	96	6	2542	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CINNYA(N)	1	CINNYA(N)
3	2320	005	0237	79	6	2536	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CINNYAMA	1	CINNYAMA
4	2321	005	0237	84	6	2721	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CINMYAA	1	CINMYAA
5	2322	005	0238	55	6	2535	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CINNYAMA	1	CINNYAMA
6	2323	005	0246	48	6	2491	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CINMO	1	CINMO
7	2324	005	0246	97	6	2500	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CINDARI	1	CINDARI
8	2325	005	0247	31	6	2499	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CINDARI	1	CINDARI
9	2326	005	0247	56	6	2541	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CINNYA(N)	1	CINNYA(N)
10	2327	005	0248	00	6	2533	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CIN'YAMA	1	CIN'YAMA
11	2328	005	0249	17	6	2544	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CUNNYAAGUU	1	CUNNYAAGUU
12	2329	005	0256	08	6	2498	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CINDARI	1	CINDARI
13	2330	005	0256	76	6	2503	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CUNDARI	1	CUNDARI
14	2331	005	0256	89	6	2502	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CUNDARI	1	CUNDARI
15	2332	005	0257	12	6	2497	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CINDARI	1	CINDARI
16	2333	005	0257	43	6	2496	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CINDARI	1	CINDARI
17	2334	005	0265	96	6	0056	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CINMYANDERA	1	CINMYANDERA
18	2335	005	0275	36	6	0054	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CINNYANDEERA	1	CINNYANDEERA
19	2336	005	0275	97	6	2540	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CINNYA(N)	1	CINNYA(N)
20	2337	005	0276	50	6	2539	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CINNYA(N)	1	CINNYA(N)
21	2338	005	0294	66	6	2494	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CINTAI	1	CINTAI
22	2339	005	0294	93	6	2493	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CINTAI	1	CINTAI
23	2340	005	0340	00	6	2725	かたつむり(蛸牛)	鹿児島県	CUNMYAAYUU	1	CUNMYAAYUU
24	0001	005	0716	46	6	1726	かたつむり(蛸牛)	北海道	DENDENMUSI	1	DENDENMUSI
25	0002	005	0724	12	6	1725	かたつむり(蛸牛)	北海道	DENDENMUSI	1	DENDENMUSI
26	0003	005	0724	58	6	1724	かたつむり(蛸牛)	北海道	DENDENMUSI	1	DENDENMUSI
27	0004	005	0724	95	6	0468	かたつむり(蛸牛)	北海道	KATACUMURI	2	KATACUMURI.DENDENMUSI
28	0005	005	0724	95	6	0468	かたつむり(蛸牛)	北海道	DENDENMUSI	2	KATACUMURI.DENDENMUSI
29	0006	005	0737	94	6	1723	かたつむり(蛸牛)	北海道	DENDENMUSI	1	DENDENMUSI
30	0006	005	0747	70	6	0201	かたつむり(蛸牛)	北海道	NAMEKUZI	2	NAMEKUZI.KATACUMURI
31	0006	005	0747	70	6	0201	かたつむり(蛸牛)	北海道	KATACUMURI	2	NAMEKUZI.KATACUMURI
32	0007	005	0776	88	6	1722	かたつむり(蛸牛)	北海道	DENDENMUSI	1	DENDENMUSI

図5 エクセルファイル (形式2)

5. 凡例語形の文字データのコーディング

ASCII で入力できる LAJ の凡例欄の表記はそのままであるが、一部の音声記号による表記の部分は基本的に GAJ のコーディングと同様のシステムに従いながら、必要に応じて一部に改変を加えて入力した。必要に応じて表記に関する注記を加え、データの README 等に記載した。これらは、まとめた上で「LAJDB 解説」に記載する。

6. 基礎図・参考図の電子地図

LAJDB のデータを利用して分布図を作成、分析する際に利用するため、基礎図の電子化と参考図（近代道路図、地勢図、藩領図）を電子化した。ファイル形式は GIS 等で標準的に用いられるシェープファイル形式と Adobe Illustrator 形式（AI 形式）のものを作成した。

シェープファイルは、LAJ の制作年を考慮して、日本測地系で作成した。シェープファイルは、基礎図、参考図合わせて、海岸線、都道府県支庁界、湖、mesh_小、mesh_大、調査 PT（位置調整済み）、poi2mesh（地点番号から機械的に展開した場合）、都市、道路、藩都、藩領、地勢_山系、地勢_水系、河川名を作成した。詳しくは「LAJDB 解説」で説明するので、ここでは、一部のイメージを示すのみに留める。（図 6）

AI ファイルは、シェープファイルを元に作成し、北海道、奄美・沖縄などをカットして配置したものである。LAJ の地図の配置に近づけた形で作成してある。GAJ のプラグインの利用を考えたものであるが、各調査地点には 6 桁の地点番号を持たせてあり、GAJ の白地図にあるような 2 桁の地点コードを介在させず、6 桁の地点番号で直接対応づけるようにしてある。図 7 に基礎図に対応するもの、図 8 に近代道路図のレイヤーの一部を示す。

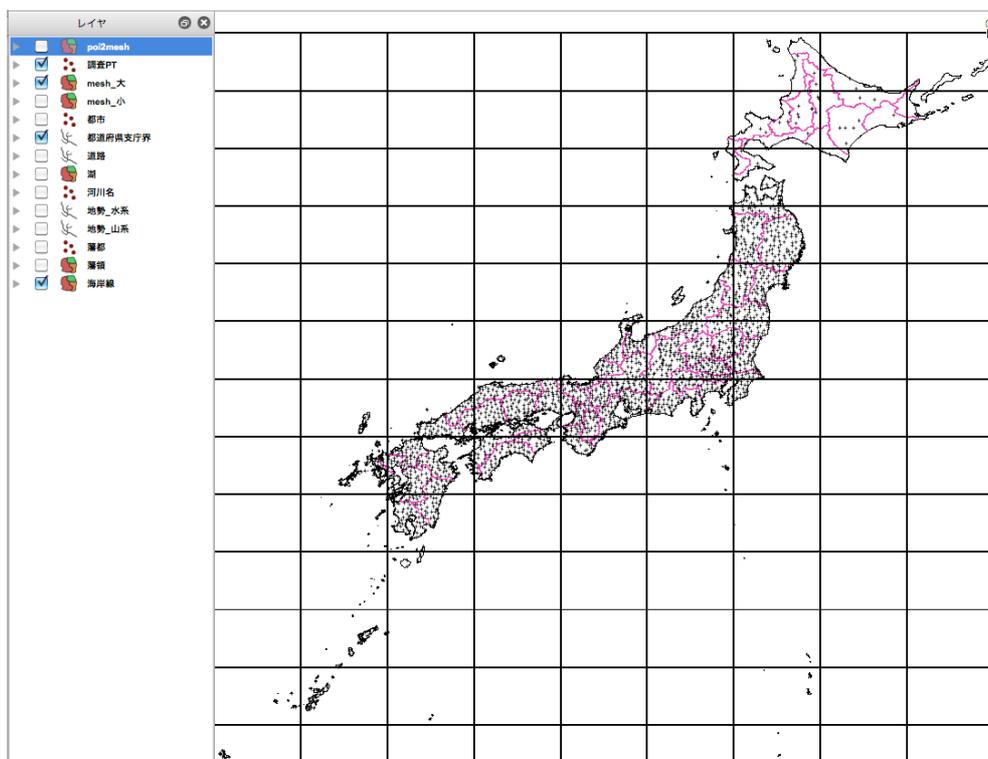


図 6 シェープファイルの表示（mesh_大、海岸線、都道府県支庁界、調査 PT）



図7 Adobe Illustrator 形式 (AI 形式) の基礎図 (白地図) の表示 (レイヤーを選択表示)

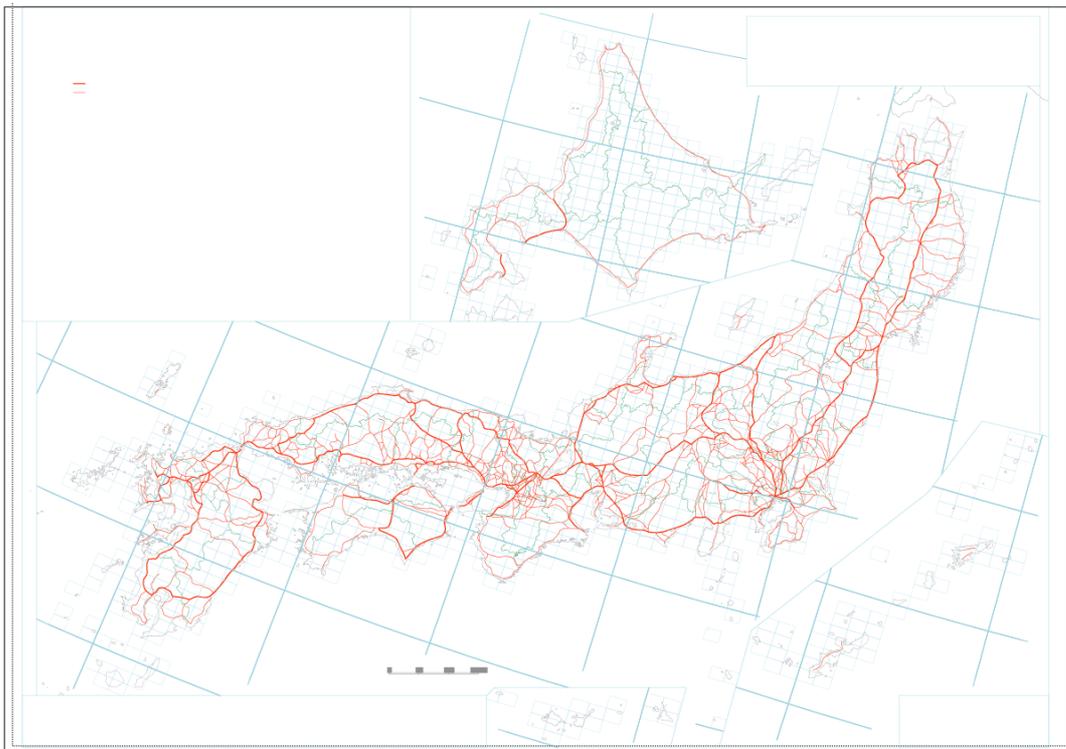


図8 Adobe Illustrator 形式 (AI 形式) の近代道路図の表示 (レイヤーを選択表示)

7. 関連情報のデータ

『解説』所載の表を入力したデータを作成してある。

(1) 地図番号, 調査項目番号の対応表, (2) 調査地点一覧にある被調査者のフェースシート情報 (個人名無), (3) 調査項目の履歴と分類, (4) 調査地域表 (後期計画で調査する地域しない地域を分けた項目と地域の関係), (5) 行政単位別調査地点数, (5) 調査票質問文, (6) 調査者リスト

8. 公開済みの LAJ 関連のデータ

LAJ の関連データとして, 過去に国立国語研究所「日本語情報資料館」のコンテンツとして作成し, 現在も, 国立国語研究所 HP 上で公開しているものに次のものがある。いずれも, 画像を PDF ファイルで公開した。(LAJDB の公開ページからもリンクする。)

(1) 『日本語地図』 地図画像, (2) 『日本語地図』 解説, (3) 『日本語地図』 調査票, (4) 『日本語地図語形索引』, (5) 『日本語地図注記一覧』

9. LAJDB 処理済み 119 項目一覧

データベースとして利用可能になった 119 項目の一覧を示す。

表 1 LAJDB 処理済み 119 項目一覧 (項目番号順)

LAJ_Q001 : かまきり	LAJ_Q083 : たけうま	LAJ_Q165 : まわた	LAJ_Q233 : くるぶし (課)
LAJ_Q005 : かたつむり	LAJ_Q089 : かくれんぼ	LAJ_Q166 : いと	LAJ_Q235 : すてる
LAJ_Q006 : なめくじ	LAJ_Q090 : おかね (貨幣)	LAJ_Q167 : きぬいと	LAJ_Q237 : おそろしい (恐ろしい)
LAJ_Q007 : おたまじゃくし	LAJ_Q091 : おつり (釣銭)	LAJ_Q169 : はたいと (機糸)	LAJ_Q238 : なのか (七日)
LAJ_Q012 : とかげ (蜥蜴)	LAJ_Q092 : かぞえる (お金を)	LAJ_Q173 : こめ (米)	LAJ_Q239 : ここのか (九日)
LAJ_Q031 : あたま	LAJ_Q095 : やる	LAJ_Q174 : うるち	LAJ_Q240 : ひまご
LAJ_Q032 : つむじ	LAJ_Q103 : きのう	LAJ_Q176 : はんまい (飯米)	LAJ_Q241 : やしやご
LAJ_Q036 : ものもらい	LAJ_Q104 : おとどい	LAJ_Q179 : ぬか (糠)	LAJ_Q244 : いえ (家)
LAJ_Q037 : はな (鼻)	LAJ_Q105 : さきおととい	LAJ_Q182 : あぜ	LAJ_Q248 : ふすま
LAJ_Q038 : におい (芳香)	LAJ_Q108 : あした	LAJ_Q184 : とりおどし	LAJ_Q250 : きれいだ
LAJ_Q039 : におい (悪臭)	LAJ_Q109 : あさって	LAJ_Q185 : かかし	LAJ_Q252 : とうがらし
LAJ_Q042-7 : においをかく (前部分)	LAJ_Q110 : しあさって	LAJ_Q186 : じゃがいも	LAJ_Q253 : おいしい
LAJ_Q042-8 : においをかく (後部分)	LAJ_Q111 : やのあさって	LAJ_Q187 : さといも	LAJ_Q261 : おんぶする (幼児を負う)
LAJ_Q047 : くちひる	LAJ_Q113 : あしたのぼん	LAJ_Q189 : さつまいも	LAJ_Q264 : かつく (材木)
LAJ_Q048 : した	LAJ_Q116 : つき	LAJ_Q190 : とうもろこし	LAJ_Q265 : かつく (天秤棒)
LAJ_Q051 : うすい	LAJ_Q117 : あめ (雨)	LAJ_Q191 : かぼちゃ	LAJ_Q266 : かつく (二人で)
LAJ_Q052 : あまい	LAJ_Q118 : つゆ (梅雨)	LAJ_Q192 : すみれ	LAJ_Q268 : いる
LAJ_Q056 : ほほ	LAJ_Q119 : ゆうだち	LAJ_Q194 : つくし	LAJ_Q280 : カガミ (鏡) の-Gの音
LAJ_Q057 : かお	LAJ_Q122 : いなずま	LAJ_Q195 : すきな	LAJ_Q282 : なす
LAJ_Q059 : あざになる	LAJ_Q124 : にじ	LAJ_Q200 : とげ (いばら等の)	LAJ_Q284 : とんぼ (蜻蛉)
LAJ_Q060 : ほくろ (小)	LAJ_Q125 : ゆき	LAJ_Q214 : おうま	
LAJ_Q061 : ほくろ (大)	LAJ_Q127 : こおる : 水が凍る	LAJ_Q215 : めうま	
LAJ_Q063 : おやゆび	LAJ_Q129 : つらら	LAJ_Q216 : こうま	
LAJ_Q064 : ひとさしゆび	LAJ_Q131 : こみ (目にはいるもの一塵)	LAJ_Q217 : たてがみ	
LAJ_Q066 : くすりゆび	LAJ_Q132 : こみ (掃除の対象一塵芥)	LAJ_Q218 : うし	
LAJ_Q067 : こゆび	LAJ_Q134 : こみ (川のごみ一塵芥)	LAJ_Q219 : おうし	
LAJ_Q068 : しもやけ	LAJ_Q135 : じしん	LAJ_Q220 : めうし	
LAJ_Q072 : すわる (座る)	LAJ_Q148 : たく	LAJ_Q221 : こうし	
LAJ_Q074 : あか (垢)	LAJ_Q149 : いる	LAJ_Q222 : もうもう	
LAJ_Q075 : ふけ	LAJ_Q153 : ゆけ (飯の場合)	LAJ_Q223 : もぐら	
LAJ_Q076 : うろこ	LAJ_Q155 : すりばち	LAJ_Q228 : すずめ	
LAJ_Q080 : おとこ	LAJ_Q156 : すりこぎ	LAJ_Q229 : ちゆんちゆん	
LAJ_Q081 : おんな	LAJ_Q157 : せともの	LAJ_Q231 : はげる (禿げる)	

10. LAJDB の公開

本プロジェクト (「大規模方言データの多角的分析」) のホームページ

(<http://www.ninjal.ac.jp/research/project/b/daikibo/>)

に公開に関する情報を掲載する。

(付記) LAJDB は科学研究費研究成果公開促進費 (データベース) [平成 13,14,15,16,17,20 年, 『日本語地図』 データベース (研究代表者: 熊谷康雄)] の補助を得た。

『日本言語地図』のデータベース化

熊谷康雄

1. はじめに

国立国語研究所編『日本言語地図』全6巻は、日本で最初の全国的な規模で行われた言語地理学的調査に基づく言語地図であり、方言研究における基礎資料として広く用いられてきている。調査は1957年から1965年に行われ、編集・刊行は1966年から1974年にかけて行われた。調査項目数285、調査地点数2400である。調査開始から今年で50年になる。

同じ国立国語研究所の『方言文法全国地図』全6巻（調査：1979-1982年、刊行：1989-2006年、調査項目数267、調査地点数807）は、刊行の過程でコンピュータ化を進め、データはインターネット上に公開されている。一方、一世代前の『日本言語地図』の調査および刊行は、調査資料の整理、編集、作図等、全て手作業で行われた。『日本言語地図』の第3集については、佐藤亮一、澤木幹栄、小林隆、白沢宏枝によりデータ化（国立国語研究所（1986））が行われている。このデータ化は原資料に遡って作業が行われているが、今から約20年前、現在から比べると様々な制約のあるコンピュータ環境の中で行われている。

本発表は、『日本言語地図』全体を対象とし、基礎資料として一層徹底した電子化を行うことを意図したものである。

本データベースは、『日本言語地図』データベースと称し、データベース科研の補助（平成13,14,15,16,17年、『日本言語地図』データベース（研究代表者：熊谷康雄））を得て、国立国語研究所において進めてきている。現在、原資料のおおよそ9割程度まで電子化が進んでいる。データの整備を継続しつつ、順次、項目毎の公開を開始する。公開に関する情報は <http://www.kokken.go.jp/lajdb/>上に掲載していく。

2. 『日本言語地図』の資料保存と電子化

言語地図の編集の元になった原資料は、調査者が記録、報告した総数約54万枚の手書きのカードである。このカードは、唯一、国立国語研究所に保管されている。この原資料を後世に確実に伝えていくと同時に、保存と利用の両面を考え、電子的な手段を用いて複製を作成し、データベース化する。

また、物理的なカードは原本そのものであり、電子化したデータに不審な点が見つ

かった場合などの戻るべき拠り所でもある。今後とも、国立国語研究所において将来に渡って保管される。(なお、原調査票は調査者の手許に保管され、国立国語研究所に集められてはならず、『日本言語地図』はこのカードを基に編集された。)

『日本言語地図』データベースは、(1) 地図化されなかった調査項目も含め、原資料のカードをすべて画像データ化し、また、(2) 『日本言語地図』として公刊した地図上に示された語形の地理的分布情報は文字コードとしてデータ化し、これらをデータベースとして統合的に公開するものである。

原カードの画像データ化は、原資料の保存対策と合わせ、原資料の閲覧・利用を容易にするという側面を持つ。注記などの地図化されなかった情報、凡例の形に統合される前の個々の語形や併用処理の情報などにも簡単に触れることができるようになり、資料批判、新たな観点からの研究や地図化など、研究の一層の深化も期待できる。コード化された情報は、『日本言語地図』に関する情報検索を容易にするとともに、計量的研究を含め各種の研究における『日本言語地図』の利用に新たな基盤を提供する。

また、印刷公刊された『日本言語地図』所収の各地図は、『日本言語地図』データベースと並行して、国立国語研究所において電子化を進め、現在、全6巻すべての地図画像をインターネット上に公開している。刊行された『日本言語地図』自体が、研究の基礎資料として参照されてきているものであり、その刊行された姿において、参照可能な形としておくことが必要である。

なお、地図画像の作成には『日本言語地図』の縮刷版を用いた。

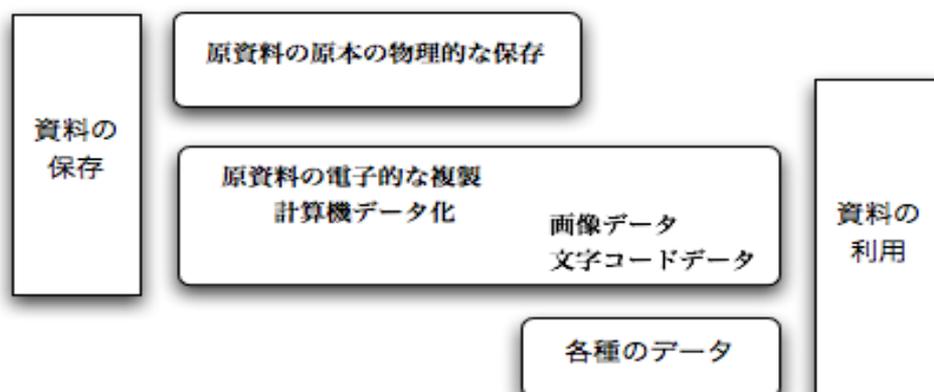


図1 資料の保存と利用

3. 『日本言語地図』の原資料の状態と電子化作業

電子化に関しては、将来のコンピュータの発達を考え、作業開始時の計算機環境の制約の中での効率性を第一とはせず、むしろ、後世に日本の方言に関する基礎資料を残すということを第一義に考え、原資料の複製として、十分にいい品質で整備し、電子化したデータはデータベース化、公開することとして、データの仕様や作業方針等を決めた。

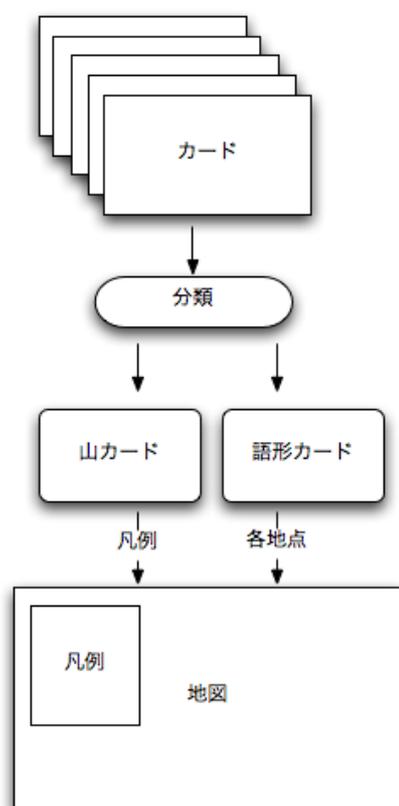
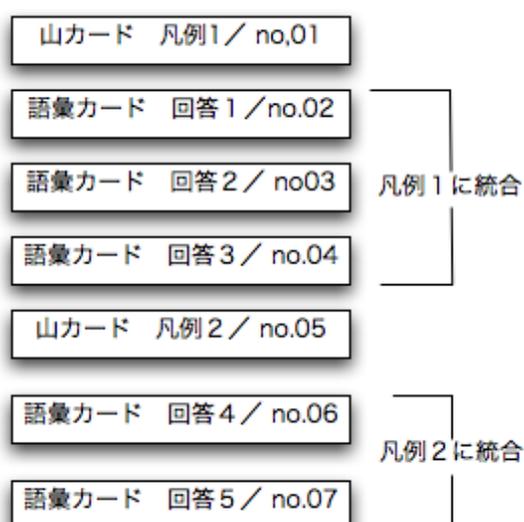


図2 原カードから言語地図へ



語彙カードを分類するため、複数回答が記入されているカードには、その複数回答のパターンに対して、一枚の山カードが作られている。

図3 分類されたカードの配列

現在、『日本言語地図』の原カードは、原則的には項目別に地点番号順に並べられてカードボックスに保管されている。編集作業終了時、地図化のためのカードの分類が行われた配列状態では、カードボックス内では、図3のように、凡例の見出し語形を示す山カードで分類されて個々のカードが並んでいる状態にある。この状態が、図2のように地図上に移される。現在、カードボックスに保管されている原カードは地点番号順に並べられているが、この原カードには、図3の段階の配列の状態でのカードの裏に通し番号が振られており、編集作業が終了し、地図化したときのカードボックス

の状態を情報として保存するような仕組みになっている。これは、地図編集当時の所員が、地図化した段階の状態を保存し、編集時のカードの並び順を復元できるように、番号をカードに押したものである。

実際には、これに、地図化の種類（総合図や、語形の前要素、後要素など）に対応する番号も併せて振られているが、基本は、カードボックス内のカードの並び順を保存するための連続番号である。

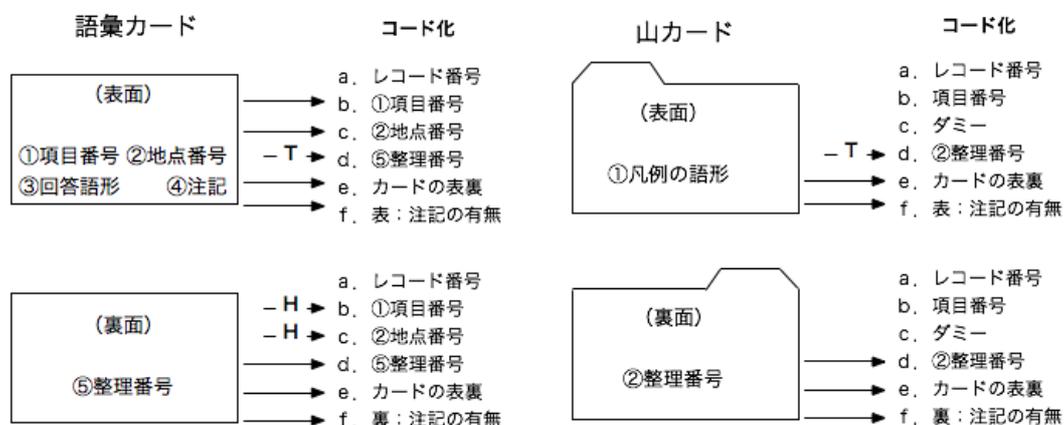


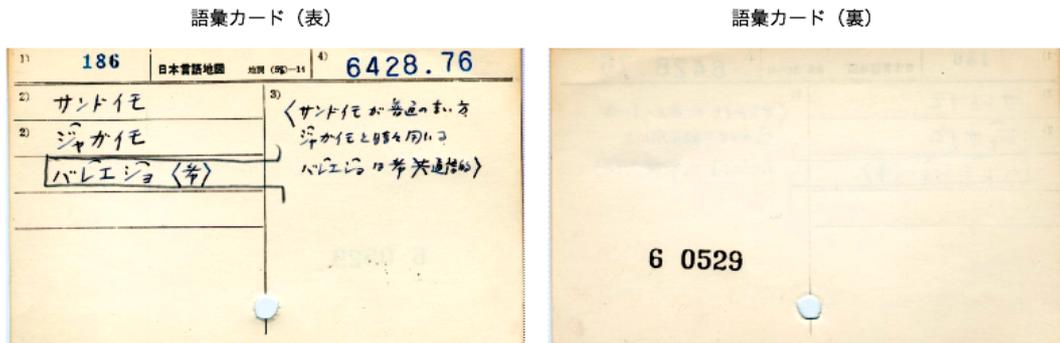
図4 カード上の記載と文字コード化する情報の関係

この番号付け（整理番号と呼ぶことにする）により、カードボックス内のカードと公刊された『日本言語地図』上の分布情報との対応づけが可能となる。

この原カードからコード化できる情報としては、語彙カード上に項目番号、地点番号、整理番号が振られている。山カードには、整理番号が振られている。そして、この整理番号によって、カードボックス内の並び順を復元できるということは、上記のカード毎のコードをデータ化し、この連続番号でソート（実際には逆順にソートする）すれば、計算機上に地図化時のカードボックスの状態を復元し、後は、計算機処理で、各カードにそれが分類される先の山カードの情報を付加してやればよい。これで、凡例上の分類された語形とそれに配属される地点がコード情報としてデータ化できることになる。

原カードのスキャンに際しては、画像ファイル名に上記のコード情報を埋め込むことで、スキャン作業時にコード情報の入力を同時に行った。また、このことにより、画像ファイルと対応するコード情報を実体としてのファイルに一体化して作業対象とできるようにした。

以下、図6に示すような工程を経て、情報の付与、データベース化が行われる。



対応する画像ファイル名

カードの表面 1177.186.6428.76.6.0529.hn.tiff
 カードの裏面 1177.186.6428.76.6.0529.t0.tiff

a: 通し番号4桁, b: 項目番号3桁, c: 地点番号 [c1: 前半4桁, c2:後半2桁],
 d: 整理番号 [d1: 前半1桁, d2: 後半4桁], e: 表裏1桁, f: 注記1桁, g: 拡張子1桁

図5 語彙カードの表と裏の画像

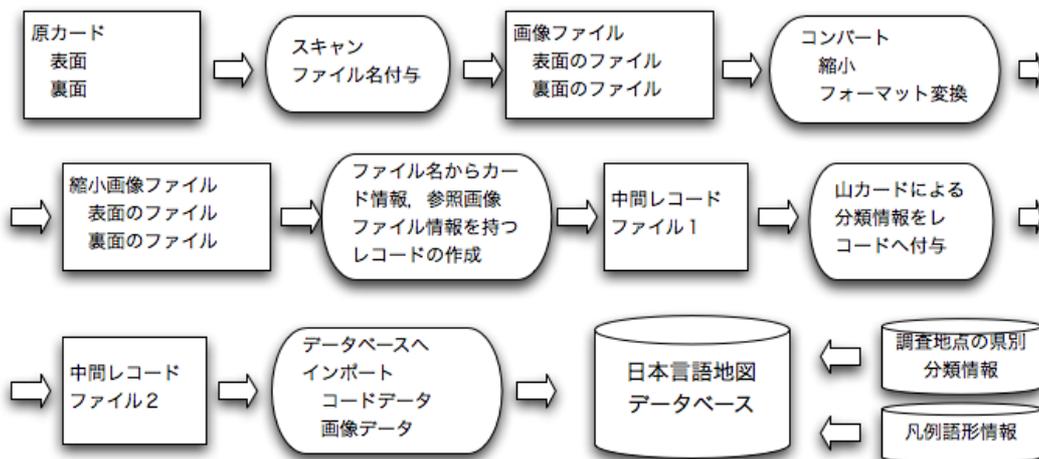


図6 電子化・データベース化の工程（概念図）

カードの配列順を保存する連続番号を振らずに、地点番号順に並べ替えてしまっていたら、上のようにして得られる情報を再現するには、非常に多くの労力を掛ける必要が生じる。仕事の状態を復元できるように番号を振るといった判断をしていたことが、今回のデータベース化の計画の実行可能性を高める上で、非常に重要な点であった。後で、トレース

可能となるような情報を埋め込んだということである。現在の立場から振り返ると、非常に重要な判断であった。

4. 信頼性の確保と検証手段およびデータ管理と公開

原資料の電子化であるから、そのデータの信頼性（原資料との同一性）の確保が重要である。画像データの持つ情報そのものは、原資料の情報をそのまま伝えるものとして扱えるが、文字コードデータに関しては、誤りが入り込む可能性がある。誤りは、可能な限りゼロに近いことが望まれるが、現実的にはゼロであることを完全に保証することはできない。しかし、正にその地点の情報が重要な意味を持つということはある。

本データベースの場合には、文字コードデータのもとになる原カードの画像と文字コードデータがリンクされており、これが、利用者にもデータの検証手段を与えるものとなっている。地点番号、整理番号は画像ファイルに画像として記録されている。これは、コード化の元の資料にすぐに当れるということである。

また、カードの表と裏で一組であり、1枚のカードに関するコード情報は両面からの情報で構成されている。特に、上のユーザの検証手段を保証するものとして、表裏のペアが正しく組み合わせられているかは、重要である。

スキャン作業では、通し番号とタイムスタンプはそれぞれ順序付けられて（原則的に）連続するはずであり、データ化のエラーの回復に役立つ冗長性が組み込まれているということになる。これを利用して、データベース化の際に機械的にエラーを検出し、校正を行う。さらに、同じカードの表裏であるので、ユーザは画像により同じカードの表裏かを見極めることも手段としてはある。

なお、データの整備過程で、あり得ないコードがないか、コードが定義されている範囲内を逸脱していないか、カードの裏表が正しくペアになっているか（通し番号、タイムスタンプの記録）などは、データベース化の際に、機械的なチェックをかける。

公開に際しては、データの維持管理などが重要な意味を持つが、利用法、利用者からの情報のフィードバックも含めて、また、公開したデータのバージョン管理など、基本資料としてのデータの維持管理、情報の共有などを検討を継続しつつ公開を進めていく。その際、データの性格と利用法の段階を考え、公開を加速するため、段階的に公開する方法を検討している。

原データは400dpi、フルカラーでスキャンした（フルカラーのコピー機でカードを原寸大でコピ

一したときの品質と遜色のないプリントアウトを得ることができる)。カードの片面8MB、スキャンは両面行うのでカード一枚16MBである。54万枚のカードの表裏両面のスキャンが全て済むと、おおよそ9TBとなる。また、閲覧用に変換した画像ファイルは、平均でおおよそ70KB程度であり、54万枚のカードの両面で、108万ファイルだとしても、全部で約76GBである。このことは、今のパソコンのハードディスクの中に、『日本言語地図』のカードボックスの全てを入れて持ち運べるということになる。

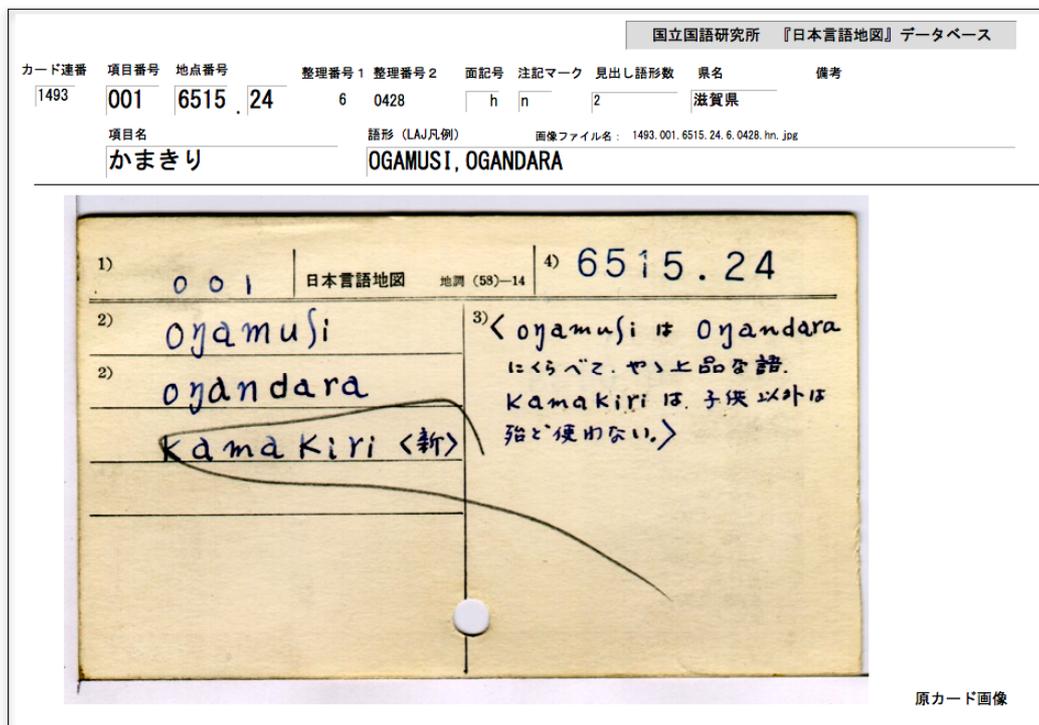


図7 『日本言語地図』データベースの画面サンプル

5. 『日本言語地図』データベースの公開

データベースおよびデータは、研究、教育目的には無償で利用可能である。以下のような形で公開する。公開情報は <http://www.kokken.go.jp/lajdb/> に掲載していく。

- (1) データベース：画面のサンプルを図7に示す。現在の版はファイルメーカーを使って作成しており、オンラインおよびダウンロード版を提供する。
- (2) コードデータ：コードデータをテキストファイルで提供する。
- (3) 画像ファイル：原カードの閲覧用画像ファイルを提供する。

6. おわりに

本データベースは平成13,14,15,16,17年度[†]に「『日本言語地図』データベース」(研究代表者:熊谷康雄)として科学研究費研究成果公開促進費(データベース)の補助を受けて行ったものである。原カードに関する『日本言語地図』編集当時の様々な情報は、佐藤亮一、白沢宏枝の両氏に多くを負う。特に作業上遭遇した個々の原カードの不明点に関する情報は白沢宏枝氏から得た。

『日本言語地図』の地図画像の電子化は、国立国語研究所情報資料部門における蓄積資料電子化の一環として行われた。『日本言語地図』のデータベース化も蓄積資料電子化の一環であり、言語資料の蓄積と共有のためのシステムとしてインターネット上に構築している「日本語情報資料館」のコンテンツとしてデータの整備と公開を進めていく予定である。

データベース科研では『日本言語地図』や『方言文法全国地図』に関わるなどの経験を持つ、佐藤亮一、江川清、澤木幹栄、小林隆、白沢宏枝の国立国語研究所OBの諸氏と、『方言文法全国地図』の編集メンバーである国立国語研究所の大西拓一郎、三井はるみの両氏にメンバーとして協力を得た。『日本言語地図』データベースの計画全体の設計、電子化の実施は熊谷康雄が主として行い、スキャン作業のための原カードの出納管理は磯部よし子が主として担当した。最後に、ご協力いただいた方々に改めて感謝いたします。

文献

国立国語研究所(1966-1974)『日本言語地図』(全6巻)大蔵省印刷局

国立国語研究所(1981-1985)『日本言語地図(縮刷版)』(全6巻)大蔵省印刷局

国立国語研究所(1986)『方言研究と電子計算機』昭和60年度科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書(研究代表者:佐藤亮一)

国立国語研究所(1989-2006)『方言文法全国地図』(全6巻)大蔵省印刷局

URL

国立国語研究所「日本語情報資料館」: <http://www.kokken.go.jp/siryokan/>

国立国語研究所『日本言語地図』データベース: <http://www.kokken.go.jp/lajdb/>

*日本方言研究会の発表原稿を参照の便のため再録する。記述は2007年当時のもの。データ公開などはこの報告書の「『日本言語地図』データベースの概要」の節を参照。
†その後、平成20年度にも、データベース科研の補助を受けた。

共同研究発表会開催記録

共同研究期間（平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月）および研究取りまとめ期間（平成 24 年 9 月～平成 25 年 3 月）の期間中、以下の公開の共同研究発表会を開催した。

1. 公開研究発表会 平成 22 年（2010 年） 3 月 15 日（月）14:00-16:30

国立国語研究所 多目的室

(1) 「共同研究大規模方言データによる多角的分析の目的と概要」（熊谷康雄）

【概要】国立国語研究所では全国の方言分布が見渡せる『日本言語地図』や全国規模の方言談話の録音資料「各地方言収集緊急調査」などの資料の電子化を進めてきた。『方言文法全国地図』では作成段階から電子化されている。しかし、このような大規模な方言データを本格的に駆使した研究は今後に期待するところが大きい。本研究では、これら基盤となるデータを中心としつつ、計量的方言研究、言語地理学、日本語史、談話研究などの共同研究者が実践的なデータの分析を通して多角的に研究を行い、データの持つ可能性を発掘、新たな知見の獲得や方法の開発を目指す。この研究の目的、概要について説明し、事例として『日本言語地図』データベース構築の概要と研究利用への展開について示した。また、全国規模の方言分布データによる研究として、言語地図のデータに基づき地点間の方言の類似度をネットワークとして表示、分析する方言区画のためのネットワーク法に触れた。

(2) 「消えゆく日本語方言の記録調査－『日本言語地図』との関連で－」

（小林隆，澤村美幸 [東北大学大学院生・日本学術振興会特別研究員（当時）]）

【概要】プロジェクト「大規模方言データの多角的分析」は、特に『日本言語地図』を構成する大量のデータを整備し、さまざまな角度から研究に役立てようとするものである。この「大規模方言データ」という点では、私たちの研究室（東北大学方言研究センター）が主体となって取り組んでいる調査も該当するのでここでその概要を紹介した。この調査は、語彙項目を中心とする全国的な分布調査であるという点で、『日本言語地図』との関係が深い。例えば、『日本言語地図』の「目」という項目に対して、新たに「目玉」や「ひとみ」の項目を調査することで、「マナコ」という語の意味の分布や歴史についてより詳しく考察することが可能になった。

(3) 「分布の類型と孤例」（沢木幹栄）

【概要】大規模データを使った研究の例として「孤例の研究」を取り上げる。孤例の研究は徳川宗賢に始まる。沢木はそれを引き継いで、コンピューターを使い、『日

本言語地図』の 27 項目という大規模データを対象に孤例の出現の仕方 についての研究を行った。地点ごとの孤例の生産性という観点では、27 項目のうち、一回しか孤例がない地点は全体の大多数を占め、孤例の出現数が多くなる につれ、その出現数を持つ地点の数が急激に減るという傾向が見られる。また、孤例の多い地点を地図上にプロットすると、琉球地域にそのような地点が多く見られるなど地理的な偏在が認められる。孤例の研究は大規模データをそのまま活かすという点で有望なものであり、また、まだまだ発展する余地のあるものだと考えられる。非常にコンピューターに乗りやすい研究手法であるということも強調しておきたい。語形の共出現による地点間の距離を測ることによって地点同士 の構造を探ることも提案したい。

2. 公開研究発表会 平成 22 年（2010 年）7 月 17 日（土） 14:40-16:30
国立国語研究所 多目的室

(1) 『日本言語地図』による方言分布データの計量的研究の探索（熊谷康雄）

【概要】計量的なアプローチによれば方言分布はどのように捉えられ、取り扱うことができるか、『日本言語地図』のデータを用いた探索的な試みの報告をした。言語地理学的分析において、語の分布の地理的な連続性は分析の基本にあり、言語地図のデータ処理・計量的な研究においも重要である。この分布の連続性の取り扱いのひとつとして、計算機上で、語の分布において地理的に連続した領域を認識し、分割、ラベル付する方法について初期段階の試みの報告をした。『日本言語地図』データベース中の語形を例とし、計量的方言区画のための「ネットワーク法」において地点の隣接関係の近似的表現として用いている Delaunay net（幾何学的な意味において自然な隣接地点同士を結ぶネットワーク）を用い、ネットワーク上で語の分布が連続する領域の分割、ラベリングをする手順と実行結果を示した。また、今後の展開についての見通しのいくつかを述べた。

(2) 『全国方言談話データベース』を用いた表現法の地域差の分析試論（井上文子）

【概要】全国規模の方言データを活用して、地理的分布、形態的変異、使用実態を把握し、社会的属性、場面差、世代差、機能差などの観点から方言間比較をおこなう、日本語方言における表現法の地域差について分析を試みようとしている。表現

法のひとつとして、間投助詞を対象とし、各地方言における間投助詞の多様性について予備的考察を開始した。『方言文法全国地図』に現れる間投助詞の形式を整理し、全国の地理的分布を概観した。間投助詞「ナ」「ノ」「ネ」については、場面による使い分けの一端にも言及した。また、『全国方言談話データベース』の各地点で使われている間投助詞「ナ」「ノ」「ネ」「サ」「ヨ」「ヤ」について、秋田県湯沢市、東京都台東区、奈良県五條市、愛媛県松山市、鹿児島県揖宿郡穎娃町における出現状況を報告した。

3. 公開研究発表会 平成 23 年（2011 年） 3 月 17 日（木） 14:40-16:30 中止

4. 公開研究発表会 平成 23 年（2011 年） 12 月 10 日（土） 13:50-16:40

国立国語研究所 セミナー室

(1) 『日本言語地図』データベースの構築過程とその性格」（熊谷康雄）

【概要】データベースの利用・分析にはその性質・特徴を理解しておくことが重要である。『日本言語地図』データベースの構築方法は、資料の保管秩序に基礎を置き、地図の編集や資料の保管法と結びついている。データベース構築のプロセスと構築過程で出会う問題点とその対応から、事例を示しながらデータの性格についての整理を試みた。また、この『日本言語地図』データベースの活用、分析を目的とする参考地図の電子化や地点・被調査者の属性情報等、関連データの電子化の方法についても述べた。基礎図、参考地図は多くの GIS も含めた他システムとのファイル形式の互換性の高いシェープファイルの形式で作成し、これを基にこれまでのプラグインの利用に互換性のあるイラストレータ形式も作成した。これらについて報告するとともに、フリーの GIS ソフトである QGIS 上で道路網と複数回答地点の分布の突き合わせについての初歩的な観察を例示として示した。また、地点の属性データ等の LAJDB 本体への統合に向けて、データベースの見通しを述べた。

(2) 「方言圏論の発展と現代的な位置」（小林隆）

【概要】柳田国男によって提案された「方言圏論」は現在でも方言の成立を解き明かす有効な原理である。しかし、その後、この理論に対する反論や修正案が提出され、さまざまな問題点が検討されてきた。その中で、日本の方言形成についての

議論が繰り返され、方言学の発展が促されてきた。今や、方言圏論は、方言の形成について扱うより大きな研究の枠組みの中でとらえるべき段階に来ている。そのような広義の研究概念を「方言形成論」と名付けることにする。この方言形成論は、近年、研究が活性化しつつあるが、それらの研究に共通するのは、方言圏論的な方言形成を批判的にとらえる問題意識である。この発表では、それらの研究に導かれながら、方言圏論のもつ問題点をあらためて整理し、それが今日、方言形成論の中でどのように深化されてきているかを見ていった。すなわち、現在の方言形成論における方言圏論の位置付けと課題について考えた。

(3) 「言語解析ソフトを利用した大量方言テキストデータの処理法」 (澤木幹栄)

【概要】日本語解析ソフト茶筌を利用して、標準語対訳付きの方言テキストデータで、感動詞や指示詞などをコンテキスト付きで取り出すことを考えた。標準語テキストに解析ソフトを使うことによって、効率よく特定の品詞や特定の活用形を取り出すことができる。今回の発表では、方言談話資料のデジタルデータから、標準語訳の部分に形態素分析ソフト「茶筌」を適用して、形態素に文法情報を付加したものを作り、そこから大量データを作るという手法について発表を行った。このとき「コマンドプロンプトの利用になれていない研究者にとってハードルが高すぎる」という意見が出、これに対して、visual basicなどでプログラムを書いて、ユーザーインターフェースの改良を図ることを提案した。現在、取りかかり始めたところである。

5. 公開研究発表会 平成 24 年 (2012 年) 3 月 19 日 (月) 14:45-15:45

国立国語研究所 多目的室

(1) 『日本言語地図』データベースの環境を利用した回答語形の分布に関わる観察

(熊谷康雄)

【概要】構築中の『日本言語地図』データベース (発表時 100 項目) の環境を利用した観察事例を報告した。(1) 併用回答の分布: 併用は語の接触, 変化と関わる。併用地点の分布と LAJ 参考図近代道路網との重ね合わせを試行し, 初期の観察で道路網の密なところに併用地点が多く分布する傾向が見えた。多数の項目の集計で, その傾向を探った。(a) 項目別併用地点の地理的分布の例, (b) 55 項目 (整備済で地点数が全調査地点数 2400 にほぼ同じ項目) の集計による各地点の併用項目の

度数の地理的な分布などを示し、今後の分析の見通しを述べた。(2) 凡例語形のモーラ数の分布：LAJの凡例語形のモーラ数を数えるプログラムを作成し、項目毎に、各地点の回答語形のモーラ数を計算（約70項目）し、第一段階として県別の語形のモーラ数の度数分布の形に地理的な分布パターンを示した。凡例語形という制約はあるが、地理的な分布が観察できること述べた。

6. 公開研究発表会 平成24年（2012年）8月25日（土） 10:20-17:20
東北大学文学部 103 演習室（文学部3号館1階）

(1) 「報告と討論：大規模方言データの利用と研究」

【概要】報告・討論者：沖裕子，小林隆，澤木幹栄，竹田晃子，日高水穂，鎌水兼貴／コメンテータ：佐藤亮一（国語研名誉所員）進行／井上文子，熊谷康雄
『日本言語地図』データベース（LAJDB）や全国方言談話データベース（DDJD）など、全国規模のデータベースの利用とこのようなデータベースを活用した研究について、異なる分野の研究者の視点から、事例報告と討論を行い大規模方言データの利用と研究について議論した。『日本言語地図』データベースにより『日本言語地図』（LAJ）の半数の項目を用いて孤例の分布状態を示した「全データの半分で行った孤例の研究」（澤木幹栄），『日本言語地図』データベースの項目データと属性データを用い、インフォーマントの年齢差の情報を用いて言語地図上で方言語形の変化を探る試み（鎌水兼貴），全国分布資料や東北方言資料を用いた「東北方言における極限のとりたて助詞サエ」（竹田晃子），全国方言談話データベースを利用し表現法と受話法の方言的特徴について指摘した「大規模自然談話資料の活用可能性」（沖裕子），全国規模で収集された既存の言語資料と『日本言語地図』や『方言文法全国地図』等を比較対照して問題発見を試みた「全国規模の既存の言語資料を用いた方言研究の試み」（日高水穂），大規模方言データという観点から「消えゆく日本語方言の記録調査」のデータを用いた「知られざる地域差を探る：表現法・言語行動，そして発想法」（小林隆）などの報告があり，コメンテータと参加者を交えた討論が行われた。

(2) 『日本言語地図』データベースの構築と計量的探索（熊谷康雄）

【概要】構築を進めている『日本言語地図』データベース（LAJDB）の報告と、『日本言語地図』の計量的分析に向けて現在探索的に行っている事例の中から，併用現

象の分布を中心に以下の報告をした。(1)『日本語地図』データベースについて原資料、地図情報の全体の電子化、データベース化などの概要を説明した、(2) 3月に報告した2400地点の55項目の併用現象の分布に加えて、地点毎に併称処理が行われたか否かの情報を付加したデータを作成し、地点毎に併用処理の行われた項目数の分布を描き、併用処理の行われた併用回答の分布も合わせて観察できるようにした。併用処理の行われた併用の分布は、併用処理語の『日本語地図』の併用現象の分布と矛盾せず、その中にはまるような分布を示した。この併用現象の分布について報告した。(3) これまで部分的に『日本語地図』の3集のみのデータを用いて言語的な類似のネットワーク法による視覚化を試みていたが、『日本語地図』データベースのデータを用い、併用現象との突き合わせを念頭に整備済みの中から上の併用現象の観察を行ったものと同じ55項目について、ネットワーク法による視覚化を行った。(4) 方言形成のシミュレーションに向けて検討を続けているが、D. Nettleの方言の発生(言語的多様性の発生)に関するシミュレーションの再現と検討のために行ったD. Nettleのシミュレーションの再現の報告をした。

7. ワークショップ 平成24年(2012年)12月16日(日) 9:30-17:20

全国町村会館 ホールB (東京都永田町)

【概要】

全体説明:「プロジェクトの紹介、データベースの説明など」(熊谷康雄)

報告1:「方言昔話資料にみる語りの地域差—文末形式に着目して」(日高水穂)

報告2:「大規模自然談話資料にみる受話法」(沖裕子)

報告3:「用言準体法の分布と形式(仮題)」(大西拓一郎)

報告4:「『日本語地図』にみる動物の鳴き声のオノマトペ」(竹田晃子)

報告5:「全国方言調査から見た感動詞の地域差」(澤村美幸)

報告6:「孤例は特殊な語か」(澤木幹栄)

報告7:「言語地図にみる方言変化・共通語化 LAJDB 編」(鎌水兼貴)

報告8:「LAJDBによる『日本語地図』の計量的探索」(熊谷康雄)

報告9:「共通語形の分布と伝播について」(小林隆・熊谷康雄)

コメンテータ:岸江信介(徳島大学), 半沢康(福島大学)

進行:熊谷康雄

共同研究プロジェクト「大規模方言データの多角的分析」は研究の基盤となる大規模方言データの整備、ならびに、データが持つ可能性を引き出す多角的な研究の

実践を通して、ことばの地域差の実態やその形成の解明に寄与する知見の獲得や、方法の開発を目指して来た。この3年間のプロジェクトを踏まえ、『日本言語地図』データベースや全国方言談話データベースをはじめ、全国規模のデータベースの活用・分析の実践の報告と討論を行い、大規模方言データの利用と研究について議論した。構築を推進してきた『日本言語地図』データベースの構築状況と公開についても報告した。データの整備と多角的な研究の実践に関する報告と討論を通して、データが持つ可能性を引き出すことを目指し、ことばの地域差の実態とその分析、資料や研究方法について、報告者、コメンテータ、参加者で議論を行った。

(以上)

以上の他、公開研究発表会と併せて毎回開催した非公開の研究打ち合わせ会でも、参加者全員による報告と全員によるディスカッションが行われた。

執筆者一覧

- 熊谷康雄 (国立国語研究所時空間変異研究系准教授)
井上文子 (国立国語研究所時空間変異研究系准教授)
大西拓一郎 (国立国語研究所時空間変異研究系教授)
沖裕子 (信州大学人文学部教授)
小林隆 (東北大学大学院文学研究科教授)
澤木幹栄 (信州大学人文学部教授)
澤村美幸 (和歌山大学教育学部講師)
日高水穂 (関西大学文学部教授)
竹田晃子 (国立国語研究所時空間変異研究系特任助教)
鎌水兼貴 (国立国語研究所時空間変異研究系プロジェクト非常勤研究員)

国立国語研究所共同研究報告 12-05
大規模方言データの多角的分析 成果報告書
一言語地図と方言談話資料一

2013年3月31日発行

編者 熊谷康雄
発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立国語研究所
〒190-8561 東京都立川市緑町 10-2
電話 042(540)4300(代表)
<http://www.ninjal.ac.jp/>

©国立国語研究所
ISBN 978-4-906055-25-8

ISSN 2185-0127

NINJAL Collaborative Research Project Reports 12-05

**Analyzing Large-Scale Dialectal Survey Data
from Multiple Perspectives**

Yasuo Kumagai (ed.)

March 2013

NATIONAL INSTITUTE FOR JAPANESE LANGUAGE AND LINGUISTICS

大規模方言データの多角的分析 成果報告書
—言語地図と方言談話資料—

正誤表

ix ページ, 29 行目

(誤) —併用現象, 標準語形の分布と交通網, 方言類似度—

(正) —併用現象, 標準語形の分布と交通網, 方言類似度の観察—

81 ページ, 4 行目

所属が抜けているので所属を追加

(正) (和歌山大学)

159 ページ, 図 1

(誤) (調査項目数に対する割合に対する各処理段階の済んだ項目の割合)

(正) (調査項目数に対する各処理段階の済んだ項目の割合)

179 ページ, 13 行目

(誤) 貴／進行：井上文子, 熊谷康雄

(正) 貴／コメンテータ：佐藤亮一（国語研名誉所員）／進行：井上文子, 熊谷康雄

正誤表に以下を追加 (2013-04-16)

37 ページ 6. 1 節のタイトル

(誤) 直接型 (正) 直截型

44 ページ, 図の番号

(誤) 図 3 (正) 図 4

※上記は印刷版の正誤表。PDF 版では、上の正誤表に記載の誤植は修正済み

NATIONAL INSTITUTE FOR JAPANESE LANGUAGE AND LINGUISTICS